幼馴染の親友

世羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
幼馴染の親友

【Ｎコード】
Ｎ４３５３Ｘ

【作者名】
世羅

【あらすじ】
せりかと玲人はお隣さんの幼馴染。今までいつも一緒で親たちの良好なご近所関係の為、協力し合ってきた戦友だったが、高校入学で首席の妖しい魅力を放つ超絶美少年な彼、橘忍とせりかの接近で二人の関係にも変化が？

1

彼、高坂玲人（こうさかれいじ）と産まれてからこのかた１６年のお付き合いである。

いわく、隣に住む幼馴染は眉目秀麗で、頭も良く、サッカー部のエース格でいつも黄色い声援を浴びている。

当然の事ながら、私、椎名せりかは、両親から同じ歳であるお隣の息子さんと比べられ、育って来たので色々な努力を余議なくされた。

彼は１７８ｃｍと長身ですらっとした細マッチョ！！これは幸い私も１６３ｃｍと並んでも見劣りしない。しかし、太らない様に毎日の半身浴、こっそりとビリー隊長に入隊したり、コアリズムをしたりとその時々の流行を追いながら、美容にもかなり力を入れている。

まあ、今時の高校生なら当たり前だが、私の場合それは小学生の時からの日課で、パックをしたり、日焼け止めを欠かさなかったりとそれはかなり異常な頑張りであったと今になって思う。

その甲斐あってか近所では綺麗な娘さんねと言われている様なので、親もまあまあお隣さんに見劣りしない分卑屈にならずに済む様なので、努力はある意味報われてはいると思う。

本当は、高校も別の所に行きたかったが、優劣の差が出ると近所付き合いにも影響が出そうだったので、彼と相談して県下一の公立高校に決めた。

そう。ある時期から玲人と私は共同戦線を張る様になったのだ。お互いの親同士の平和の為に勉強は二人で分からない所を教え合い、

ほぼ同じ点数を取れる所まで徹底的にやるので二人とも苦手教科が無くなった。水泳の苦手だった私を玲人が特訓してくれて今では平均よりも早く泳ぐ事が出来る。周りは二人仲良く遊びに行っていると思っていたが、その実はそんな事をして二人で助け合ってきた。

当然、一緒にいる時間が兄弟がお互いいない事も手伝って長くなる。

そうすると、どうしても出てくるのが、付き合っているのか?恋人なのかという周囲の関心がくるが、これも二人で話し合って曖昧に、付き合っているかいないか中間の態度を取りつつ、はっきりと問われた際は否定するという結果になった。

なぜ曖昧に付き合っている風にしなくてはいけないかについては、あまりにも一緒にいる時間をどう説明するかが他人に説明が出来ないからだった。

戦友と言って理解が得られないのは分かっていたし、私も彼も幼い頃から結んだ協定や影の努力をさらけ出す気は毛頭ない。

お互いの家も頻繁に行き来する為、年頃になった今は、母親達だってそれらしい事を水を向けてくるが、ここは、身内なので、はっきりきっぱりお友達、幼馴染、兄弟みたい、の域を超えない事ははっきり告げておく。身内にまで曖昧にすると将来は…などと、どつぼに嵌まってしまっては適わない。

今日も玲人が迎えに来てくれて、学校へと向かう。

近所のおばちゃん達に愛想よく挨拶しながら、駅へと向かう。今日も玲人は爽やかだな~と笑いたくなるが、それはお互い様らしい。

「いつも、せりの猫被りに笑いそうになるから、自然と笑顔になって助かるよ」

「玲人の言葉そのまま返させて頂きます」

「うちの母親も、せりちゃんがお嫁に来てくれたらいいのにとか言ってたぞ、今朝」

「え〝、それはさー、玲人も親にはちゃんと付き合ってないって言ってくれてるよねー?!」

「もちろん。協定通りにはっきり言ってるけど、これくらいの歳の息子は照れてホントの事をいわない、みたいな話をうのみにしてるんじゃないかな?多分」

「あー、そういう結論にいっちゃうのか〜。うちは女同士だから、そういう事はないね」

「しばらくそっちの家に行く事にするよ。せりんちはおばさん最近出掛けてるんだろう?」

「区民センターにイケメン講師が来てくれてるからって今更、英会話だよ?」

「いいんじゃない?幾つになっても海外旅行とかには役に立つよ」

「今だけブームだし楽しそうだからいいんだけど若干引くっていうか……」

「うちだって韓流スターのナントカのポスターやらＤＶＤとかで溢

れてるよ」

「どこのおかんも似たりよったりって訳ね。仕方ないか～」

電車で学校の最寄り駅に着いた所で玲人の親友の橘くんに後ろから声をかけられた。

「「おはよー」」

玲人と私とでハモると橘くんは柔らかい笑顔を見せた。うわぁー！！顔赤くなりそう。

だって、だって、私の片思いの男の子はこの橘忍（たちばなしのぶ）くんなのだ!!!

本人にはもちろん玲人にだって知られてない。この事を話しているのは、同じクラスの親友の森崎美久（もりさきみく）と斎賀弘美（さいがひろみ）だけだ。

玲人にバレるのだけは、絶対避けたい。何故かって、そりゃーいいようにからかわれるのが見えているからだ。玲人に同じ事が起こっても面白くて私だってそういう行動にでると思うから、分るだけに絶対、絶対に秘密なのだった。

何時から橘くんの事を好きになったのかは、多分、もう半年以上前の入学当時からだったと思う。

彼は、入学式に新入生代表で挨拶をしていた。トップ合格と言う事だ。私も玲人も自己採点でいいセン行っていたから、半分以上本気で、どっちかだと面倒だよねなんて言っていたけど心配は杞憂に終

わった。

どんだけガリ勉くんなんだと自分の事を棚に上げて彼を見てみると、すっきり通った鼻筋に、綺麗な目元に淵のない眼鏡を掛けた秀麗な容姿の持ち主であった。よどみなく読み上げる声もなかなか良い感じだ。

天は、二物も三物もおまけも与えるのね～なんて思いながら、すっかり見惚れてしまった。他の新入生も多数の女子生徒が彼に見惚れていた。

玲人もすぐ後に、『あんな奴いるんじゃ俺モテないな～』なんて言うから、『モテたいの？』と聞くと苦笑して『それは、そうでもない』と言った。玲人は本当は橘くんみたいな、いかにも人気が出そうな男子がいて良かったと思っているから、逆の言葉を言ったのだろう事は私には分かっていた。

一緒にいる私に迷惑を掛けたくないと思っているのだろう。中学迄は、皆が昔からずっと一緒にいる私達をセットとみなしていたから、あまり問題も無かったが、高校ではそうはいかないだろう。

少し離れる選択も二人で話し合ってはいた。選択肢のひとつではあるが、今迄の事を知っている友達も数人この学校に来ていたので、他人の振り（他人だけど）も不自然だし不便だから問題を保留にして様子を見る事にしていた。

しかし、カメラを抱えながら、両母親が、並んで門の前に立たせるのだから、やっぱり他人の振りは無理の様だ。

帰りも当然一緒に帰る事になる。新入生の初日から男女で並んで歩

く私達は当然目立つ。玲人が目立つから余計に目立つのよ！と心で悪態を付きながらも、秀麗な優等生の橘忍くんが、明日からの話題の中心だろうと考えると、玲人が彼の影に隠れてくれるだろうと思ったが、これがとんだ誤算になる事は、この時は予想出来なかった。

クラスは玲人が一組私が五組だった。寂しいというよりもほっとした。これで物理的には離れていられる。

玲人と別れてクラスに向かうと同中の森崎美久がいた。彼女とは中学の時から親しくしていた。

「せりか、おはよう。同じクラスに知り合いいて良かったよ」

「おはよう。私も美久がいてよかった！」

「でも高坂くんとは離れちゃったね」

「玲人？玲人は離れたってうちが隣だし、学校でまで一緒じゃなくてホッとしてるの。私も高校生になったんだから彼氏の一人や二人欲しいもん」

「そこは、一人で充分でしょう」

「物の例えよ。もちろん一人でいいのよ、良い人ならね」

「そういえば、カッコいい人見つけちゃった♪橘くんって昨日挨拶した人！高坂くんと甲乙つけがたいよね」

「あー！あの人、玲人の何倍もカッコいいひとね。しかも頭も抜群にいいなんてすごいよね」

「せりか…あんた高坂君見慣れ過ぎだからそんな事言うけど同レベルだと思うよ」

見慣れ過ぎは、本当だけどなんだか昨日の橘くんは、私には蝶の粉が舞う様（さま）の様（よう）に、煌々（きらきら）と見えた。桜はもう散ってしまったけれど、桜舞う中を歩く彼の姿を見てみたかったなと乙女チックな事を思う。

一瞬の静寂が訪れて皆の視線を見ると彼に注がれていた。

知り合いが数人彼に寄って行くと、ふんわりと優しく微笑んだ。近くで見たそれは、とても綺麗な笑顔だった。

周りもざわつくが、本人は慣れているのか気にした様子は無く、自然体で笑みが絶えない。

「びっくり！五組だったのね」

声を潜めて美久に言うと「知らなかったの？」と返された。玲人と自分のしか見て無かった。

HRが始まり、皆席に着いた。担任は年配の女性教師で、少し厳しそうに見えた。

全員の自己紹介が始まり、中学と名前しか言わないから、直ぐに最後まで終わった所で、担任が言った。

「学級委員長はこちらで指名します。委員長は橘忍君お願いね」

「はい」

まあ、みんなも予想通りだなという空気が流れる。

「副委員長は椎名せりかさんお願いしますね」

「…はい」

思わず舌打ちしたくなったが、これ以外の答えは許されない。以前も学級委員にはなっていたが、雑用が多く、何故自分が…という気持ちが強かった。しかも彼と一緒というのが更に追い打ちをかける。彼と一緒では玲人といるより何倍も目立ちすぎる。元々、玲人の時に若干の嫉妬の混じった視線を受けていたせりかは、いくら橘がカッコよくとも観賞するのがいいのであって、彼氏は自分と性格が合って楽しい人が良いなと思っているので、彼は、せりかの中では彼氏候補にも入らない。羨ましいなら替わってあげたいが、実際に委員をやりたい者は少ないだろう。

やはり初日から委員の二人は残らされて、各教科の名簿作りをする。単純作業だが、結構量がある。黙々と仕事を進めると彼が話し掛けてきた。

「やっぱり大変だよね。でも椎名さんが仕事早いから助かった。前も委員とかやってた？」

「うん。こういうの慣れてはいても面倒よね。一学期だけとか言っても一年やる事に成るのは目にみえているしね」

「そうなんだよな。誰もやりたがらないから最初決まった人間が一年なるんだよな。部活も始まるから本当参ったよな～」

「もう部活決めてるの？」

「サッカーやってたから。ここ進学校の割にサッカー部強豪で楽しみなんだよね」

玲人も多分聞いてはいないがサッカー部に入る事になるだろうなと思う。運動部で一年生は準備などあるから、こうして委員の仕事はきついだろうと思われた。

「残れない時は、これ位の事ならやっておくからサッカー部に行っていいわよ」

「それは、悪いよ。先輩にも委員の仕事だっていうから大丈夫だよ」

「でも、いくら進学校のうちでも強豪のサッカー部にその言い訳通じないよ。一年生の初めだもの」

「…椎名さんは優しいね。それに運動部の上下関係良く分かってるみたいだけど、椎名さんこそ部活は？」

「私は入っても文化部だから大丈夫。文化部は委員の仕事やってる先輩もいるからそういうの甘いのよ。準備もないしね」

「悪いけど出来るだけの事はするけど迷惑かけちゃうと思う。ごめん。少し落ち着いたら融通効くと思う。部長が同じサッカークラブ出身で知り合いだから」

「無理しなくてホントにいいよ。今迄もそんな感じだったし…」

言いながら玲人の事が心配になった。多分一組で委員の仕事に就いているだろう。副委員の子は玲人を部活に送り出してくれるのだろうか？

「あのね、私の幼馴染が多分、委員になってて、多分サッカー部に入るのね。それで遅れちゃって準備の当番とかこなせなさそうな時は、替わってあげてもらえないかしら？」

「うん。いいけど、多分が多いね」

橘くんはおかしそうにくすくす笑う。やっぱり笑顔になると彼の秀麗な顔の造りに華やかさが出て、ぐっと妖艶な雰囲気に変わる。せりかにはやはり彼の周りに煌めく粉が降るように見えた。

「それで、その椎名さんの幼馴染くんは名前は？」

「高坂玲人というの。一組なんだ」

「わかった。出来るだけフォローするよ。委員の仕事も多い時は、部活終わったら交代するからね」

「良かった。ありがとう！」

「いや、こちらこそ本当に助かるよ。椎名さんがパートナーじゃなかったら初っ端から先輩ににらまれちゃってたよ」

「新入生代表だもんね。目立ってきついよね」

「うん。実際そうなんだ。いい気になるなとかって思われてるんだろうな」

「それは、否定出来ない。そういう中でやっぱり遅れて行ったらよくないと思ったのです」

急に丁寧語でせりかに諭されると、また橘はおかしくて笑みが漏れる。せりかがそこまで心配する幼馴染がどんな奴かも興味が出てきた。このままいけばチームメイトになるわけだ。

作業が終わって職員室には橘が行ってくれた。駅までは一緒だし、送ると言われて断り切れずに彼の鞄を持って昇降口で待つ事になった。

「せり？」

薄闇の中だったが直ぐに玲人だと判った。

「玲人も委員になっちゃった？サッカー部に入るの？副委員の子は？仕事代わりにやってくれそう？」

「せり、質問多過ぎ～。とりあえず委員になったし、サッカー部にも入る。両立大変そうだけどなんとかなるだろう。副委員の子には

協力は一応頼んだ。バス通学で方向違うから先帰ってもらった」

「そうかぁー。心配し過ぎだったかも」

「じゃあ、帰ろうか？」

「まだ帰れないの。相方待ってるから」

「俺が一緒じゃマズイ？」

「ううん、むしろ待ってて。紹介したいから」

「せりのとこの委員長を？なんで？」

「サッカー部に入る人だから！チームメイトになるでしょ。玲人が委員の仕事で遅れた時とかのフォロー勝手に頼んじゃったの」

「それは、せりがそいつの仕事引き受ける前提だろう？そんな事だめだ！！」

「玲人が委員長の時の副委員の時は自分は部活行くって言って私にやらせて平気だったじゃない。それに、玲人の事が無くても困るの解るのに放っておけないの！！」

「…ごめん。お待たせ。なんか俺の事で揉めてるみたいだから、口挟んで悪いんだけど、なるべく椎名さんが負担にならない様に考えるから」

「お前、新入生代表の奴か？」

「そう。橘忍。よろしく。椎名さんと一緒に五組の委員の仕事する事になって、サッカー部に入る話したら、協力してくれるっていう話になって悪いからって言ったら、幼馴染が入るからサッカー部の準備当番とか助けてくれっていう話になって……君が高坂？」

「一組の高坂玲人。そいつとは、家が隣で生まれたときからの付き合いだ。俺も橘のフォローするから委員の仕事も二人で話し合ってきちんとやろう。もちろんお互いのパートナーにも多少は、迷惑掛ける事にはなるけど協力すれば何とかなるだろう？」

「ああ。そうだな。出来たら俺も椎名さんに迷惑掛けたくないから、高坂と協力してやっていきたい」

「じゃあ、決まりだな。よろしく頼むな」

「玲人、そういう事なら一組の副委員の子とも友達になってタッグ組みたいから今度紹介してくれない？」

「せりが無理しなくてもいいから」

そこからは、歩きながら先にこうなる事を見越して部長さんに色々としきたりめいた事を聞いてる橘くんは、サッカー部の大体の仕事の流れと許されそうな範囲を説明して、二人で打開策を練り始めた。駅に着くころには二人はすっかり相棒と化していて、ケータイのアドレスを交換していた。橘くんはわたしのも教えて欲しいと言ったのでとりあえず私達も知っていた方が便利だろうとアドレス交換をした。

2

晴れてサッカー部に入部し、練習に行く二人を見送る。教室に残る生徒からの視線が、かなり痛い。

せりかは、橘と少し近付き過ぎた事に後悔し始めていた。

昨日は薄闇の中で、愚かにも気が付かなかったが、玲人と橘が二人連れだって歩く図は、酷いくらい絵になった。酷いというのは、せりかの心情からでた言葉だが、とても人目を惹く。一人一人でも充分に華をしょって歩いている様な二人が仲良さそうに歩く図は、それは、それは二乗されて麗しく、筋肉質な玲人に比べるとやや華奢にみえる橘は、見方を変えると、やや倒錯的にも映る。

男女限らず振りかえられる二人は飄々と足速に部室を目指す。

しかし、橘も悪目立ちでキツイと昨日洩らしていたところを見ると、こちらからは平気そうでも本人達もポーカーフェイスなだけかなと思う。玲人に比べると橘は中身は繊細そうだった。せりかに話しをする時の距離の取り方や、昨日の玲人の非難に対する対応を見ても、配慮があって大人だと思う。そう思うと玲人は天真爛漫までは言わないが、比べれば無邪気な方だ。すっかり昨日橘に懐いてしまった玲人は、放課後早々に橘を迎えに来たのが、せりかにとっての悲劇であった。玲人もせりかの紹介で橘と仲良くなったからだろうか、せりを先に呼び、彼を迎えに来た事を告げた。目立つ容姿の玲人の突然の来訪に皆がぽかんとしているところに、追い討ちの様に橘に「行って来るね」とにっこりと新婚さんのような言葉を掛けられた。無視するのもなんだと慮っての事だが、かなり要らない配慮だ。

せりかは、部活見学を約束していた美久と一緒に逃げる様に教室を出た。

「すごかったねー♪なんかもう眼福って感じ？W王子様に囲まれて羨まし～」

「そんなにいいもんじゃないの、美久は付き合い長いんだから知ってるくせに」

「いやー二人並ぶと迫力あるから、びっくりしたよ。あの二人もう友達なんだ？なんだか似合うというか、逆に似合い過ぎてちょっとっていう気もするコンビだね」

「私がうっかり紹介しちゃったの。同じサッカー部に入るって聞いたから」

「橘くんってすごいね。トップ入学でサッカー部に入るなんて、文武両道？しかもルックスが抜群だし」

「本当にそうね。たとえ本人の努力が有ったにしても、不条理を覚える人ではあるわね」

「でもせりかも仲良くなったんでしょう？」

「うん。まあね。仲良くっていっても話してみたら向こうがすごく大人な人で、玲人が懐いちゃったのよ」

「性格もいいんだ～。益々ファンが増えそう。競争率高くなりそうだから頑張らないとね」

「私はやめとく。玲人とずっと一緒で大変だったの、やっと少し解放されそうだったのに、これ以上厄介事を呼び寄せたくないもの」

「勿体ないと思うけど、せりかもなんだかやつれてるし、そう思うのもしょうがないかもね～」

「私は、普通にちょっとだけカッコ良くて優しくて可愛い感じの気の合う人がいいの！」

「なんだかせりかって、微妙に残念なトコが可愛いのよね。一見しっかりしてそうにみえるのに」

「何よー。残念な事なんてないわよ。私は普通の幸せを願ってるだけなんだから」

「じゃあ、その微妙な彼を連れて来て見せてくれるの楽しみにしてるからね」

絶対連れて来てやる！！と思うが、私だってそんなに全体に丁度いい人が簡単に見つかるとは思ってはいない。玲人や橘みたいな素敵な人達は目立つから直ぐに発見されるだけの事だ。気が合うとかは時間を掛けないとわからないしやっぱり難しいのかと思う。

家に帰り、夕食と入浴と腹筋などのいつもの自己流美容メニューをすませてから、今日の復習をしていると、部活が終わった玲人がやって来た。

「もう、始めてるんだ～。偉いね～。せりは」

「猫撫で声出すって事は分からないトコあったんでしょう？今日の分は、聞いてくれて大丈夫だよ」

「流石、せり様。いつもの事だけどホントに助かってるよ」

「お互い様！持ちつ持たれつでしょ」

「そうだけど、せりと一緒の学校にして良かったよ。やっぱり」

「そうだね。違ったら一緒に勉強出来ないもんねー」

「大学もせりと同じ所にしようかな～」

「な、何言ってるの！まだ高校入ったばかりだし、大学は将来の事も考えて選んでよね！」

「まあ専攻とかもあるから、そううまくは行かないだろうけど、出来ればって話」

「もう、玲人ってば、いつまで一緒に居る気なの？」

「何だよ。イヤなのかよ。こんなに付き合い長いのに俺、愛されてないんだな～」

まずい。玲人が拗ね憎になってる。今迄も何度かあったけど、もういい加減子供じゃないんだし、この手の拗ねかたは、無しだと思うんだけど。しかも愛されてないって言われてもね～。愛してるかと

言われればそれは違うし、逆に愛されていないのか？と言われれば愛情はあるんだけど…。ムズカシイ。お互いお年頃になって来たんだから？幼稚園の頃と同じ事言うのはやめようよと言いたい！！しかし言ったらもっとメンドクサイ事になるので「そんな事ないよ」と言っておく。

「とりあえず、勉強しよう。ね！」

「数学でいまいち理解しきれなかった所、教えて」

「うん。これは……」

説明を始めると元々飲み込みの早い玲人は一回ですぐ解るので、教えるのにそんなに手間が掛からない。その後は、他の教科の復習を二人で簡単にさらった。やはり、一人でやるより、効率もいいし頭に入る。その後、予習も半分ずつして、半分はお互いにレクチャーして、これで完璧、と二人とも満足した所で玲人が帰って行った。

なんだか今日の玲人は、幼稚園の頃、せりかが、他の男の子と遊んだ時と同じ拗ねかたをしていた。もしかすると橘くんの事が引っ掛かってるのかなと思うが、拗ねられる程親しくもないし、本来は恋人では無いんだからそんなに独占欲を持たれても困るのだが、それを彼に言うのは、築きあげて来た二人の仲の何かが壊れてしまいそうで言えなかった。

玲人は、今日帰り道で、橘がせりかの事を褒めるのを誇らしく自分

の事の様に聞いていたが、なんだか、もやもやして来た。言われなくてもせりかが、優しくて、思慮深くて、可愛いけれども気取った所がなく気さくな性格で、おまけに面倒見も良いと言う事は、最初から分かっている。他人がそれを賛辞するのは珍しい事ではないが、ああ手放しに褒められると橘は、せりかが、好きなのだろうか？と勘ぐってしまう。まだ会って間もない橘にせりかを取られてしまいそうな気がして、不安定な気持から自分でも自覚する程、子供っぽい行動に出てしまった。自己嫌悪に陥るが、せりかが、昔と一緒で、「そんなことないよ」と愛情を否定しないでいてくれる優しさが、心に残った。

橘は男の自分から見てもかなりの美丈夫で、サッカーも体格にまかせて強引なプレーをする玲人と違い、テクニックに優れていた。自在にボールを操る様は、見ていても気持ちがいい位で、レギュラー入りも受験の為に早めに引退するこの学校の三年生が、引退した後には確実だろう。それを奢った所も見えず、学年トップの成績は受験勉強を、死ぬほどしたからだと努力を隠そうともしない所が好感が持てる。俺とは全然違うと思う。毎日のせりとの勉強会が無かったら、俺の成績など知れている。お互い助け合ってはいても、サッカーに時間を取られる分、学業面では、どちらかというとせりに助けられていると思う。自分の方が助けたと思うのは主に逆上がりを出来る様にしてやったり、泳ぎのコツを教えたり、走るフォームの改善だったりと、主に体育面が多かった。それでも、せりは今でも、その事を話題にして、助かったと言ってくれるし、勉強会も二人だと効率がいいと言って玲人の負担を軽くしてくれるのだ。成績が落ちると間接的にせりにも迷惑が掛かるので部活動をしながらも精一杯頑張るが、それは水鳥のように、下で足がいくらバタついていても見えないし、見せなかった自分と努力を恥じらう事無く見せる橘とどちらが正しいという事はないだろうが、それでも玲人には、彼が眩しく見えてしまう。今迄は自惚れる訳では無いが、せりかが、

自分よりも近しい男が出来そうに成っても、それを蹴散らす自信があったし、実際そうして来た。その事はせりかは知らないし、知らせるつもりもない。それ程たいした事もせずに少しだけ付き合っている男の顔で相手を睨めば、向こうが簡単に退いてくれただけだ。そんなつまらない男達に、せりかを渡せる筈も無いと大義名分を自分の中で作って来た。橘忍は、大袈裟かもしれないが、こんな出来た人間が世の中に存在した事に玲人が軽くショックを受けた程、精巧に神が造り出したかのような美しい相貌以外の要素も完璧だった。今迄の大義名分は橘の前では跡形もない。そんな人間が傍に居れば少なからずとも好意を持つのは、時間の問題だ。既に玲人でさえ、橘忍に魅了されている。せりかが、橘と付き合えば、きっとせりかと玲人の関係も変わってしまう。玲人の中でそれを、避けられる術を持たない以上、考えれば考えるだけ、思考は深みに嵌まっていってしまうだけだった。

3

「橘くんからメールだ」

せりかが呟くと玲人は僅かに眉を寄せた。最近文化祭が近い為、打ち合わせメールがよく届く。自分の所にも同じ様に副委員の石原沙耶からメールや電話は来るが、どうも一組よりは、五組の方が力が入っているのか、連絡が1．5倍位はある気がする。

せりは悩みながら、返事を返すと満足した様に微笑んだ。

「なにやるんだ?五組は?」

「えー!内緒だよ。他のクラスはライバルでしょ」

「たいした事じゃないじゃん。うちだって隠す事何もないし、別に教えるのに聞こうとしないし」

「だってこっちの言わないのに聞いちゃったら悪いもん」

「だっても何も、随分他人行儀だな」

「子供っぽい事言わないの。文化祭の時に見に来てよ。そっちにも行くから♪」

楽しそうに、子供の様なワクワクした目で言われると、そっちの方がガキっぽいと言い返したい気分の玲人だったが、あまりしつこくして嫌われたくはない。ずっと幼い頃から一緒にいたが、やはり其処には見えない線が明確にひかれており、そうで無ければこんなに

長く居られない部分でもあった。

玲人のクラスはありきたりだが、執事&メイド喫茶という学園祭では最近一番多いのではないかと思われる催しもので、衣裳作りや喫茶のメニューなどが、女子の担当で、店の内装が男子担当という完全分業制で、部活動もある玲人には、とても有り難い、楽さ加減だった。当日、殆んど執事役をやってくれれば、内装も指示を出してくれれば、部活優先でいいと言うクラスメイトの気配りも嬉しい。実際、この進学校の中で真剣な運動部はサッカー部だけで他は同好会要素が強く、文化祭優先といった考えでいいらしい。運動部自体も入部しているやつは少数派だった。

対してせりかは、部活動は結局見学だけで入らず、帰宅部で暇なのかと思えば、今は玲人よりも忙しい。家では色々とチクチクと縫っているし、たまにミシンが出たままになっている。もともとせりかは裁縫の類が得意である為、面倒見の良さも手伝って無理しているのではないかと不安になる。帰りも結構遅く、部活動を終えた自分よりも一時間以上遅いのだから心配になる。迎えに駅まで行くと言っても、人通りも結構あるから、心配要らないと断られてしまう。経験上、ここで過干渉な事をすると、とても距離を開けられてしまう。いつもより更に遅い時だけ、メールでどのあたりか聞き出して、コンビニに買い物があるからついでに・・・と言って何気なく迎えに行くが、其処まではせりかも拒否する気持ちは無い様で、『ありかとね』とすこし照れたように礼を言う。短い期間の事だし、毎日迎えに行かせてくれた方が精神的に楽なのだが、せりかには、譲れない所らしい。言わなくても玲人には、なんとなく理由が分かる。それは『彼氏の仕事』なのだ。それを玲人にして貰うのは、嫌だと言うよりも、今迄ずっとして来た線引きから越えることが、玲人の為にも、そして、自分の為にもならないと考えている様だった。

橘からも何度か送るという申し出を断っているというのを橘本人から聞いていた。せりは、変な所で頑なで真面目だ。自分はあんなに面倒見が良いのにそれは自分では意識に無い様で、自分の事は出来る事は、頼らずに、出来ない事だけ已むを得なくお願いするといったスタンスだ。玲人は、せりかのそういう面はとても気に入っていたが、最近は頼られない事が少し、寂しく感じていた。

せりかのクラスは、実は劇をやる事になっていた。なんでそんなメンドクサイ事を・・・と内心思う。衣裳、台本、大道具、小道具、キャスト決めに、セリフ覚えとやる事が目白押しの一番手の掛かる代物だ。しかし、多数決で『シンデレラ』をやる事になった。理由は簡単だ。リアル王子様の存在が大きい。橘忍が舞台上に立てば、それはそれは見映えのする事にクラスの殆んどの者が目を付けていた。基本、賢い人間ばかりの集まりだ。何を効果的に使うかというのに長けた者が多い。其処に橘の存在は、大きく使わなければ宝の持ち腐れであると考えられていた。学年中の有名人でもあり、客寄せにも持ってこいな訳だ。橘は基本、本当に大人な人だと思う。嫌な顔一つせずに、引き受けた。橘の性格上、王子様なんてやりたくないのは、間違いない。ここ数カ月のクラス委員のお付き合いで、周囲の創る王子様キャラに関して、たまに洩らす少し困ったような言葉を聞いているせりかは、少なからず同情してしまったが、シンデレラはせりかにやって欲しいとクラスの皆に言われた時には、その同情も何処かに飛んで行ってしまった。少し躊躇いながらも断りたい旨を示すが、皆もやるからには失敗したくないし、しっかりしていて容姿も整っているせりかが適任だというのがクラスの総意で、

懇願されてはせりかも断りきれなかった。

こうしてせりかの忙しい日々が始まった。皆それぞれ得意分野に分かれて、自主的に仕事を引き受けてくれるので、クラス委員としては、なんて良いクラスだと思う。一番難しいと思われた台本作りも、元々そういう事を将来の仕事にしたいと考えているクラスメイトが、何本か案を持って来るからその中から面白く成りそうなもので行こうという安心感たっぷりの言葉をくれた。

ダンスシーンだけは大分、練習を余儀なくされた。ワルツの踊れる高校生などそう居る訳もないが、やはり、一人や二人嬢ちゃん、坊ちゃんがいて、小さい頃から嫌が応も無く叩きこまれている二人の経験者が、先生となってダンス教室をしてくれる。配役はそれを見越して運動神経の良い者が選ばれている。

最初こそ、皆、男女が身を寄せて踊るダンスに照れるわ、腰が引けるわで、見れた物では無かったが、舞台で失態を見せる事を思えばやるしかないと腹を括ったらしく、それなりに踊れる様に成るのは相当早かった。踊れる様に成ると楽しくなって来てしまい、現金なもので、あんなに最初苦戦したダンスが最近の一番の盛り上がる場へと変わって来ていた。橘が部活がある為、代役がせりかと踊ってくれるのだが、この代役はワルツの先生役の片割れの坊ちゃんが演ってくれる為、リードも巧みで本当に踊りやすい。皆から見ても優雅に見えるらしく、せりかのシンデレラ役は好評価を得ていた。これで本番に橘と上手く踊れれば、なんとか大役を果たせそうだった。

部活を終えて皆に謝りながら練習に参加する橘は、最初からワルツを踊れたのかと思う程、上手だった。それを口にすると、家でもステップを踏んでいて、毎日練習しているらしい。家族に気味悪がられていると告白すると、その場の全員が笑い崩れた。橘は天才では

なく、努力の人だとクラスの皆にも段々分かって貰えて来ている。代役の子にも昼休みに付き合って貰って、マンツーマン指導で教わっている。

皆で、一生懸命何かを創り出すと言う共同作業は、とても楽しく、特に努力を怠らないクラスの王子様が牽引役となって皆を引っ張ってくれていて、五組は一つに纏まっていた。せりかも今迄、あまり話した事のないクラスメイトとの触れ合いに心温かくなっていた。特にダンス先生の坊ちゃん、本庄綾人（ほんじょうあやと）とはよく話す様になった。本庄は、皆から坊ちゃんとあだ名で呼ばれるのに最初はムクれていたが、皆からすると親愛と感謝の入り混じった呼び名だったので、せりかがそう説明すると、仕方無く受け入れると言った。シンデレラを多分嫌でも一生懸命やろうとするせりかの言葉は本庄には、響くものがあった。橘も相当、努力型だが、せりかもそうだというのが練習を通して本庄には分かって来ていた。

見た目も頭も申し分無くて運動神経も良く、委員の仕事もそつなくこなす二人に、クラスメイトは、多少の羨望と嫉妬の入り混じった感情があったが、文化祭の準備が始まるとそんな気持ちは綺麗さっぱり消えてしまった。どれだけ二人がいつも大変な仕事をしているか、皆の面倒をさりげなくみてくれていたかを放課後に残る事で目のあたりにしたからである。しかも軽々とこなしている訳でも無いのは見てとれた。二人の（特にせりかが）鬼気迫る迫力で、面倒事を次々と片づけていく様子には頭が下がった。皆で手伝う事を決めて、出来る限りフォローしなくては申し訳ないとほぼ全員が思った。

本庄も最初はいつも完璧な二人が、ワルツに四苦八苦するのをほんの少しだけ、小気味よく思っていたが、真摯な二人を見れば直ぐに自分の考えが愚直であった事に気付いた。改めてみれば、せりかは、手を取るのも照れて頬を染めながらも、何度も、何度もステップを

踏む。自分に対しても感謝の気持ちを顕わに親愛の笑みを向けてくれる。いい意味で普通の躾の良い女の子だった。皆は、ふざけて『坊ちゃん』と本庄を呼ぶが、せりかだけは、一度もそう呼んだ事がなく、『本庄君』と呼んでくれる。直接的ではないが、ワルツが出来る事をばれてしまった所為で申し訳ないと言う様な趣旨の事を言われたので、そんな事は何でも無いと答えれば、ほっとした表情を見せた。本人はシンデレラの大役だけでも荷が重いだろうに、気遣いにも程があると少々おかしくなって笑ってしまうと、『ワルツが出来る人がいて本当に助かったと思ってとっても有り難い気持ちでいっぱいなのに笑うなんてひどい…』と本気でムクれられ、本庄は少々、困ってしまった。椎名せりかが義理難く、気さくでいて、それでいて思っていたよりも子供っぽいからだ。しかしまだ、高校一年の女の子だと思うと、今迄がどれだけ神聖視という名の偏見で見ていたかという事に、随分と自分が浅慮であったと思った。他のクラスメイトにしてもそう思っていると思う。

よく話す様になってからも、せりかは本庄の家の事などには決して触れてこない。最近見た映画の話だったり、女子だけでやっている衣裳作成の苦労話等をユーモアを交えながら、話してくれる。どちらかというと本庄は聞き役だ。本庄は笑いながら、話の途中で突っ込むと切り返しもとても見事でこちらを不快な気持ちにさせるという事がない。ダンスの時の初さから考えると男兄弟でもいるのかとこちらが踏み込んだ事を聞いてしまっても、多分、幼馴染の一組の高坂玲人の所為で、男子の鋭いツッコミに慣れてしまっているんだと思うと簡単に答えてくれた。自分の事は殆ど話さない割に、せりかに関しては、詳しくなってしまっていた。高坂が生まれた時からのお隣さんだという事や、彼女の母親がイケメン講師目当てに英会話に行っている話まで、話の流れで話してくれた。言ってしまってから要らぬ事まで話したかな?という後悔が少しみえたので、『他には、椎名さんの個人情報は流さないよ。他の男子にいろいろと聞

かれるけどね』と言っておくと『流石、先生』と返された。教える立場からか、彼女はたまに先生と茶化して呼ぶ。女子はどちらかというと坊ちゃんよりもそちらの方が浸透している節もある。文化祭も終わって落ち着けば、元の名字呼びになってくれるとは思っているが…。坊ちゃんよりは何倍もましな呼ばれ方ではあった。

そうして、着々と一年五組の「シンデレラ」が完成されつつあった。

4

「ラブシーンが最後に無いと劇全体が締らないんだよ！やっぱり！！」

台本と演出担当の荒井美奈絵が出来上がりつつある「一年五組版シンデレラ」に対して、声を張りあげる。

「「「「「はあ～？」」」」」

呆れた様に皆、力の抜けた答えを返す。特に当事者の二人は苦笑気味だ。

「あのね～。荒井さん。演出に力入れてくれるのは嬉しいけど、それはちょっとやり過ぎだと思うよ」

せりかが軽く注意をいれると、橘を始め、周りの者も頷いた。

「そうだよ。学園祭でそこまでやったら指導はいっちゃうんじゃね？」

「主役の二人にも悪いよ。そんな演出は」

次々と荒井を諭す言葉が出るが、流石プロ志向だけあって少しそれっぽい感じでいいから！と粘られる。

「大体、少し抱き合うふりなんてダンスとそう違わないじゃない？」

「「「「違う～！！！」」」」

踊る連中からは悲鳴が上がる。

本庄がダンスの先生として見かねて代表で物申してくれる。

「ワルツをしない人間から見ると抱き合っているのと近く見えるかもしれないけど、踊る当事者からは天と地程の違いがあるんだ。みんな、ダンスなら恋人じゃなくても手を握れるけど、それ以外でそういう事は無理だろう？女優や俳優じゃないんだから、そんなに割り切れないよ。まだ高校生なんだし」

「そうか～。ごめんね。出来あがりがどんどん良くなって来たら欲が出ちゃって。私も大分、無理目な事を言ってるのは分かってるんだ…」

荒井が、しょぼんと肩を竦めると皆、責めた事に段々罪悪感が湧いて来た。彼女は、そもそもよくやってくれているのだ。彼女無くしては、劇も素人ばかりで形になったかどうか分からない。

気まずくなった内のひとりが爆弾を放り投げた。

「キスシーンは？もちろんフリだけで。それで幕が降りれば、かなりめでたしめでたしっていう感じじゃない？」

「フリだって流石に見てる先生とかも分かるだろうし、それならば注意は受けないかもね」

「そうだよね。ホントにする訳じゃ無いし、そういう場面があったらすっごい素敵かも～」

女子中心にかなりの盛り上がりでキスシーン（フリ）の追加がついに決定してしまった。せりかにしたら大ショックだが、橘も口も挟めない状態でせりかを見るので、安心させるように『大丈夫、フリだけだし劇がうまくいったほうが嬉しいから』というと橘も頷いた。

しかし、あからさまな、フリなのもどうなのか？やはり一気に、冷めるのではないかという話になり、クラスの皆が、客席予定の色々な位置に立ち、照明も夜で、月夜バージョンに落として、どうしたらどの角度からみても離れて見えないか？という実験がはじまった。

せりかはやると言った手前、頑張るが冷や汗が出て来た。せめてもの救いが衣裳を着ている事だった。これが制服だったら本当にもう居たたまれない。橘の王子様の衣裳は、緋色のマントに黒のタイネクタイをしたスーツだった。物語の王子様っぽくないが、かぼちゃパンツは、似合わないからという理由でドレスもすべて現代風にする事で、浮かないようにしたが、橘の存在自体が、佇んでいるだけでも充分に目を奪われるので、あまり意味がないのではないかとせりかは思った。しかもタキシード風なスーツとマントじゃ、ドラキュラ伯爵に見える。しかし、橘が着るとそれに王冠を載せただけで充分王子様になるから摩訶不思議だった。

現実逃避すべく色々な事を考えるが、キスシーンは顔を限界まで近付けるので、もうビクビクである。橘や、本庄が、やっぱり止めたほうがいいんじゃないか？と取りなしてくれるが、見ている皆が、変な演出家スイッチが入ってしまって、「もうちょい角度右で」とか「少し手を添えると隠れて離れてるのが見えないからやってみて」と指示が色々な所から飛んでくる。それに少しずつ答えて行くうちに、全員からＯＫサインが出た。わぁーとか、おおーとか出来あがりに歓声が沸いた。

「すっごい雰囲気ぐっと締っていい絵になるよ！！やっぱりこれでいこう。立ち位置とか角度とか充分に今のを覚えこんでね！」

荒井が興奮して言うが、心の中はへなへなになっているせりかにこれを覚えている自信は全く無い。橘を頼る様に見ると、ガムテープを小さく分からない位にこっそりとその場所に貼った。それから携帯を持って来てもらい、本庄に写メールのムービーで体勢を一周まわって撮ってくれる様にリクエストしていた。流石、頼りになるなぁと変に感心する。本庄も冷やかす事も無く、黙々と作業をこなしてくれる。先生ありがとうと心の中で手を合わせる。こんな撮影、本庄で無ければ冷静にやってくれられないと思うと橘の人選にも唸らざる得ない。

「有難う。橘くんも先生も」

少し涙目になりながらお礼を言うと、二人がぎょっとしてせりかを見たが、本庄は早く涙を拭け！！とやや命令口調でハンカチを押し付け、橘は口元を押さえて顔を赤くした。

「どうかしたの？」とせりかが不思議がると「これだからお子様は！！」と本庄には珍しく悪態を吐かれた。橘は僅かに微笑んで、後で、メールで写メ送るねと優しく言っただけで質問には答えてくれなかった。何がいけなかったのか帰ったら玲人に聞いてみようとせりかは思い、それ以上聞くのをやめた。

帰ってからせりかは、恒例になっている二人の勉強会の後に、今日

の事を劇の事だけすっとばして玲人に聞いてみた。玲人は、一瞬絶句するが、その後、呆れたように溜息を吐いた。

「あのさー、違ってるの分かって聞くけど、特に意図はないんだよな？」

「意図？って何の為の意図よ」

「やっぱり微塵もないんだな。分かってくれてる本庄に相当感謝すべきだな」

「ハンカチ押し付けられたけど別に拭かなくちゃいけない程、潤んでないよ。少し熱とかあるとウルッとするじゃない？あれくらいだよ。しかもなんか達成感と緊張が解けたんで気が少し緩んだだけで、泣いちゃったわけでもないのに…」

「あのなー。鈍いのもいい加減にしてくれっていうか、多分俺の所為か…。今迄、せりの周りから男連中排除してたから、極端にそういう事に疎くて無防備にさせてるんだな～。ごめん！」

「なんで玲人が謝るのかも訳分からない。確かに今迄、すこーし免疫薄いかもしれないけど女子校育ちじゃ無いんだし、喋ったり普通にしてきたんだよ？」

「うーん、なんて言ったらいいか分かんないから直訳しても怒らないか？」

「うん。怒らないから、はっきり私の至らない事を言って？それだけは本庄君の言い方で何と無く分かったんだよねぇ」

「一言で言うと、それは普通に見れば、男を誘っている様にみえるんだよ。せり…」

「はぁー？初心者が二人も一遍に誘えるわけ無いじゃん。ばっかじゃ無いの！！」

「だから～、無意識でやるのは無防備の馬鹿なの！それを気付いて本庄が止めてくれたんだろ。お前にそういう気が無くても男の方がグッとくるの！！」

「誰にでも来るわけ？節操ない感じ。普通、好きな人だけじゃないの？」

「高校生の男なんて大抵そんな事しか考えてねぇよ。今迄そういうの俺が排除して来たから危機感薄いかもしれないけど大抵の男ならせりはストライクゾーンだからある程度、気をつけないと駄目なんだよ」

「なんか私って、鈍くてすごく駄目な子みたい」

「みたいじゃなくて、だめだから！」

「きつーい。でも玲人じゃ無いとこんなにはっきり教えてくれないんんだから感謝しないとね。ありがとう。橘くんと本庄くんも教えてくれなかったもん」

「それは、無理だろう。半分自分で気付くようにしてくれてる分、本庄は場馴れしてるのか、ちょっと話聞いたら普通の奴と違うよな？」

「そうだね～。悪いから、直接は聞いてないけど、噂では、結構有名な企業の御曹司って聞いたけど。でも本人あまり言われたく無さそうだから、玲人も余計な事言わないでね」

「セレブで女慣れしてるって事か……」

「そんな感じ悪くないし、全然チャラくないわよ。なんだか色々と面倒見も良くて育ちがいい感じで他の子よりも少し丁寧な感じ？粗野の反対で…優雅って言ったらちょっと過ぎるけどなんだか自然にジェントルな感じって言ったらわかる？」

「ああ、大体分かった。まあ、いい奴なのもわかる。せりが、結構ボケてるのを知ってて、面倒見てくれてて、なんだか俺も手を合わせてお礼言いたくなってきた」

「私なんていつも心の中で手を合わせてるよ。実際言葉でも言うけど。ハンカチのお礼と共に何か作ろうかな？」

「ああ、それ駄目―。アウト。そいつにも、またお目玉喰らうと思う。少量の買ったチョコか飴がベスト。いつも噛んでるガムとか？そういう軽―い感じのにしとけ」

「分かった。そうする。遅くまでありがとう。聞いてくれて助かった。玲人には文化祭終わったらお菓子作ってあげるけど、それはセーフ？」

「もちろん！！」

満面の笑みで玲人が答えた。せりかも気になっていた事が分かったので、内容はどうあれ気分は良かった。これで数日後の文化祭がう

まくいけば言う事なしなんだけど、といった気持ちになった。

5

文化祭当日になった。

今日は一般公開のない校内だけの公開なので模擬店も割合空いている。

せりか達のクラスの劇は、明日なので、チラシを校内で、配り終わると、後は自由時間となった。部活動などで、展示やお店を出している者は、そちらに行かなくてはならないが、せりか達は文化部にも入っていない為、模擬店を見て回る事にした。美久と弘美と三人で、一年一組のメイド&執事カフェに行ってみる。

一組のカフェは大盛況で、入るのは躊躇われたが、玲人がせりか達を見つけて声を掛けてきた。

「せりー。来てくれたんだ。奢るから、こっちにこいよ」

お友達特典で空いている目立たない席に滑り込まされる。

「これって、横入りじゃないの。大丈夫なの？」

せりかは、こういう固い所があり、理不尽な事を嫌うところがある。玲人は、ここは特別予約席だから大丈夫だと宥めた。他の子達も特別に親しい子が来た時に自分が対応する事を条件に許されている席らしい。そういうことなら、とせりかも納得して席についた。

「お帰りなさいませ。お嬢様。お飲み物は何に致しますか？」

執事姿で軽く腰をおり、多分お決まりのセリフを玲人が言うと、せりかと美久は笑い崩れた。

「似合い過ぎー！！高坂君カッコいい。一番人気なんじゃないの？」

「玲人、天職だよ。執事っていうか、ホストっぽい！」

けらけら笑いながら、褒めてるんだか貶してるんだか分からない言葉を掛ける。二人とは対照的にあまり玲人と面識のない、高校からの友達である斎賀弘美は、頬を染めて玲人に見惚れてしまっていた。

「それで、お嬢様がた？お飲み物は？」

「アイスコーヒーお願いします」

「美久と斎賀さんは？」

「うーんとオレンジジュースで」

「あ、私も！」

「かしこまりました。少々お待ちください」

玲人が去っていくと三人できゃあきゃあ騒ぎだした。

「玲人も似合うけど、女の子のメイド服もかわいいね。一回着てみたい」

「そうだね～。みんな三割増しかわいく見えるよね。執事さんも見た目重視みたいだし？」

「確かに。厳選してるみたいね。けっこうシビア…」

「せりかもそう思う？執事さんも衣裳カッコいいし、店も本格的。ステンドグラスとか使っててアンティークな喫茶店みたい」

「一組も頑張るよね～。明日は負けてられないね！」

かしましくお喋りしていると玲人が飲み物とショートケーキを持ってきた。

「お待たせ致しました。どうぞ」

いつもに無い玲人の気取った所作と笑顔に、せりかも楽しくなってきた。

「執事さん？ケーキは頼んでませんけど？」

おどけて言うと

「お嬢様方の為に特別に用意させて頂きました。宜しければお召し上がりください」

それらしく、恭しい態度の玲人がまたツボに入って、美久とせりかは笑い出す。弘美だけは首を傾げてお礼を言うと、玲人は、『喜んで頂けて光栄です』と微笑んだ。

「ありがとう。玲人もあっちで、呼ばれてるよ？私達は充分楽しませてもらったから」

「ああ、ゆっくりしてってくれ。俺も明日の劇見に行くから席キープしといて。結構評判になってるから混みそうなんだよ」

「王子様がねー。橘くんじゃ、宣伝しなくても人が来てくれるから助かるよね」

「せりのシンデレラも笑いに行ってやるから。後、忍も冷やかしてやれるから、今から超楽しみ！」

「冷やかすのは、終わってからにしてよ？唯でさえ、私も橘くんも緊張してるんだから」

『わかった、わかった』と言って玲人は他のテーブルのお客さんの元に去っていった。

それにしても執事の玲人は大人気だった。せりか達がいる間もあちらのテーブル、こちらのテーブルといった感じで中々忙しい。一緒に記念写メ等も撮らされていて、笑顔で楽しそうに対応している。これがもし橘だったら相当苦行だろうと思われた。反対に玲人が王子様でも楽しくやってくれそうだと思うと玲人は、いつもポジティブだなぁと感心させられた。橘がネガティブなのでは決してない。あちらの方がごく普通の反応で、玲人の方が、ある意味特別強靭な精神の持ち主なのだろう。騒がれてもそれはそれで、相手も自分も楽しくさせられている様に見える。

玲人に皆でお礼を言ってから一組を後にした。後はタコ焼きをたべたり、綿菓子を持って、ヨーヨー釣りなどまるで、お祭りに来たみたいである。おまけに全てが安価である為、買うのになんの躊躇いもない。明日の衣裳が着れなくならないといいんだけど、と思うが楽しむ方を優先した。弘美が射的でおおきなぬいぐるみを当てて、

嬉しそうに抱えているのも微笑ましくて自然と笑顔になる。そうしているうちに同じ様に楽しんでいる橘と本庄とすれ違った。橘がせりかに声を掛けて来た。

「玲人のところ行ってやった？」

「行ったよー！笑い過ぎてお腹痛かったよ。あんなに気取った玲人初めて見たからもうおかしくて！」

「椎名さんの幼馴染の彼、スゴイ迫力あるね。カッコいいんで初めて見たから結構驚いた」

「男の人から見てもそういう事思うものなのね」

「むしろ男の側から格好良く見えるタイプだよ。体格とかも筋肉質で、でもすらっとしてて理想的だし。橘も綺麗な顔してるけど、男からすると見た目だけに関すれば高坂のが羨ましいね」

「せんせい？橘くんを目の前にして失礼じゃないかしら？なんといってもうちのクラスの王子様なんですからね！」

「ははっ。気を使ってくれなくてもいいよ。俺もサッカー部で玲人くらい体格恵まれてたらっていつも思うもん」

「私からしたら、知らない人から写真とか強請られて、平然と楽しく一緒に写っちゃう図太い神経が一番羨ましいけどね…」

「「「「それは確かに」」」」

皆の声が揃ったので、せりかは、噴き出してしまった。

本庄がせりかにだけ、こそっと「何か俺の事を話した？」と聞くので「この間の教えてくれなかったから玲人に聞いた時に先生の事もはなしたけど」と答えるとはぁーとタメ息をついた。

「せりがお世話になってますって彼に言われたんで、何かと思ったけど」

「引かないでね？私も他に聞ける人居なかったから聞いちゃったんだけど、玲人にも先生に感謝しろって言われて私も反省してるから」

「何こそこそ内緒話してるの？」

美久が入って来たので、玲人のことを説明してたと言ったら直ぐに納得してくれた。親し過ぎる間柄に説明が必要な事が、今迄も少なく無かったからだった。それに嘘は言っていないから後ろめたさもなくていい。

それから5人で展示物を見てまわったり、お化け屋敷に入ったりした。しかし、学生の造るお化け屋敷はやはりあまり恐く無かった。せりかと橘は内心、来年はお化け屋敷はなしだなと思った。気が早いが、委員になる可能性が高い以上、見る目が粗を探してしまうのも事実だった。

そうして文化祭1日目が終わった。

6

とうとう文化祭二日目のせりか達の劇の上演日になった。

せりかは、緊張で朝から食欲も無かった。せめてもの救いは相手役の王子様が、実際にも陰ながら憧れている王子様という一点につきた。

何をしてもそつなくこなし、面倒事も厭わない橘は、人間としてもせりかの理想形だった。あんな風に自分もなれたらいいと思う。橘の傍にいられる権利を手に入れたいと迄は、思い詰めた想いではなかったが、彼が、笑いかけてくれたり、話したり出来た時には、少しハッピーな気持ちになれる。なんだか片思いっていいなと最近のせりかは思ってしまっていた。今迄にそういう感情を持った事が無かった為、こういう恋の仕方もアリかな?と思う。なにも報われなくてもいいのだ。報われれば面倒な事も一緒に付いてくる。本人とも合わないところも出てくるだろう。せりかにとっては、今が一番の最良で幸せな状態だった。故に、いくら美久や弘美にせっ突かれても告白する気なんてさらさらない。『誰かに取られちゃうわよ』なんて美久達はいうけど、その時は、あの橘が選んだ相手なら納得出来そうだった。今迄、毎日小さな幸せとときめきをくれる存在の橘に感謝すらしていた。それは彼に特定の彼女が出来たとしても寂しくは思うと思うが、無くなってしまう思いではないと思う。

今日はそれだけ思い入れのある相手との共演なのだから、失敗は許されない。セリフもダンスも完璧に覚えた筈だったが、それでも何度も台本を見直してしまっていた。当の本人の彼は、『間違っても分からないから大丈夫だよ。俺もその時は合わせるから慌てないで落ち着いてね』と相変わらず完璧なフォローぶりだ。しかし、立場

は相手も同じ事を思えば相手にばかり甘えていられない。自分も今日は完璧でありたいと思うと余計緊張して来てしまうのだった。

家族席チケットは二枚迄で、玲人の両親の分も考えると足りなかったのだが、美久が親が来る予定がないからと二枚融通してくれた。弘美もそれを知っている為、ケーキとジュースのお礼にと玲人に二枚渡してといって渡してくれた。玲人は、もしかすると美久達が融通してくれる事を分かっていて先日過剰な御馳走をしてくれたのでは無いか思う。今時、あまり親など文化祭になど来ない。それを思えば、一番近しい二人がチケットを譲ってくれるというのを予想したとしてもおかしくはない。

皆で見に来られるのは恥かしいのだが、人生で多分、初めてで最後の主役だと思うと嬉しそうに玲人の小母さんと来る算段をしている親を止める気には成れなかった。

橘が王子様役だと知れるや否や、五組の劇は注目の的だった。橘もサッカー部の先輩達に強請られてチケットを融通してもらっていた。普段同じクラスでも無ければ見れない橘の王子姿を見たいと思うのは当然だろうと思われた。しかし、サッカー部の先輩は、もちろん橘が見たい訳ではない。橘と玲人にガードされているお姫様のせりかを見れるのを楽しみにしているのだが、鈍いせりかに分かるはずも無い事だった。

用意した席が足りず、立ち見客も多い中、「一年五組版シンデレラ」が幕を開けた。

一般的なシンデレラは、舞踏会に行きたくても、行けなくて泣いている所に、魔法使いが現れていドレスや馬車や、靴を用意してくれるが、五組版シンデレラの性格はまるで、せりかの様であった。

義理の母と義姉達とは犬猿の仲であるが、伯爵家の爵位の継承権はシンデレラに有り、実質家の中を、取り仕切るのはシンデレラであった。

「おかあさま、お義姉さま、無駄遣いはお止しになって。どうしても舞踏会に行きたいのでしたら、私の言う事に従って頂けなくてはお許しできませんわ」

地味な灰色のドレスを見に纏ったシンデレラは、きつくそう言い放った。

会場が、高飛車で気の強いシンデレラに笑いが漏れた。

「まずは、ドレスは、私が作って差し上げるから、服飾の業者などお呼びにならないでね。今の時期は高くされてしまいます。宝石類は、新たに安物など、お買いに成らずとも、伯爵家が管理しているなかでドレスに合う物をお借ししますわ」

「わかったわ。シンデレラ。あなたの創るドレスは、売っているものより素敵だもの！」

義姉達は嬉しそうに、シンデレラの言う事を聞く。義理の母も渋々、頷く。

「それから、使用人を遅くまで待たせる訳には行きませんから、十

二時までにはお城の門のところに帰ってらしてね。それより遅かったら置いて行きますから」

小姑のようなシンデレラだが、家の女主人としての威厳と慈愛に溢れていた。

其れからは何枚ものドレスに、ミシンを踏むシンデレラの奮闘場面となり、舞台上の健気なシンデレラに基本的に努力家の多い、この学校の生徒の共感を呼ぶ。

「お姉さま達の分は、出来あがったから先に行ってらして下さい。私は、後から行きます」

義姉達は、シンデレラ作の趣味の良いドレスに身を包み、まだ会った事もない王子様を思い、夢心地で出掛けていく。

シンデレラは一人残って、ミシンを踏み続ける。

そこに、お決まりの魔女が登場する。周りの噂で、継母達にいじめられて、舞踏会に行けないであろうシンデレラを助けに来たのだが、丁重にお断りされてしまう。

「わたくし、お父様にタダで人様からものを貰ってはいけないと教えられていますの。私もそれは、道理に適った事だと思っていますので、すみませんが頂けませんわ」

「でも舞踏会にいけなくなってしまいますよ」

魔法使いは必死に言い募る。実は伯爵と共に登城するシンデレラを見初めた王子からの使いだったのだ。喜んで来てくれると思ってい

た為、困って唸ってしまう。

なんだか困ってしまった魔法使いを見かねたシンデレラが、魔法使いの懇願を受け入れる形で魔法に掛かる。

魔法使いが杖を振ると、ぱぁーと今迄の灰色のドレスが紅色の美しく華やかなドレスに変わる。皆、魔法のシーンは無いと思っていた観客は急な手品のような早変わりに驚きの声を上げた。

すこしスモークをその後焚いて、大振りなイヤリングやネックレスと巻き毛のウイッグに華の髪飾りを手早く付けると観客からは、拍手が沸いた。まだ劇の中盤なのだが…。

馬車に乗る陰で、口紅やアイシャドウが施される。

お城の広間に立った、シンデレラの美しさに、フロア中の皆が見惚れるという設定だが、客席も先程の早着替えを見ている為か、キラキラのシンデレラに息を?む。

それからは、見せ場のワルツである。待ちかねた王子様が駆けより、皆でワルツを踊る。一番の見せ場である。

優雅に踊る群舞に客席からは、溜め息が漏れる。華やかでいて統制の取れた動きは圧巻であった。王子様の橘の美麗さも際立った異彩を放っており、父兄の間でも、滅多に見れない、本当に物語に出てきそうなキラキラ王子に会場がどよめいたのがはっきりと分かった。

流石の現実主義なシンデレラも美し過ぎる王子に言い寄られてアタフタしてしまう。これは演技の設定だが、演技だと分かっていても

橘の甘い言葉にアタフタしてしまうのだから、脚本がありがたい。夢見がちな女の子ではなく、現実的な子を落とす、かぐや姫のような美しさを作るのだと言って、演出の荒井から、橘には毎日の肌の手入れの指示や、眉を整えられたり、軽く舞台用に化粧まで施されていて、本当に、月に帰って行ってしまいそうな美しさと色香を湛えていた。そして、王子はシンデレラに婚約を申し込むのだが、驚いたシンデレラは、会って間もないのに、そんな事を急に言われても…と躊躇する。全くもって現実的である。普通、そんな簡単に人生決められるものではない。そこへ十二時の鐘が鳴ってしまう。なり終わらないうちに、シンデレラは門迄走って、屋敷に戻って行ってしまう。王子さまは追い掛けるが、ガラスの靴だけが、残されていて、この靴の持ち主と結婚すると言い張り、一応、皆にチャンスがある様に演出をする。結婚もドラマティックにしなければ、国の祝い事も効果が、半減になってしまうからだ。こうして、シンデレラの所まで辿り着くのは夜になってしまう。

月夜に、現れた王子に今迄の経緯を聞いたシンデレラは、王子の聡明さに惹かれて、結婚を了承する。そして最後のキスシーンである。前の時に、ぱっちり目を開けたままのせりかに、本庄が、顔が近付いたら、目を閉じる様にアドバイスしてくれていた為、せりかは顔の角度と立ち位置に気を使いながら目を閉じた。しかし、目を瞑ると平衡感覚がおかしくなる事には気が付かなかった。少し揺らめいてしまうのを如何にか橘が支えてくれる。もうすぐ幕が下りると思った所で、事故は起きた。どうしても傾いてギリギリで留まっていた唇が、かすってしまったのだ。橘もせりかも内心はパニックだが、周りには気付かれていない。元々、そう見える演出なのだから。せりかは橘に直ぐにでも謝りたい気持ちになったが、劇を最後まで演じ切った。

会場からは、割れんばかりの拍手が起こり、カーテンコールに主役

のふたりで出る事になった。二人で出て行くと興奮したお客さんから拍手と歓声が起きた。劇が成功した事を感じ、せりかと橘は深々と頭を下げて、また幕が下りた。

7

橘くんに、『ごめんなさい！！私の不注意で本当にごめんなさい』とメールを打とうとしたけれど、送信は出来なかった。直接言わなければ謝罪にならない気がしたからだった。明らかに私がよろめいた為の事故であちらも、もしかしたら初めてかもしれなかった。女の子の方だけが、そういう事にロマンを持っているわけでも無いだろうと思う。よっぽど異性との付き合いが雑な人ならともかく、橘はそういうタイプではない。玲人に相談してみようかと思うが、相手のプライバシーにも関わる以上、友達でもある玲人に話してしまうのは、やっぱり悪いだろう。やはり、二人きりになれる時に、直接謝るべきだろう。

一年五組版シンデレラは、全体の催し物部門で最高ポイントをゲットして、（投票箱が設置されているのと、お客さま動員数と先生の投票数で決まる）一年のクラスとしては異例の最優秀賞を獲得した。観客動員数の多さもさる事ながら、内容に随分の脚色があったが、それが持ち点数の高い先生方に、高い評価を得たようであった。少し、道徳的なところを説いていると思われたらしい。演出の荒井にその意図があったかは分からないが、皆がとても喜んだのは間違いなかった。副賞は驚いたのだが、生徒会が用意してくれたカチューシャだった。いくら、今流行っているからっていっても装飾の類が、商品って大丈夫なのだろうか？

気にしていると色とりどりのリボンの付いたものから、レースのものまでいろいろあって、皆で各々、好きなものを選ぶ。せりかは、茶色のシンプルな物を選んだ。男子は使わないし、どういう風にな

るのかと思ったが、姉、妹、彼女、友達、もしくは、これにあやかって好きな子に告白して渡すという選択肢を生徒会から提案されると、会場がどっと沸いた。はやし立てて、「がんばれよ～！」という声が聞こえてくる。きれいな透明な袋にリボンで可愛く包装されていて、如何にもプレゼント用だった。男の子達も誰の顔を思い浮かべながらかは、謎だが、結構真剣に女子と共に選んでいる様子は可笑しくも微笑ましくもあった。やはり、戦利品である以上、普通に買ったものよりも嬉しい。

女子は全員その場で装着して、皆で似合うとやんやと褒め合って、勝利の美酒に酔うという感情に近い気持ち良さを味わった。皆がそれぞれ、いい仕事をしたという満足感で一杯だった。

生徒会の片づけの人がちらほら見えるが、他の人達は大体帰ったが、五組の皆で、帰り難く、輪になって騒いでいるところで、それは起こった。

橘が、せりかに近づいて来て、目の前に真っ青なリボンのカチューシャを差し出した。早くもお友達にくれる気になったのか？と誰もが思ったが、その後、橘の発した言葉が、それを裏切った。

「椎名せりかさん、俺と付き合って下さい」

はぁ～？？生徒会推奨を早速、使いますか？みんなビックリです。でもその場のノリの類で済ますのが、ここは得策だとせりかは考えて、にっこりと「喜んで」とカチューシャを受け取ると、皆からは拍手が起きた。冷やかす者は誰も無く、普段から仲が良く、主役も演じ切ったツーカーの学級委員二人のノリの良い余興だと思われたようだ。せりかの軽い快諾の言葉が、そういう風に思わせる要因だった。普通は、皆の前で告白されて平然と即座に返事したりなんて

しない。慌てたり、テレたり、狼狽したりするのが多分、正しい反応だろう。余興にも盛り上がったところで、後日打ち上げをする事になり、皆で家路についた。

わらわらとクラスの皆と美久や弘美と校門まで行くと玲人が待っていた。どうやら両方の親が、近くの喫茶店で待っていて皆で食事でもしようという事に決まったらしい。二人に簡単に説明して別れて、玲人と二人で駅とは反対方向に歩き出した。それを見たクラスメイト達は、先程の二割位残った疑念も晴れたようだった。橘も近くにいたが、玲人が親しげに手を挙げて向こうもそれに応えて手を挙げた。どこから見ても、先程の事を真実、真剣なものだったと思うものは、これで限りなくゼロになった。

せりかは、自分の所為で唇がかすってしまった事を謝らなければならないが、まさかその事で、責任を感じて言いだしたことじゃないよね？と橘にしては笑えない冗談に不可解なものを感じていた。いずれにしても後日、橘と二人で、話合わなくてはならないだろう。

8

「どうしてあんな所で告白なんてするんだ？橘らしくないよ」

本庄が怒りを含んだ口調で橘を責めた。

「二人きりでしたら断られるもん」

珍しく酷く子供っぽい事を言う。

「それは、仕方無いだろう。向こうの気持ち次第の事なんだから、断られたらすっぱり諦めるしかないだろう。ストーカーか？お前は？」

「そうだよね～。でも諦めたく無いって思ったら、あの時、すっごくチャンスだと思っちゃったんだよね」

「お前みたいなやつが正々堂々と行かないなんて超意外！大体断られるって決まっては、いないだろう？」

「またまた～、本庄だって１００％うまくいかないの分かってるくせに」

「それは…」

本庄は言い淀んだ。最近仲良くなったせりかの性格が分かってるだけに、おそらく丁重にお断りされてしまうだろうと思う。たとえ、この超美形で中身も言う事なしの橘であっても無理だろう。本庄の見るところ、せりかはひどくアンバランスな人間だ。人としてはし

っかりしているが、女性としては、とても幼いように思う。その落差が激しく、少し危うく見える。その上に、あの幼馴染の玲人の存在が彼女の中で大き過ぎて、恋愛関係ではないといっても、二人の中に割って入るのは困難に思えた。

「やっぱり、分かってるよね。だから、少し思いつめ過ぎて暴走しちゃったんだけど、後悔はしてないよ」

「本当に思い詰めた人間が、自分で思い詰めてるって言わないだろう！！」

「そうかなぁ～自分では、ここのところ結構キテたつもりだけど。劇の練習とかでいつもより接触時間が多いから、そうするとまた、いいところ発見！！ってなっちゃって嵌まってちゃうんだよな」

「お嬢は、確かにいい子だと思うよ。素直でかわいいし、クラスでも結構人気あるけど、お前と高坂で囲んでるのに特攻する無謀な奴なんていないんだから、もう少し余裕持ってゆっくりいけよ。じゃないと椎名さんにとって迷惑でしかなくなるよ」

「すごい高度テクニックでスル―されたもんな～」

「そうだな。校門のところに高坂が居たのも痛かったな。あれで、もう完全に無い事になったな」

少し、憐憫な目で橘を見ると、苦笑いを浮かべたので、こちらが思っているよりはショックを受けているのだろうと思った。

「これからどうする気？」

「どうしようか？相手の出方次第かな？」

「距離置かれちゃうんじゃないの？多少、警戒心持たれちゃってるだろうし」

「それは、そうだけど、あっちから近い内に二人で話す機会を作ってくれる筈だから」

「スルーされてるんだし、きっと、なるべく普通にしつつも二人きりでは話してくれないんじゃないかと思うけど」

「本当に内緒だけど、本庄にだから言うけど、実は劇のキスシーン、とちッて本当にしちゃったんだよね」

「お前、まさか！！」

「誓ってわざとじゃ無い！！どちらかというと椎名さんがよろめいたの支え切れなくてかすっちゃって、超パニックだったから。もちろん少しは嬉しかったけど、向こうには、ものすごく申し訳なさそうにされてて、めちゃくちゃ謝られそうな気配でさ！もう、悲しくなって来たってわけ！だから、そのおかげで話す機会は椎名さんから作ってくれるのは間違いないんだよ。彼女は謝罪はスルー出来ない性格してるから」

「じゃあ、天下の王子様のお手並み拝見ってトコか」

「茶化すなよ。俺だってどうしたらいいかわからないよ。断るスキルしかないし」

「うわー流石、モテル奴しか言えないセリフ来たーって感じだな」

「お前だって結構断ってんの知ってるんだからな。俺より、数多いんじゃないのか？」

「どこの情報網？コワー！俺は、落とす方のスキルもあるから心配無用なの」

「俺より大分性質悪じゃないか！落とすスキル、だったら伝授してくれ！」

「普通仕様はあるけど、お嬢仕様は悪いがない。あれは、レアだから。悪い事言わないから、お前の為に諦めて別の人にしとけって。もう振られてるようなものなんだし。他の子ならよりどりみどりだろう？どうして椎名さんになっちゃうかな～？もしかしてあえて無理な山を登る人達みたいに、ややＭだったりするわけ？」

「キツイこと言うなよ。別にそういう趣味趣向は無いよ。しかもまだ、振られてないし。強いて言えばＯＫの返事貰ってる…って言ってて自分で虚しくなってきた」

「悪い。俺も言い過ぎだわ。ツッコミどころ満載なんでついつい、いつも言葉が過ぎちゃうんだけど、お嬢は全然付いて来れるからスゴイんだよ」

「謝ってるのに、傷に塩塗ってどうするんだよ！そんなの分かってるよ。いつもお前達の会話、テンポ良くて羨ましいと思って見てたから」

「乙女だね～。まあ、協力はするから。相談はいくらでも乗るし、なんなら、俺からもお嬢にお勧めしとくから」

「有難う。お前って口固いし、しんどい話も深刻にならなくて済むから実際は助かる」

「やっと分かってくれたみたいで良かったよ。お嬢の方からも相談される事多いから、うまく行くように俺も力になるから頑張れよ」

その日の夜、橘に、せりかから『お話したいことが有るので時間を作って貰えませんか？』というメールが来たので、代休日である明日に会う事になった。

9

せりかは悩みに悩んでいた。玲人に今迄は相談出来ていた事が出来ない。それだけの事で、こんなにも駄目になってしまう自分は、今迄どれほど玲人に依存して来たんだろうかと思う。今迄は、兄弟の域がこのぐらいだと思った。自分達は居ないから分からなかった事だけど、普通の兄弟がどんなものか少し周りが見える様になると、大分違う事に気付き始めていた。

少し玲人との関係も考えなくては行けない時期に来ているのかもしれないとせりかは思った。

カチューシャが二本ある。一本は、もちろん橘に貰った物だった。皆の前でなく、普通に友達としてくれたとしたら、間違いなくせりかの宝箱行きだった。今でも嬉しくない筈は無い。橘はせりかの憧憬の対象であり、たぶん初めての恋する相手だと思う。しかし、皆のいう恋愛感情と少し噛みあわない。

橘に対して、会いたいとか、会えないと寂しいとかは思った事は無い。ただ会えると純粋にとても嬉しい。随分、消極的で受け身な気持ちだと自分でも思う。到底、恋愛感情とは遠く思えるが、自分の中では、芽がでたばかりで、どんな花が咲くか分からないといった期待の気持ちもあるのは確かだ。時間が経てば、或いは、日差しを浴びるきっかけがあれば、大輪の花が咲く可能性がある。今迄は、その小さな芽でさえ、存在を感じた事も無かったせりかにとっては枯れて欲しくない大事な気持ちだった。自分の中だけで大事に取りだしては観て楽しんでいたいというのが本音だが、恋愛は自分一人

でするものでは無く、相手があって成り立つ最たるものだ。橘に好意を寄せられた場合、どうしたらいいのだろう?好きな人に対する気持ちとしては、大変失礼極まりないが、一番に思うのは、面倒だという事である。今迄と環境が変わってしまう事の恐れや、あの、美しい橘の隣に恋人として並ぶ事を考えただけでも、前世でどれだけの悪い事をしてしまったのかと思ってしまいそうになる位の苦行である。こんなに酷い事を思っているだなんて、知ったら、橘だって百年の恋も一遍に冷めるだろう。

友人に悩みを相談する事は決して悪い事では無いと無理やり思い返して本庄に携帯で電話を掛けた。自分はやはり、こうして誰かに頼らないと生きていけないのかと嫌になるが、本庄は、今日の出来事を良く知る人物であったし、今迄にも、同じ歳とは思えない、人生経験の豊富さを感じる人でもあり、自分との着眼点の差に唸らされてきた経緯もある。やはり、今日の橘の告白がどう映ったのかを聞いてみたい欲求に負けてしまった。

「もしもし、椎名です。今、時間大丈夫?」

「お嬢じゃん。今日の告白事件の相談?時間あるから聞くよ」

相変わらず察しが良くて、こちらが一か二位言えば、十まで分かりそうな人だと思った。

「そうなの。今日の事、先生はどう思う?やっぱり本気だよね…」

「それは、間違いなく本気だろうから、真剣に考えてやった方がいいんじゃないの?」

「でも、あの橘くんが、みんなの前で、告白なんてどう考えても納得できないよ。そんな浅慮な人じゃないでしょう」

「あれは、アイツが悪いと思うけど、みんなの前で言っちゃえばこそこそしなくて済むし、付き合う事になってもやっかみも減るから、つきあうなら悪い方には出ないと思うよ。唯、断る時は最悪だけどね。お互いに」

「じゃあ、橘くんは断られるって思わなかったって事だよね？分からなくもないけど、万が一って事もあるんだし。しかもあの人の普段の言動考えてもそんなに自信家な印象は受けないんだよね」

「逆に、自信無いから、あそこで言ったんじゃないのかな？断れなかったじゃん。現に」

「無理やり断れない状況にしたって事なの？それこそ、橘くんに似合わないよ」

「そうそう。結構、思ってるより、腹黒で策士なんじゃないの？普段の爽やか君ぶりを知ってると引くよな～？」

「もし、そうだったら、逆に安心するよ。普段のパーフェクトな方が実のところ、引いてた所あるもの。もちろん尊敬もしてるけどね」

「へぇ～！結構分かってるねぇ。流石お嬢だな。普通の女子達とは違うな。俺も、やっぱりそれは、そう思うんだよ。腹が少し黒いくらいの方が親近感湧いたよ」

「ちょっと！！勝手に腹黒認定やめてよ。橘くんは、普段が非の打ち処が無いだけで、この位の事でそこまで言うのは罪悪感を感じち

ゃうよ。少しくらい落ち度がある位の方が、こっちも安心するかな～位の気持ちなんだから」

「それで、お嬢さんは橘くんの事はどう思ってるのかな？」

「それは、たぶん、好きだと思うけど付き合ってって言われたら、断ると思う」

「好きなのに断るなんて勿体なく無い？」

「言っても軽蔑しない？」

「しないよ。大体分かる。面倒事嫌なの、ごめんなさい。平和に生きたいの。ファンみたいに観てるだけの方が楽だし、高坂との関係もギクシャクするとそれもまた面倒だし、とか思ってるんだろう？」

「すごーい！！先生実は人の心まで読めるみたい。今言った、人道的にどうなの私？って言葉そのまんま思ってる。酷過ぎで言うの躊躇ったけど」

「普段のお嬢の考え方とか、状況とか考えて、軽蔑しないか？と聞かれたら、その辺だろうとは見当が付くよ。それに相手が橘だったら、よっぽど自分が奴に相応しいとか思ってる人間でも無ければ、大体は思うんじゃないの？橘がそういう人間を選ばないとは思うけどね。好みじゃないだろう？そういう見当はずれの自信過剰な奴」

「みんなキャーキャー言ってても、いざ、付き合いましょうってなったら、意外と私みたいな反応になるって事ね。なんだか橘くんが、気の毒になって来た。でも、あれだけ綺麗な人だと隣歩くだけで勇気はいるんだよね。『なにあの女、釣り合って無いじゃん』みたい

な目で見られるしね。玲人で少し、経験済みなもんで、それより数倍かっこいい橘くんとなんて考えただけで無理そう…」

「へぇー意外!!何倍も橘のがかっこいいと思ってるわけだぁ〜。奴が聞いたら泣いて喜ぶね」

「美久には玲人の事は見慣れてるからだろうって。まあそういう事も有るんだろうけど、入学式の時は、真剣に驚いたよ。今日の劇にしたって、うちの母だって王子様超イケメンって騒いでて玲人が友達だって話したら、連れて来て〜!近くで見たいって玲人のお母さんと一緒に言うんだよ?」

「それは、それですごいね。高坂のお母さん迄そんなんじゃ何だか魔性な感じしてきたな。俺の方が、橘にマヒしてるのかも。毎日の様に見てるし、性格知ってると、外見はあまり気にならなくなるもんだしな」

「そうでしょう?明日、橘君と会う約束してるんだけど、そんな酷い事いえないし、断ったらそれもその後、気まずいでしょう?」

「今迄、断ってるのは、気まずくないんだ?」

「え〜?!今迄、断る事なんてしてないよ。告白されたの初めてだもん。だから困ってるんじゃない」

高坂がいたからだというのは分かるが、威力がすごい。裏で排除してきただろう事が覗える。そうなると最大のライバルも本気だという事になる。気付かないのは鈍いせりかだからだろう。人の事ながら、本庄も頭を抱えたくなって来た。

「あのさー、何も結婚してって言われてる訳じゃないんだし、好きなんだったら、思ってる面倒事も半分位だけ白状して、それでも向こうがいいっていったら付き合い方もお友達レベルからお試しでしてみたら？両想いで断るなんて勿体ないじゃん。見映えの問題はお嬢レベルなら大丈夫だから、それは俺が保証するからさ。高坂の時みたいなのは、純粋に嫉妬だから、全然無いとは言わないけど今はみんな現実的な近場の彼氏作って来てるじゃん？特にこの文化祭で増えてるし、人の事なんてあまり気にならないと思うよ。みんな少しは大人になってるし、自分の恋愛事のが忙しくて人の事迄あまり関わってこないんじゃないかな？」

聞いていると八方塞がりになりそうだったので、少し、捲し立てるように自分のポジティブ方面の意見を言ってみた。高坂については、そこは分からないのであえて触れないし、触れると迷路に入るので、あえて無視した。

「そうだよね。少しは、本心話さないと悪いよね。慣れないのを言い訳にして自分だけいい子でいたいと思っていたかもしれない。ちょっと反省しちゃう。それで、橘君がどう思うか分からないけど言ってみる事にする」

「そうだよ。一人で考えてもラチあかないから、相談するつもりで話してみれば？それから妥協点みつけてもいいんじゃないかな」

「うん。有難う。今迄、一人相撲とってたみたい。相手がある事なのは分かってたんだけど、他の友達に相談しても惚気に聞こえちゃうし、相談誰にも出来なかったんだよね」

「じゃあ、明日はうまくいくといいな？色んな意味で…」

「うん頑張ってみるね。どんなになっても報告するから」

せりかが、そう言って電話を終えた。本庄は少し、罪悪感が湧いて来た。一番肝心な玲人の事をすっ飛ばして話を進めたことだ。其処を突くと膠着しちゃうし、とは、思ったが、もしこれで橘とせりかがうまくいったら、玲人には相当恨まれてしまうだろう。

とにかく今の時点では、二人の問題なわけだし、友達の橘に肩入れするのは仕方がない。本庄にとって、せりかも大切な友達なのだ。珍しく男女の垣根を越えた、友人の力になりたい。将来、もしも修羅場になった時には、せりかの一番の味方でいようとそれだけは強く心に決めた。

10

話をする時間を貰いたいと言ったのは、せりかの方なので、時間と場所は橘にお任せした。お任せするとは言ったけれど、橘君のおうちの前に着いた時には、『いきなりお家ってどうなんでしょうか？先生～！』と居ない本庄に向かって心の中で雄叫びをあげた。

嫌じゃなければ、うちに来て欲しいとメールを貰った時には、動転したが、色々と、人目を憚る話に成る事は確かなので、その配慮だろうとは思ったが、御家族だっていらっしゃるだろうし、（居なくても問題だけど）とっても緊張してきた。

一応手作りのアップルパイを多めに作って手土産にした。昨日はリンゴを煮たり、冷凍パイ生地を買ってきたりと急に忙しくなった。後は、たいして手間もなく、失敗もないので、簡単で持ち運びも楽な、せりかの一押しのお菓子だった。たまに学校で美久や弘美とも食べている。親には友達の家に、文化祭の打ち上げの打ちあわせに行って来ると伝えた。、本当の事を言って、橘だと分かったら、こっちに連れて来いと言われるのは間違いなかった。きっと玲人や玲人の小母さんまで来て落ち着いて話など出来ないだろう。

最寄り駅まで迎えに来てくれると言われたが、駅から近く、降りて右にずっと歩いて数分という、分かりやすい場所だったので、万が一分からない時は電話すると言う事にしてもらった。

橘の家は、白い三階建のお家で、玄関には綺麗な、名前は分からないが、色とりどりな花が咲いていて素敵だった。聞いた事は無かったが、きっとお母さんがガーデニングが趣味なのだろう。

少し、逡巡したが、約束の時間も来ていたので、観念してインターフォンを押した。

すぐドアを開けてくれたが、お母さんが、出て行こうとしているを止めている橘の声が聞こえて中々、出てこない。流石に諦めたのか二人で出て来ていらっしゃいと迎えてくれたけど、それまでの攻防戦が聞こえてきていたので、微妙な笑顔に成ってしまって、二人にも伝わってしまった様で、二人ともお恥ずかしいところをお見せしてと恐縮されてしまった。せりかは学校とは全然違う橘を見れてここに来た理由も忘れて、心の中で、美久や、玲人にも見せたい！かわいい～！と思ってしまった。お母さんも思った通り、予想を裏切らない、美女である。せりかの母と同じ位の歳とは到底思えなかった。しかし、見かけは相当美女なのだが、中身が気の良いおばちゃんで、どんどん話し掛けて来てくれる。

通されたリビングで、お土産のアップルパイを、とても喜んでくれて小さく切ったのを口に早々と入れて、「おいしい、林檎、紅玉でしょう?この酸味がいいのよね！」と褒めてくれた。とても気さくなお母さんで安心した。下のリビングで声がしたからか、階段から誰か、降りてきた。それを見て橘は眉を顰めた。

「おっ！！シンデレラちゃんじゃん。俺、忍の兄で、一樹（いつき）です。よろしくね♪」

「椎名せりかです。よろしくお願いします。今日は、お邪魔してしまってすみません」

「イヤイヤ、来てくれてありがとうね。昨日のシンデレラ良かったよ～！超かわいかった。途中から忍見るの忘れちゃったもん」

「見て下さったんですね。お恥ずかしいです」

「俺もあの高校出身だから、後輩から弟が主役やるって聞いたから飛んでいったんだよね。こいつ全然、言わないからさ」

橘は、その言葉に苦笑いを浮かべただけで何も言わなかった。男の子がお家で王子様をやる事を自慢するのは、幼稚園迄の話だろうと思う。正直にいえば、せりかも親にシンデレラは観に来て欲しく無かった。せりかも橘の兄の不平の言葉には、微笑を返しただけだった。

お兄さんは、これから、出掛けるらしく、お母さんに私のアップルパイをラップで包んで貰っていた。

「これ、アップルパイのお礼にあげる。友達がバイトしてて、貰ったんだけどね。良かったら、忍と行ってやって？」

そう言って、八景島シーパラダイスの券を二枚くれた。結構高いものなので、遠慮しようとしたが、橘君と行くのを嫌がっている様にも取られてしまうので、笑顔でお礼を言って頂いた。

お母さんがアップルパイと紅茶を御持たせですが、と言ってお盆に載せてくれた。どうやら、これから橘くんの部屋に案内されるらしい。

お盆は、橘君が持って、三階だからと言い、先を歩いていった。小母さんに軽く頭を下げると、「ゆっくりしていってね」とにっこりと言ってくれた。

橘君の部屋は、雰囲気が、驚くほど玲人の部屋と似ていた。サッカ

ー関連の雑誌が積まれていて、本棚には参考書がびっしりでボールがネットでつるされている。六畳程の部屋に、ロフトが付いていた。

小さなテーブルが置かれていてそこに橘は、お盆を降ろして、手際良く、せりかの前に紅茶とパイを置いた。自分のも置き終えると、ふぅーと息を吐いた。どうやら緊張しているらしい。

「アップルパイありがとう。気を使わせてしまってごめんね。俺も気が付かなくて…母と兄も無遠慮で、なんかいろいろとごめんね」

「ううん。全然そんな事ないよ。お母さん、すっごい美人なんで驚いちゃったよ。気さくな感じで大分ほっとしたけどお兄さんも優しそう。シーパラの券ホントに貰っちゃっていいのかな？」

「貰い物なんだから気にしなくていいよ。押し付けていった様なものだし、紅茶冷めるからどうぞ。俺もアップルパイも頂くね」

「うん。じゃあ頂きます」

「この紅茶アッサム？美味しい！茶葉凝ってるんだね～」

「母は、そういうの好きみたいだね。アップルパイも美味しいね」

「ありがとう。そんなに手間掛かったものじゃないから、あまり褒められると恥かしいんだ。パイは冷凍のでホントに簡単なの」

「今日は、こっちまで来てもらってごめんね。他に思い付かなくて、なんだかその所為でいろいろ手間掛けさせちゃったね」

「そんな事ないよ。少し緊張したけど、こっちから時間作って貰ったんだし、謝らないで。私が、橘くんに謝りにきたのに…」

「何を謝るの？劇の事なら、どちらかと言えば俺が、謝るべきだと思うけど。普通は男の方が、謝るものじゃないの？」

「そんな事ないよ。ホントにこめんなさい。男の人だってそんなに軽いものじゃないと思うの。あの…もしかして、初めてかもしれないし…やっぱり大事にしたいものじゃないかと思うんだよね。それが、あんな事故じゃ、申し訳なくて」

「椎名さんには、俺は、随分女の子に慣れて無いように見えるんだね」

「ごめんね。失礼な心配だよね。でもずっとサッカーやって来て、勉強その後、頑張ったって言ってたから、彼女とか居なかったかなーとか勝手に思っちゃってごめんなさい。高校でも時間が無いからって言って断ってるじゃない？」

「…よく知ってるね。理由まで」

「引かないで聞いて貰いたいんだけど、告白してくるっ子って全員違うクラスの子でしょう？だから、うちのクラスの子は結構、橘君情報の提供を求められるのね。みんな、答えないで適当に流してたんだけど、五組で独占する気？！とか訳分からない方向に行きそうになって、みんなで個人情報を悪いとは思ったんだけど、知ってる範囲の事は答えるようにする様になったのね。一学期の初め辺りから。そうすると逆に聞いてないんだけど、その前にいろいろと聞いて来てた子が、振られちゃったって言ってくるのよね。報告みたい

な感じなのかな?本人からすれば」

「……」

「ごめん。びっくりするよね。こんな話。でも、みんなの事責めないで貰いたいの。一緒のクラスの子は、橘君がそういう事嫌がりそうだって分かってるから、出来るだけ話さないようにしてたんだけどね。最初はホントに知らないし、知ってる事でも知らないで通してたんだけど、段々、それで通らなくなるでしょう?みんなが私のところに相談に来て、話し合ううちに、最終的に話して害に成らない事は話して、住所とかケータイとかメールアドレスみたいな困る物は、自分達も知らないで全員通す事に決めたのね。最後に橘君に知らせるかは意見が割れたんだけど、気分が悪くなるから自分だったら知りたく無いってひとが多くて知らせない事になったの。知らない方が幸せって事もあるよとか、みんな真剣に考えた結果なの。今、私が言っちゃうのもどうなのかな?と思うけど、直接聞かれた場合は、黙ってると裏切られたっていうか、話してくれたらいいのにってきっと思うと思うから、聞かれたら話すっていうのも決まってた事なの」

「ごめん。みんなに謝れるものなら謝りたい!!なんだかうちのクラスの女子ってさっぱりしてて気のいい子が多いと思ってたけど、気の所為じゃなかったんだな。そんなに迷惑掛けてたなんて知らなかったよ…なんか俺、歩く人災みたいだよな…」

「違う違う!!ホントにみんなは、橘君の事もクラスのみんなも大好きなの!女子とかは、却って結束固まったし、男子もいい人多いから三年間このクラスだといいのにって言ってて、どっちかっていうと雨降って地固まるっていう感じで、今はみんな慣れもあってそんなに大変な事は無いんだけど、黙ってるのが少し辛くなってきた

から、話せて良かったかもって位のもので。ペラペラ話してたって橘君に誤解されちゃったらどうしようって思ってる子も多いからね。話した方がいいっていう意見の子はそういう意見の子が多かったの。だから、橘君さえ、気を悪くしないでくれたら、誰も迷惑なんて思ってないよ」

「そっか。…有難う。今度みんなにもお礼言っとく」

「みんなすごくいい子で嬉しくなっちゃうよね！今度の文化祭でも思ったけど、力の出し惜しみしないで協力してくれるし、色々、判断早いし、ワルツ踊らなくちゃならなくなった時も誰も不平不満を言わなかったのには感心したけど。でもあれは橘君のお蔭なんだよ。王子様役、一瞬も嫌な顔見せずに引き受けてくれたでしょう？そうしたら他の人達もみんな見習わなくちゃって空気になって、やれる限りの事をやるのは当たり前になったら、劇もすごくうまく行って最優秀賞まで取れたじゃない？なんだかんだ言っても橘君がみんなを引っ張って行ってくれてるんだよ。うちのクラスは」

「そんなに褒めてくれても、椎名さんは俺の事は対象外なんだよね？やっぱり玲人がいるからなのかな」

「そんな事ないよ。入学してから今迄、橘くんの事ずっと好きだったんだもの。カチューシャの告白は嬉しかったんだけど付き合うってなると今迄、付き合った人いないし、急に怖気づくっていうか、それに橘くんとってなるとやっぱり嫉妬みたいのもあると思うし、それはちょっと遠慮したい部分も正直あるんだよね。まして告白されたのなんて初めてだから、パニくっちゃって自分でもどうしていいか分からなくて」

「今迄、告白された事ないの？本当に？！」

「うん。橘君位もてると何回もあると思うけど、普通はそんなに無いんじゃないのかな？」

せりかの事を気に入っている部活の先輩も少なくない。いつも玲人と、のらりくらりとかわしているが、紹介しろと暗に言われているのは間違いない。そのせりかが、今迄に誰からも告白を受けた事が無いというのはどうにも不自然で、なんらかの力が働いていたのを感じられる。いわずもがなでは有るが、玲人が邪魔していたんだろうと思った。しかし、其処まで大事にしているせりかをフリーにさせておいて平気なのものだろうか？実際自分や本庄など、比較的親しくする異性が出来てきている。もしも、せりかが玲人の彼女だったら、もちろん告白など出来ないし、友達としてももう少し距離を開けた関係になるだろうと思う。彼氏に誤解を与える行動は出来ないだろと思われた。せりかは、自分といる事によっての弊害と自分の経験の無さをが、付き合う事の壁の様にいうが、聞いてみると一番の壁は自分の友人でもある玲人の存在だと思った。今迄もなにも考えなかった訳ではないが、この瞬間に確信に変わった。

「あのさー、今の話は、俺が椎名さんの事を思う程は、思われてないけど、好意は存在してて、でも付き合うと周りに色々変に思われたりするのが嫌で、それで初心者だし、抵抗あるって事だよね？纏めると」

「ごめんなさい。あんまりな感じだけどその通りです…」

「じゃあ、学校では一応、内緒にして、付き合いもそんなに気を張らなくていいから、少し休日出かけたり、それも毎週とかじゃなく

ていいから。それからメールとか電話とか用事なくてもしても良かったりとかその辺の事でいいから、付き合って貰いたいんだけど。玲人と仲がいいのも今更、ヤキモチ焼いたりしないし…」

ここ迄、譲歩されて断れる人なんているんだろうか？隣を歩く苦行問題が残っているが、それは有る程度問題ないと本庄に言われてから少し気にし過ぎかと考えを改めた。どう、答えていいものか悩んで、黙っていると断り辛いのかと心配気な顔で覗きこむ橘の顔が見えた。こんな時でもこちらが気まずくないかを一番に考えてくれる橘に少しは応えたいと思う。

「とりあえず、お兄さんから貰ったシーパラの券で、水族館に行ってみない？私もずっと一緒にいたら、橘くんが思ってくれているような人間じゃないかもしれないし、色々と思い違いもあるかもだし、気が合わない所もでてくるかもしれないじゃない？とりあえず、一回お試しでお出かけしてみる事にしない？お兄さんの好意も活かせるわけだし」

せりかが、そういうと橘は、ぱぁーと顔を明るくさせた。概ね、橘の思った通りになった。付き合ってもらっても、一緒に出掛けて合わなければ、振られてしまう事だってあり得ることだったら、出掛ける機会と考えて貰える余地が残れば結果としては上々だった。

11

橘君のお母さんが、昼ごはんを一緒にと言ってくれるのを、固辞して橘家を後にした。帰りは送ってくれるという橘に、駅までならと譲歩して送って行って貰う事にした。そのまま一人で帰ってしまっては、彼のお家での立場も微妙だろうと考えたからだ。何か、駅前でファーストフードでも食べていかないかというお誘いも、お母さんが五目ごはん作ってくれてるよね？と先程の誘いの時にでた話を持ち出して断った。

ここまで、いろいろお断りすると、仮にも、お試しでも、お付き合いをする前提で、遊びにいく約束をした相手にするべき仕打ちでは無い気がするが、結局は、お母さんの昼食のお誘いを断った時点で、その他の事は必然的に断るしかなくなる。やんわりとそれを告げて、決して迷惑とかの理由での拒絶ではないと言うと、橘は安心した顔を見せた。やはり、関係がはっきりとしないうちに御家族の方と懇意になってしまう事に躊躇いがある事も一緒に付け加えた。

橘は、納得してくれた様で、駅で電車が来るまで、一緒にホームで待ってくれながら今度の出掛ける事について話し始めた。時間はあまり無かったが、その他に、打ち上げは、木曜日になりそうだという話もされた。本庄の親戚が、バーを経営しているらしく、場所を提供してくれるらしい。食べ物と飲み物は持ち込んで、片づけをしていけば、三時間位、貸してくれるという話だった。流石、どこぞの御曹司は顔が広いとは思ったが、ワルツ同様有り難い。今迄なら多分、本庄もそういう協力をしない少し冷めた感じの人だという印象だったが、いい方に変化が出て来ているように感じる。この短い時間に出来る限りの必要事項を話し合って電車が来たので、橘と別れた。一本電車を遅らせても良かったのだが、そうすると家で直ぐ

に帰ってくると思っているお母さんに多分、冷やかされてしまうだろうと思った。彼のお母さんに、お友達はよく遊びに来るのだが、女の子は珍しいから是非とも一緒にご飯を食べたいと言われた事でそう感じた。そうすると、お兄さんもあまり、彼女とかはお家に呼んではいないという事になるんだよなぁと思うと今回のお呼ばれは、結構レアな事では無いかと今更ながら、どうしようも無いが、どうしよう！という気持ちになってしまう。

ひとり、帰りの電車で赤くなったり、青くなったりしたが、彼が困るだろうだけで、直接せりかに被害が来る訳ではない。しかし、最初の玄関での親子の攻防を思うと橘は、やはりせりかを呼んでしまった為に、いらぬ苦労を強いられたような気がする。

実際は、計画的にでは無いが、お兄さんに貰ったシーパラの券でデートする事になったり、お母さんに会ったりお部屋に入ったりした所為で、せりかの橘に対する認識が友人＋αになったのだから、橘の作戦勝ちと言える結果なのだが、せりかにはそれは微塵も考えられない事だった。本庄に、夜に報告の連絡を入れた時には、『橘はやっぱり、少し黒いから、ちょっとだけお嬢の認識を改めてね？』と優しく諭されたが、具体的な事は言わない思わせぶりな口調なので、渋々頷いたが、今日の何処に少し黒い所があったかは、せりかには欠片も思い当たる事がなかった。

帰ってきて昼食を食べた後、玲人に帰って来た事を伝えようかと思ったが、今日は、友達と遊びに行くと言っていたから、まだまだ帰っては来ないだろう。今の状況を玲人に話した方がいいのか悩む。しかし、橘は、玲人とも友人関係にある。これが全然関係ないか、もう少し、遠い関係の人だったら間違いなく相談したが、相手であ

る橘のプライバシーも関わってくる。しかも、相手に告白されてその返事を保留させてもらっている立場だ。逆だったら相談など、共通の友人にされてはたまらない。特に、玲人は過保護も過ぎるので、もう一人誘って、ダブルデートにしようとか言って、どうにかついて来そうな気配がプンプンする。記憶の彼方に近い事が、たしかあった様な気がする。そうなる事は、やはり玲人に話した事が橘にも伝わる訳だから、あまり気分のいいものでは無いだろうと思う。せりかは、この事に関しては玲人には相談しない事に決めた。

代休日が終わった火曜日、学校に行くと皆がカチューシャをしていて笑ってしまった。せりかも実は茶色のをしている。普段していなかったが、柔らかい素材のものであまり違和感が無いし、髪が下を向いても落ちて来ないので、結構便利である。

クラスで木曜の打ち上げの出欠表が早くも回っていた。どうやら幹事さんはもう決まっていて、買い出し係とかも決定しているらしい。せりかは、自分と橘でやらなくては成らないのかと思っていた為とても驚いた。元々、優勝しなくても打ち上げの予定は有って、それに幹事の名乗りを上げてくれる女子が数人いて、そこに本庄と数人の男子が力仕事も有るだろうからと加わったという話だ。話が纏まったのが、ダンスの練習中だった事もあって、踊りの仲間が多い。その中には、本庄と共に先生をしてくれた、更科真綾（さらしなまあや）もいた。本庄とは元からの知り合いの様で、主に二人で役割分担を決めていた。貸して下さるお店のオーナーさんとも真綾は知り合いの様で、勝手知ったると言った雰囲気だった。今迄、あまり二人は親しい素振りが見えなかったので少し意外だった。

美久や弘美は初めてのバーでの打ち上げにお酒は飲めないとはいえ、大分興奮気味だった。食べ物や飲み物、カラオケやダーツ、それに商品付きビンゴ大会と全体に高校生主催にしてはやけに豪華な打ち上げだと思う。確か会費は千円だったはずだが…。幹事の二人がオーナーの差し入れと担任の先生の好意だと最初に説明をしていた。少しカンパを取り付けたらしい。ちゃっかりしているというよりも、担任の顔を立たせる為だろうと思われた。これで、少し、クールな担任のイメージは、生徒思いだけど表には出さない押し付けがましく無い先生に塗り替えられただろう。いったい策士とは誰の事だろうと本庄を見ると、こちらに向かって『まあまあ』といった感じに心の声が聞こえたように薄く笑った。

せりかは、明後日の事が気になっている為、いつもよりも大人になったと錯覚して楽しめる余裕などなかった。格好だけはいつもよりも大人っぽいワンピースに海外土産のブランドのバックを合わせたものだった。カチューシャは今回、みんなの中で必須アイテムだったので、橘に貰った真っ青なリボンの付いたものをつけた。洋服に合わせた事も大きいが、皆の前で貰ったのにつけないのは、橘に悪い気がしたのと明後日はつけていかない事に対する免罪符のような気持ちからだった。二人きりで出掛けるのに青いカチューシャをつけていく勇気と気持ちはまだせりかの中には無かった。

橘の姿を探すと、絶対にお兄さんにコーデされてしまったのだろうというあり得ないチャラい大学生風だった。ジャケットを黒くしてるのに中のシャツも黒でボタンを二つあけてゴツイ革のアクセサリ

ーを腕とお揃いの物を付けている。それにジーンズとブーツを合わせて、ホスト風に成らない計算をされたチャラさだったが、元がいいと何でも似合う。皆にも大好評で写真を撮らせてと言われて必死に断っていた。大体、橘の私服では無い事は一目瞭然なので、皆、『似合うよ～』とニヤニヤするだけで嫌がる事を無理やりするような場を盛り下げる人間は居なかったが、王子様の意外な取り合わせに男女問わず、釘付けで、純粋に普段を知らない人間がみれば唯、唯、カッコいいのだが、橘の不機嫌な態度も後押しして、おかしさと面白さに拍車が掛かっていた。お兄さんナイスなチョイスである。『いい仕事してるよね』と本庄が一樹（いつき）の存在を知っているのか目の端に涙を浮かべて苦しそうにせりかのところに寄って来た。せりかも同感だった。多分、あの券を譲って貰った恩義で逆らえなかったのだろう。あれは、一人分五千円を超えた招待券だった事を思えば、お兄さんも貰ったとはいっても自分が彼女と行かずに弟の為にあげてしまうのは、随分気前がいいと思う。弟思いだとも思うが、今日のクラス全員へのサービスには頭が下がる。しかし、この飾り甲斐のある弟を持てば一回はやってみたかったのだろう。明後日、出掛ける時に橘から真相が聞けると思うが、一樹さんも人が悪過ぎる。橘が目に入る度に皆、普段とのギャップにウケそうになるのをこらえる。本人も分かっていて、もう笑うならいっそ、笑ってくれた方が楽だと公言しても笑いだせる人間は居なかった。可笑しいのだが、おかしいと思うと、似合うなぁと妙に感心してしまい、笑うところまでこないのだ。しかも『ちゃら男の橘くん』なんて多分この先も、大学生になってもありえない。人間変わって行くものだが、この種の変化はないだろうという事は察せられた。要はみんな超レアで楽しんでいるだけなのだった。

盛り上がりに盛り上がった宴会は、時間切れが来てしまいお開きと

なった。せりかは片づけに残ろうとしたが、全員で自分達の周りのごみを纏めて、気が付く子がテーブルを拭くと五分程で片付いた。流石、最優秀賞を取れたクラスの団結力に感心してしまうが、文化祭から皆の意識が変わった事でクラスの雰囲気も良くしていた。行事ってメンドクサイ事だけではなくてこういう副産物もうみ出してくれるのだなとせりかは感慨深い気持ちになった。

帰り際、そっと橘が、「カチューシャ青いのも似合うね」と言って来たので、せりかはお返しに、「一樹さんコーディネートも最高にカッコいいよ」と返すと爽やかな笑みを引っ込めてとたん渋面になった。その変わり様に本庄には何を言ったのか聞こえていないのに分かった様で、わざわざ二人のところに寄ってきて馬鹿ウケしていた。「先生、今日のせっかくの装いが台無しな馬鹿笑い止めた方がいいよ」とせりかに突っ込まれていたが、余計にツボに入ったらしく、橘にもたれて崩れそうになって笑っていた。いつまで笑っている気だろうと思ったが、更科が戸締り等の確認に本庄を呼びにきたので、やっと去って行ってくれた。

楽しかった打ち上げはこうして幕を閉じた。

12

金曜日になると、とうとう明日だ、とそんなに深刻になるような事では無い筈なのに、せりかの中には大きな問題として心の中に横たわっていた。やはり自分は男の子に慣れていないのだなと今迄、思ってもいなかった事を思った。玲人がいつもいて一緒に行動していたから、こんなに自分が免疫不足だと思わなかった。要するに、ビビっているのだ。なんだか改めて自己分析すると恥かしい。

こういう時に喋れる相手は、一人しかいない。もう、最近は人生の師としても仰いでもいいのではないかと思っている本庄綾人（ほんじょうあやと）だ。

「せんせい～。明日、どうしよう？」

もう最近は弱音を思いっきり吐いてしまう。気取った言い回しをしたところで、彼には無意味だ。

「どうしようって行くしかないでしょ。逃げるなんてお嬢がするとも思えないし、着て行く服の事でも悩んでんなら相談のるよ？」

「ああー！！そこ忘れてた。人生初のデートなのに適当な格好なのも思い出としてどうなの？って感じだよね」

本庄はまだデートする前から思い出にされかかっている友人を思い、不憫になってしまった。少しでもデートを盛り上げるべく、服選びに行こうと無理やり放課後の約束をせりかに取り付けた。

放課後、連れてこられたのは、ショップでは無く、更科と表札の掛かった大きな屋敷だった。本庄は、なんの躊躇いも無く上がり込み、

お手伝いさんらしき人に挨拶してから階段を上って、あるドアを空けた。

そこには、予想通り、更科真綾がいた。急に来てノックもせずに入って来たのだから、さぞ驚いているだろうと様子を見ると嬉々としてせりかを迎えた。よくみると広い部屋の中は、色々な服が散らばっている。

「いらっしゃい。お待ちしてましたわ」

「え、えっと何も聞いてないんだけど」

「だって聞いたら、お嬢、逃げるじゃん？」

「逃げるって何から？」

「真綾から」

「なんで、更科さんから私が逃げなくちゃならないのか説明してくれる？」

「今から、お嬢は真綾の着せ替え人形になるから…？かな」

「悪いけどちょっと更科さんは待っててね。本庄くんと先に話をつけるから。それで、とりあえず、更科さんと本庄君はどういった関係で、何故、私が急に連れてこられたのかしら？！」

「真綾は、従兄妹兼婚約者。叔母が母の妹なんだ。それで、生まれた時からの婚約者。同じ綾の字を使ってるのも一応約束の記念か証みたいなものだって聞いてる」

「この間の打ち上げから少しは親しいのかと思ってたけど、この儚げな美少女掴まえて、いきなり婚約者って…私からみたら軽く犯罪者に見えるんですけど、相手の了承得てるんでしょうね？」

「儚げって、そりゃあ、それこそ詐欺だわ！真綾は中学迄、超箱入りのトコ行ってたから今の環境でボロが出ないように大人しくしてるだけで、どんな想像してるか分からないけど結構いい性格してるし、病弱でもないよ」

「それで、再度お聞きしますけど、どうして私が更科さんちに連れて来られてるの？」

「それは、真綾がずっとお嬢と仲良くしたがってて、俺ばっかずるいって言うからいい機会かと思って。まあクラスメイトだし、俺の従兄妹を今更だけど紹介しようかなっと言う訳なんだけど」

「それで、この服の山は、更科さんが私の明日のデートのために用意してくれたって事なの？」

「そうそう！！真綾がいっつもせりかちゃんかわいいから、こういうの着せて見たい！とか髪巻いたら、超似合うんじゃ！とかいってるから、絶好の機会かと思って電話しといたんだよ。とにかく後は、女子二人で着替えてみてよ。俺はあっちの居間でお茶のんでるから。出来たら見せて？」

「……」

せりかはなんと言っていいか分からない程呆れてしまったが、二人になった以上、とにかく、真綾と向き合った。

「明日、橘君と八景島に行くんだよね？そうするとスカートじゃなくてパンツで上にかわいいチュニックを合わせた方がいいかな？あそこ乗り物もあるもんね」

「本庄くんから聞いたのね。もう、橘君にも悪いと思わないのかしら？」

「絶対、他には言うなって言われてるし、微妙な事情も少し聞いてるから。私の事は今迄あまり知らないだろうけど、綾人の身内だから信用して貰えないかな？」

「うん。本庄君にはお世話になりっぱなしだから、こんな文句言える筋合いもないんだけどね。でも、婚約者ってそれは、恋人ではないんだよね？」

「うん。つい最近迄は、結婚するつもりも無かったんだけど…綾人が、今更だけど付き合ってくれってこの間、文化祭の後言われて…」

そう言って真綾は頬を赤く染めた。これ以上突っ込んで聞けないけど、なんで急に？何故心境の変化があったんだろうか？

「椎名さんにはいいづらいんだけど、綾人曰く、とんびに油揚げさらわれたら困るからって告白されたの。どう見ても、椎名さんに橘君が告白したことと関係あるわよね？」

「私や、更科さんが油揚げで、橘君がとんびって事？そりゃあ、随

分口が悪いわ！」

「そうよね！私も、あまりにもな告白に断りかけそうになったわよ！でもずっとなんとも思われて無いと思ってて諦めてたから嬉しい方が勝っちゃって、悔しいけど受けちゃったって訳。何年もこっちの事、焦らしといて、本当にムカつくったらないわ」

そう言いながらも真綾は幸せそうだった。しかし、本庄は、せりかの事を玲人の油揚げで、橘の事をそれをさらおうとしている、とんびに見えているのかと思うと何だかそれって何処から如何突っ込んでいいのか分からない内容だった。客観的にそう見えるかもしれなくても本庄がそう思うとは思わなかった。

「綾人は、本当は、結婚はするつもりだったけど、後悔しないように私にも誰かと付き合ってみた方が良かったんじゃないかって言ってるの。その上で、綾人を私が選ぶなら婚約もそのままにするつもりだったらしいの。何も政略結婚じゃないし、本人達が断っちゃえば何とでもなる軽いものだったの。唯、うちの親が他所にやりたくないって生まれた時に親ばか発言した所為で、それなら身内にってくらいの馬鹿馬鹿しい話なんだもの」

「うちも、隣の玲人の家に嫁に行かす気満々だから、それはすごく分かるわ」

「でも、橘君と付き合うかもしれないんでしょう？」

「本庄くんからするととんびに成るみたいだけど…。玲人とは今迄、そういう事考えた事ないの。血も繋がってないのに一緒の時間が長過ぎて兄弟みたいな感じで。橘君は、初めての片思いの相手なの。相手から告白されてるのに変なんだけど、今迄、恋愛ってした事な

いからすごくどきどきしたり、トキメくって感情を初めて感じたら、もう片思いが楽しくて！でもなんだか、橘君にも言われたんだけど、どうしてもその人と居たい、みたいな一般的な強い感情迄はまだ無いみたいなんだけど、橘君がそれでもいいって言ってくれて、とりあえず、お試しなお出掛けをしてみる事になったの。何様？って思われるよね？あの橘君を相手に」

「抽象的な例えだけど、例えばピアノを習い出したばかりで楽しくなって来たところに、急に君は才能あるからもっと有名な先生に習うべきだとか言われて、そこに連れて行かれちゃったみたいな気分ってことだよね？出来ればもう少し、自分のペースで楽しみたかったって事なんだよね？」

「分かって貰える人が居るとは思わなかったけどドンピシャ！更科さんって流石先生と血縁なの感じるわ～。少し言っただけで大体分かっちゃうんだね」

「そんな事はないと思うけど、綾人はエスパーかと思う時あるわよ。ちょっと怖いくらい何でもお見通しなんだもの」

「それは、私は其処までは思った事はないから、更科さんの事は多分よく知ってる所為じゃないかしら？元々、すごくカンが良い人なんだとは思うけど。それに、何だかんだと言いながらも面倒見もいいから、つい私も頼ってしまっているから、更科さんが気を悪くしていないといいんだけど」

「それは、大体付き合えるようになった切っ掛けが、椎名さんなんだもの。いい加減で適当な感じだった綾人が二人の事、気にかけてるのも珍しい事なの。元々、あまり他人に興味持たない人だったし。それが最近私にも微妙に違くなったっていうか優しくなった気がす

るの。だから、全然気にしないから綾人の事も仲良くして欲しいの。それについでに私とも♪」

真綾はそう言って可愛らしく首を傾けた。せりかは『もちろん』と頷くと真綾は嬉しそうに微笑んだが、その顔が少し本庄とやはり似ているなぁと改めて思った。

それからは色々文字通りお人形となって色々着せ替えられて、薄くメイク迄され、髪をホットカーラーで軽く巻いた上に緩く纏め髪にされて、ふんわりと女の子らしい感じに仕上がった。鏡の中のせりかは明らかに女子度アップした姿が映し出されていた。

「綾人に見せに行こうよ！びっくりするよ。すっごくせりかさんかわいいもん。早くも心変わりされちゃうかも。ふふっ」

随分な過激発言を軽い調子で言う真綾は、とてもかわいらしくて、何年も真綾の事を想っていた本庄が、心変わりする事は万に一つも無いだろうから言える冗談だが、其れ位いいよ！と誉められているというのはよく分かった。

居間には、テレビを見ながら、ケーキを食べている本庄が居たが、待ちくたびれたといった感じが一切なく、爽やかに笑いかけて来たのには、流石、育ちがいいってこういう事なのね！としか言いようが無かった。

「お嬢、超綺麗じゃん。元々、可愛いけどいつもより、倍くらいいい

いって！明日、楽しみだな～。橘にデートバトンタッチして貰いたいくらい」

「真綾さんの前で何言ってるの？妬かせようとしても無駄だと思うわよ！」

「ははっ。流石お嬢、負けるね。やっぱり」

「こんな別人で行ったら詐欺じゃないかしら？」

「そんな事ないよ。真綾の腕はいいけど、お嬢の素がいいからだし、前、釣り合わないみたいな事気にしてたじゃん？これで自分が気に成らなくなるなら余計に良くない？橘は、ある意味大変だろうけどね」

「どういうこと？」

「うーんと、ナンパに気を付けてって事。出来たらあまり一人にならない方がいいかもね」

「大丈夫だと思うけど、先生の言葉は重く受け止めます」

「明日、とにかく楽しんできなよ。友達っていう選択になっても仕方がないし、友達だったら楽しんじゃいけない事も無いでしょう？もちろん付き合うって事になれたら、それはもっと楽しくなるとは思うけど、これぱっかりは、理屈じゃないから感性で感じて結論だすしかないよ」

「うん。有難う。なんか気持ちが軽くなった。真綾さんもありがとね」

「ううん。せりかちゃんが家に来てくれるなんてすっごく嬉しいもの。またいつでも来てね？」

「とりあえず、服とかカーラーとか返しに来るね。その時、色々報告するからね」

「うん！待ってるね。教えてくれるのね。嬉しい！」

「それから、せんせい？私達は油揚げじゃ、ありませんからね！」

そう言って軽く片目を瞑ると、本庄は、苦笑して真綾を軽く睨んだ。

13

せりかは朝からとても忙しかった。まずは軽くシャワーを浴び、半乾きになった髪を綺麗にブローする。髪と肌の手入れは怠った事が無いので、自分的には数少ない自慢出来る艶のある髪だった。長さはセミロングだ。それをホットカーラーで昨日真綾に教わった要領で巻いていく。思っていたよりも簡単で驚いた。後ろの見えないところは如何するのかと思っていたが、別に髪を前に持って来て巻けば済むらしい。それから、試供品で貰ったというリキッドタイプのファンデーションを薄付きに塗った。UV効果もあるもので助かる。あと、整えられた眉に少し足すように眉を書き、瞼に三種類の茶色とベージュのアイシャドウを重ねて行く。すべて真綾直伝の薄化粧に見える化粧法だ。最後は、薄い色のピンクのグロスを乗せた。それから着替えた服は、黄緑色の少しだけエスニック調の長めのワンピース風チュニックに細身の白いパンツに歩きやすいオフホワイトのストラップのついた低い靴をあわせた。

カーラーをとった後、軽く固めるスプレーをする。ほんのり、チェリーの香りのするもので気に入っている。いつもは前髪を整える時位しか使わないが、まんべんなく髪全体にかけた。サイドを少し落とて巻いた髪を黒く光る素材のついたクリップで纏めて止める。結構強力なクリップなので、緩く纏めて見えるが、その実、きっちり留っている。鏡の中の自分はいつもより少しだけ大人っぽく見えた。

昨日、真綾にどんだけフリフリでピンクの洪水もどきの服を着せられるかと思っていたせりかは、このさっぱりとしたコーディネートに少し拍子抜けしてしまった。それでもその落ち着いたオリエンタルな雰囲気はせりか自身もとても気に入ったし、真綾も綾人も手放しに褒めてくれた。

母にこの格好が見つかると厄介だと思っていたが、母は今日は友達と紅葉狩行くと行って随分早くに家を出た。バスツアーだと行っていたから、多分狩るのは紅葉だけではないだろう。果物狩りもセットだろうと思われた。

待ち合わせの新杉田の駅まで来た。ここからモノレールで一本で着くところに八景島がある。せりかは以前、二度ほど行った事があったが、久しぶりの水族館はやっぱり楽しみだった。天気もいいし、気候も丁度良く気持ちがいい。少し早く着き過ぎたかと思ったが、橘はもう既に来ていた。少し離れた所から見てみると、グレーのパーカーにボトムスはカーキのジーンズで中に胸から下だけにボーダーの柄のインナーを合わせた橘は、ファッション雑誌から抜け出したかの様に素敵だった。やっぱりこの間のチャラ男風より、ナチュラルなほうが断然似合う。今日がもしもディズニーランドならあの格好にミニーちゃんの耳を着けちゃうんだけどなぁ～と思った自分が怖い。すこし、真綾に感化されてしまっているようだ。人待ち風な橘を女の子の二人組がチラチラというより、ガン見していて、よくあの視線に自然でいられるものだと感心しそうになるが、彼は玲人とは違い、そういう事に無頓着な方では無いと思い直し、小走りに橘に近寄って行った。

「ごめんね。お待たせー。橘くんも早いね」

「うん。今さっき着いた所だから、気にしないで。椎名さんを待たせなくて良かったよ。落ち着かなくて早く出て来ちゃったから」

見ていた女の子達が明らかに残念そうに去っていく。来たのが同性なら逆ナンでもする気だったのだろう。結構綺麗な子達だったし、自信もあったんだろうなとせりかは思ったが、今日は真綾のお蔭で、何と無く仮装気分なので、釣り合わないとか思われていたのではないかと言う卑屈な気持ちには成らなかった。自然と背筋も伸びて、笑顔になれる。おしゃれってやっぱり大事だなと改めて思った。

「切符、もう買ってあるからいこうか」

往復切符を渡されて、お金を渡そうとするとやんわり断られた。モノレールの中で、打ち上げの時の服はやはり、一樹さんに無理やり着せられて、代わりにバイト代が出たからと今日の軍資金をくれたらしい。何処までも弟思いだと思うが、打ち上げの日の橘を思うと純粋に、そうとばかりもいえないなと思った。やっぱり本人は、相当恥かしかったらしい。『似合ってはいたよ。とっても』というと、『生きているうちに一回くらいは、ああいうのも面白いかもしれないけど、クラスの連中の視線が痛くて打ち上げが長かった』と橘らしい答えが返ってきた。バイトも家庭教師のバイトで中3の子を教えているらしく、受ける高校の過去の問題集等をさせて、持って帰ってきて橘に採点をさせているらしいので、純粋におこづかいをくれたというよりは正統な報酬に近いらしい。要するに受験まで、またよろしくね！という裏の声が聞こえたと言うのが橘の談だった。せりかは兄弟がいないので、微妙な関係姓を興味深く聞いていた。内容は驚く物もあれば、微笑ましいものまで様々だったが、一度会っている所為もあって、光景が目に浮かぶようでとても面白かった。

八景島に着くとまずは、水族館に向かった。結構人が多く、家族連れや、カップルがやはり多かった。友達同士で来た事があったせりかは、その時、「次は彼氏と来よーね！！」と友人達と言い合った事を思い出しておかしくなった。今は叶った事になるんだろうか？

隣には、通りかかる人が目を瞠る程の美形の男の子がいる。なんだか現実感が伴わない不思議な感覚がした。

水族館の入り口で人の流れに流されそうになるのを、橘がせりかの腕を捕って、なんとか留まった。直ぐに手を離したが、なんだか気まずい。それこそ、シンデレラでは腕を組むなどワルツの時は当たり前だったのに、本庄の言う通り、全然違う事なんだと実感した。多分、橘も同じ事を思っているとなんとなくせりかは思った。しかし、せりかも、橘もどちらかというと実質を取る方である。はぐれたりしないように、腕を組む事をせりかが提案すると、橘もあっさりと受け入れた。二人は、まるでダンスを踊る時の様に、軽く腕を組んで歩き始めた。やはりこの方が、間に人が入って来なくて楽である。水槽を見ていても、ラブラブに見えるカップルへの気遣いか、家族連れ等は少し離れて見てくれるので、人に揉まれる事も無かった。グラスフィッシュを興味深く見ていると橘も実はこれが結構好きなんだと言って笑った。内臓がスケルトンで面白いのだ。しばらく見入ってしまってから、エスカレーターの海のトンネルを潜る。ここは、下からマンボウや小さな魚の群れが見えて、まるで海の中に入ってしまったかの様な気持ちになる。エスカレーターなのであっと言う間なのが残念だが、階段だったら、ずっといる人達がいて渋滞になってしまうだろうから上手い造りだと思う。

そのあと、イルカショーを見た。こう言ってはなんだが、イルカショーって水族館に行ったら見なくてはいけない気持ちにさせられてそれなりに楽しいのだが、どこの水族館も似たりよったりな気がする。水を被りそうな席は避けて、賢いイルカたちがジャンプしたり、トレーナーさんと一緒に泳いだりするのを程良く楽しんだ。ここは、白イルカもいて、それは結構珍しいと思った。しかし、せりかは実はイルカよりもペンギンがとっても好きなのだ。皆が同じ方向を向いて佇んでいるのが、神秘的で愛らしい。結構長い間、ペンギンに

見惚れていると横で、橘はせりかを見ていた。少し焦って、「ペリカンのところ、餌をあげられるんだって！」というと、ペンギンのところにもう少しいようと言われてせりかは赤くなった。お言葉に甘えてペンギンが泳ぐところとか、てこてこ歩くのに歓声を小さく上げて堪能した。やっぱりペンギンって可愛い。そのあと、ペリカンに小魚の餌をやったら結構、ペリカンって凶悪な顔に見えてきた。手が魚で生臭くなってしまったので、お手洗いに行く事にした。お手洗いに行った後、待ち合わせの場所に行くと橘が土産物屋でペンギンのぬいぐるみを見ていた。ふこふこで本物よりも可愛い。せりかは買って帰ろうかと思ったが、この後、遊園地に行く事を思えば、邪魔になってしまうだろうと思って諦めた。

昼食を取る前に、絶叫系の乗り物を乗ってからゆっくりと空いたころに食事にする事になった。こういうところは、気が合うと思う。がっつりハンバーガーなど食べた後に乗り物など乗せられては堪らない。昼食時も混んでいる時間帯はとてもではないが、ゆっくり食べれたものではない。

まずは、海上コースターに乗るが、上りが地味に怖い。落ちる瞬間よりもじりじりと直角に上っていく瞬間が一番怖いと思うのはせりかだけだろうか？お昼時で、空いていたので、続けて二回乗ってしまった。あとは、船が上下に揺れる、海賊船のようなどこの遊園地にもある乗り物だか、これが、ここのは元の高さが高くて怖い。せりかは、絶叫系は苦手な方ではないが、この高さは流石に怖かった。一番怖そうなタワーで落ちる乗り物だけは、パスさせてもらった。見てるから乗って来てもいいよと勧めたが、怖そうだからやめてお

くと言われた。きっと気を使ってくれたのだろう。バイキングに乗っている時も少しも怖そうでは無かった。後は、結構、ほのぼの系の乗り物を乗ったあと、昼食を食べる事にした。結構、遊園地にしては落ち着くレストランが多い。ブュッフェレストランの店を選んだら、海の見えるテラス席に案内された。もうお昼とお茶の時間の中間の為、とても空いている。パスタやフルーツやデザート等、種類も豊富なのに適当な値段である。御機嫌で、好きな物をお皿に載せて取ってきてから、入れ違いに行った橘を待って、飲み物を飲みながら心地よい気持ちになっていた。

「大丈夫?色々、連れまわしてしまって、疲れてない?」

「大丈夫。有難う。すごい楽しいよ。天気も良くて良かったよねー!風も気持ちいいし」

「そうだね。気持ちいいね。あの、今更だけど、今日の格好可愛いね。いつもとイメージ違うからなんだか余計落ち着かないけど、良く似合ってるよ」

「今更~?!って、うそうそ!有難う。お友達の協力を得て、橘君に見合うべく、頑張ってみました」

「髪型変わるだけでも女の子は随分変わるね。最初会った時言いたかったんだけど、なんて褒めるのがいいのか分からなくて、少し大人っぽく見えたしね」

「あんまり褒められると、更科さんと先生が後から恩着せて来そう

で、怖いから」

「それ、やってくれたのあの二人なの？！」

「うん。そうなの。なんだか訳分からないうちに、真綾さんとは友達だし、本庄君は、飄々としてて協力してくれてるつもりなのか、唯、遊んでるだけかよくわからないし、今日の報告もお礼にする約束して来ちゃったの。「超楽しかった！」って報告で許してくれるのかなぁ？あの二人の話は聞いてるだけで、こっちが恥かしくなるからあまり突っ込めないし、服貸してくれたり、面倒みてもらっちゃってるから色々、聞かれるのは必至だなぁ」

「あの二人、とうとう上手く行ったんだね」

「あ、うん。最近らしいけど、そういう素振りも真綾さんからしたら、無かったらしいから。よく知ってたね。先生が何か相談してたの？」

「まあ、そんなトコかなぁ。出来れば更科さんと親しくして欲しいって言われてた。本庄曰く俺がいると男避けになるらしい。見た目と結構ギャップがあって驚いたでしょう？」

「ああ、そうね。儚げな美少女っていったら、せんせいに詐欺だって笑われたわ。本人は、さっぱりしてて面白い子よね。私の事を何故だか、妙に気に入ってくれてるらしいのよね」

「そうそう、いつも俺にも椎名さん情報を聞いてきて、男だったらヤバイ感じだった。自分で声掛ければいいのにっていっても、其処は普通の女子の掟がまだよく分からないからとか言うから、少しウケたけど、やっと声掛けれたんだね」

「先生に無理やりお家に連れて行かれたから、声掛けられた感じではないけど、もう、がっちり友達にはなったわね。先生の従兄妹で婚約者で彼女でしょう？友達の友達はみんな友達の感覚に近いけど、可愛いのに、女の子にしては、はっきりした物言いをする子は嫌いでは無いしね」

「椎名さんらしいね。ちなみに男だったらどういうタイプがいいの？俺が聞くのも微妙だけど…」

「前に美久に聞かれた時に答えたのは、「普通にちょっとだけカッコ良くて優しくて可愛い感じの気の合う人がいい」って答えたら「せりかって残念な子ね」って言われちゃったの。意味は自分でも分かっているの。そんな人が見つかる確率なんて、とっても低いし、その人が自分に好意を持ってくれるかってなると更に確率落ちるものね」

「…俺は当てはまってないのかな？ある程度は好意を持ってくれてはいるんだよね？」

「はっきりいうと、さっき言ったタイプからは大きく外れてると思うわ。悪い意味では無いんだけど、この事を言ったのは橘くんの話になった時だったんだもの。相手にも失礼な言い方だけど自分に見合う人の方が楽かなって思ってしまうものなのよ。橘君に告白して来る子達は、みんなすごく美人で、モデルさんみたいな子達じゃない？とてもじゃないけどあんなに自分に自信無いし、実際、私みたいに告白されてもしり込みしちゃう子の方が多いと思うわ。橘君にとっては理不尽な話だと思うけど。橘君は、橘君の近くにいて惹かれない子はいないんじゃないかと思う位、理想的過ぎるのよ。見た目だけの話じゃなくて、私も橘くんみたいになれたらいいなってい

つも思ってるし、決してレベルダウンして欲しいとかは思ってないのよ?なんだか今日も一緒に歩いて居た時思ったんだけど、ふわふわしてしまって現実じゃないみたいに思ってしまう感じなの。本人にこういう本音を言うのも本当は止めるべきなのかもしれないけど、思っている事をちゃんと言うのが誠意だと私は思っているから、気を悪くしたら、もう少し、自分を見直すから、橘君もはっきりと不快に思う事は言って欲しいと思ってるの」

「不快では無いけど、かなりショックかもしれない。其処まで言われる程、自分が彼氏なのは無理って思われてるとは思わなかったから」

「たぶん、もう少し、大人になるとこんな見栄っ張りに近い気持ちは無くなると思う。それくらい馬鹿馬鹿しい事を思っているし、言っているのも分かるんだけど」

「椎名さんが思う程、俺は立派な人間じゃないし、清廉潔白でもないよ。前にキスした時、初めてだったら悪いって謝られたけど、殆んどなんとも思わない兄貴の女友達と興味本位でつきあったりしてたから、気にされるほど綺麗な訳じゃない。椎名さんとっていうのには意味は大きいけど、却って悪い事をしてしまったと思ってるんだ。わざとじゃ勿論ないけど相手が違う人だったら多分、もっと頑張って避けたかもしれないと思うから」

「あれは、頑張って避けちゃったら、せっかくみんなで頑張った劇が終わっちゃうでしょう?!ギリギリ頑張ってくれたの私にだって分かったよ。全面的に私がバランス崩した所為だし!それに、自分基準で初めてなのかなって決めつけたのだって、男の子にはすっごく失礼な話じゃない?あの後、反省したの。余計な事言っちゃったって。だから、過去のお付き合いした女性が十人単位で出てきても、

橘くんならありかなぁと思うよ。年上にもモテそうだもん。うちの母や玲人のお母さんだって騒ぐくらいだし」

「流石に十人単位では居ないけど、数ははっきりは言わないけど数人いたうちの一人がストーカーになっちゃった人が居たんだ。刺されそうになったところを警戒してた警官に助けられて、中2の時だったかな?結局半径１００M以内には寄らないって念書を書いて貰って告訴とかはしなかったんだ。結局いい加減な付き合いをしてた俺が悪いのに、俺が中学生ってだけで全面的に被害者だとみんな思ってるから、兄貴にもすごく謝られちゃって、それから絶対うちに女の友達連れてこなくなったし。俺は、反省したのもあって家族にも迷惑かけたし、勉強位頑張ろうかなって思っただけなんだけど、やっぱりそれから少し女の人が恐くなって、それは家族も道とか歩いてても自然と避けちゃうから分かるみたいで、胸が痛かったみたい。特に兄貴が。だから今回、初めて自分から家に椎名さんを連れていったから、みんな浮かれちゃって、こんなに過剰に世話焼きな訳。ちょっとブラコンかと思われるでしょう?やり過ぎで」

橘くんは静かに笑ったけど、そんな事があったら、お兄さんも協力しようと思ってしまうのは当然だと思った。聞いた内容が重い割には話しかたや表情が軽くしていて、深刻にならないように話してくれていた。

「ブラコンとかは、思ってないよ。そもそも如何いうのが普通なのか、あまり分からないしね。橘君みたいな弟さんならお兄さんもいろいろ構いたくなるんだろうなー位にしか思って無かったけど、そういう事があると慎重になるものなんじゃないの?私が橘君のストーカーにならない保証なんて無いんだよ?」

「椎名さんみたいなかわいいストーカーなんて居ないよ!逆に今は、

相手が付きまとった気持ちが分かって、悪い事したと思ってるもん。相手の事好きなのに、全然向き合ってくれなかったら辛いだろうし。俺もあの時、今の気持ちが分かれば、せめて向き合って、それでも合わないなら、納得いくまで話して断ったのにって思うから」

「それは、私とも納得いくまで話したいって事だよね。正直、私の事を其処まで思ってくれるのが、不可解なんだよね。何か特別橘君の気に入るような事した覚え無いし、そういう要素も自分に有るとは思えない。別に自分を卑下してるわけじゃ無いし、謙遜でもないんだけど、今迄、告白すらされた事無かったから、どうしたら、好かれるのかな？みたいな疑問がどうしても拭えないんだよね。付き合うのもピンとこないの。こんな子供っぽい私の何処がいいわけ？」

「それは、言ったら、細かいとこから全部好きだよ。それこそ、指の先から髪の先まで」

それは、とてもセクシャルな意味を含んだ言葉だというのが分かる言い方でせりかは瞬時に真っ赤になった。そんなせりかを見て橘は少し嬉しそうだった。先生が橘は少し黒いから認識を改めたほうがいいと言ったのを初めて現実に分かる思いがした。しかし、あまりにもせりかが橘を神聖視しているので、わざと今迄の話や、こういう態度を取らせてしまっているのかもしれないと思うと、自分の偏見の所為で、相手に辛い事を思い出させて、その上で人間らしい部分を見せようとする橘が、痛々しく見えた。

「分かったから、もう少し、猶予を貰ってもいい？後、玲人に相談してもいい？もちろん橘くんの今話してくれた事は言わないつもりだから」

「…いいよ。玲人は椎名さんにとっては家族同然だもんね。今迄黙ってくれていたのは、俺に気を使ってくれての事だろうし、構わないよ」

取り敢えず一応の決着を見た所で、あまり食欲も無くなってしまったのでお店を出る事にした。会計は何も言わずに橘が払ってくれたのを、お礼を言った。雰囲気が払うと言わせない空気があった。今日は何から何まで、奢られてしまって、せめておうちにお土産を持って帰ってもらおうと思い、土産物屋に入って、いるかチーズケーキなるものを自分の家の分とふたつ買った。

帰り、モノレールに揺られながら、八景島を離れていくのが、なんだか寂しく感じられた。気まずくなりそうな車内も混んでいるのをせりかを端に立たせて、負担が来ない様に庇ってくれているのが分かる。なんだか、彼にこれだけ想われて、返せる物があるのか不安になった。

新杉田駅で別れる時に、御家族にとお土産をわたすと橘はとても驚いた顔をした。

「いいの？貰っても？」

「うん。今日はいろいろとありがとう。人生初のデートが橘君で良

かったと思ってる。すごく楽しかったし、今迄と違う橘君も知れたから。お兄さんにもお礼沢山言っておいてね」

せりかは、答えを出せないうちにこう言う言い方は期待を持たせて卑怯かもしれないけれど、今日思った本当の気持ちを告げた。しかし、賢い橘はやはり甘い意味には取らなかったようで、淡く微笑んだだけだった。それからポケットから小さい紙袋をせりかの手の上にお菓子を受け取る代わりに乗せた。

「渡すのどうしようかと思ったんだけどやっぱり椎名さんの為に買ったものだから貰ってくれる？」

「空けてもいい？」

「帰ってから見てみて。じゃあ今日は本当にありがとう。気をつけてね」

そう言って反対側のホームに去って行った。

帰ってから紙袋をあけるとそれは小さなペンギンのマスコットだった。それを見て。せりかは、何故か、胸が痛くなって涙が止まらなかった。

14

せりかは更科邸に来ていた。服はクリーニングからまだ帰ってきていないが、ホットカーラーだけ返す事にしたのと約束通り、更科と本庄に初デートの報告に来たのだ。二人は唯、せりかの話す事を淡々と聞いてくれた。少し気持ちが重い事も正直に話した。やっぱりなんだかんだと本庄を頼りにしてしまう所はせりかも最近自覚していた。彼は、元来の性格なのか、せりかに対してある程度特別なのかは分からないが、とても正直に見たままを言ってくれる。しかもそれは、せりかの立場に立った場所からの見解で、いつも親身になって相談に乗ってくれる絶対的な味方であった。真綾には悪いと思うが、今一番気兼ねなくなんでも話せる友人は間違いなく本庄だった。

「お嬢は考え過ぎなんだよ。寄せられた気持ちに応えなくちゃならないって思うから重たいんだよ。相手が勝手に想って来るんだから同じだけ返せなくても仕方の無い事だし当然だと思うけど」

「それは、そうかもしれないけど、人の好意には応えたいものじゃない？もちろんそんなに博愛主義って訳じゃないよ？だけど相手に好意を持っている場合は自分はそれ程でもないとかって切り捨てられないよ」

「そこがお嬢の良い所だとは思うよ。でも男の好意なんて下心付きなんだから、そんなに思いやり見せなくてもいいんだよ。もちろん真剣な気持ちを踏みにじれって意味じゃないのは、分かるよね？」

「うん。でもどの位、待って貰ってもいいのかなぁ？はっきり即決で無理とかＯＫとか出来ない以上、相手にもその間、ツライ思いを

させるし、他に目を向けるチャンスも奪ってる気もするし」

「中途半端に返事する位なら、いくらでも待たせていいんじゃないの？待てないなら、それまでの話だし、そんなのそれこそ見切っていいんじゃ無いの？勝手に橘が思い続けても、止めても、それは向こうの意思も尊重されるべき事ではあると思うから、もし一年位このままで、違う想う人が返事貰う前だけど出来ましたって言われても仕方ないよね？その時、逃がした魚が大きく見えるかもしれなくてもね」

「もともとお魚が大きいのは分かってるけどね。誰の目から見ても明らかじゃない」

「でも、例えば、真綾は、橘より俺を選んでくれるわけじゃん。少しは心動くかな～と思ってた所はあったんだ。すっごい引力あるでしょ？彼」

「やだ、綾人そんな事思ってたの？」

ビックリした真綾は今迄、話を聞くのに徹していた様だったが、流石に声をあげた。橘には男避けに親しく出来たらしてって言っていたと聞いたが、そんな、自虐的な目的が有ったとは知らなかった。

「それは、そう思うでしょう？あれだけ、顔良し頭良し性格良しでおまけに声も良いよな…あとはなんていうか唯、カッコいいとかじゃない艶があると思う。それと、何気に危うい感じがする所が逆に隙になってて、惹き寄せられる要素になってるんだよなぁ」

「…せんせいが危ない方にいかないか、真綾さんがいなかったら心配になる分析だよ。それは……」

「実際、そういう奴もいるんじゃないのかなぁ？男子校とかいってたらあいつマジでやばいと思う。共学来て正解じゃないの？でも橘って見てると意外と女の子苦手そうだけどね。特に自分に言い寄ってくる子とは、話すのもしんどそうだもん。最初は断るのが苦手なのかと思ったけど、断るスキルは有るって本人も言ってたし、そう思うと嫌悪感がある様に見えるんだよね。断る時悪いとか全然思ってなさそうだしね。普通はお嬢さんほどじゃなくても相手の好意に応えられない罪悪感が湧くもんでしょ。それが、全然無さげで、断り方もさっぱりしてるから…あ、俺がいる時、何回かそういう事有ったから知ってるんだけどね、相手の子は緊張してるから分からないと思うけど、言葉は普通だけど、顔見ると嫌悪感を感じてるのが分かるんだよね」

本庄はやっぱりするどいな～と感心してしまう。話の感じだと橘が何か話した訳ではなく、自分が見て感じたものから導き出された結論のようだ。

「でもせりかさんに告白してるんだから、女嫌いっていう訳でもないでしょう？それに私とも普通に話してくれるし、私はそう感じた事ないわよ。クラスの子とだって結構フレンドリーな感じだしねぇ」

「多分タイプによると思う。真綾とかお嬢とか自分に明らかな好意が無いの分かるし、クラスの連中は意外と橘の事、なんだか恋愛対象から除外してるところあるじゃん。多分なにか感じる所があるんじゃないのかな？近くにいると」

「そう言われれば、どっちかって言うと頼りにはされてるけど、うちの子達ってさっぱりしてて、橘君に言い寄ってるの見た事ないわね。はっきり好きとは言わなくてもああいうアイドルみたいな人っ

て綺麗な人が張りついてそうよね？」

「橘がそういうのイヤなのみんな分かってるんだよ。なんとなく。入学当初は結構ピリピリした神経質な奴かと思ったけど、いまではクラスでは平和そうでのんびりしてるから、ついからかったら、『俺のオアシスだな。ここは』って言ってたからかなり今の状況は気に入ってるみたい。それは廊下とか歩くと途端に、みんなが目で追って来るから仕方がないのかなとも思うけどね」

「玲人とかは、そういうの全然気にならないみたいなのよね。なんか性格図太いっていうか強靭っていうか一緒にいる私のが辛かったけど、だから橘くんの事もそういうのも面倒って言うのもあるんだよねー」

「そうだよね～！よっぽど好きか、自分ってすっごく綺麗って思ってる子じゃないと耐えられないわよね」

「そうそう！！どっちも無いからやっぱり早めに断るべきかな～？」

「うわっ！冷たっ！可哀想じゃない？あまりにも」

「綾人はそう言うけど、せりかさんは身を持ってあの一組の彼とずっといて大変だったんだから、他の人よりも現実知ってるって事よ。冷たくなんか無いわ」

「そうなんだよね～。なのに奴は涼しい顔してるからいつもムカついてたわ。やっと少しは平和になって来たかと思ったら次は橘くんでしょう？なんだか他の人に言ったら贅沢で絶対に怒られると思うけど、もうちょっとだけでいいから、目立たない人が来てくれないものかしらって思っちゃうんだよね」

「でも高坂とはそれでも離れなかった訳でしょう？耐えられないっていう事は無いと思うよ。多分」

「…玲人と離れる選択が有ったのは、高校受験の時位で、後はもうべったり一緒だから…諦めたのかな……自分の中で」

「じゃあ、せりかさんとお付き合いすると、もれなく高坂君が後ろに付いて来ちゃうんだったら、並みの人じゃそれこそ無理じゃないのかしら？橘くんは、そこは分かってくれてるんだし、かなりの高評価じゃないかしら？言い辛いけど、この先彼氏作るの、せりかさん厳しいと思うわよ」

「そういうの考えて無かったかも！そうだよね～。玲人の事気にしないでいられるのって橘くん位の人じゃないと無理ってなると私の将来暗い事になるよね？今回は、奇跡みたいなものな訳だし」

「そうね。大学生に成るまでは絶対無理よね？」

「あ〝～！大学も無理かも。玲人、一緒の大学行こうって言ってたし……」

「…お嬢さんさあ、高坂と別れるつもりは無い訳？この先も？」

「付き合っても無いのに別れられないよ。それに、うちって両親も仲が良くて学校一緒にした方が優劣つかなくていいんだよね。亀裂が出来ると嫌だから高校も結局一緒にしちゃったんだもん」

「…成程ね。割と思うよりもシビアな関係な訳だ。高坂とは」

「そうなの。こういうの恥かしいから言いたくないけど隣で同じ歳の子がいたら、親同士少なからず張り合うものなのよね。玲人と私が頑張ったから、今の平和な御近所関係が有ると言っても過言じゃないと思っているの」

「大人は分からなくても子供って微妙に空気読むものなんだよな～。分かるよ、そういう事が生活上結構重要だって事。俺とかも他の従兄弟達に負けるなって圧力結構あるもんなぁ」

「みんな大変なのね。私は、比べられる存在がいないから自分の好きにやってこれたけど」

「なんだか、激しく納得な感じよね。真綾さんの美徳でもあるけどマイペースでいられるのは羨ましいわ」

「そうそう。こういう競争する意識をもたないでいられるのは羨ましいところだよな。って話がずれて来てるけど、橘にも保留って言ったんだから取り敢えず保留にして高坂に言ってみなよ。何か動くかもしれないしね」

「先生は、あくまでも玲人が私の事、どうにか思ってると思っているみたいだけど、そんな事もないのよ?さっき言った通り意外とシビアな関係なのよ。人には言えないけど」

「じゃあ、賭けてもいいけど、それはお嬢には酷かなぁ?まあ、いいや。俺の見解が当ったら教えてくれる?」

「…いいわよ。これだけ相談乗って貰ってるんだもん。ある程度は報告義務も発生するってものでしょう?なんでもとは言えないけど、万が一、それっぽい感じの事があったら報告します」

「せりかさん、私も綾人から聞いてもいい？」
真綾が遠慮深く言ってきたのを微笑して頷いた。
家に帰って来たので、とりあえず帰って来たメールを玲人にすると直ぐに玲人が家にやってきた。手にお茶のペットボトルを二本持っていて、お茶が軽く汗をかいていた。
一本当然のように渡してくるので、礼を言ってキャップを空けた。
「ここんトコ、せりは出掛けてばっかりで、付き合い悪いよな。文化祭も終わったんだから、少しは時間に余裕出来るんだろう？」
「…うん。あ、あのね、話があるんだけどいいかなぁ？突然で悪いんだけど、相談に乗って貰いたい事が有るの」
「何？…いいよ。もちろん」
玲人は言いながら、嫌な予感がした。こういう日が、いつかが来るかもしれないと思っていたのに、全然覚悟なんて出来ていない自分

に気付いて逃げ出したくなったが、それは妥当な解決法では無い。とにかく聞いてみるしかない。

「少し前に、橘くんに付き合って欲しいって言われたのね。…でも玲人とは友達だから相談するの少し躊躇ってしまって直ぐには言えなかったんだけど、どうしたらいいかなぁと思って、取り敢えず一回デートしてみて、考えるって事になって最近出掛けたのね。でも、付き合うってなると先に面倒事の方を思っちゃうのよね。ずっと玲人と付き合ってるって思われてたから、中学の時も大変な事ってあったじゃない?それを乗り越える程、好きなのかって言われるとそうでもないし、自分がもっと綺麗で自信があったら付き合ってみたりしてもいいと思うのかな?とか考えちゃうと、相手は友達の延長で良いって言ってくれているのには、断るのもひたすら自分勝手に思えてくるし、下らない事気にする自分も嫌になるところもあって、答えられなくて保留にしてもらっているんだよね」

予想通りの話ではあったが、少し上回る内容だった。橘みたいな奴と付き合うと大変だから、止めたほうがいいと、止めるつもりだったし、賢明なせりかもそれは分かっていて、たとえ橘がせりかに惹かれるような事があっても受け入れないだろうと踏んでいたのに、一度デートしてみたりだとか、断らない選択肢を残しているのは橘の事を少なからず好きなのだという事実が玲人を打ちのめした。それに、好きな相手に友達で良いなんて筈無いのに、気軽な所から攻める辺りに橘の聡明さが覗える。これでは、せりかが落ちるのも時間の問題ではないかと思われた。

「…せりが、忍の事をどう思ってるのかが一番大事なんじゃ無いの?外野の事を全部無くしたら、付き合ってもいいと思ってる訳?」

一応相談に乗る以上、思っている事を言ってみた。せりかが、本当に橘の事が好きなんだったら、自分は諦めるより他ない。せめて懸命に相談に乗る事が玲人に、今出来る最善の事だろうと思う。

「好きだってずっと思って来たの。でも、今迄告白とかされた事が無いから分からないんだけど、相手と明らかな温度差があって、もしかして見ているだけでいいと思う程度のアイドルとか好きな俳優さんとかを思う感情に近い感じもして来て、普通、好きってもっと強い感情のような気がするの。例えば、今すぐにでも会いたいって思うとか…そういう感情は湧いて来ないんだよね。正直」

答えを聞いた玲人自身力が抜けた。こんな答えじゃせりかを諦める気になんてとてもなれない。しかし、同時に諦める必要が無い事にホッとしていた。自分からせりかを取り上げられたら、正直今迄と同じ生活が出来るか自信がない。もっと早くに動くべきだったと思うが、もう少し相手が大人になるのを待っていた。今の答えを聞いたってせりか自身、好きだと想う感情がまだ分からずにいる。橘の事も本人自身、憧れに近い感情なのでは無いかと考えているようだ。早く動いた所で、ずっと一緒にいたから勘違いしているという事で済まされて、今迄と同じ付き合いになるか、気まずくなってしまうかのどちらかだと分かっていたから動かなかっただけだ。しかし、今せりかは恋愛について考えているいい機会だ。これに便乗しない手はない。

「じゃあ、もう少し良く考えてみたら?今迄が全然、恋愛事に縁のない状態だったから分からないって事だろうし。それで、考える時に俺の事も一緒に考えてみて」

「……どう言う意味?!」

「俺は、せりの事ずっと好きだった。実際今迄、せりに言い寄りそうな奴は邪魔して来た。だから、せりが疎くなってるのは申し訳なく思うけど隣にいて同じ気持ちになってくれるまで待とうと思っていたから、忍の事、ショックだけど、せりが決める事だし、俺も言っておかないと後悔するから、相談に乗るって言いながら、余計困らせるの分かるけど、忍への気持ちと一緒にでいいから俺の事も考えて欲しい。本当にずっと、ずっと好きだった…せりがいない人生なんて考えられない。忍は友達でもいいっていってるみたいだけど、俺は、そんなんじゃ嫌だ。将来は結婚も考えて欲しい…」

「ちょっと待って!!いきなり飛躍し過ぎだよ。玲人はずっと一緒にいたから、他人に取られそうになって混乱してるだけだよ。玲人こそ良く考えてみた方がいいよ。幼稚園で他の子と遊んだりして怒っちゃった時と同じ感情だよ」

「ずっとその時からすきなんだから、同じ感情かもしれないのは認めるし、忍に取られそうになって焦ってるからこんな事言っている訳だから混乱もしているかもしれないけど、せりの事が好きで、俺とずっと一緒にいて貰いたいのも本気だから、よく考えて答えを出してくれ。先に言って置くけど、俺を選らんでくれなかった時は、忍との事祝福は出来ないけど、友人関係は気まずくならない様にするけど、せりとこういう風な兄弟みたいな関係は、続けられない。もちろん隣に住んでるから気は使うけど、大学に入ったら一人暮らしする。将来の事も考えたら、遠方の大学も考える。俺も気の迷いとかじゃなくて本当に本気だから」

「…分かった。良く考えてみる。でも、玲人が近くにいなくなるのは嫌だよ。それは考え直して貰えないの?それ込みで考えろってそれは脅しに近いでしょう?」

「そうだな。脅しかもしれないが、それ込みで考えてくれ。俺もそれだけ本気だし必死なんだ」

「答えを出す迄は普通にしてくれるの？今迄と同じに」

「出来る限りはそうするよ。俺も離れる覚悟もまだ出来てないし……」

そう言って玲人は帰って行った。

15

せりかは眠れずに月曜日の朝を迎えた。

ずっと自分の中で、好きっていう感情や恋愛ってどういう事を持って確かなものだといえるのだろうか？と考えていた。しかし、考えるうちに、玲人からの告白は断った場合、今後疎遠になるという事も含めたもので、今迄の自分達の歴史を否定された様で最初は悲しくて如何しようもなかったせりかだったが、段々玲人に怒りが湧いて来た。いくら何でもこんだけべったり生まれた時からして来て、こちらに彼氏が出来そうになったとたん、「じゃあね」は酷いのでは無いかと思えた。しかも橘を選ばず、玲人も選ばなくても同じ事だろうと思うと結局本当の究極の脅しだと思う。自分を選ばなければ許さないと言っているのと同義語だ。何て傲慢なんだろうと怒り心頭であるが、これが幼馴染の性格を知り尽くしていると（何も気が付かなかった時点でそうでもないのかもしれないが）傲慢なところも、我儘なところも、そういうところも、あったな～位で済まされてしまって、心でいくら罵詈雑言を浮かべてもなんだか虚しいだけだった。何を思っても今更過ぎる相手なのだ。それでも玲人は私に対して恋愛感情を見せた事は無かったと思う。だからいくら本庄に言われても信じる気になれなかったのだ。自分と同じ気持ちになるのを待っていたと言っていたが、自分の知っている玲人の性格を考えるとそんな気の長い事を考えていたなんて今でも其処だけは信じられない。橘のことが無かったら一生こんな事を言って来ないで、大学に入ったら綺麗系でナイスバディなお姉さんの彼女でもさっさと作って、せりもがんばれよ♪みたいな事を上から目線で言われていたんじゃないかとさえ今でも真剣に思えてくる。

昨日言った事が全て勢いだけだとは思えないが、勢いだけの部分も

あるんじゃないかとは思っている。特にまだ十六なのに、付き合うって決めたら、即結婚も考えろというのはこれからまだ、どんな人とお互い巡り会うか分からないのには早計ではないかと思う。

しかし、そう言えば、真綾は本庄との付き合いは結婚も受け入れて付き合っているのだから、其処まで先の事を決めてしまって後悔しないのだろうか?と疑問になった。しかし、本庄には未来を委ねてもいいと思う位の包容力があった。とても不謹慎だが、本庄に言われたら、玲人も橘も振り切って付き合ってもいいと思う位、せりかはやさぐれた気持ちになって来た。絶対に無い事だから思うのかもしれないが、段々と疲れてきて、なんだか全部投げ出したくなって来た。

朝いつもの様に玲人が迎えに来てくれたのを、やっぱり嬉しく思ってしまう自分の気持ちを思うと余計に玲人に怒りが湧いた。不機嫌に歩いていると玲人は全然昨日の事など無かったように、「アレの日か?」等とからかってくる。ぶちんと切れて、「そうよ!!」と言ったら流石に黙ってしまった。こちらの怒り様が半端じゃ無い事が分かったようだ。

「昨日は、急に色々と押し付けるような事言って悪かったとは思ってる。ごめん。せりの事をそんなに簡単に離れてもいいと思っているわけじゃないんだ」

「そうだよ!ずっとこっちがもう少し距離置いてって言っても、昔っからおんぶお化けみたいにべったりして来たくせに酷いよ!!」

「でもさ…」

「でも何も無い！！確かに好きな人が他の人といるの見るのツライとか思ってるのかもしれないけど、私達ってその程度の関係だったの？私に彼氏の二、三人出来た所で捨てられる様な間柄だったわけ？私が反対だったら、何があってもお祖父ちゃんとお祖母ちゃんになるまで玲人とは縁は切らないわ。絶対に」

「ごめん。お前の方が子供って思ってたけど、そうじゃないんだよな…俺の方が本当に如何しようもない奴なんだよな」

「分かってるなら、昨日の事許すから考え直して。そうじゃ無いと気持ちもどうか分からないのに私達結婚するしか道がなくなるじゃない！！玲人は私が玲人の事好きじゃなくてもお嫁に来てくれるならそれでもいいっていう馬鹿な考えで昨日の事言ったんじゃ、ま・さ・か、無いわよね？！」

実のところ玲人はそれでもいいと思う自虐的な思考だったが、それを今言ったら流石にせりかに殺されそうだった。というよりも逆に見捨てられそうだと思う。

「分かった。昨日の言い方は流石に極端だったと思う。せりかに酷い事言って悪かった。頭冷やして考え直すよ…」

「あー！！良かった！！もう、昨日ずっと考えてたら、恋愛云々は悪いけど如何でも良くなって来て玲人が縁切るって言った方が腹が立って来ちゃって！なんだかグレそうになったわよ。もう、いっそ橘君でも玲人でも無い方がいい気がしてきた。今言い寄られたら、ある程度妥協出来るから自分でもヤバイと思うわ。本庄君に言われたらまず間違いなくそっちに行きそうね！！」

真綾の事を知らない玲人にお灸をすえるつもりで昨日よぎった戯言を口にした。

「せりは、……あの、本庄の事が好きなのか？」

本気に取った様子で玲人が青ざめた

「彼は、とても包容力がある人だしね。昨日色々考えていたら、結婚まで何で考えられるんだろうって思ったら包容力が有るからだろうな～と思った訳」

「それって俺には其処まで考えられるほど、包容力が無いって事だよな」

「そうだよ。彼だったら、この位でガタガタ言わないわね～。婚約者の彼女、わざわざ橘君に近付けて揺らいでもいいと思うって人なのよ？最終的に色んな人を見て自分がいいと思う様なら結婚してもいいらしいわ」

ネタばらしをして、少しお仕置きを止めた。昨日考えに考えて思ったのは、本庄が特別なのかもしれないけれど、其処まで思われていたら昨日の玲人みたいな事は言い出さないだろうと思ったら、求め過ぎなのかもしれないが、自分が一番に相手に求めるものが、包容力だと気が付いた。橘や玲人のように容姿端麗で文武両道だったりしなくてもいい事に気が付いたのだ。

「…それを聞いてたら、昨日の俺の事を心が狭いって思っても仕方が無いかもしれないな」

「誰もが、本庄君みたいな考え方じゃ無い事も分かるから、仕方無

い事もあるかもしれないけど、でも私達の関係は第三者が入ってきたら、多少は変わっても切れないで繋がってるって血じゃ無いけど、そう思っているのが自分だけだと思っただけよ。あと玲人と橘くんみたいにすさまじくカッコ良くなくてもいいから、一番に包容力のある人とお付き合いはする事にしたから、二人とも悪いけど、断る事にしたから…あしからず」

「おい、結論それかよ!!少なくともどっちか選んでくれるかと思ったのに」

「そうね～。玲人が包容力たっぷりの大人な人になった時に、玲人にも私にも恋人がいなかったら、付き合う事もあるんじゃないかしら?ずっとお隣さんな訳だし?」

「忍は?せりの思う包容力が今の時点で足りないのか?俺にはそうは思えないけど」

「有るのかもしれないけど、テッペン見ちゃうと悪いけど、理想が高くなるからねぇ」

「ああ、本庄に比べると駄目って事か…」

「そうそう。他のところで、橘君や玲人の方が上のところも沢山あるとは思うけど、今の時点の私の思うてっぺんは彼だけど、自分の求めている部分が分かったっていうだけで、彼女がいる事に落胆したりはしてないわ。だって、彼女に対する彼がとても良く見えるんだもの。これで、簡単に他の人に乗り替えたら超幻滅しちゃうわ」

クラスに着いてから、メールで昼休み屋上に橘を呼びだした。

「今日は返事を貰えるってことかな？」

「ええ。その前に昨日から色々、あった事を話したいんだけど聞いて貰ってもいいかな？」

「いいよ。玲人に相談するって言われた時から少しは、覚悟が出来ているから…」

「……橘君は玲人の気持ち知ってたの？」

「それは、分かるよ。なんでちゃんと告白して自分のものにして置かないのか不思議なくらいだったよ。玲人に言われて断るような子そうそうはいないだろうし、椎名さんを見たって玲人の事を気が付いて無いだけで好きなんじゃ無いかってずっと思ってたし」

「それは、駄目モトで告白してくれたって事？」

「ううん。気が付く前に俺の物にしちゃおうかなっていうずるい考え」

「……すごく違和感ある理由だけど、そういう橘君の方が好きだわ。面白くて」

「引くかと思ったのに流石、椎名さんだね。腹黒趣味なんだ？」

「ふふっ。完璧橘君より数倍いいと思う。そういうちゃっかりしたところを見るといつもがしっかり者な印象なだけに男の子に褒め言葉じゃないけど可愛いと思うわ」

「可愛いは確かに褒め言葉じゃ無いけど、椎名さんが言ってくれると誉められてる気がしてくるから不思議だね」

「私、玲人に付き合ってくれって言われた時に、自分を選んでくれなかったらこの先、縁を切るって言われて、もうぶっちん切れたのね。今迄十六年間の関係を、色恋沙汰位で切るなんて心狭くてびっくりよ！その時、自分が付き合いたい相手に何を一番求めているのか考えたの。それさえ有ったら後は有る程度許せるみたいなものを思い浮かべたら、包容力がある人だったら結婚まで考えられるかもねって真綾さんと本庄君の様子を見て思ったら、本庄君がいいなぁって思ってしまったの。玲人に結婚も考えてくれって言われたのも大きいんだけどね」

「…それは、椎名さんは本庄が好きって事になるよね？更科さんがいても」

「真綾さん含めた本庄君だから、本庄君みたいに包容力がある人だったら、橘君や玲人みたいに綺麗だったり頭良かったりしなくてもいいかなぁって言ったら分かって貰えるかな？」

「それは、究極のところに行っちゃったんだね。相変わらず突拍子も無いね」

そう言うと橘は微笑を浮かべた。

「そうなんだけど、極端な性格なのよ。こんな私とうまくやってく

れる人なんて、心が際限なく広い人だって自分で気が付いたのかもしれないわ」

「……今迄、有難う。椎名さんの事、悩ますだけの結果になっちゃった事、悪かったと思ってるんだ。振り回すだけ振り回してごめんね。最初から断られてるも同然だったのに、おれが長引かせて足掻いただけなんだ」

「ううん。こちらこそ本当に感謝してます。こういう状況で告白になるけど、半年間、毎日どきどきしたり、ときめいたり橘君がそういう気持ちをくれた事に感謝しているの」

「それは、光栄だけど、自分でも惜しいっていう感じなんだなぁって落ち込むなぁ。玲人はライバルだってずっと分かってたけど、本庄みたいな人がいいって言われるとキツイよな」

「フォローになってないと思うけど、私は自分で自覚してるけど、特異例だし、先生曰く、橘君は、顔良し頭良し性格良しでおまけに声も良くて艶っぽくて引力あるってべた褒めですごく橘君の事を勧めてくれたのね。あからさまでは無いけど、私が断りそうになるとポジティブな要素持ちだして来てくれて、私と橘君のことすごく考えてくれているんだなぁって思ったわ。私もその通りだと思うんだけど、相談に乗って貰ってるうちにこういう感じの人だと話易くていいなぁとか思っちゃったんだ。私も潔く失恋してくるので、御相子にして貰えないかしら?」

「うん。玲人とやけ食いでもして、気持ちを昇華するよ。でも玲人は諦めないんじゃないの?俺よりずっと年季が入ってるし、これからも近くに居る訳だから…」

「それはね、お互い大人になった時に包容力も出来て、私も成長して、心狭い人とでも大丈夫とかになった時にお互い、恋人がいなかったら付き合う事もあるかもしれないわねって言ってあるの」

「俺より生殺し状態だな。椎名さんって結構サドっ気有りそうだもんね。玲人が苦労しそうだな」

「あら、意外と腹黒の橘君にサドなんて言われるなんて光栄だわ。女王様キャラで行こうかしら？これから……」

「わざわざ、キャラ作らなくても地でイケるんじゃない？学校では少し猫被りみたいだから」

「ふふっ。分かる？こうやって気取らないで喋ってたらもっと楽しかったよね。八景島とか。なんだか損した気分だわ」

「そうだね。これからはお互いに地でお付き合い願いたいね。それだけで、俺のほうはもう充分だから」

「有難う。楽しくなりそうね。周りをドン引きさせないといいわね？周りの人達の為に…」

「黒―い空気漏れ出して五組の委員は二人とも腹黒でサドとかって笑えるよね。きっと…なんだか椎名さんと緊張しないで楽しく喋れるようになったら、少し世界観変わってきたかもしれない」

「私も！！これからはもっと楽しくなりそうね。まだ高校一年生なんだもの。恋愛より友達と楽しくしててもいいと思うの」

「そうだね。今度は二人じゃなくてみんなで遊びにいこうか？玲人

や本庄や森崎さんや斎賀さんも誘って」

「いいアイディアだと思うわ。橘君の提案じゃクラス全員来そうだもの。あと数カ月だけど、このクラスで良かったって本当に思う。いい出会いが沢山あってシンデレラも大成功だったし、あと好きな人とファーストキスも出来たしね」

軽く片目を瞑ると橘は驚いた顔をしたが、その後、屈託無く笑ってくれた。その顔を見て、せりかは、本当に自分の淡い初恋が終わったのだなと感じた。二度目の恋は本気だけど、既に婚約者のいる相手で失恋確実で、でもきっとその後も橘と一緒で友達付き合いしていける筈だ。恋が終わっても何もかも無くなってしまう訳ではない。ここからが新たなスタートだと思う。

事の顛末を本庄に話すと、「勘弁してよ～！！俺がすごい悪者みたいじゃん」と抗議を受けたが「好きなんだから仕方がないじゃない？」と言うと「流石はお嬢！！想定外で最高に面白いね♪」と最高の賛辞が返ってきて、せりかの失恋の痛手は大分薄くなった。もちろんその後も良き相談役でいて貰う気満々だからねと言うと「お嬢さんには敵わないよ。この中で真の無敵なのは、間違い無くお嬢だね」とからかうようでいて優しい許容の言葉をせりかにくれた。

16

「せりの事抜け駆けしただろう？忍、おまえって本当に友達甲斐の無い奴だよな」

お好み焼きを頬張りながら言われてもあまり効果は薄い。

「何の事？抜け駆けなんて人聞きが悪い事俺がする訳ないでしょう？玲人が一回でも椎名さんの事好きって言った事あったっけ？無いよね。それでも分かれってそれは言いがかりってもんだよ」

いけしゃあしゃあと言ってのける橘の方が、口では全然優勢だ。玲人では相手にならない。

「大体、せりが本庄に転んだのだってお前の事相談に乗って貰ってるうちにそういう感じになったんだろう！」

「あれは失敗したね。婚約者がいる奴だからって安心してたんだよ。途中からは、結構仲良いからなんだかヤバくならなければいいなぁとは思ったけどまさかね…」

「俺が、いつからせりの事想ってたと思ってるんだよー！忍はその見映えだけで充分誰でも男でも女でも付いてくるんだから、せりになんてちょっかい出さなくてもいいのにさ！！」

「あ・の・さ、本庄はお前の方がカッコいいって言ってたけど？それこそ手近で済ませないで、もっと視野を広げて見ろよ。玲人に合って、玲人の事を想ってくれる子なんて沢山いるよ。一応、玲人の為を思って言ってるんだからな。あんまり思い詰めると相手も重い

よ」

「人の事言えるのかよ！」

「失敗してるから言ってるんだよ。椎名さんはいい子過ぎて想ってくれる相手に気持ちを傾け過ぎるから、追い詰める事になるって分かったからこうして綺麗さっぱり諦める気持ちになったのに玲人が隣の家で、未練たっぷりにしてたら彼女も身動きとれないよ？少し休戦しなよ。大学生くらいになったら、玲人も本庄位いい男になるよ絶対」

「お前、俺の事本当に慰める気でいたんだな。からかわれてるか遊ばれてるとしか思って無かったけど」

「それも当たってる（笑）プラス励ます気持ちで、今日はきたんだけど？」

「お前は大丈夫なのか？かなり本気だったんだろう？わざわざそうじゃなければ、せりなんて面倒な所に行かないだろう？」

「それはもう、超本気でしたよ？全力でこんなにいったの初めてだし、だけど、気持ちが時に重い事も知ってるから真剣に相手が断ってきた以上はすっぱりあきらめるよ。玲人は俺とは微妙に先のある断られかたなんだから、とりあえず今は友達に戻った方が、絶対に玲人の為にもなるから…」

「そうだな。せり以外は今でも考えてないけど、今迄の関係で続けてみるしかないよな」

「そうそう、それに今度、本庄や更科さんとか森崎さんとか斎賀さ

んと遊びに行こうって椎名さんと言っているんだ。楽しそうでしょう？」

橘は意地の悪い笑みを浮かべながら玲人の方をみた。案の定、本庄の名前を聞いた途端に不機嫌になる。橘は玲人のこういう素直な所を好ましいと思ってはいるが、どうしても苛めたくなって来てしまう。

「本庄がいかないと椎名さんも来ないかもしれないよ？この間の暴言で玲人株大暴落だから」

「忍って本当に見た目天使なのに中身は悪魔だよな…。くやしいからせりに暴露してやろうかな？」

「椎名さんはとっくにそんなの知ってるよ。それに黒い俺の方が付き合いやすいって言われてるから隠すつもりないよ」

「……せりって趣味悪いんだな。幼馴染でも分かって無い事って多いんだな」

「自分でも自分の事ってそんなに分かっているわけじゃないんだし、まして異性の友人の全てを把握しようとするのは無理ってもんだし、気持ち悪いよ。悪いけどそれが許されるのは、彼女に想われている場合以外は立派な犯罪になるから気をつけてね」

「お前の辛辣な助言、ありがたいけど、なんだかもう少しあったかく言えないものなわけ？たちばなくん？」

「ゴメンね♪こういう性格なもんで、これが精一杯の温情かな？立場は玲人と同じなんだから仕方ないよ。さあ、俺も本格的にやけ食

いしようかな」

「そうだったな。俺ばっかり振られた気持ちになってたけど、そもそも忍があまり落ちてないから、ついついその事実を忘れちまうんだよな」

「玲人は女々しいって椎名さんに吹き込んで、更に株を落としてやってもいいんだけど、落ち込まないのが彼女の為でしょう？玲人も今の態度じゃ椎名さんも落ち込ませるの分かってるの？しっかりしなよ！！」

「……本庄ってすごいな。お前にも靡かないのを彼女がいるのに向こうを選ぶんだから」

「本庄はすごいけど、椎名さんもまだ恋愛したく無いから無意識に相手にならない人に惹かれるんじゃないかと思うんだ。だから玲人も本気なら熟成させるつもりで地下に気持ちを寝かせておいた方がいいと思うよ。確かなことじゃないけど椎名さんも玲人の事、多分好きになると思うよ？だって俺の時には周りが面倒だって言ったのに、玲人の時は違った訳だからその時点で答えが出てると思うよ」

「そう願うしか無いか…とにかく、もう少し包容力をつけてお前みたく相手を思いやれないといけないんだな…」

「なんだよ！気持ち悪い。俺だって椎名さんに言わせれば駄目なんだから、見習っても無駄だから」

「いや、お前の俺とせりへの気遣い聞いてるとなんで、せりに振られたのか納得させられるよ。なんでお前を振っちゃうのか分かんな

いけどな。勿体ない事するよなせりも」

「タイミングが悪かったのと後はやっぱり、根本的な気持ちの問題だと思うけどね。でも、椎名さんは今でもこれからもずっと友達だし、俺のトラウマを解消してくれた恩人だからやっぱりずっと忘れられないとは思うよ。…彼女も初恋でファーストキスの相手だって言ってくれたしね♪」

「忍…、それ冗談だよな？せりから、其処まで聞いてない！！」

「残念ながら本当。シンデレラのキスシーンで掠っただけだったけど、どうせならもうちょっと感触わかる位しとけばよかったなぁ……」

「あれ、してるフリじゃ無かったのかよ？」

「まあね。でも椎名さんがよろめいたの支えてたんだけど、もともとすごく無理な体勢を強いられてたから支え切れなくてね」

「わざとじゃないのか？本当に？」

「それは無意識には願望もあったかもしれないけど、そんな事はしないよ。…唯、相手が違ったらもっと頑張ったかもしれないけどね♪」

「忍は、俺が落ち込むのを見るのが好きだってよく分かった。…俺はせりの幼馴染なだけなんだから、それは気にしない事にする。これで妬いたりしたら、もう一生せりに相手にされないと思う」

「玲人もわかってきたじゃん！！みんなでこれからは、遊びに行っ

たりしたいのに玲人の意識が変わらないんじゃ誘えないから残念かなって思ってたんだ。これからは楽しみだな?部活も二人ともレギュラーになれたし。まだ一年だからフルでは使って貰えないけど、お前と一緒にプレー出来るの楽しいんだ。同じ年の奴もいいのが揃ってるから俺達が主力の代になった時には結構上を狙えると思ってるんだよね」

「そうだな。いろんな人達の協力があって今が有るんだから、感謝しないといけないよな。親やクラスメイトや先輩達…それに仕事を沢山引きうけてくれた副委員の石原さんやせりにも感謝だな」

「玲人も多少は他の子に目が向き始めたのかな?石原さんって綺麗な子だよね?」

「そんなんじゃないけど、今は周りにいる全員に『ありがとう』って言いたい気分なんだよ」

「基本的に玲人は素直で明るいし今迄挫折無さそうだもんなぁ。これからも能天気なムードメーカーでいて欲しいな」

「はぁ〜?!そんな評価されたの初めてだ。すっごい屈辱!!特にお前に言われたくない。他の奴なら鼻で笑ってやるのに!」

「悪い意味じゃ無いよ。椎名さんもいつも言っているけど、玲人は精神が強靭で羨ましいって。俺も実はそう思ってる。サービス精神豊富なのもすごいなって思ってるよ」

「なんだよ。褒め殺しでいろいろ無かった事にする気だろう?ッ最初に話題戻ってやろうか?!」

「戻ってもいいけど時間と労力の無駄だからやめような～。褒めてるのは本心でチームとか友達うちでもムードメーカーでいて欲しいとは思ってるんだよ。これから、お互い頑張っていこうな！！椎名さんに振られた者同士、連帯感も湧いてくるってもんだろう？」

「最後の一言が余計なんだよ……」

17

「それでね、私も真綾さんの誕生日プレゼント一緒に本庄君と選びにいく事になったの」

「はぁ？それって好きな男の婚約者のプレゼント一緒に選ぶって事か？！それで、せりはいいわけ？」

「うん。何がいいか今から楽しみ。後、半日くらい本庄君と一緒に歩けるのも幸せ～。セラピストみたいなんだもん。せんせいって」

今でもせりかは本庄の事をせんせいと半ぶんかそれ以上の割合で呼ぶ事が多い。

「彼女に悪く無い訳？」

「真綾さんには許可貰ってるし、そのあと合流してお茶する事になってるから大丈夫。問題なしよ」

「あのさぁ、虚しくならないの？自分に振り向かない相手と一緒にいるの…」

「全然！！すごく楽しいし、癒されるよ。相手が本庄君だからかもしれないけど、友達で満足してるし。それに真綾さんと三人でいる時の本庄君が最高にいいんだよね。もう二人がとっても理想的な恋人像なのよ」

女って本当に分からないと玲人は思う。あまりにも普通に考えたらありえない人生観に、それぞれ人は人だと言い切れないものがあっ

たが、引き止める理由も意義も存在しない。唯、なんだかけったいだよなぁとは思う。しかし、当人が幸せだと思うなら、幸せなのだと玲人も思う。報われていなくても、こんな話を聞かされてもせりの傍にいられる現状がある事に玲人も不毛な幸福感を感じていたからだ。

「真綾さんてどういうものが好きなのかしら?今迄は何をあげてたの?」

「実は今回が初めてなんだ。何か渡すとやっぱり向こうの家にも伝わるから、婚約がはっきりしないうちは何もして来ていないんだよ。毎年激しく文句を言われるんだけど、去年までは流してきたんだ」

「婚約指輪とかは、もう少し先だよね?ペアリングとかはどうかな?」

「俺もしなくちゃいけないのは勘弁だな。あと指輪は真綾がいい気になって今から余計に我儘になられるからヤダ」

「何、その酷い言葉!真綾ちゃんが聞いたら泣くわよ」

「うん。泣くかもだけど、お嬢はしゃべらないし、俺も直接は言わないから伝わらないからいいんだ。やっぱり先が長いし、性格知ってるとやったら駄目って事あるだろう?とくに高坂とかの間には有るんじゃないの?お嬢さんも」

「……そうね。数え切れないほどのNGがあるわね。例え、愛があっても本庄君と更科さんだったらそれが無いっていう風には思えないから、指輪はNGなわけね。わかったわ」

「話が早いね。そういう関係の奴が近くに居ないと絶対に理解不能だから、言う気にもならないんだけどね」

「歴史が長いのよね。いいところばかりじゃお互い無いし、駄目なところが嫌かというとそういう訳でも無いんだけどね」

「そうそう！でもだからと言ってべた甘には成れないんだよ。普通のカップル見ると結構甘甘じゃん？ああいう時期は一生訪れないと思うね。それを許容出来るのは相手の事をよく知らないからだよ。それが過ぎたら絶対、少し倦怠期入ってるじゃん？お互い一番甘えさせ合う良い時期を持っちゃうと、そんなの今だけで、他にも友達やら、勉強やら趣味やらで、段々融通が利かなくなって、うまくいかなくなるのにって見てるとすごく思うよ」

「そっか～！だからラブラブだと思ってたら倦怠期入って、持ち直したと思ったら別れたりするのね。みんなは」

「多分ね。だから、あえてそういう隙は与えたくないんだよね」

「でも、機嫌が悪くなった時の機嫌取りとかは慣れてるから便利じゃ無い？」

「今迄はね。真綾も彼女になったら、やっぱり今迄と一緒の対応じゃ、満足しないみたいで手を焼かされてるんだ。後悔なんて最初からないけど、かなり気は使うね。お嬢見てると余計にね」

「私が玲人を振ったから？あんまり参考にならないと思うよ。本庄君の真綾さんに対する寛容さを見ていると私達とは比べる対象にならないわよ。玲人は今でこそ、唯の幼馴染になってくれたけど、付き合わないんならこの先会わないし、人生に関わらないように生活圏も移すって脅して来たのよ？なんだかその程度の存在だったのかと思ったら目の前が暗くなりそうだったわ。実際は怒りでブチ切れたけどね～」

「ははっ！それは相手が必死だっただけで、実際はそんな事出来ないよ。高坂だってお嬢と同じくらい、相手の事を大事に思ってるよ。なんていうか勢い余って口走っただけじゃないのかな。若気の至り？ってやつでその事は許してやればいいのに。実際それをそんなに気にしてる時点で、お嬢は高坂の事を随分気にしてるんだなって思うよ？高坂本人は分からないかもしれないけど、橘あたりは分かってるから案外あっさり身をひいたんじゃないのかな？」

「本庄君に言われると私も傷が疼くかもとかは全然思わないのね？」

「疼いてないんでしょう？だから思わないかな」

「ふふっ。なんだかそういうのって先生らしいね。一見結果論なんだけど、そういう事が有る程度の情報とか経験から予想ができて、ほぼ判断出来るっていうのってすごいよね」

「ああ、何だか癖みたいなものなのかな？うちって会社やってて行く行くは一応跡継ぎなんで、従業員の気持ちとか取引先の人の気持ちとか、予想が出来るように他人の気持ちにシンクロ出来る様に少し特殊な訓練をした事があるんだ。もちろんＳＦみたいなんじゃ無いよ？いろいろ想像力を働かせてその時の人の気持ちにトレースして行くんだけど、脳波計とか着けて貰ってるからその人が思ったっ

て言うのと科学の結果が裏切ってたりする時が結構多かったんだよね。そうすると時に、人間は自分をも騙せるというのが分かったら楽しくなっちゃって、其処からは独学で心理学から来る相手の動作や行動の意味とか、段々嵌まってっちゃったんだよね。結構おもしろいよ。後は他人を不快にさせたり怒らせたりしない様に出来るから結構便利かも。お嬢は随分規格外でかなり難しいけど最近は、悲しいかそうじゃないか位の区別はつく様になったよ」

「それなら真綾さんが欲しいものなんて簡単なんじゃないの?」

「うん。だから、お嬢を誘ったんだ。真綾がせりかちゃんファンなのは、何と無く感じてるでしょう?だから、お嬢さんが一緒に選んでくれたプレゼントと一緒にお茶する時間がプレゼントかな」

「なんだか、橘君のときじゃないけど、理由があまり分からなく慕われるのってどうしたらいいのか分からないわ」

「いいんだよ。気に入るのって理由があまり要らないものなんだよ。強いて言えば容姿かな?せりかちゃん可愛いって耳にタコ状態だから」

「女の子に好かれるのに容姿っていうのは、珍しいわね。私は真綾さんの容姿は綺麗だと思うけど、どちらかというと性格がさっぱりしてて、割とものをはっきり言う所が好きだけどね」

「それ聞いたら喜ぶけど、これ以上はっきりいうと相手に迷惑になるから、出来れば言わないでくれる?」

「分かったわNGな事柄な訳ね。分かり過ぎるのも便利だけど、なにがってはっきり言えないけど問題あるわよね?」

「相手の要求がわかるのに、あえて分からないフリをするのは結構骨が折れるよ。あっちも俺が察しが良いのは分かってるから余計にね」

「なるほど！それは結構苦しい先生が見れそうで楽しそうね」

「最近そのSっぽい発言、あまり躊躇無くなってきたね。クラスでも最近じゃ女王様っぽいよね？下僕達がお仕事もしてくれるし」

「あら、そんな事ないわ。下僕だなんて言わないで。親切なクラスメイトなのよ？」

「俺達もクラス委員の仕事、悪いから手伝う事にしたけど、クラスの熱狂的な椎名さんのファンが先にやってくれてて、体よく追い払われてるんだよね～。やっぱりああいうM嗜好の奴っているんだなって感心したよ。お嬢は意外とクールにお礼言うだけで素っ気ないしさ、あれってわざとでしょ？」

「先生がそう言うんならそうなんじゃないの？相手のニーズに応えるのも時には大事って事、先生にならわかるでしょう？」

「最近、橘と話する時何気に距離が近いのは気の所為じゃないよね？」

「ああ、あれは彼等が切なさそうにするのが堪らないって腹黒王子様が言って、あっちが勝手に距離詰めて来るのよ。私は流石にそれは鬼なんじゃないかって言ってるんだけど、王子様曰く、結構向こうも打ちひしがれながらも喜んでるから大丈夫っていうの。私は其処までの変態さん達とは思ってないけど、少しは近い事してるから

橘君にあまり強く言えないのよね。だって彼がしてる事って少し私に話す時半歩位近いだけなんだもの」

「やっぱりね～。二人でいると何だか黒い雰囲気漂ってたから気になってたけど、橘は思った以上に真っ黒だねぇ」

「そうね。一緒にいると面白くて飽きないわよ。あの見た目ですんごく黒い事言われると、噴き出しそうになるもの。でも、先生も分かっているとは思うけど計算され尽くされた言動だから、全部の人がある程度得になる？っていう試算らしいから、その上でのお楽しみなんで目を瞑る事にしているの」

「何だかすっかり悪友にされてるね。少し毒されてきたんじゃない？」

「王子様に言わせると私は元々、サドっ気があるから素質ばっちりで、実際腹黒いほうの橘くんのが付き合い易いから否定できないのよねぇ～。問題出る様になったらあっちに対処考えさせるわ。得意そうでしょ？頭良いんだから使わないと宝の持ち腐れよ！」

「あのさぁ、悪い事に使わないのは持ち腐れてないって言うか…もっと別の事に使ったらどうなの？」

「そうね。今、相談してるのが、生徒会を高学年になったら一緒に掌握しようかって話してるのよ。その時は、先生の特技も必要になるからメンバーにいれるけど良いわよね？もちろん真綾ちゃんも付けてあげるから」

「真綾をお菓子のおまけみたいに言わないでくれよ」

「あれはおまけが欲しくて買うからお菓子がおまけなのよ？」

「…それは話の論点ずれてるけど、俺を入れるにはいいけど、悪事に真綾は巻き込まないでくれ」

「悪事じゃないわよ。善行でもないけど、結局自分達も楽しめて周りにも益になるように考えてくれる人がいるから、結構楽しめるわよ？真綾さんの事はともかく先生は必須要員だから、クラス変わってもよろしくね」

「分かった。それで、プレゼント決まったの？さっきからこの辺何周もしてるけど」

「うん。私は鞄に付けられるダッフィーちゃんを、お揃いのにして、先生はさっきはいい気になるからやめるって言ってたけど初めてのプレゼントなら、やっぱり指輪をあげた方がいいと思うわ。あの辺に結構カジュアルで普段使い出来そうな感じのブルームーンストーンのがお勧めなんだけど、見にいかない？」

「…そうだな……今迄本当に何もしてやらなかったのを思えばそうだよな…」

結局、せりかのお勧めの指輪を購入した。青白く光る神秘的な石は男の本庄でも魅せられるものがあった。

その後、ピアノのレッスンを終えた真綾と合流して近くのケーキの美味しいお店に入った。二人でプレゼントを差し出すととても喜んでくれたが、椎名さんがくれたクマのなんとかとかいうお揃いのヌイグルミに負けたのははっきりと分かった。これで指輪以外だったら見向きもされなかっただろうと思うと椎名さんに感謝すべきか、

一緒に渡す事にしたのを後悔すべきか微妙な所である。

しかし真綾が嬉しそうにしてくれていれば、やはりそれで、正解だったのだと思ってしまう。が、最近の橘と椎名さんの悪だくみの計画は本庄も一味に強制的にさせられているらしい。恐いもの見たさは有るが、二人の賢いのをずるがしこいほうに傾けられると学校自体痛い事にならないか、本庄は半ば本気で心配になりつつあった。だれかストッパーになりそうな人材を早急に見つけねばと策を巡らせた。思い付く人間が直ぐにいないので取り敢えず自分がそれまではやるしか無いか…と思ったところで、悪魔な二人も本庄にその役目を押し付けるつもりなんじゃないかと思いあたって彼は眉を顰めた。

18

「ねえねえ、高坂君って椎名さんの幼馴染なんでしょう？超カッコいいよね！！」

サッカー部の三年生が引退してから少しずつ力を出せる場面が増えて橘と共にツートップの位置を確立しつつある玲人は離れたクラスのここまで呼び声が高くなって来た。

その所為かあまり一緒にいる訳でも無いのにこの手の話題が最近富に増えた。紹介して欲しいと言われたらどうしようかと内心冷や冷やしている。

「うん。まあね。橘くんとも親友なんだよ。ね？」

仕方が無いので隣の腹黒王子にこの場を収めて貰う事にした。

「親友なんだ～！！じゃあ、付き合ってる子がいるかどうかとか知ってるよね？」

彼女達は幼馴染よりも、やはり親友という言葉に食いついてくれた。ほっと胸を撫で下ろすがこれからは彼の裁断でどう持って行かれるか判らないので、まだ完全には安心しきれない。

「うん。付き合ってる子は居ないけど、実は、……最近椎名さんに振られたばっかりで落ちてるからあまり傷を抉んないでやって欲しいんだよね～。それからこれは皆に言わないでね。椎名さんも気まずいだろうし」

こらこら！！ナニヲ暴露ってるんじゃ！この腹黒王子は……！！

「えー椎名さんあんなカッコいい彼振っちゃったのー？勿体ない～」

「椎名さんは小さい頃から知ってるから恋愛対象に見れないんだよ。それに、……椎名さんも振られちゃったばっかりだからあんまり恋愛ごとの話題振らないであげて？結構落ち込んでるみたいで俺が慰めてるんだけど全然靡いてくれないんだよね。弱ってる時ってチャンス！！って思うじゃん？」

「えー！！橘くんって、椎名さん狙いなの？」

「弱ってる可愛い子は、みんな狙うと思うよ？最近椎名さんの周りに野郎どもが多いのは、その所為なんじゃ無いの？」

「私、周りに振られた事は話してないのに、そんな筈ないでしょ！！橘くんも周りにそんなこと触れ回らないでよ！！」

キツイ口調で咎めると聞いていた彼女達が目を丸くした。

「椎名さん、振られちゃったの本当なのね？こんなに可愛い子振るなんて何処のろくでなしな訳？信じられない！！」

「そうだよね～。椎名さんより美人なのに性格良い子なんて滅多にいないと思うけどね～」

皆口々に振られた私に同情の言葉を掛けてくれる。

「好みの問題もあると思うし、仕方が無いよ…」

言いながら、少し涙ぐむと皆が息を?んだ

「他に良い人いるから、大丈夫だよ!!あんまり落ち込まないでね。椎名さんはクラスのみんなのお姉さん的存在なんだから、いつもは相談に乗って貰ってばっかりだったけど、何時でも聞くから言ってね!!」

「有難う!!私も早く忘れられる様にしたいんだけど、なかなかね。うまく行かないもんだよね」

しみじみ言うと皆が肩を抱いて「元気出してね。力になるから」と言ってくれた。便乗して一緒に抱きつこうとした橘の事は、きぃーと怒って彼女達が止めてくれた。今の私はいたいけな羊にみえるんだろう。

皆が去って行った後、爽やかに労わる顔を見せながら「女優だね〜」と橘が感心したように小さく囁いた。

「本心だもの。いくらでも言えるわ。…唯、目に手をやって泣けってサインを送ってこられた時は焦ったわ。瞬き我慢して目が痛くなってやっと涙が出たのよ?私、めったに泣かないのに不自然じゃ無かったかしら?」

「目に涙が溜まって堪えてるって感じで、泣くっていうんじゃないからパーフェクトなんじゃないの?期待以上だよ。その後の返しも」

「玲人や私の事を暴露して、どういう風に持って行きたい訳?王子様?」

「うわっ！コワいから王子呼び止めて！！それって最上級椎名さんが怒ってる時しか出てこないじゃん？前に腹黒が付いてる時のが全然安心だよ。俺が意味の無い事しないの知ってるでしょう？あんまり怒らないでよ」

「それで、私が失った物の対価は何？」

「一つ目は玲人を紹介してって言われなくなる。これは流石に親友としては玲人が不憫すぎるし、かといって紹介を渋ると椎名さんの評判が落ちる。付き合ってる訳でも無いのに断るのは難しいと思うんだよね。そこで、本当の事言っちゃえば紹介出来ないのも向こうも納得！って後に、でも高坂振っちゃうのは反感買っちゃうから、椎名さんの振られた話をしちゃって何時に無く落ち込んでる所を見せれば女の子って同情のが勝つから、玲人の件は其処かに行っちゃうでしょう？其処に最近椎名さんの周りにいる下僕ちゃん達の事も、弱ってる羊を狙う狼とみなしてくれるから、それも椎名さんの事は好意的に見てくれるから良い事づくめでしょう？」

「相変わらずこっちが困ってそっちに振った事まで、色々多岐に渡って利用するわね」

「あの子達が一番適任そうだったから声かけてくるの待ってたんだよね～。よく練習見に来てて玲人のファンだって知ってたから」

「け、計画的だったわけ～？！何処まで黒いのよ！信じられない！待ってたってなにそれ……」

「生徒会入ろうと思ったら、今から好感度上げて置かないとね。入っちゃえばこっちのモノだけど、玲人は今、本当に注目株だから、

関係無いってはっきりさせて置かないと影響が出てくるよ。大会とかが始まったら本格的にヤバイから早めに手を打って置きたかったんだ。玲人の事で妬まれるのゴメンでしょう？」

「それで、橘くんの事で妬まれないって言える訳でも無いのに、気がある素振りは如何してなのかしら？」

「あれは、向こうも本気じゃ無いの分かってくれるよ。仮にも本気で好きな子の前で弱ってるところを狙ってるってカミングアウトする高校生がいると思う？大人なら有りな口説き方かもしれないけど、今は冗談と慰めにしか聞こえないよ」

「それもそうね。あまり本気にして行かなかったわね。ふざけて橘君が抱きつこうとしたのも止めてくれたもんね」

「そうそう。此処は、みんな馬鹿じゃ無いからホント助かるよね」

どこまで真っ黒なんだと言う発言にせりかは乾いた笑いで答えるしか無かった。

19

二年生になり、クラス変えがあった。せりかは、やはり本庄と一緒のクラスだといいなという希望はあったが、流石にそれは誰にも言えなかった。

ところが蓋をあけてみれば、本庄ばかりで無く、真綾や橘や玲人や美久や弘美まで一緒のクラスだった。少し不可解な物を感じたが、橘がせりかに説明してくれた。

「この一組は成績優秀者で構成された、進学クラスなんだよ。国立の進学率とか上がった方が学校側もいいから公立の学校でも進学クラス作るって聞いてたから、椎名さんや玲人とは同じクラスになれるだろうとは思ってたんだよね」

「そっか～。私立だけかと思ったよ。そういうアカラサマな事するのは……」

「公立は表立って言わないだけだよ。結局結構はっきりしたクラス割りしてるよ」

「でも、そのおかげで皆一緒のクラスになれたんだったら嬉しいね！」

「そうだね。俺もそう思うよ。特に二、三年はクラス変えが無いから良いクラスになって良かったよね！」

「そうなんだぁ～！！受験とかあるから何と無くそうかなって思ってたけど部活とかしていないから先輩とかと繋がり無くてそういう

話題入ってこなかったんだよね」

「俺は、兄貴がいるから、どっちかっていうと裏情報含めてそっちからの情報なんだけどね」

「そっかー。一樹(いつき)さん、この学校の卒業生だって言ってたものね」

二人で話し込んでいると何気に周りの注目を浴びていた。やはり隣の美少年はどうやっても周りの注目を集めてしまうらしい。それにしても元五組だった人数が多い事に驚く。かなり偏ってしまっているのではないだろうか？八クラスあるのに、三分の一位は元のクラスの面々が見えるのはどうなんだろうか？

「なんだかクラス変わった感じしないね。前のクラスの人多過ぎない？嬉しい事は嬉しいけど」

「うん。うちのクラスって優秀だったんだな～！ばっさり成績順のクラスらしいからね。兄貴の話によると」

「多分、橘君が試験前にみんなに勉強会して教えてくれてたでしょう？あれの成果なんじゃないのかな？」

「そうだと嬉しいけど元々、元五の奴らって基本的に出来のいい奴多かったよ。何故だかね…」

橘ははっきりは言わなかったが、学年首席の彼の入るクラスは最初から比較的優秀なクラスに成る様に組まれたクラスだったようだ。道理で何と無く出来た人間が多いと思っていた。特に女子は橘に言い寄るような子が居なかった事を思えば内申も考慮された特別なクラスだった事が覗える。

「もしかして、このクラスでも委員長になったりしないよね？」

せりかはともかく、橘は学年首席で充分可能性が有った。その橘とよく一緒にいるせりかもセットに見られるのではないかと不安になった。

「…それは、言い辛いけど多分そうなると思う。この後、生徒会もやるつもりなんだから、なって置いて損は無いから今年もよろしくね。でも、このクラスって玲人みたいに委員やってた奴ばっかりな筈だから、仕事は手伝ってくれると思うよ？元五の子達も後半は結構やってくれてたから、入学当初みたいには大変じゃないんじゃないかな？俺も一年の時より部活も融通効くからさ」

「まだ決まっても居ないのにおこがましい心配かもしれないわね…。橘君とだったら一緒にやりたいって言う子もこのクラスなら居そうだしね…静観させてもらうわ」

「ちょ、ちょっと待って！見捨てないでよ。やり辛い子と一緒じゃ精神的消耗が激しいよ。唯でさえこの視線で少しぐったりしてるのに…頼むよ、一生のお願い！」

「この貸しは高くつくからね！何て言っても一生のお願いで下手したら二年分やんなきゃならないんだから」

「椎名さんのお願いは大抵の事は聞くから！！本当に頼むよ。椎名さん以外だと面倒事にならないまでも地で話せないから気を張りそうだし」

「わかったわ。なるべく推薦してもらえるように根回ししておく。

元のクラスの子に王子に泣きつかれたって言っとくわ。橘君の性格みんな知ってるから納得してくれるんじゃないかしら」

「結構怒ってるね。椎名さんから王子呼びが出てくると結構ヒヤヒヤするよ。如実だよね。呼び方で機嫌分かるからマジで恐いよ」

「いいのよ。お願い殆んど聞いてくれるのはかなり魅力的な申し出だもの。それに親友にそれだけ必死に頼まれたら断れないわ…親友じゃなくて悪友だったかしら?」

「出来たら、分類的には親友にして欲しいかな。悪友は否定出来ないけどね。よく本庄や玲人に椎名さんを悪の道に引き摺りこむなって言われてるからな~」

「悪の道って……戦隊ヒーローものじゃ無いんだから!言い過ぎだし、二人ともずれてるわよね。玲人もまだ過保護が抜けないのかしら?そんな事橘君に言うなんて」

「本庄が言うのは気にならないんだ?」

「…意地悪な事言うのね。私がちょっと嬉しいの分かってるくせに!結局本音を言えるのは私も橘君だけみたいね。…もしかしてそれを判らせる為にわざと憎まれ口をきいたのね?」

「椎名さんが親友だって言ってくれたから、嬉しくなって調子に乗っただけ。ごめんね。嫌な事言って」

「ううん。そんな事で喜ばれると罪悪感が湧いて来そうよ?交換条件なんて無くても良いって言いたくなるけどそれは勿体ないから言わないで置くわね。……半ぶん狙ってたでしょう?橘君の事だから」

「ははっ！流石、付き合い長く成るとカンが良くなるよね～。でも言った事は本心だからね♪」

「分かってるわ。橘君は無駄に嘘は言わないものね。特に私には！って自惚れてるの」

「相棒だからね♪信頼関係は大事でしょう？」

「そうね。私も橘君の信頼を裏切らないように頑張らなくちゃ」

「これからも長い付き合いになりそうだけどよろしくね。椎名さん」

ふんわりと彼が微笑むと、その妖艶な美しさに見ていた周りがどよめいた。彼の秀麗な容姿は笑顔になると知的なものから途端に色香を放つものに変わってしまう。せっかく微笑んでくれたのに、それを指摘するのは躊躇われた。笑うなというのは酷な話だし、周りがそれに慣れてくれるのを願うばかりだった。

その後のクラスの自己紹介後の委員決めはやはり、橘が皆の推薦でやる事になり、副委員は立候補したさそうにしている女子が数人いたが、根回し通りに推薦でせりかに無事決まった。

20

二年生になった初めての土曜日、私達は近くの公園へ花見に行く事になった。

私達というのは、せりかと橘と玲人と美久と弘美と本庄と真綾だ。今年は春が遅く桜の開花が例年より遅くなった為、実現出来た花見だった。

お弁当は女性陣で鶏のから揚げやらおにぎりやお稲荷さんに玉子焼きといった簡単な物を朝からせりかの家に集合して作った。皆、結構料理は得意の様で真綾が揚げを煮ながら、酢飯を桶で酢をきっているのをみた時は、こういう庶民の物も作れるのかと当たり前だが少し感心した。美久達も普通のレベルの料理は楽勝の様で、一組に入れた事自体成績がいいのは周知の事実だが、それ以外でも常識的であった事は友として嬉しかった。

男性陣は飲み物とコンビニでおでんやお菓子を買ってきてくれる事になっている。料理の準備が出来たら皆で玲人を迎えに行ってから、お目当ての近所の桜の綺麗な公園に行く予定だった。

最初に花見を提案したのはせりかだった。理由はかなり邪ではあるが、一年前に桜が散ってしまった後だったが、桜の散るなかを歩く橘を見たかったと思った事を思い出したからだった。それにあまり変わり映えしないながらも新しいクラスの親睦会を兼ねようと橘に持ちかけた。この計画は橘無しでは、華（はな）が無い！と少なくともせりかは思っていた為、真っ先に約束を取り付けた。

「他には、誰が来るの？」

「まだ誘ってないんだけど、クラスのみんなに声掛ける？それとも玲人とか美久とか弘美とか近い人だけにする？」

「桜は今週がギリギリだろうから、あまり誘う範囲を広げ過ぎない方がいいんじゃないかな？クラスの連中もまだ其処まで馴染んでないのには楽しい集まりにならないだろうし、かといって元五の奴らだけ声掛けたんじゃ気分悪いだろうから、近い人だけにしておかない？」

「そうね。確かにそうだわね」

橘と話していると些細な事の様に見えて結構、大事（だいじ）な気遣いに気付かされて感心してしまう。貴方をお華だと思ったセクハラオヤジの様な私を許して！と心の中だけで謝るが、橘に最初に声を掛けたのは偶然にも正解だった。

そうして声を掛けたのが玲人と美久と弘美だったのだが、橘と場所の相談をしていると本庄から自分達も花見に参加させて欲しいと言って来たのでこのメンバーになった。

公園に行くと何組かもういて、朝イチから花見をしている奥様連中が、片付けをしている所だった。

「「こんにちは」」

顔見知りのせりかと玲人が声を掛けると青いシートがひかれたその場所を譲ってくれた。二人でお礼を言うと近所のおばさま方は笑ってもう終わりだったから丁度良かったと言い、一番良い場所をラッキーにもゲットしてしまった。シートはそのままにして置いてと頼

まれた。夕方から来る夜桜の方々が使う約束らしい。本当に私達は中継ぎとして丁度いい存在の様だった。

「「「「「「「「カンパーイ」」」」」」」」皆で透明なプラスチックのコップでコーラで乾杯をすると玲人たちは女性陣が作った料理を食べ始めた。

「結構みんなうまいじゃん!!意外〜!」

「高坂君、それは失礼じゃない?料理くらい一般常識の範囲じゃないかと思うけど?」

意外と気の強い真綾が反論する。対照的に弘美は褒められて少し嬉しそうに、はにかんだ。

「いや〜、せりが出来るのは知ってたけど、後、斎賀さんとかは出来そうだけど、美久と更科さんは怪しいかなって思ってたよ」

「酷—い!!高坂君、私まで〜?」

「ほら、美久だって更科さんは駄目だと思ってたんだろう?」

「う、……そんな事も無いけど、手とかめっちゃ綺麗だし、箸より重いモノ持たない感じなんだもの」

「でも真綾さんは手際もいいし、とても上手なんで正直私も驚いたわ」

せりかが何気に美久のうっかりな正直発言をフォローするように言うと、皆も頷いて真綾の料理の腕を褒めた。

皆に褒められると、それまで不機嫌だったのは何処へやらで、すっかり照れてしまい頬を赤くして、もじもじとして、そんなことない、みんなの方が上手だとぼそぼそと言った。そんな様子が玲人に喰って掛かった真綾とギャップがあってとっても可愛い。せりかは初めて、ギャップ萌えという言葉の意味を理解した。

「こらこら、また良からぬ事を考えてるでしょう？」

隣にいた橘にせりかの思考が透けて見えてしまったようでこそっと注意をされた。

「思うだけならいいじゃない。それに口に出せる事じゃないんだし！」

「その、口に出せないような事を考えてるのが分かっちゃうから、放っておけないの！今は俺か本庄くらいにしかバレないけど椎名さんは意外と分かり易いから少し注意した方がいいよ」

「わかったわ。少しだけ意識して顔に出さないようにするわ」

二人でこそこそ話していると皆の視線が二人に来ている事に気がついて乾いた愛想笑いをしてしまう。

「二人で今度は何の相談してるわけ？今回の花見みたいに良い事なら別にかまわないけど……ね」

本庄が言うのに皆も頷く。悪い事をした覚えは無いのだが、皆から

言わせると自覚が無いだけで、プチ悪魔な所業らしい。小悪魔？と尋ねると色気が無いからそれは違うらしい。なんて失礼なんだ！！この悪友どもめ！！と心の中で毒を吐くと橘と本庄だけが微かに、溜め息を洩らした。やっぱりあの二人だけが、妙にカンがいいだけじゃないのか？という気がしてくる。

「二人って何だかいっつもじゃれてて兄弟みたいよね～」

美久に言われても兄弟が居ないので、どの辺りまでが兄弟みたいなのかは、玲人とぐらいしか比較出来ないが、この一年は橘といる方がずっと長かったし、美久もそれを見ていたからこその言葉だが、玲人は少し面白く無さそうだった。今迄の自分のポジションを取られたようで寂しいのだろう。

「じゃれてるっていうより、橘くんにいいように遊ばれてるか、便利に使われてるって気しかしないけどね～。そのかわりに駄目なところをフォローしてくれるから頭があがらないのよね」

「そんな事ないよ。椎名さんの言う事はなんでも聞くってこの間約束したばかりじゃん？」

嫌な事をみんなの前で言ってくるのは、計算の内だろうが、それって如何いう経緯でそうなったかを話して欲しかった。がくんと項垂れると本庄から同情の目を向けられたが、皆は興味深々にその言葉に食いついた。

「橘くんになんでも？ってせりかすごいわね…」

美久や弘美が感心したように言うが、委員決めの時に本当の事を二人にくらい話して置けばこんなに驚かれなかったのに！と後悔して

しまいそうだ。

真綾がせりかに更に追い討ち情報をくれた。

「噂で聞いたんだけどせりかさんの女王様キャラ?!でいいのかな?一年生の子にも話題になってて、踏まれたい?とか言われてるわよ。習い事の知り合いの子が一年にいて教えてくれたんだけど」

全体に聞き捨て成らない内容だった。

橘も本庄もこの内容には流石に驚いたようだった。

「真綾、そんな話、聞いてないけど?それにまだ新入生だって入学して何日かしか経ってないのに冗談でも踏まれたいってそれはちょっと無いんじゃないのか?」

「そうだよ。内情ともかく、椎名さんは上品で聡明そうに見えるし、女王さまには見えないんじゃないのかな?」

た・ち・ば・な・君、本音が駄々漏れなんですけど!!……。しかし、腹は立つが、彼にしては珍しい!と思う方が先に立つ。

「聞いた話では、橘くんがやっぱりすごく人目を惹いちゃうでしょう?それで最初は橘君の話題が大半だったらしいのよ。…それでいつも一緒にいる人は彼女なのか?って話になってって、でも二人って傍からみてもそういう感じが皆無っていうか、むしろ椎名さんにいつも橘くんが窘(たしな)められているように見えるらしくて…」

「えー!!反対だよ。今だってこそこそと注意を受けてたのは私の方なんだよ」

「そうなのよね。事実はそうなんだろうけど、橘君は私達の前でさえ、こそこそとして、尻尾を見せないから、普段は余計にせりかさんが言ってるのだけが目に映るみたいなのよ。特に遠い人達は」

「ひどーい！これも何かの橘君の計算の内なわけ～？もう絶対橘くんと一緒に歩かないからね！！」

「違うよ！悪かったよ。そんな風に見られるなんて思わなくて…だって長い付き合いならともかく、椎名さんがそんな風に絶対見えないと思ってたし」

「成程ね！今みたいな会話の状態だけを見た奴らが、橘を振り回すように見える訳か…」

「そうなのよ。まして橘君って見た目完璧王子様でしょう？その上首席で、サッカー部のレギュラーだから、非の打ち処の無いところに女王様に怒られて、焦ってなだめようとする姿がツボっていうか可愛くてきゃーってなるらしいのね。それで怒るせりかさんは、あの王子様が崇める存在だから女王様って訳。普段見てると、わざとちょっとせりかさんのこと怒らせてその後、機嫌取るじゃない？私から見れば橘君の遊びに無理やり付き合わされてる様に見えるんだけど、一年生からはそう見えないみたい。後、何気に高坂君に結構冷たいのも影響しているみたいなのよ」

「それって、…でも私だって流石に橘君の横にいる時に玲人に来られたらどう見られるか恐いもの。そんな、超嫌な女に見られたく無いから、遠慮のない玲人には悪いけどはっきり向こう行って！もしくは私が何処か行くから二人で話してってクラス変わってから言ってたけど冷たくはしてないわよ？ねぇ？」

「……まあな。最初はすこーし傷付いたけど最近はせりの言い分も分かるし、今迄同じクラスで今も同じクラス委員同士の忍といる方が自然だって分かってるから」

「その、分かって無い時に見た子達がサッカー部のエースですっごく人気のある高坂君を足蹴にしてるの目撃しちゃったのよ。クラスでは気を付けてたかもしれないけど外とかだと『近寄らないで』位の事言ってたでしょう？」

「ああ、軽く暴力もあったな」

玲人が遠い目をしながらいうが数日前の話だと思う。中々、理解してくれない玲人に苛立ってデコピンをして怒って教室に先に走って戻ってしまった事があった。あれを見られていたのか…。取り敢えず自分の学年以外は知らない人だし、油断していた事は確かだ。

「それを見てた子達が、橘君を従えて高坂君にも靡かないせりかさんの事を女の子達の一部が『お姉さま凛々しい』みたいになっちゃって、勘違いした男子は『踏まれたい』になったという訳」

「こわーい！！寒気がしてきた。玲人の所為？橘君の所為？どっちだと思う？」

「玲人の所為なんじゃ無いの？最初から空気読めよ！お前が来たら目立って椎名さんに迷惑がかかる位最初から分かるだろうに」

「忍の所為も有るだろう？いくら面白いからってせりで遊ぶなよ！」

「二人とも充分悪いから喧嘩するなよ。特に橘が悪いけどな。お前

が事態の収拾考えて、お嬢の女王様説どうにかしてやれよ」

「判った。椎名さん本当にゴメン！何とか打開策考えるから勘弁して」

「せり、俺も悪かった。おれも協力するから、許してくれ」

せりかに必死に頭を下げる二人を見ていたら、『事実なんだから仕方なく無い？』って言う気持ちになって来た。そこにいた人間はともかくせりか本人でさえそう感じたのだからやっぱり悪いのはせりかなのだろうと思う。

「二人ともういいよ。結局私も悪いから仕方無いよ。今の時点では二人を弄(もてあそ)んでるみたいなすごく悪い噂じゃないみたいだから、これから気を付けていけばいい事だから頭上げて？」

二人は、飼い主から許しをもらった忠犬の様に目を輝かせてせりかを見た。皆もせりかは優しいし、許すのも心がかなり広いと思う。しかし、その様子はやはりせりかを女王様の様にみせるに充分な光景だった。真綾だけは最後まで『せりかさん優しいから甘過ぎなのよ！』と言っていたが……。

不意に風が吹いて花弁が舞った。せりかはにんまりとして橘に写メ撮ってもいい？と聞いてみた。

「何で俺の写メなんて欲しい訳？」

「それは、一年前からの念願だったのよ。桜舞う中の橘君の姿を見たかったのよ。嫌なのは分かるけど、この間の委員の引換の言葉忘れて無いわよね？」

「…分かった。気が済むまで撮っていいよ。でも分かってると思うけど他の人には見せたり送ったりしないよね？」

「それは勿論！相方の嫌がる事は、分かってるから最初はそんな事はしないつもりだったんだけど、ここであの権利を行使しないと使い所が無さそうじゃない？」

そう言ってせりかは花が舞うたびに何枚か写真を撮った。最後はムービーで撮っていたら、流石にムクれた顔で、もうお終いと手をせりかの方に向けた。少しバカップルみたいな様子に、『なんであの二人は付き合って無いの？』と真綾が呟くが、少し困った顔の本庄が窘(たしな)めるように『人それぞれ色々なんだよ』と言った。美久や弘美は「桜舞う～」のフレーズを一年前に何回か聞いていたので、せりかに良かったね！と初恋の微かな成就を良かったと思ったが、本庄の事も聞いているので少し切ない気持ちになった。桜の下にいると日本人は感傷的になりやすいと見ていた玲人も皆の表情を見ながら思った。

初恋の思い出の欠片を手にしたせりかは、少しの橘への罪悪感と沢山の満足感で一杯だった。今日の花見を一番堪能したのは、間違い無くせりかだった。撮った写真は絵画のように美しい。少しだけ気持ちが一年前の様に橘に向かっていたら良かったのにと写真を見ながら思った。

21

「せりかちゃん、最近男子に『せりりん』って呼ばれてるわよ。何かのアニメキャラらしいんだけど名前と見た目が似てるらしいの」

石原沙耶が、親切に知らせてくれた。この子は一年の時の一組の副委員長だった子で玲人の元、相方だったので、委員の仕事を玲人が部活にどうしても行かなくてはいけない時など融通して助け合ってきた。逆の場合もこちらも手伝ってもらっていた。今は、純粋にクラス委員の私の手伝いをしてくれている。前もあったが、最初はやはり忙しい。彼女もそれを知っているので当たり前の様に手を貸してくれる。橘が部活より此方の仕事を優先しようとしたのを、沙耶と二人で追い払う様に部活に行かせた。一年の時の様に気まずさは無くとも、彼はレギュラーなのだから行かなくては多少の弊害は出て来てしまうだろうと思う。

「なんだか、玲人にデコピンしたのを見られた所為で一年生からは『女王様』って言われてるらしいから『せりりん？』くらいはどうって事ないわ。愛称で許される範囲じゃない？」

「ああ、……玲人君ちょっとしつこかったものね。せりかちゃんが困るの分かっても納得するまで少し子供っぽいしがみつき方だったもの。怒っても仕方が無いわ」

「玲人は基本的に人目が気にならない羨ましい性格だから、根本的には理解できないのよ。今も私が気にし過ぎって思ってる節もあるんだもの」

「私も玲人君と一緒にいると結構やっかまれたから、せりかちゃん

の気持ちはわかるわ。彼って全然気が付かないんだもの。自分以外の事にあまり目が行かない方みたいね」

「そうなのよ。ごめんね！沙耶ちゃんにもやっぱり玲人の奴、迷惑掛けてたのね。うちに帰ったらとっちめておくから！！」

「ううん！玲人君は悪気は無いんだし、無邪気で一緒にいて楽しいから、そんな事言わないでおいてね。二年になったらせりかちゃんと一緒になったから、そういう事も無くなったしね。玲人君最近すごい人気があるから、ちょっとどうしようかなって思ってたから助かったわ。流石に謂われの無い嫉妬は恐いものね」

「そうだよね。みんな一回でも私達の立場になったら、羨ましいなんて絶対言えないと思うわ！橘君と一緒に委員の仕事も泣き付かれなかったら絶対引き受けてなんか無いのに…」

「あの橘君が、泣き付く所、見たかったわ♪想像できないもの。出来過ぎ君って心の中で思ってたのよ。実は…」

「私も思ってた～！！最近はそういう所も見えるから、安心するけど、最初半年くらいは近寄りがたい感じだったもの」

「そんなに長かったの～？今の仲の良さからは、考えられないわね！」

「うん。見た目が気にならなくなる迄に結構かかったかなぁ？あのフェロモン駄々漏れで近距離で微笑まれると普通、固まるわよ！それは玲人じゃないけど其処だけは彼も自覚薄いから、なんて言っていいか分からないんだよね。彼の場合は結構注目浴びるのは、気になるみたいだし、一緒にいる私の事も気遣って対処してくれるから

玲人とは比べようも無いけどね」

「せりかちゃんって玲人君に厳しいわよね～。少し気の毒かも。あっちはあんなに懐いてるのに…」

「そんなこといったって同学年高校生男子に懐かれても可愛いなんて全然思えないし！ちょっとは、クラスが遠くなってお互い少し距離が出来たと思ってたのに、また同じクラスじゃない？私は玲人のお姉さんでも妹でも無いんだからある程度の距離を保って欲しいのよね。どうも未だに奴は幼稚園児の時の感覚と一緒な感じなのよ。橘君の存在に今は助けられてるけどね。彼は玲人の調教も上手いから」

「せりかちゃん、やっぱりひどーい！」

そう言って沙耶と二人で笑った。玲人に酷い目に遭わされてる被害者同盟だからこその愚痴のいえる相手だった。本当に有り難い。おまけに仕事もこうして手伝ってくれるのだから本当にいい子と巡り合えたと感謝してしまう。

「あっ居た居た！！せりりんと石原さんお疲れ様！」

「本庄君、せりりんってやめて？何かのアニメキャラなんでしょう？」

「なんだかずっと椎名さんって呼ぶのも寂しいかと思ってたから、可愛いし、いいかなって思ったんだけど？」

ずっとお嬢とか、お嬢さんとか呼んでいた本庄だが、クラスが変わ

った途端にそういう風に人前では、めったに呼ばなくなった。せりかも本庄を先生と呼ぶ事を止めていたので、お互い変に偏見を持たれないように相手を慮っての事だったが、せりりんの定着は嫌だと思う。一部の男子が裏で言ってる分には、そのアニメが終われば多分消えて行くだろうと思う。

「却下します」

「そっか～残念！他検討するから、また考えておいてね。飲み物の差し入れ持って来たんだ～。橘からメールで頼まれたから仕事も手伝える事あったら言って？」

まだ結構涼しい為か温かい紅茶がレモンとミルクとストレートの三種類用意されていた。沙耶に先に選ばせてミルクを取ったのでせりかはレモンを貰った。本庄がストレートの紅茶を空けて飲みだしたので、温かいうちに二人も頂く事にした。

「橘が、石原さんも本当に有難うって言ってくれって言ってたから」

「ううん。委員の仕事って言っても本当はみんなでやっても良い様な事なんだもの。それにせりかちゃんとは、一年の時から一緒にやってたから仕事がしやすいのよ」

「沙耶ちゃんが同じクラスで助かったよ。そうじゃないと橘君、私に罪悪感持ってるから部活に行かないもん絶対！他の子が手伝ってくれても多分譲らなかったと思う。沙耶ちゃんは慣れてるから安心感と後、…少し甘えられたんだと思うよ」

「メールも石原さんと一緒だから大丈夫だろうけど、一応行けたら行ってっていう内容だったから、そうなんだろうな、多分」

「橘君ってやっぱり出来過ぎ君だと思うわ。なんだか完璧よね。気遣いが……」

「そうかもね～。でも、それも彼の美点だからね～」

「そう、そう。橘もずっと一緒にいると結構普通の所のが多いよ。いい所は、長所だと思うぐらいの感じであまり特別視しないでやってよ」

「本庄君は友達想いなのね。少し冷めた感じのイメージあったから意外だわ」

「そうなんだよね。私も頼りにしてるんだけど、沙耶ちゃんも困った事があったら本庄君が一番頼りになるから覚えておくと便利だよ」

「おいおい、その便利屋さん発言はどうな訳？お嬢さん？」

っ！今多分、うっかりお嬢さんって言われたけど、結局彼の中では私の呼び名はそれでせりりんにはならないんだろうなぁと思う。私もその内には多分、せんせいと呼んでしまうだろう。なんといっても人生の師匠である。最初はワルツのだったけど。

「でも何かあれば、出来る限りは力になるから言ってね？」

沙耶に優しくそう言うと沙耶の顔がほんのり赤くなった。先生、罪つくりな事しないでよね！真綾さんの事はみんなには言って無いんだから！！

軽く睨むと目だけで『ごめん』と言ってきた。せりかがお仕事を頼

むと本庄は手早く残っていた分を終わらせて職員室に運んでくれると言って、私達は早めに帰る事になった。

「せりかちゃん、さっき気付いたんだけど、もしかして本庄君の事が好きなの？」

沙耶も結構鋭いのか、私が分かりやすいのか、バレてしまったらしい。何かそれらしい事をしてしまったかなぁと思うが分からない。女のカンって奴かな？

「実はもうとっくに振られてるから黙ってて欲しいんだよね。今はもう友達だし」

「ごめん！！そーだったんだぁ！道理で、橘君や玲人くんに靡かないと思った。せりかちゃんってやっぱり趣味がいいわね。私もうっかりヨロめきそうだったわ。彼氏いるのに」

「沙耶ちゃんって彼氏いたの？知らなかった～！！どんな人か聞いてもいい？」

「うん。今は違う学校なんだけど、中学からの付き合いでサッカーしてるのよ。だから玲人くんや橘君の事、放って置けないのかもしれないわね」

「何処が良くてお付き合いしたの？」

「うーんと一番は優しい所だけど、全体的に此処がいいっていうんじゃなくて気が合う所かな？」

「そっかー！いいなぁ。わたしにも早く良い人が出来ないかなぁ」

「せりかちゃんって残念な感じよね…」

美久にも言われた事を沙耶にも言われた。なんだか私ってそんなに残念なのかなぁ？

少し落ち込んでいると慌てて沙耶がフォローしてくれた。

「周りに良い人い過ぎて目が肥えてくるから感覚マヒしちゃうわよね。そういう意味で残念って意味だから、ごめんね」

そうは言ってくれたが、遠慮の無い美久が言った意味と多分近いのだろうとは思う。沙耶は可愛いし性格も申し分無いくらい良いし、彼氏がいても全然当たり前なのだが、なんだか想い想われる関係の人がいる事をとても羨ましく思ってしまった。

22（前書き）

玲人から見たせりかを取り巻く状況です。

22

最近、せりの様子がどことなくおかしい。
学校では、相変わらず寄るなオーラが出ていて話す事もあまり出来ないが、家での勉強会は今でも続いているし、普通に話す。学校もクラスが同じになれた為、今迄よりも共通の話題も増えたし、教科も同じだから予習、復習も一緒にやりやすくなった。
毎日顔を合わすと『学校では、ごめんね』と謝られるが、俺はどうやらかなり鈍感で、石原沙耶にも要らぬ迷惑を掛けていた様なので、せりかには俺が把握する十倍くらいは今迄迷惑を掛けていたんだろうと思って今は極力気を使っているつもりだ。

ただ、始めは、忍と一緒にいるのは良くて、俺と一緒なのは駄目なのだというせりかの言う事がどうしても納得出来なくて、大分困らせてしまいデコピンをくらった。
せりかは、普段滅多に俺に対して暴力など軽い戯れの様な事もしないから、よっぽど焦れて怒っていたのだと思う。

その事が改善されてからは、前の様に一緒の時間を過ごしてきた。
おかしいと思うのは、冷たくなったとか素っ気ないとかでは無く、逆なのだ。
前よりも明らかに優しくなった。せりに振られたのは何カ月も前の事で、その直後に不自然な気遣いをされたなら納得もいくが、その時期は俺の暴言が尾を引いていて無視されない迄もかなり態度は冷たかった。
多分家族愛にも近い感情が俺にあったせりは、かなり俺に失望した様だった。今思えば、それも仕方の無い事だったと思う。忍にせりを取られてしまうと焦った俺は、家族だったら絶対に口にしない様な決別の言葉を言ってしまった。

その時言った言葉は全てが本気では無かったと落ち着けば思うが、反対に言われたらと考えるとかなり酷な言葉だったと反省している。その反省を受け入れてくれたせりと今迄通りになれた事は彼女の寛大さと恋情では無くとも、別の情が大きく存在していたからだというのは分かる。

俺だって恋愛感情以外の親愛の気持ちが彼女にある。

今は、たとえ俺以外の男と幸せになったとしても、それは祝福しなければならないし、そう出来ないなら今、こうして傍にいる資格も無いと思う。

本庄の前にいるせりは、俺の知っている彼女よりも子供っぽいと思う。

よっぽど相手を信頼しているのだと同じクラスになって思い知らされた。

しかし本庄には更科さんという絶対的な存在がいて、せりもそれは分かっている事だが、最近は少し辛そうにみえる。相手に嫉妬などはして居ないが、ただ、少し哀しそうな表情を見せる時がある。

それを見ると矛盾しているが、本庄にせりを笑顔にしてやって欲しいと思う。

実際、本庄は気持ちに応える事は出来ないものの、彼女の力になってくれるいい友人だ。

報われなくても想う幸せがあるとしたら、こういう形だろうと思える程に本庄の友情は揺るぎが無い。時々、残酷だと思える程に常にせりの味方で彼女の視点からの考え方で動く。

ある意味で更科さんには無い感情がせりかにある事は確かだろう。

せりの報われている片思いは、自分のいまの状況とかなり近いから見ていて辛くなるのだろうと思う。

多分、せりかの辛さよりも幸せなのが大きい事が分かるから自分が余計に辛い。

それは自分にも当てはまる事だからだ。
好きな相手が、自分の事を心底思いやってくれる事はある種の媚薬だ。
それ自体に陶酔感を伴う甘美な毒だ。かといって毒だと知っていてもそれを手放す事は出来ない。
女々しいと自分でも思う。
忍や本庄は、せりの気持ちはなんだかんだ言っても最後は俺に落ちてくると思っている節がある。
その根拠は分からないが、俺にはそうは思えない。
何故なら最近のせりの優しさには、罪悪感が含まれているからだ。
急に俺に対して悪いと思い始めている事自体に、悪い予感しかしてこない。
しかし、せりに報われる恋が訪れたなら、それは喜ぶべきことなんだろう。
恋愛に消極的だから本庄のように相手がいて無理な奴を好きになってしまうんだろうと忍が振られた時に言っていたが、それは、ずっと俺がせりに告白出来なかった遠因でもあるから、そうなのだろうとは思う。
彼女も本庄に片思いするうちに少しづつ恋愛面での情緒が育ってきているのかもしれない。
もしかすると本庄がそう誘導している様な気がして来る。
本庄は底が知れない奴で何を思っているのか分からないが、その全てがせりかの為を思っての行動なのは間違いない。

更科さんには流石に皆もせりの気持ちを悟られないようにしているが、彼女は、彼氏があんなにせりかに気持ちを傾けていても何とも思わないのかが不思議だったが、同じクラスになって彼女がかなり浮世離れている変わったお嬢様なのがわかって少し納得した。
しかも彼女自身がせりかのファンというかフリークなのだから嫉妬になるのは本庄とばかり仲良くてずるい！といったずれた嫉妬を本

気でしているようで、本庄も真綾の為にこの間の花見の様にせりかと一緒に遊ぶ時間をつくってあげている。
そうすると何だかせりが可哀想になるが本人自体、本庄と真綾の存在を好ましく思っているのだから、可哀想だと思うのは此方の勝手な解釈でしかないのは玲人にもわかっている。

しかし、最近同じクラスになって全員との関係も深くなって来て、今迄、もちろん全てを聞いていた訳では無かったので、現実を目の当たりにすると少なからずこの状況に衝撃を受けたのは事実だった。

そうしているうちにせりの違和感がある優しさが、玲人に重く圧し掛かる。

二年生になってからの玲人はとても憂鬱だったが、サッカー部ではレギュラーを不動のものとしているし、周りは華やかな女子に囲まれる玲人を羨望の眼差しで見ているのが分かる。此処で不機嫌な態度など取れない玲人は周りに合わせるように努めて負の感情を押さえて明るくいられる様にしているが、心の中は何かに縋りたいくらいに弱って行った。

22（後書き）

玲人もせりかちゃんの幸せを祈っているのですが…。
お気に入り登録をして下さった方、有難うございます♪読んで下さっている方が居ると思うと励みになります。取敢えず更新頑張ります。

23（前書き）

シリアスモードです。

23

玲人の様子がおかしい事に橘は気付いていた。元気に部活に励む姿だけ見ていればそんなには変わらない。

しかし今日のクラスでの玲人はかなり虚ろだった。昨日も少しは感じていたが、今日は見逃せるレベルを超えていた。

親友といっても男同士そんなにべったりした関係では無い。二人とも振られてしまったけれどせりかを巡ってのライバル関係でもあった。しかし仲の良い幼馴染の二人に自分が割り込むような形になった事を玲人だけには申し訳なく思う気持ちも橘の中にはあった。

あまり立ち入るべきで無い事は百も承知だが、放っておけるのも友達として限界のところまで来ている。元来楽天的な性格の玲人が此処まで悩むのはせりかの事以外にありえない。何があったのかせりかに聞いてみたいが、それは玲人の傷口を広げる様に思えたので、先ずは玲人本人に直接聞くのが一番近道だと考えて今日の帰りに話を聞く事に決めた。勿論、玲人が何も話してくれない場合はそれ以上踏み込まれたくないのだから、静観するしかないのだが…。

「あのさー最近、玲人珍しくちょっと落ちてるじゃん？どうかしたの？椎名さんと喧嘩とかあった？」

遠慮がちに重くならないように軽い口調で切り出した。

玲人は軽く目を瞠ったが「流石だな」と言って軽く苦笑した。

「やっぱり何か悩んでるんだ？良ければ相談に乗るけど……話したくなければ勿論いいんだけど…」

「いや、有難う。俺も最近、少しシンドクなって来てたから、ここらで忍に聞いてもらった方がいいかもしれない……実は、最近、せりが妙に優しいのが気になって…」

「はぁ～？！惚気（のろけ）てんの？俺の傷口に塩塗らないでくれる？」

「違うんだ。嬉しくて浮かれてるとかじゃ無いんだ。うまく伝わらないかもしれないけど、優しいのは罪悪感からの裏返しに思えてくるんだ…」

「罪悪感って、クラスであまり近寄らせない事？それは俺も原因の一部だから悪いとは思ってるけど…その他にも何か有る訳？」

「それは、俺が今迄無神経過ぎたくらいだから少しっていうか大分寂しいけど、それだけが原因で優しいわけじゃない気がするんだ」

「…玲人は何か思い当たる事がある訳？」

「多分、好きな奴でも出来たんじゃないかと思うんだ……」

「それは…椎名さんは、まだ本庄の事好きだろう？それは、玲人も分かってる事じゃないの？本庄とどうこうなるって事は無いだろうし…まあ、普通の友達以上に本庄も椎名さんには甘いから誤解も、もしかしたらするかもしれないけど……」

「違う。本庄以外で気になる奴が出来て、俺に罪悪感を感じてるん

じゃないかと俺は思ってる」

「本庄以外って、椎名さんは今でも確実に本庄の事が好きだよ。この間だって委員の仕事手伝って貰って嬉しそうにしてたし、それにそれ以外ってなると、普段は結構俺といるし、家に帰っても玲人と勉強で、塾とか行き出したりしてないでしょう?そうすると出会いが無いと思うよ。俺の把握範囲だとね」

「そうなると、忍の事がやっぱり好きなんじゃないかと思う」

「……何言ってるの?俺はもう振られてるんだよ?結構きっぱり断られたし!今はふっ切って友達なのに玲人も妙な事言い出すね。大体椎名さんがそう言ったわけじゃないよね?何を根拠にそういう考えに到った訳?」

「…消去法……」

「…あのさぁ、俺は結構玲人の事を本気で心配してる訳!それでその結論じゃ、なんだか、もう力が抜けて来たわ…」

「ごめん。理不尽な事を言ってるし、お前に対してもこんな憶測で無神経だって分かってるんだけど、俺、せりの事になると頭に血が昇っちゃって訳分からなくなって、自分でも堂々巡りになってる」

「玲人はさぁー、ずっと椎名さんしか見てないのが良く無いと思うんだよ…前にも言ったけど、思い詰め方が結構キツイから両方ともが辛くなるよ。…椎名さん以外で一番良いと思う人と付き合ってみるっていう考えにならない?一緒にいれば情が湧くっていったら年寄り臭いって言われるかもしれないけど…そういう風に無理にでもどうにか気持ちを他に向けた方が良いんじゃないかな?…でも、相

手は慎重に選んでね。恨まれると結構女の人って恐いから！これは俺の実体験のマジな話だから。それだけは気を付けて後は、誠実に付き合えば玲人だったらうまく行くと思うよ。俺とは違うもん」

「何が違うか分からないけど、忍だって、せりに振られてから他の子と付き合って無いじゃないか！それで俺だけに勧められても納得出来ない」

「俺はさ、中学の時、結構年上のお姉さん達といいかげんな付き合い方をしてたら、ストーカーされて刺されそうになったんだ」

「……忍が？信じられないけど」

「それで、ちょっと女の人が恐くなって、まだ少し引き摺ってるから、椎名さんを忘れて無理やりっていうのお前に勧めといてなんだけど俺にはまだ時期が早いと思ってる。玲人はそういうんじゃ無いし、明るいから付き合っても相手の子も楽しくさせられるだろうし、自分も一緒に楽しくなれるトコあるだろう？そう考えると俺には無理だけど玲人はそうした方がいいんじゃないかと思ってるけど、押し付けられる意見でもないから聞き流してくれていいんだけど…解決法として思い付くのはその辺しか無いんだ……ゴメン」

「いや、真剣に俺の為に言ってくれてるのは分かった。出来るかどうかは別だけど、忍の言った事考えてみるよ」

「最近、玲人があまりにも虚ろだったから、心配になってさ…切り替えが出来る方法があれば、良いんだけど…部活とかに力入れるとかでもアリなんだけど、今でも充分に力入ってるから、気分的な逃げ道に成らないみたいだから、ここのところどうするのが良いか考えてたんだ。聞く前から椎名さん絡みなのは予想が付いてたから」

「そっか…。心配掛けたんだな、悪い！変な事も言ったし・・・」

「椎名さんが俺をっていう話？玲人が落ち込んでるの如何にかして浮上してくれれば気にしないから」

「わかった。ありがとう」

今迄、目を逸らして来たが、橘と話してみて玲人は根本的にせりかへの気持ちを諦める方法を見つけなくてはいけないのだと改めて認識させられ、自分が岐路に立たされている事をひしひしと感じた。どこの道を歩くのかは、まだ未知の領域だが、その道の選択肢に忍の言った事もあるのは確かだろうというのは判った。

24

せりかは昨日見たドラマの話を本庄としていた。

「あれ、出演の人が変わってからの方がぐっと良くなったよね～」

「そうだね。俺も最近の方がすきかなぁ。前のから面白かったけど…」

「でも、あれって絶対脚本書く人が何人もいると思うんだよね。すっごく話が好みの時とそうじゃない時の差が激しい感じなんだもん」

「ああいうのって、そういうもんなんじゃないの？同じ雰囲気だと見てる方も飽きちゃうでしょう？」

「まあ、そうなのかもね。いちいち確認してみるわけじゃないし、例え好みの人のじゃなくても見ちゃうもんね」

「今、映画もやってるでしょう？見に行った？」

「ううん。まだ行って無い。玲人と今度の休みでも行こうかって言ってるけど…」

「それに付いていったら迷惑かなぁ？真綾から連れてけって言われてるんだ」

「でも、そっちはデートでしょう？二人の方が良いんじゃないの？」

「それは、そちらと一緒で別に今迄も出掛けてたりしてたから特別

に珍しい事でも無いんだよ」

「そう。いいわよ。玲人に一応聞いて見るけど嫌だって言わないと思うわ」

「そうだね。高坂は大らかだもんね」

「相変わらず人間観察に余念がないわね。本庄君は」

「半ぶん趣味だからね。一緒に行けるとなったら真綾が喜ぶよ」

「そうね。私も玲人と二人より楽しいかもしれないわね。場所とかは決まってるの？」

「こっちが無理やり付いて行くんだから、そっちの行く予定のところに合わせるよ」

「桜木町のワールドポーターズの上のところに行こうかと思っていたんだけど大丈夫？」

「ああ、あそこね。大丈夫。どうせだから、観覧車でも皆で乗っちゃう？」

「ああいうのはカップルが二人きりで乗るものじゃないの？」

「二人づつ乗っても良いけどお嬢さん達は少し気詰まりじゃない？」

「別にそんな事もないわよ。積極的に二人きりになりたいって訳では無いけどね」

「そう。でも、やっぱりみんな一緒の方が楽しいよね。高坂には俺から誘っとくから任せて貰っていい？」

「うん。じゃあ、玲人と話しておいて。私は後から玲人に聞くから」

それから数日後の土曜日の午後、四人で駅で待ち合わせをしていた。三人で真綾の習い事が終わるのをを待っていた。

「チケット玲人がネットで取ってくれたんでしょう？後ろの方にしてくれた？」

「ああ、せりか前だと気分悪くなるもんな。三時過ぎからのだけど、時間前に何か食べていくよな？」

「うん。朝遅かったから、お昼まだ食べてないし！本庄くんはもう食べちゃった？」

「いや、食べてないよ。真綾も食べてる時間無いと思うよ。みんなを待たせちゃってるから急いで来る筈だから」

「じゃあ、マーヤが来たら、ファミレスでもいくか？」

「ちょっと玲人！本庄君の前で、真綾さんの事呼び捨てにするのは悪いわよ！呼び方変えなさいよ」

「何で？止めた方がいい？」

「真綾が嫌がってないなら構わないよ」

「ほら、良いって！！せりも細かい事気にし過ぎだよ。マーヤもクラスメイトだし、美久とか沙耶とかと一緒だよ」

真綾が息を切らせて走って来るのが見えた。車で来たのだろうに此処まで乗り付けるのは憚られたのだろうかと思うと、玲人と違って真綾は流石本庄の婚約者なだけはあって神経細やかだと思う。

真綾は前に見せてもらった時の洋服の雰囲気とは違い、いかにもお嬢様といった感じのピンクのフリルのついたワンピース姿だった。デートだから？って思ったらピアノの習い事仕様らしく、着替えるつもりだったのに時間が押したので、そのままこちらに向かう事になったのでその格好らしいが、小柄で可愛らしい真綾にはとても似合っていてケースにいれたらまるでお人形さんの様だった。

「マーヤ遅いぞ！！みんな腹減ってんだから、飯食いにいくぞ」

「うん。分かった。ごめんなさ…」

謝罪の言葉を、言い終わらないうちに玲人に引き摺られて連れて行かれてしまった。遅れた事を気に病まない様にわざと乱暴に扱っているのだと分かる。しかし、最近玲人と真綾は本当に仲が良くなった。といっても喧嘩友達の様な感じでマーヤと呼ぶのもミツバチマーヤから取った玲人のつけた愛称だった。玲人は真綾の名前を初めて聞いた時にそのアニメの名前が浮かんでいたそうだ。せりりんは嫌だけど、マーヤは何と無くほのぼのとして可愛い感じがしていた。しかし、聞き様によっては呼び捨てに聞こえるので、本庄がどう思

うのかと思っていたが、別に何も思うところは無いらしい。

真綾は玲人が引き摺って行ってしまったので本庄と後を歩いて行く。なんだかどっちがカップルだか分からない取り合わせだが、今日は友達と遊びに来ているんだからいいかとせりかも気にしない玲人を見習う事にした。

「高坂は、優しいよなぁ！真綾も嬉しそうだし、一緒に来て正解だったな」

「そうね。玲人とも随分打ち解けてくれて、少し意外だったわ」

「真綾は結構人見知りだし、人の好き嫌いも激しいから、意外な感じはするかもしれないけど、高坂みたいな人懐こい奴に人見知りなんて出来ないんじゃないの？」

「玲人は花見あたりから、結構真綾さんの事気に入ってちょっかい出してるでしょう？悪気ゼロなんだけど真綾さんの反応が面白いから楽しいみたいなのよね」

「高坂に強気に言い返すのって椎名さんくらいだから、新鮮なんじゃないのかな？」

「まあ、多分そうなんだけど、本庄君の前ではもう少し、気を使うかと思っていたんだけど」

「何で？裏表無くていいと思うよ。誰かさんと親友なのに大違いだなって思っちゃうけど」

「玲人も忍は黒い！ってよく愚痴ってるけど、でも橘君とは相性が

いいみたい。正反対の方が却っていいものなのかしらね？」

「椎名さんとは似た者同士だけど合ってるよね？」

「私はお腹は黒くないわ」

「あとで見せてもらってもいい？」

「本庄君が言うとセクハラ発言に聞こえないから不思議ね。だけど、勿論だめです！」

「真っ白いのを確かめたら、あの腹黒同盟から脱退させてあげるのに」

「相棒が脱退させてなんてくれないわよ。それに本庄君だって真っ白じゃ無いじゃないの！脱退したところで、グレーに成る位のもんじゃない？意味ないわ」

「流石、容赦無いね。楽しくなっちゃうのは俺も高坂と一緒かもな……」

「私達の反応が面白いってことでしょう？せんせいに敵うって思ってないから、諦めるしかないけどね」

「なんだか、真綾と高坂、写真撮られてるみたいだけど、雑誌の取材とかなのかな！？」

後から歩く私達は随分ゆっくりだった様で、真綾達はカップルと間違われてるらしい。二人とも目立つというか傍からみてもお似合いに見える。真綾はいつもの仕返しとばかりに為りきりを決め込んで

玲人を少し困らせていたが、写真を撮って少し質問を受けたら解放されたようだ。

「本物の彼氏が後ろに歩いてるんだから、そっちと取材受けろよ！ハッチ！！」

「うわぁー！子供っぽい。その悪口って小学生の低学年レベルよ。でもハッチも好きだからハッチでもいいもんね～」

「何が付き合って初めてのデートですぅーなんてデタラメ何処からでてくるんだよ！？おかげで汗かいただろう！」

「面白かったじゃない！それに綾人じゃ、取材なんてスルーして受けてくれないもん」

「まあね。もしも雑誌とかに載ったりしたら親がうるさいしね」

「マーヤのところはうるさくないのか？親戚なんだろう？」

「うちは自由だもん。やりたい事とか興味を持った事はやりなさいって言われてるもの」

「道理で我儘娘な訳だ…」

「何か仰られたかしら？」

「いや、何でも無い。過ぎた事はもうどうでもいいわ…」

玲人、大らか過ぎだよと流石のせりかも思うが、本庄は感心したようだった。

そうしてやっと目的のファミレスに着いた。なんだか少しは歩く場所ではあったが、いろいろあって長い道のりだった。

２４（後書き）

Ｗデートもどき、次話も続きます。まだご飯も食べらていません…

25

「何を頼むか決まった？」

「うん。決まりました」

「私も！」

「俺も決まってる」

オーダーを頼むと来てくれた店員さんに各々の注文を頼んだ。

「やっぱりお嬢さんはあっさりと決断が早いね～」

「みんなと一緒じゃないの」

「普通、女の子って色々悩むでしょう？」

「真綾さんが悩んでないのにそういう事言うのって墓穴だと思うわよ」

「確かに！！そういうのは、そっと指摘してくれるといいんだけどな～」

「悪いけどそういう事は、女性の味方なの！」

「せりもそういう所、気が付いても言うなよ！知らぬが仏って言葉があるだろう」

「そっかー！私が気が利かなかったのね。ごめんね、真綾さん」

「せりかさんを責めるなんてお門違いもいい所だわ！！私も綾人の失言だと思うわ。…でも珍しいわね。いつもはあまりそういう事をしないのよ」

「そうだよね～。そういうトコロ普段堅そうだから思わずツッコミ入れちゃったのよね。でも私もちょっと反省かも」

「いいんだよ。お嬢さんには元々ついつい口が滑るだけだから、フォローは、いいよ。大丈夫だよ。真綾もあまり気にしない」

せんせいの過去の女性関係とか、結構濃そうなのでとてもじゃないけど聞けないし想像もしたくありません…（汗）。

せりかでさえ、そう思うのに真綾が気にならないっていうのは男性側の勝手な思い込みじゃないかと思うんだけど…と思って真綾を見るとにっこりと微笑まれたので、気にしないでって事だと思う。

こんなにいい子を泣かせたら、許さないんだからね！！そう思って本庄を見ると微苦笑しているので、せりかの気持ちが伝わってる様だ。

食事が運ばれて来て食べだしたが、お互い笑ってしまって中々食事が進まない。というのも席は、真綾と綾人、せりかと玲人と並んで座っていたら料理が来た途端にせりかは何も言わずにご飯の半ぶんを玲人の皿に盛り、玲人は何も言わずにハンバーグの付け合わせのインゲンをせりかの皿に置いた。前の席を見ると、まったく同じ事を本庄と真綾がしていたので、お互いに鏡を見るようでウケてしまった。自分達は何気なくやっていたけど相手の方を見るとおかしいというのは、それこそおかしいのだとは分かっているのだが、可笑

しいものは理由なく可笑しくて皆で笑い出して暫く止まらなかった。やっぱり人目がある時はやめようかとお互いが思ってしまったがそれは口には出さなかった。

デザートも女性陣は食べたかったのだが、映画の時間が迫ってきてしまったので、急いで会計を済ませて映画館に向かった。

映画館ではせりかと真綾を中にして玲人と本庄は端に座った。やっぱり本庄がいると気が利くと感心するが、玲人も今迄はせりかとだったから、エスコートする雰囲気でも無かったのだろう。

何か飲み物とかと本庄に気を使われたが、せりかは映画を見る時は飲食はしないのでお礼だけ言って断った。普段はどうなのか分からないが真綾たちも何も飲まなかった。

映画は皆の好きなドラマシリーズのものだけあって期待を裏切らない出来で、中だるみ感もなく、緊張状態が続く。

大きな画面で見るのは、いつものテレビと違うし、映画の迫力も大きくてとても良かった。少し泣きそうになったところもあったが、それは恥かしいのでぐっと堪えた。玲人とだけなら少し泣いていたかもしれない。

明るくなると急に現実に引き戻された。皆も少し眩しそうな顔をしたのが見えた。

喉も乾いたので、お茶でもしていこうかと意見が一致して、ケーキがおいしそうにみえた喫茶店に入った。外がうす暗くなって来た。玲人が一緒だから遅くなってもいいかと、せりかは思うが、真綾と本庄との関係とは違うのだと思うと随分甘えている様に思えた。

玲人の自分への好意を利用しているような罪悪感が湧いて来た。好きだと言われる前は当たり前に享受出来た事が、受け入れていない身でその恩恵を受けてもいいのかどうかせりかは最近悩み始めていた。断った直後は、玲人と関係もあまり良好とも言えなかったし、失望の方が大きくてそんな事は考えなかった。しかし、二年生になって同じクラスになり、こうして共通の友人と花見や映画など、一緒に遊ぶようになった。一年生の時よりも物理的な距離が近くなった所為で、玲人に対してこれでいいのだろうか?と段々と悪いと思う様になって来た。

ケーキは多分美味しい筈なのだろうが、せりかには少し、しょっぱく感じた。

横で真綾と玲人がぎゃあぎゃあと他愛も無い事で揉めているようだが、(真綾のケーキを勝手に玲人が味見したのを怒っていたようだ)なんだか二人を見ていると玲人もせりかじゃ無い女の子とこんなに楽しく一緒にいられた未来を見ている様で余計に自分の存在が玲人の足枷になっている様な気がしてならない。

本庄は、せりかの落ち込んだ様子に気が付いてしまった様でしきりに目で訴え掛けてくるが、この場の空気を壊しては、なおさら申し訳ないので軽く首を振って何でも無いと伝えた。

外に出るともう真っ暗になっていた。

「夜景が見えるから、やっぱり観覧車に乗ろうよ」

本庄が誘うと元々、そうしようかと言っていた事もあって皆も頷いた。

夜景でこんなに雰囲気が良いのだから、やっぱり本庄と真綾は二人で乗ったほうがいいのではないかと勧めた。

しかし、本庄が「普段と同じじゃつまらない」と言い出した。

「私だってせりかさんと乗りたいもん。綾人は高坂君と一緒に乗りなさいよ!!」

「ウゲー!マーヤそれ相当キツイ罰ゲームだろう?」

玲人が即座に抗議する。それは、真綾の言葉に私も賛同出来ない。…あまりにも二人が可哀想だ。余計な事をいわずにみんなで乗る方にしておけば良かったのかと思うが、もう二人で乗る方の列に並んでいたので、玲人が真綾と一緒に乗ろうと説き伏せていた。男二人で乗って変な目で見られるよりも百万倍、いや千万倍ましだろう。本庄が「つまらない」と言い出した以上、気の強い真綾は本庄とは絶対に乗らないだろう。せりかと乗ると主張して二人を突破して行くのが目にみえる様なので、玲人の説得は正しいと思う。二人とも仲が良いし、こちらも本庄と二人で気まずくなる関係でも無い。

玲人の説得で二人が先に観覧車に乗り込んだ。続いて直ぐに本庄が乗って手を差し出してくれるのを一瞬躊躇ったが、思い直してお礼を言った。玲人だって先に乗って真綾を引きあげてあげているのを見ていたのに、同じ事に躊躇うのは、気持ちの問題だろうと思う。やっぱり、まだこの人の事が好きなんだと再認識させられた。最近はもう頼れる友達くらいに思える様になって来たと自分で

は思っていたので少しショックだった。鋭い本庄にも分かってしまっただろうと思うと余計に落ち込んだ。

「どうしたの？喫茶店から急に元気が無くなっちゃって……もしかして具合でも悪い？」

本庄が具合の悪そうな人間を二十分も降りられない観覧車に誘う訳がないので、その聞き方はだいぶ気を使ったものだろうと思った。首を横に振って否定すると少し難しい顔になった。

「真綾と高坂が仲が良すぎて気分が悪いとかじゃないよねぇ」

違うと確信を持ちながらもじわじわと追い詰めて来る。

「本庄君はいいの？私は二人が仲良くしてくれるのは嬉しいけどなんだか本庄君に悪いわ…」

探り合うような会話に緊張感が出て来た。

「俺は真綾に親しい異性が出来た事はむしろ良かったとは思っているけどね。我儘で気が強いから中々、難しいからね」

「そうよね。前にそんな事言っていたものね」

「それで、お嬢さんは何にそんなに悩んでるの？」

今迄がジャブだったのだろう。いきなりストレートに聞いてこられた。

二人きりの空間では逃げ場所がなく、はぐらかしたり誤魔化したり出来ない。この時になって普段と一緒じゃつまらないと言ったのは

せりかと二人で乗る為だと気が付いた。元々思い出せば本庄はみんなで乗ろうと言っていたのに、二人で乗るところに並んでから、あんな事を言い出した事自体に不自然さを感じるべきだった。

「玲人に悪くて…」

素直に思った事を言ったが、これではいくら本庄でも何が悪いのかまでは、はっきりとは分からないだろう。

「最近になって急に悪いって思い出したって事は、振ったのを悪いと思っている訳では無いんだよね?それだったら橘にだって悪いと思う筈だもんね」

「今日、お茶してる時に、段々暗くなってきたでしょう?帰りが暗くなっても玲人がいるから大丈夫かなって思ったら、玲人の好意を利用してるように思えて来たの」

「それは、家が隣なんだから、送って貰うわけじゃなくて、一緒に帰るって事だよね?それに遅くなったら方向が違っても俺でも椎名さんの事を送るだろうから、其処は常識の範囲なんじゃ無いの?まして幼馴染なんだし」

「でも相手は私の事が好きなんだよ?それに応えて無いのに調子のいい時ばっかり頼ったりってどうなの?って思う。それに真綾さんと一緒に楽しそうなのを見てたら、そういう子が私との事が無かったら出来ていたと思うの」

「そうだね。高坂は見た目もいいし、真綾の我儘を受け止める度量もあるから、確かに彼女が出来ていても不思議は無いよね」

「やっぱり、そう思うでしょう?そうしたら玲人に悪くて…」

「椎名さんは俺の事を憎いとか、俺さえいなければカッコいい彼氏とか出来ていたのにって思う時ってある?」

「そ、それは、無いよ!こっちが勝手に想ってるだけだもん。却ってまだ諦めて無いのかって思われて避けられないか不安だよ…」

「高坂も同じじゃないかって思うんだ。罪悪感から、避けられたり、遠慮されたりするほうが辛いんじゃないかな?って思わない?」

「……自分に置き換えたらそうかもしれない。玲人に悪くてってこっちが思ってるのが分かっても、それでも傷付くよね。多分」

「やっぱり、普通に接するのが高坂にとっても一番望んでる事だと思うんだよ。だから悪いと思わない努力も必要じゃないかな?」

「本庄君は私に悪いって思って無いけど、それは、そう思う努力をしているからなの?」

「努力っていうと重いね…。ごめん。でも椎名さんに悪いって思う事自体が、椎名さんに失礼な事だとは思うよ。キツイ言い方だけど高坂に対してもそう思うけど」

「私の罪悪感が玲人に失礼な事をしてるって事だよね?」

「うん。高坂の気持ちを踏みにじってるし、否定してるよ。たとえ受け入れられなくても彼の気持ちは彼の物だと思うよ」

「……そうだよね」

「橘の時も言ったけど、お嬢さんは相手の気持ちに応えたいって思い過ぎなんだよ。その所為で、悪くなって来ちゃうんでしょう？相手に罪悪感があるのを感じたら相当辛いと思うよ。高坂だって」

「そうだよね」

なんだか同じ言葉しか出てこない位に自分に置き換えると、して欲しくない事や、思ってほしくない事をしていた。唯一、お隣なので、避けなかったのが（避けられなかった）救いなくらいだ。

「そろそろ下迄来たから降りる準備した方がいいよ」

本庄が先に降りて手を差し出してくれるのを、今度は躊躇わずに掴めた。

先に降りた真綾と玲人は楽しそうに話の続きをしていた。私達が降りて行くと真綾は嬉しそうに駆け寄ってきたので、本庄がせりかの為に崩してしまった機嫌が直った様で少しほっとした。

「たまには、綾人（あやと）以外の人と二人で乗るのも新鮮で良かったわ」

「そうでしょう？こっちも楽しかったよ。ね？椎名さん」

「そうね。いつも玲人とばかりじゃ色気がないわよね」

「せり、ひでー！！俺の方も楽しかったけど、そう言われるとムカつく！マーヤとじゃ色気なんて欠片もないもんなぁ」

「なんですって～！あんなに頼むから一緒に乗ってあげたのに」

「ああ、そうだった！ごめん。ごめん。お蔭で変なホモカップルに見えないで済みました。ありがとう」

「あーー！それであんなに必死だったのか…それは仕方無いよね。私が無茶振りしたのね。ごめんなさい」

「今度はみんなで乗った方が楽しいから、次の機会があったらそうしようね」

「そうだよ～。せりかさんと一緒に遊べるって楽しみにしてたのに！次はリベンジするわ」

「八人くらい乗れるから、お花見メンバー誘って乗ってもいいよね。今度は中華街も行きたいしね」

「中華街行きたいー！今度は絶対ね！」

「分かった～！楽しみだね」

次の予定も決めて本庄と真綾と別れた。

玲人は我儘姫の相手は疲れたと帰り道でいったけれど、せりかはくすっと笑っただけだった。

今日受けた雑誌の取材が、学校であんなに大騒ぎになるとは、この時は知る由も無かった。

26

「生徒会のお手伝い？」

せりかがきょとんとすると橘は少し悪戯っぽい笑みを浮かべた。

「そう、今度体育祭があるでしょう？それに参加して欲しいって打診があったんだ。俺と椎名さんに」

「誰から？」

「生徒会からだけど、まあ、会長と副会長からかな」

「人手が足りないの？」

「うちの体育祭はたいした事もしないし、人手が足りないって事も無いんだけど、選挙は秋だから、今のうちから仕事を覚えて欲しいみたい」

「引き継ぎって事だよね？選挙で選ばれてもいないのに引き継がれても選ばれなかったら意味無いんじゃないの？」

「そうなんだよね。手伝ってたのに選んで貰えないとやっぱりきついよね～」

「それってそういう事も有り得るってことでしょう？なんだか大丈夫なのかな？」

「だから、好感度アップ作戦、一年の時から草の根運動、してたじ

ゃん！」

「草の根運動って…あの幾つかの悪企みは、草の根運動だったって訳なの？」

「前にそう言わなかったっけ？玲人との事も気を付けてたのも、選挙も大きいけど、こうやって声を掛けてもらう為だったんだよ。悪目立ちすると選挙に通らない可能性があるから、その前にお手伝いの声も掛からなくなるからね」

「なんだか奇妙ね。次の生徒会役員は前の生徒会の人が決めるみたいな感じよね。民主主義じゃないみたい」

「それが現実なんだよ。結局仕事はしてもらわないとならないけど、一年から役員の奴っていないから、結局秋の選挙まで待ってると三年生も受験勉強もあるから引き継ぎは今くらいからして置きたいんだよ」

「建前と現実は違うのね。それでどうするの？」

「これから生徒会長達にご挨拶、顔合わせとこれからのスケジュールの説明があるから」

「わかったわ。なんか緊張しちゃうわね。先輩との繋がりって今迄皆無だったから…」

「部活してないもんね。でもうちの学校って半数は部活してないし、してても同好会レベルだから、珍しくないんじゃないのかな？」

生徒会室を見渡すと、何台ものノートパソコンと一台のデスクトップとプリンター、そしておおきな楕円形の机が中央にあり、椅子が何個かあった。小会議室といった感じだった。そこで数人が昼食をとっていた。

私達がノックの後に失礼しますと入室すると、皆、一旦昼食を取り止め、私達に挨拶をしてくれた。本来下級生である私達から自己紹介するのが筋だろうが、こちらは急に呼ばれた身でもあるので、先輩方の自己紹介を聞いていた。

「会長の三年一組の若宮春奈(わかみやはるな)です。今日は、急に呼びだしてしまってごめんなさいね」

会長は何回かの行事の挨拶で知っていたが、美人で賢そうな女性(ひと)だった。おまけに感じも、ものすごく良い。こうじゃないと生徒会の顔にはなれないんだろうなとせりかは思った。

「副会長の伊藤律也(いとうりつや)です同じく一組です。よろしく。君達が次代の会長と副会長だから、頑張ってね！」

うわー！暗黙の了解だと思っていた事をはっきり言っちゃったよ！と心の中で突っ込むが、伊藤先輩は面白そうに私達の反応を見ていた。

あと、書記の二人と会計の計五人で運営しているのだと説明された。驚いたのは、全員が同じクラスだった事だ。

後から、橘に聞くと代々そうらしいので、珍しい事でもないらしい。勿論例外もあるが、こうして一組から私達のように会長と副会長が決められると後は仕事を一緒にやり易い人を連れて来る事になるという事だった。

今回は体育祭の各クラスの実行委員への仕事の振り分けや、説明会が行われるのでその際の書類の作成等の説明を受けた。

「橘くんはお兄さんが私達の二代前の会長だから、この指名制はあまり違和感は無いみたいね」

不意に会長の若宮さんが言ったので、驚いて橘君の方を見るとにっこりと肯定の笑顔を見せた。

「うわー！お兄さんもカッコいいなぁとは思っていたけど、弟さんの方も近くで見ると迫力あるわねぇー」

若宮さんが感心した様にいうが、初対面で橘を見れば、十人中十人が同じ感想を抱くだろうと思う。一樹（いつき）さんも顔の造作は整っているが、随分砕けて気さくな雰囲気だった。橘は高嶺の花感満載の人だと思う。無駄に綺羅綺羅しいのに、他人をある線から近寄らせない。過去の経験からかもしれないが、今はストイックな感じで出来過ぎな印象を与えるので、よけいに近寄り難い感じだった。

「兄はああいう感じの人なので、ご迷惑を掛けていたんじゃ無いですか？」

「ううん。私達、その時一年生だったから直接はお話させてもらった事はあまり無いんだけど、私達の前の先輩達からよく話を聞かされてて、色々と無駄な事とかカットしたり、文化祭の規律を緩くし

て楽しめるようにしたのも橘先輩だったらしいの。今迄って文化祭は、やっても良い範囲が厳しくて、出された企画も結構却下されていたらしいから」

一樹さんってすごい人だったんだなぁって思うが、橘は知らなかった様で純粋に驚いていた。家ではかったるそうにしていたのに…とうっかり洩らしてしまう程だった。

「椎名さんは、橘君と親しそうだし、いい補佐役になってくれそうよね」

「いいえ、そんなこと…」

「謙遜はいいよ。一年の時の文化祭は感心したよ。一年のクラスが最優秀を取ったのって初めてみたいだよ。頑張ったクラスとかがあると、特別賞とかは出していたらしいけど」と伊藤先輩がいってくれた

「ああ、あの劇は脚本と演出を担当した子が頑張ってくれたんです」

「劇の中では恋人同士だったけど実際は付き合ってないよね？そういう雰囲気ゼロだもんね～」

からかうように伊藤が言うと橘が抗議の声をあげた。

「伊藤先輩！！余計な事言わないでよ～！」

随分親しげな様子に二人が知り合いであった事が判って橘に聞くと、どうやら伊藤はサッカー部の先輩らしい。最初から言えばいいのに、橘はやっぱり狸だ。一樹さんの事だって一言も聞いていなかった。

妙に詳しいとは思ったが部活の先輩が副会長だったのか！

運動部と生徒会は両立出来るのかという心配は皆無になった。ここに生きた見本がいるのだ。多分、予算や場所の使用権を握っている生徒会の権限は大きく、自分達の部に生徒会関係者がいる事は歓迎されるべき事柄のようだ。

「もちろんお付き合いしていませんよ！」

せりかがにっこりしていうと伊藤が「連れないねぇ」といったが、笑顔でスルーした。

「次期副会長さんもなかなか骨が有りそうだから、楽しみだよ。ね？若宮？」

「そうね。私達早めに引退させて貰えそうね」

と物騒な事を会長が言い出した。やっぱり任期中はやらなきゃでしょう！！と突っ込みたくなるが、いかんせ先輩に失礼な口はきけない。まして橘と違って初対面だ。

予鈴が鳴ったので、そこで一応、解散となった。明日の昼休みからお手伝いに入るから暫くは昼食は生徒会室で食べる事になりそうだ。

皆、気さくそうな人達で一先ずほっとした。

家に帰ってから今日あった事と伊藤先輩の事を玲人に報告すると「伊藤先輩と一緒だったら大丈夫だろう」と随分伊藤を信頼しているのが分かる感想だった。

「忍は、せりがビビるの面白がって余計な情報与えなかったんだろうとは思うけど、でも、言うと甘えも自然と出ちゃうから言わなかったんじゃねーの？ほら、第一印象って大事だろう？最初は緊張してるくらいの方が後輩は可愛いと思うよ」

「成程ねー！すべて計算し尽くされていた訳か……」

「普通はすごく親切って思う筈の所だけど、忍相手だとそういう感想にはなっても仕方がないよな…」

と玲人が普段の親友の悪行を思い、溜息を吐いた。

27

最近、生徒会のお手伝いがとても楽しい。

若宮は、綺麗で素敵なお姉さんで、とてもひとつしか年が違うとは思えない。誕生日は聞いて居ないが、せりかが四月の終わりの生まれなのを考えると、数ヶ月の差かもしれない。

ちなみに玲人は五月の初めでせりかより三日遅い。当然の様に中日（なかび）辺りに両家の合同食事会でお祝いされたが、今年はそろそろだが、どうする気なんだろうか？と思う。去年は高校の入学祝いの食事会をした直後だったので辞退したのだった。いつも、大体、大人の方がお酒を飲んで出来あがってしまうのをタクシーに押し込んで帰る事になる。本当に私達のお祝いだと思っているんでしょうね？！と文句を言いたくなる年も有ったが、決まって、母親が欲しかった洋服だったり、ゲームだったりと、その時の迷惑の掛けられ具合と比例した贈り物をしてくれるので、我慢出来るのだった。

「せりかちゃんも仕事、随分慣れてきたわよね！最初からあまり、飛ばさないでね。嫌になって逃げられたら困っちゃうもの」

なんとも、他人（ひと）の心の擽（くすぐ）り方を知っているのではないかと思う程、さり気無く褒めて、せりかを必要だと言ってくれる。相手に自分を必要と言って貰える事がこんなに嬉しいものだとは正直思わなかった。

お手伝いの身である為、些細な事をしても過剰にお礼を言われてし

まい、多少、恐縮気味だが、年上のお兄さんとお姉さんのお手伝いをするといった感覚は、兄弟のいないせりかには、かなり新鮮で楽しい事だった。

伊藤も時々、労わりの言葉を掛けてくれるのだが、そうすると橘の逆鱗に触れる事になる（先輩相手なのに…）。どうも伊藤の「せりかちゃん」呼びが気に入らないらしい。最近は、怒る橘面白さで軽く肩などに手を置いたりするので、伊藤も橘と同種の人間なのだと悟った。玲人が懐いている訳が何と無く分かりたく無いけど、分かった気がした。

橘は、何もヤキモチを焼いている訳では無く、せりかに嫌な思いをさせたく無いと考えているようだ。今迄は、玲人がべったり傍にいたし、その後は橘や本庄と一緒にいるせりかに「せりかちゃん」と呼んで来る男子などいなかっただけで、特に呼ばせなかった訳では無かった。むしろ、本人達には言えないが、無自覚なアンタたちの所為で、男子に壁作られてるんだからね！と思っているのだが、せりかが、嫌がっていると思っている橘にしてみれば、自分が無理やり連れてきたのに、先輩といえどもちょっかいは、出させないといったナイトぶりで、恥しくなる程だ。伊藤等は、その辺りを薄々察していて、せりかに触ったりして来るのだから性質が悪い。それは、流石にせりかも少し嫌なので、橘が過剰に反応するのをやめてくれれば、そんな事しないのになぁと思う。

やり過ぎな時は若宮の鉄拳が伊藤に飛ぶので、皆で笑ってしまう。適度であれば、問題無いし、嫌じゃないから平気だと言っても、せりかが先輩達に気を使っていると思っている様だった。まあ、最初は本当に気を使っていたので、橘がそう誤解してもおかしくは無いのだが…。

書記の二人の男性の先輩は、伊藤を窘めてくれるし、せりかの事も椎名さんと呼んで適度な距離を置いてくれる。多分、これ以上恐がらせたら可哀想だし、本当に逃げられると思っているらしい。

会計の女性も、若宮の親友で、なかなかオトコマエな人で、たまに伊藤に対して蹴りまで入れてくれる。お姉さん達二人にこんなに守られているんだから、本当に大丈夫だから、先輩に暴言吐くのやめようね！って言いたいのだけど、皆にコミ二ケーションの一環だから橘を止めなくてもいいと言われている所を見ると、どうやら、皆も面白く思っているに違いない。なんだかこういう種類の人間が生徒会をやっていくものなのかなぁと思ってしまうが、会長、副会長が友達を連れて来たのだから、類友なのだと答えは直ぐにでた。

そんな穏やかな日常の中で事件が起きた。前に遊びにいった時、玲人と真綾が撮られた写真が、ファッション誌に載ってしまったのだ。

何組かのカップルにインタビューとファッションチェックをする内容なのだが、玲人と真綾をメインに配置したページは他の小さく載っている人達とは格段に違う扱いだった。

見出しには『ナチュラル系イケメン彼氏に姫系彼女、初めてのデート』とある。ナチュラル系って何!?と思うが、あまり飾らずにすっきりした着やすいものを好む玲人のファッションの事だと思うが明らかに美化しすぎだろう。姫系もあの日、ピアノのレッスンの後、着替える時間が無くて仕方無く、していた格好で本人は普段はあっさりした服を好んできているのに、この雑誌を見ると真綾にあやかってゴスロリ&姫系特集も組まれていた。

これでは反響が大きいのも当然と言えた。玲人と真綾を知らない人達まで一組の扉のところに来て雑誌を片手に見物者で一杯だった。

中には、玲人のファンの子達が、皆で雑誌を握りしめながら泣いていて、泣いている友達を慰める子まで付いて来て真綾を睨みつけていた。此処までわざわざ泣く為に来なくても良いのでは？とハテナで一杯な光景だが、真綾に気害を及ぼさないか心配になった。

騒ぎが大きくなった為、担任に生活指導室に来るように二人が呼びだされて事情を聞かれる事になってしまった。普通だったら、こんな事では呼び出しは喰らわない筈だが、騒ぎが大きいので、周りを黙らすために、二人を教室から隔離したかったようだが、まるで悪い事でもしたかの様に皆の目に映ってしまわないか気になった。

28

「サッカー部の高坂君、一組の更科さんと付き合ってるらしいよ！！」

「うそー！マジで？！あたし超ファンだったんだけど！…っていうか更科さんって誰？」

「この雑誌見てみれば分かるよ」

「えー！！こんな子と付き合ってるの～！なんか思ってたのと雰囲気違うしー」

「そうだよね。何か子供っぽいし、発育不良？って感じだよね～」

「言えてるー！何か釣り合ってないよね～？それに高坂くんの事はみんな好きだったけど、みんなのモノって手出ししない約束だったのにね～」

「ずるいよねー！でも何かこの雑誌のせいで説教喰らってるらしいよ」

「身の程しらずだっつーの！反省して早く別れてくれればいいのにね～」

「ホントだよ～！高坂くんもこんな女じゃ満足出来ないんじゃ無いの？きっと直ぐに別れるわよ」

色々なところでこの雑誌の事が囁かれているが、やはり真綾に非難が集中してしまっているようだった。真綾位、可愛くていい子なら玲人には勿体無いと思うのだが、玲人に想いを寄せる女子にはそうは映らないらしい。結局真綾がどうこうじゃ無くて、だれが彼女でも我慢ならないのだろう。

「本庄君、どうしよう？なんだかマズイ事になってるよ！何とかしなきゃ…」

「うーん。高坂には悪い事したなぁとは思うけど、完璧に真綾の過失だよね。ああいう取材受ければ写真が掲載されるかもっていうのは前提の話だし、高坂はこれだけ人気あるんだから、こうなる事は有る程度、予想できた訳だよね？」

「でも、謂われの無い悪口言われたら、真綾さんだって傷つくんじゃ無い？玲人がこんなにモテるなんて私だって予想外だもん」

「予想外なの？でも椎名さんは、高坂の事、近寄らせなかったから、用心してたんじゃ無いの？」

「それは、半ぶんは橘君にそうした方が良いっていわれて、それに中学の時は少しやっかみもあったから、気を付けてただけで、まさか此処までとは思って無かったよ」

「何とかするって言っても噂は収まらないだろうから、単独行動取らせないくらいしか今は出来ないと思うよ。俺との事を言っても、火に油を注ぐだけだと思うから暫くは様子を見るよ。実害があった

ら、証拠ばっちり揃えて訴えるけどね！それこそ、真綾に傷一つ付けたら、どんな手使っても退学して貰うから！」

やっぱり、本庄も、この状況で何も起きないと楽観視している訳じゃ無い様だ。とるべき措置は全部とって、それでも、噂や悪口などは、どうしようも無いから静観するしか無いのだろう。

それからの教室の移動は皆で、真綾を囲んで見えないようにして動いた。トイレも美久や弘美やクラスの女子で連れだって行った。

幸い一組の女子には玲人が本当の事を説明したので、誤解だと分かってくれた。元々、玲人が説明しなくても殆んどの子は余り気にしていない様だったが、唯、四人程、玲人の熱心なファンの子がいて真綾にでは無く、玲人に事情を聞いてきたので、何と無くまわりにいた人達にもついでに説明するに到った。元々、同じクラスだった元五組の子が中心となって、警戒してくれている。橘が、皆に頼んでくれたらしい。皆も仲間の危機とあって協力してくれている。常に十人以上で動く様子は、異様ではあったが、橘くんを筆頭にした大所帯の団体に文句を付けてこれる人は居なかった。

「私が悪かったのに、みんなに申し訳ないわ！！」

珍しく気弱になった真綾の頭を撫でると、薄らと涙を滲ませた。

「ずっとって訳じゃ無いし、皆も、纏まって行動してるだけだから気にしない方がいいと思うわ。もちろんとても有り難いとは思うけど、私も含めて純粋に真綾さんが心配なだけだから…」

「有難う。せりかさん…」

玲人も申し訳なくは思う様だが、真綾に寄らないように言ってあるので、出来るだけあの雑誌に書いてあるのは軽いノリでジョークだからと周りに説明するのに留めていた。

「玲人の奴、玲人のくせに随分騒がれてるらしいじゃん！」

生徒会室に昼休みに手伝いに行くと伊藤がせりかに声を掛けてきた。

「本当に玲人のくせに！！ですよ」

「せりかちゃん、橘にだけじゃ無くて玲人にも連れないんだねぇ。もしかして男嫌いなの？」

「違います！好きな人はいます！！」

「そーなんだぁ！告白とかしないの？っていうか誰？！俺の知ってるやつ？」

思わず乗せられて、余計な事を口走ってしまって、何て言おうかと思案していると橘から助け舟が出された。

「先輩、プライバシー侵害ですよ！そういう事は、もうちょっと親しくなってから聞くべきでは？」

「おおっと！正論出たね。じゃあ親しくなれるようにがんばらなくっちゃねぇ～」

「今度はセクハラ入ってますよ！！オヤジ臭いから止めて下さい」

「間髪入れずにキビシーね～！せりかちゃんどう思う？ああいう男？」

「…私を庇って言ってくれてるのにどうもこうも思いませんよ！」

「伊藤君！ふたりに毎日、突っ掛かってるとその内、嫌われちゃうわよ！特にせりかちゃんに…」

「それは、困るかなぁ！役員の業務にも支障をきたすよね～。俺からせりかちゃんに引き継ぎなんだからさ！」

「そうよ！せりかちゃんに嫌われたら困るでしょう？逃げられちゃったら一生恨むからね！！」

「若宮は、橘に引き継ぎだから、橘を捕獲しておけば安泰なんじゃ無いの？恨まれる筋合いないと思うけど」

「この頃は、せりかちゃんが居てくれるだけで、この殺伐としてた生徒会室も癒しの空間になって来たのに冗談じゃないわ」

「なんだか若宮の方が中にちっさいおっさんが入ってる気がして来た……」

「なんて言って下さっても結構！とにかくせりかちゃんに半径一メ

ートル以内近寄らないで頂戴！」

「今日は何か、みんな機嫌悪いよなぁ？何でなん？」

「若宮先輩は伊藤先輩と違って、神経細やかなんですよ。…俺たちの友達が玲人の事で困った事になってて気持ちが落ちてるのが分かってらっしゃるんですよ！」

「噂の相手の子友達だったんだー！それは、大変だったなぁ！庇って神経使ってたから機嫌悪かったのか…」

「そうよ！あの雑誌の子を囲んで十人くらいでガードしてるの見たもの！二人とも大変なんだから、伊藤君の戯れの相手まで出来ないわよ」

「相手の子って玲人の彼女じゃ無いの？」

「それは、違うんです！！私も一緒にいたんですけど、たまたま、二人が取材されちゃって！だからデートとかじゃ無かったんです…」

皆で守ってるけど心配だと言うと、若宮先輩が出来るだけ、同級生で部活をしている子達に話して後輩の子に違うという事を広めてもらう様に手伝うと言ってくれた。伊藤先輩も部活を見に来ている子達にフォローを頼むと言ってくれ、結構伊藤先輩もいい所があるなぁと思った。後は、沈静化を待つしか無かった。

29

人の噂も七十五日と言うが、真綾の件は、思っていたよりも諺（ことわざ）よりも、もっとずっと早くに解決を見た。

こんなにあっさり解決されたのは、若宮と伊藤の存在が大きい。

若宮は各部長に働きかけて、下級生に雑誌の話題を吹聴しないようにしてくれと頼み、下級生はやはり直に関わる先輩からの言葉は重いので、友達諸共、その話題はしなくなった。

伊藤はサッカー部という事もあって実に効果的に動いてくれた。この学校では、サッカー部自体に人気があるが、伊藤は同学年ではその実力からカリスマ的な人気らしい。ＭＦのポジションでチームの司令塔の役割だと橘が教えてくれた。（せりかは練習も試合も見に行った事が無いので分からなかったのだが）

その彼の応援に来てくれている同学年のお姉さま方に今回の件を話してくれた。応援や見学というのは部活動では無いが、毎日の様に顔を合わせれば挨拶もするし、自然と人間関係も出来て、秩序も生まれてくる。応援出来る場所などは学年毎で決まっているという事だった。

伊藤から頼まれたお姉さま達は、早速、二年生の応援する見学者に話を付けてくれたらしい。

ここで言う事を聞かないと、自分達の趣味であるサッカー部の観戦も応援も出来辛くなる事から、一番厄介だと思われていた、熱狂的な玲人ファンの子達は、あっさりと矛を収めた。

その子達が何も言わなくなると、言っている子達が目立って、空気が読めない感じになって来た。まして、学年で知らない者はいないと思われる橘を中心に十数人で守っているのだから、却って真綾に謂われのない悪口を言っている方に主に男子の冷たい視線が行く事になった。其処まで行くと、空気が読めなかったり、色んな伝手(つて)からの協力から漏れた子達で、最後まで悪態をついていた子達も分が悪くなって来たのに気付いて、口をつぐむ様になった。

ここに到るまで、たった四、五日だったのだから、すごい！！生徒会にお手伝いに駆り出されたお蔭で、思わぬ人脈が出来て、本当に助かったと思う。

「ありがとう。お嬢さん達のお蔭で今回は本当に助かったよ。真綾も世間の風に当たって、もう不用意な事はしないと思うし…」

「真綾さんも今回は辛い思いをしたんだから、余り責めないであげてね！みんな、本庄君程、先の予想が付く訳じゃ無いんだし」

「それにしても終息早かったなぁ。今回の事で先輩の偉大さを初めて感じたよ。直接俺がお礼言うのも変だから、言えないけど会長と副会長には、本当に感謝してるよ」

「そうなの。私もすごく感謝してるんだけど、若宮先輩はともかく伊藤先輩は普段おちゃらけた感じだから、今回こんなに力になってくれた事はかなり意外なんだけどね」

「橘に聞いたけど、その伊藤先輩が、かなり真剣に頼んでくれたらしいよ。副会長やってるから、サッカー部では部長も副部長もやってないけど、実力も人望も部内一だって」

「そうなんだってね！びっくりしたよ。いつも私に絡んで、それで橘君の神経を逆撫でて楽しんでたから、そういう部分しか見た事なかったから意外だったよ」

「おれも、真綾の持ち物が無くなったり怪我とかさせられたりしようものなら、無い罪状まで付け加えて訴えて、その親にも責任取らせて、社会的に抹殺しようと思ってたから、汚い事をしないで済んで助かったよ」

「…それって、向こうが助かったっていう気が若干してくるけど……」

やっぱり、お腹は真っ白なんかじゃ無い！！グレーと言ったのは甘めだった。権力まで持っている分、本当に怒らせると本庄の方が桁違いに怖ろしい事をしそうだった。

それだけ真綾の事を考えているんだろうとは思うが、規模が大き過ぎて少し恐い。いろいろと食い止められて良かったのかも知れない…。

「高坂も、責任感じてるらしくて、いつも以上に愛想を振りまいていて少し痛々しいらしいよ。『あいつって天然にホスト体質なんだからこれ以上やらなくてもいいのに』って橘が言ってたから」

「なんだか、可哀想なんだけど、突っ込む所が多過ぎて、なんて感

想言っていいのか分からないわね。橘君も結構頑張ってくれたから口が悪いのも許せるし、玲人も今回の事で現実見た所もあるでしょう」

「椎名さん。お疲れ様！」

「橘くんもね♪お疲れ様。伊藤先輩達には本当に感謝だよね！生徒会に関わって良かったね～」

「うん。いつも遊びに付き合ってあげてて良かったよ。ホント」

「えーー！！付き合ってあげてるっていつものバトルの事～？いつも少しは怒ってるんじゃ無かったの？！」

「ううん。全然。唯、面白がってるみたいだから期待に応えていただけ。時には相手のニーズに応えるのも大事でしょう」

以前にせりかが、本庄に言った言葉と同じ言葉を橘から聞くと微妙な気持ちになった。

「いつも先輩に暴言吐くから、止めようと思ってたんだよ？！」

「でも止めなかったのは、ニーズがあったからでしょう？伊藤先輩も、もしかするとみんなを楽しませようと思ってやってるのかも？だけどね」

「私以外はみんな楽しんではいるかもね～。でも、私も知らない人達の中に溶け込み易かったかもしれない！…伊藤先輩の計算なのかな？」

「聞く気はないけど、そうかもしれないよね～。今回の事でも思ったけど意外と面倒見がいいんだよ。伊藤先輩って」

「そうなんだ……橘君と少し似てるよね」

「えー！それは少し嫌だなぁ」

「そう？良い意味でだよ」

「ホントにー？怪しいけど」

「ごめん。少しだけ違うかも…」

「やっぱり…まあ、いいけどね。体育祭もある事だし、これからまた頑張らないとね？」

「そうだね！私達が会長、副会長になった時に、どう面白く変えるかもこっそり考えちゃおうか～？」

「それ、いいね！兄貴に、変える時のコツを聞いてみるよ。何か先生とかの落とし所を知ってると思うんだよね」

「そういえば顧問の先生って会った事無いけど誰なの？」

「今は三年一組の先生で、来年は俺達のクラスの担任がやるよ」

「なんだか効率いいねー！無駄に探さなくても会長たちが、朝夕会うから、滅多に現れなかったんだね」

「効率的なのって気分が良いよね？」

「そ、そうね。まあ気分は悪くはないけど…」

全体的に指名制といい、顧問といい、割り切りすぎてるんじゃ…この学校とせりかは思ったが、伝統の重みの前にはひれ伏すより他なかった。

30

「せりかさんお誕生日おめでとう！」

「ありがとう！！これってブリザードフラワー？！綺麗ねー！有難う。部屋に飾らせて貰うね！」

オレンジのバラが黄色とグラデーションになって小さな籠に入れられたもので、オレンジのバラが好きだと真綾に教えた覚えは無かったが、せりかの一番好きな色の花だった。

「お嬢、俺からはこれ。うちで食べて」

「うわーこれってスイスの有名な所の生チョコじゃない？すごーい！保冷剤も入ってるのね」

「溶けるからね。うちの母が食べたいって言い出したから丁度いいかと思って二つ買って同じのにしちゃったんだ」

「「せりか～お誕生日おめでとう！」」

美久と弘美もやって来て、「はい」と小さな紙袋をくれた。同じお店の袋なので、一緒に買ったのだろう。

橘も玲人と来て、「おめでとう！」といって美久達と同じ袋を出したので、せりかの目が丸くなった。

「開けてみてよ！せりか」

「うん。あっ！このペンダントってラピスラズリの四つ葉のクローバーだぁ！可愛いし、良い事ありそうな感じするよね」

ミッドナイトブルーのクローバーは、せりかの趣味に合わせてか色は結構渋いのだが、デザインが凝っていて、とってもいいと思った。

弘美がくれたのは同じシリーズのブレスレットで、クローバーの部分にラピスラズリとターコイズが斜めに配置してあるもので、美久がくれたネックレスよりも明るいくて、さわやかな感じだ。

最後に橘のくれた袋を開けてみると、美久のくれたネックレスのクローバーが小さくなったものに、水晶がアクセントで上に付いて、揺れるタイプのイヤリングだった。

「すごくびっくりしちゃう！可愛いねー♪橘君これって自分で買って来てくれたの？」

「うん。斎賀さんと森崎さんに聞いたら一緒に見に行こうって言ってくれて、これも二人が選んでくれたから、結構気に入って貰える自信はあったんだけど…」

「うん。すっごく私好みなデザインだし、ラピスラズリって癒しの効果があるっていうから、こんなに一杯あったら、癒されまくりだね。お揃いだから組み合わせても着けれそうだし、とっても素敵！みんな有難う！！」

「俺は重いから、うちで渡すから」

玲人がそう言った。なんだか色々貰ったのに、まだ楽しみが残って

いるのは嬉しい。

「私も玲人の用意してあるから、早いけど、早めの方が良いものだから今日渡しちゃうね！」

「玲人ももうすぐ誕生日か～！なんか用意するか～」

「橘くん、高坂君は他で沢山貰うんだから、良いよ！」

「美久、ひどいぞ！せりは、それでも毎年ちゃんとくれるのに！」

「それは、昔からだからでしょ！山の様に貰うんだから、私があげても、埋もれるだけだって！」

「まあ、無理には、いいよ」

「高坂って、誕生日、何時（いつ）？」本庄が聞くと玲人が答えた。

「三日後の五月三日」

「じゃあ、俺と真綾は何か、用意するよ。迷惑もかけたから、お詫びも兼ねて」

「いや、迷惑かけたのはこっちだから、止してくれ」

「じゃあ、普通に誕生日プレゼントにするよ。それなら受け取ってくれるだろう？椎名さんと一緒に食べられるお菓子にしておくから、今日のチョコレートも二人にって事にして貰って食べてよ」

「わかったわ！玲人、今日うちくるでしょ！生チョコ美味しいって

評判のところのなんだよ。一緒にお茶でもしながら食べようよ」

「わかった。本庄、有難う。やっぱり、あまり知らない奴から貰うプレゼントより嬉しいよ」

「俺も、祝日だから、前の日の帰りに、何か好きな物奢るよ」と橘が言った。

「ホント？ラッキー♪何にしようかな～」

玲人も先に楽しみが出来て嬉しそうだった。

それにしても気が重いのは玲人の誕生日に執り行われる事が決まった、両家族の食事会だ。もう、このくらいの大きな子供の誕生日会はキツイ！って思っているのだが、両家の平和の為には仕方が無い。でも最近は、玲人の小母さんが『お嫁に来て』って、酔うとしつこいのが、辛いところだ。はっきりと断れないから、『また冗談ばっかり！』とかなんとか言って煙（けむ）に巻くのだが…。

沢山のプレゼントを抱えてうちへ帰ると、お母さんに「良かったわね～お母さんからのは要らないかしらね？」と言い出したので、強く、強く否定して置いた。

部活が終わった玲人が、プレゼントを持って部屋にやってきたので、冷蔵庫から生チョコを出して、紅茶を入れる。玲人へのプレゼントは、もうラッピングして机の上に用意していた。

ふたりでチョコレートを口にいれた。

「「うまーい！」」

とろけるチョコレートは溶けて無くなってしまうのが惜しい程、美味しかった。

「ほっぺた落ちるね。これは」

「美味(うま)いなぁ！こんなに溶けるの早いのは初めて食べた！本庄ってすごいグルメなんだな」

「あっ、なんかねー、お母さんが食べたいって言ったから、ついでに同じ物にしてくれたらしいよ」

「そっかー！男のセレクトじゃないよな～。流石にこれは！」

紅茶を飲みながら、これ以上食べると食べ過ぎになる手前で、お母さん達にも残す事にした。手をウエットティッシュで拭いてから玲人にプレゼントを渡した。

「三日早いけどおめでとう！」

「せりも誕生日おめでとう！これ、前にせりが欲しいって言ってた奴だから」

「えー！なんだろう？……これって……」

二人で、一瞬無言になった。

玲人からのプレゼントの中身は、せりかが玲人にあげたものと全く一緒だった。

「せり、お前これ、自分も一緒に使えるからって選らんだだろう？！」

「玲人だってそうじゃないの？」

「俺は、せりが本屋で、この参考書、良いんだけど値段が張るから今月の本代じゃ買えないって言うから、誕生日も近かったし、プレゼントに丁度いいかと思ったんだよ」

「私だって勉強するのに、これ、解り易いから、いいなぁと思ったんだもん。玲人も勉強はかどるでしょう？部活も大変なんだからさっ」

とりあえず折角手に入れた参考書を片手に今日の復習をする事にした。

「せり、ここって如何してこういう答えになるのか理解出来ないんだけど…」

「ちょっと待ってね」

せりかは真新しい玲人に貰った方の参考書をぱらぱらと捲り、その解説箇所をみつけた。

「６５ページ見てみてー」

玲人はせりかに貰った参考書を開くと、成程！と思う、詳しく解り易い解説だった。

「二冊あるとやっぱり便利よねー！」

御機嫌なせりかに対して、一冊だったら、身を寄せて近くで見れたのに！と思ってしまった玲人は、この恋の成就がだいぶ遠いのを感じて項垂れた。

後日行われた食事会では、両家の親が落ち着いた日本料理屋の個室の座敷で、かなり酔ってしまい、せりかの父が「こんなに立派になった玲人君にならせりかをやってもいい」と言い出し玲人の小母さんを大変喜ばせ、宴会は前祝いさながらの大騒ぎとなった。

母からは、せりかに二日後、欲しくても手がとても届かなかったアナスイの財布が贈られる事になった。

30（後書き）

※ブリザーズドフラワーと本当は、いうらしいのですが、間違っていても日本では一般的に使われているブリザードフラワーを使いました。

31

「伊藤先輩も飽きませんねぇ～」

「せりかちゃんが可愛いからじゃ無いの？」

すごく美人な若宮に言われても納得感はゼロに限り無く近い。

結構この間の真綾の事件の収束で、伊藤が大活躍だったので、せりかは伊藤を見る目が変わっていたのだが、伊藤は相変わらず、せりかにプチセクハラもどきのちょっかいを掛けてくる。橘が居れば、彼に対する遊びで、事は済むのだが、少し趣向を変えたのか、いない時にちょっかいを掛けるようになって来た。

会長の若宮と会計の佐々岡百合（ささおかゆり）が止めてくれる事が増えたていたのだが、二人も最近は何を誤解したのか、「人の恋路を邪魔し過ぎるのもどうかと思うの」とか訳の分からない事を言い始めて、よっぽど目に余る時以外は干渉しなくなったのだ。せりかが伊藤や他のメンバーに慣れて来て逃げられる心配が無くなったと思っている所為か、何処か微笑ましく伊藤とせりかの攻防を見守る様になって来た。

今は、橘は書記の先輩達と体育祭用の備品のチェックに行っている。会長職は一応全部の把握が必要な為、彼はせりかよりも多忙だった。

せりかはパソコンでの書類の作成が多い。とはいっても、今回の橘達が使う、チェック項目がある文書を印刷したり、前年度のから日時を変えたり、と細かい変更をするのが主なので、ファイルの場所さえ、判ればそんなに大変な作業でもなかった。あとは、エクセルで予算の管理を引き継いでいるが、これは、連れてきた会計の子に

まかせるらしいが、副会長としてのせりかの把握して置かなければならない範疇らしい。「お金の事は二人以上でやるのが鉄則なのよ。変なトラブルになっても嫌だから」と佐々岡に言われて、納得した。今は会長の若宮とやっているが、本来は副会長の仕事なので、せりかになったら戻す事になった。

「せりかちゃんが色々、やってくれるから、橘は楽できそうだなー」

「それは、伊藤君がサボり過ぎるのよ。元々は、どっちが、会長の候補だったのか忘れているんじゃないの？」

「若宮の方が、適任そうだったから、前会長に進言しただけだけど？会長も俺よりも若宮の方が、安心だと思ったんじゃないのかな？」

「伊藤先輩が会長に成る筈だったんですか？」

「そうなのよ。せりかちゃんだって、女の会長なんて、どれだけの女傑なのって思っちゃったでしょう？」

「あ、はい。最初は女性の生徒会長さんは珍しいかなっとは思いましたけど、でも、生徒会の顔としては若宮先輩はぴったりだと思います！」

「ありがとう～！！なんだかそんなに優しい事言われた事って最近ないから泣きそうよ？」

「若宮には、みんな、いつも感謝してるって、なあ、佐々岡？」

「それは、伊藤には、春奈も言われたく無いんじゃないの～？嬉しさ半減どころかマイナスになるんじゃないの？」

「そうよ！百合のいう通りだわ！か弱い乙女を矢面に立たすなんて、男の風上にもおけないわ！橘君は、せりかちゃんにそんな事させそうに無いから安心ね！」

「そうですね。基本、橘くんは女性に優しいですから、会長職を押し付けてきたりは、しないと思います」

「せりかっち！それじゃあ、俺はすごく人で無しみたいじゃん」

とうとう、呼び名が、『せりかっち』になって来た。せりりんじゃないだけ良しとしよう…。

「人で無し迄は言ってないですよ！若宮先輩が、向いてらっしゃるから出来たことでしょうし、それで前会長も納得したんでしょうから。でも私には会長は無理なので、橘君も分かってくれてるだろうなってことですよ」

「せりかっちも言う様になったねぇー！お兄さんも鍛えた甲斐があったよ！」

「なんだか、愛のムチみたいに言われると全力で否定したくなるんですけど！！」

「いやいや、分かって貰えるまで、頑張らせてもらうからね♪先は、まだまだ長い事だし、手取り足とり教えてあげるからね！」

「伊藤君、今のは、完璧にイエローカード越えてるわよ！橘君がいたら、きっとカンカンよ！」

「そうですよ！橘君云々抜かしても、今のは、ちょっと悪寒が走りました……」

正直に言うと伊藤は笑い崩れた。怒ってくれていた筈の若宮や佐々岡まで、耐えきれなくて、噴き出したので、先輩に言うにしては言い過ぎたかと反省するせりかだった。

「いい！いいよ！せりかっち。悪寒って、マジで受けたわ」

「もしかして、言葉のチョイスを間違えました？気持ち悪いとかよりは気を使ったつもりだったんですけど」

堪え切れないと言う様に、若宮たちが、身体を捩って笑いだした。

「せりかちゃんって、最初の印象よりも面白いわよねぇー！！可愛いだけじゃ無いのがナイスよ！その「敬語で毒舌」はなかなか、いないキャラだと思うわー」

「もしかして、私、相当失礼な事をしちゃっているんじゃないですか？気を付けるんですみません」

「違うわよ！伊藤君のセクハラも軽くいなしてすごいなぁとは、思ってるけど、それをいい事に伊藤君がやり過ぎなのよ！それで、言葉選んで悪寒が走ったとかって、なかなか良いセンスしてるのがおかしかっただけよ！流石に伊藤君も内心、傷付いてるでしょう？貴方に靡く女の子ばっかりじゃ世の中無いのよ？」

「そんなに自惚れてないけど、正直悪寒はショックだなぁ！今迄、橘のブロックに遭ってきたけど、逆にこっちにダメージが来ない様にやってたんじゃないのかと思うくらいだよ」

「橘君って、気遣い屋さんだから、もしかするとそうなのかしらね〜」

と若宮はくすくすと笑いながら言った。二人に揃ってそう言われると、何も言えないせりかだったが、慣れて来て、こんな風に軽口をきける様になって来たという事だろうと、優しい先輩達を見ながら思った。

それから数日後、とうとう体育祭の本番になった。練習があった訳でもないので、本番というのはおかしいかもしれないが、せりか達は、各クラスの体育祭の実行委員のお仕事が、ちゃんと出来ているのか、チェックする役割をしていた。

去年の体育祭の時には、こんな風に見回っている人達がいるなんて知らなかった。分かってはいたが、華々しい部分だけが、目立ちがちだが、生徒会は、基本的に縁の下の力持ちなのだと思うが、せりかは、そういう事は嫌いじゃない。誰かにみて欲しいわけでは無く、自己満足の世界だと思う。だからこそ、自分達の遊びもいれて楽しめるのだ。ボランティアという訳でも無く、趣味に近いかなと思うが、口には、それこそ出せないと思った。

三学年による、クラス別の対抗リレー等、前々から練習をする様な得点の高い競技は春の体力測定の結果から、スカウトが来るので、（個人情報保護法はどうなってるのよ〜と思うが）今年もせりかに声が掛かった。生徒会の仕事があるから断ろうとしたが、やんわり

と橘に止められて、走る事になった。橘も、一緒にでは無いが、走者だ。一組は他に、若宮も伊藤も走るので、なんだか生徒会チームの様だった。

男子と女子と別れているので、混合にしたほうが盛り上がりそうだと、橘に言うと、「来年はそうしちゃおうか」と答えられた。先輩達も、来年は全然違う大会になるとは、夢にも思わないだろう！使う機材とかは、変えないで、如何に面白くなるか？白熱するか？盛り上がれるか？だけをモットーに変える算段を橘とちょこちょこと話合った。連絡用に持ってもいいと言われている携帯のメモ機能に打ち込んで置く事にするが、今は、誰にも見せられない為、ロックは普段よりも厳重に掛けた。これで、来年の体育祭が楽しみだ。橘と目を見合わせて微笑むが、お互いの笑みはかなり黒い。

結局、善戦するが、オール一組チームは三位だった。優勝チームは、何故かゴーヤの種が商品だった。ゴーヤって苦いよね？と思ったが、お手伝いする時にはもう決まっていたので、まあ、花も咲くし、実も家族とかには好きな人もいるだろうと思ったが、優勝チームの前の花壇は、ゴーヤを植えてもいい権利もプラスされて、ｅｃｏカーテンで涼しくなれるらしい。涼しいのは、一階の三年生だけでは？と思ったが、それは、上級生の特権らしい。

私達の時は一、二年生にも恩恵がいく、賞品にするとメモするが、しかし、今回のもなかなか面白い！と思う。時流にも乗っていて、シャレが利いている。これ以上に面白いものは、なかなか難しい様に思うが、それを考えるのも楽しみだとせりかは思った。

32（前書き）

少し短めです。

32

体育祭の後、暫くして行われた中間テストの結果が廊下に張りだされた。

せりかは、今回、たまたま掛けたヤマが当って結構良い出来だったので、御機嫌で結果を見に行くと、結果を見て固まってしまった。1年生の時は橘が不動の首位だった。今回もそうだろうと見ると怖ろしい事に、自分の名前のほうが先にあったのだ。……呆けてしまって言葉もない。

よくよく見ると、橘はたった1点差で2位だった。せりかは、あと1問取ってくれてさえいれば…と思わずには居られなかった。自分は首位等でなく、いつも2位から5位くらいをうろうろしているのに、橘の連勝記録を途絶えさせてしまった。

すぐに教室に戻ると、橘と本庄が「おめでとうー！」と手を振っていた。

「1点差だよ？勿体ない！！連勝記録が、かかってたのにー！」

「なんだか、お嬢が意味不明な事、言ってるけど…嬉しくなさそうだねぇ」

「それは、そうよ！競馬とかだって二冠とったら、三冠取って欲しいって思うの当然でしょう？調子がものすごく悪かったなら、諦めも付くけど一点差じゃ、収まりがつかないわ！」

「たちばなー、これ何て言ってるのか通訳出来る？お嬢さん、怒っ

てて言ってる事が理解不能なんだけど」

橘はふんわりと笑った。その顔に悔しさなど、何処にも無い。

「椎名さんは、俺に三冠馬になって欲しかったんだって！って競馬詳しいね。お父さんとかと、もしかしてテレビで見てたりして知ってるの？」

「うん。たまに大きなレースは一緒に見てる。もちろん賭けたりはしてないけど…」

「ははっ！お嬢、1位の喜びゼロなんだー！相変わらず難解な思考してるよなぁ！それに言うに事欠いて三冠馬って、既にうら若き乙女の言葉じゃないよ…」

「確かに！予想をことごとく裏切る所は椎名さんらしいけど、三冠馬になれ！！って言われたって言ったら、伊藤先輩とか笑い死にそうだな」

「…橘君は悔しくないの？！三冠馬からは離れてもらう事にして…ずっと首位だった訳でしょう？」

「それを、抜いた椎名さんが、言うのは、かなり可笑しいけど、俺は悔しくないよ。負けたのは椎名さんにだし、いつもより出来が悪かった訳でも無い。しかも、ずっと1位キープが当たり前って思われてるのもプレッシャーだから、良い機会かなって感じなんだよね」

「今回はきつかったよね～。部活も有るのに生徒会のお手伝いも有ったし…」

「生徒会は体育祭から、しばらくお休みだし、部活はいつもの事だしねー。別にいつも通りだよ。椎名さんが頑張った結果なんだから、喜んでよ。そんなに言うなら、期末は負けないであげるからさ」

「聞いた～！すごい宣言だなぁ。橘って何気に結構、俺様だよなー。今の言葉、絶対実行するのが、また小憎たらしい所なんだよなぁ」

「絶対、誰にも負けないでね！」

真剣に言うせりかに、橘は、苦笑しながら頷いた。多分、彼女は自分が彼を打ち負かしたという所はすっぽり抜け落ちている。しかし、次は相棒の期待に応えなければと橘は思ったが、本庄は既に、早々と思い出し笑いをして、涙を浮かべていた。

その後、クラスの皆から、橘を抜いた快挙をもてはやされるが、到って冷静に、「ヤマが当ってまぐれなの」と、低いテンションで返した。

「すごいじゃん！せりか！」

美久と弘美が、やって来てせりかを祝うが、「うん。ありがとう」と返して、嬉しそうに全くしない様子が心配になり、橘と本庄に相談に行くと、馬の事は普通の女子には分からないだろうと思った本庄が、かいつまんで、「次は1位になれ」と鬼コーチさながらの勢いで橘にせまっていた事を話すと、親友二人は、溜め息を吐いた。

「どうしてせりかって、頭良いのに、そんなに残念な子なのかしら？そこが、愛嬌っていう気もするけど、でもねぇ～」

「そうなんだけど、そこがお嬢さんの、キテレツで面白いところだから、良い所は伸ばしてあげようよ」

と言いながら、声が震えてしまっている本庄の言葉に説得力は殆ど無かった。

クラスの皆は、せりかの事をとても謙虚で慎ましいと、好ましく感じていたが、裏で鬼軍曹に豹変していた事は、極、限られた人間のみにしか、知らされなかった。

ちなみに５０位迄が張り出される、それは、１組の生徒には恐怖の張り紙だった。下位でクラスに入ったものは、２組の生徒に抜かされる事が、怖ろしいのだ。やっぱり１組の生徒が２人抜かれていたが、今更、クラスは変わらない。だからこそ、頑張るしかないのだが、それは、まだ、高校生の彼らには、かなり酷な事だった。

33

ある日のＬＨＲで委員長であるせりかと橘は教室の教壇に立って、修学旅行の説明をしていた。担任は横のパイプ椅子に座っている。

「行き先は北海道で四泊五日です」

「班行動があるので、四人一組でお願いします」

橘とせりかが交互に話す。

「班が決まったら、班長を決めて、点呼の時には、確認後、報告に来て下さい。人数の都合上、五人になってもかまいません」

「班長になった人は、班の人の氏名を書いて、こちらに提出してください。尚、班長はこの後も連絡係となりますので、宜しくお願いします」

ざわざわと皆で班を決めて、記入しだした。班長は押し付け合いに少しなっていたが、じゃんけんで決まったり、一番面倒見が良いものが、なってくれたりと、皆、マチマチの決め方で、記入をしていた。

せりか達の班は、せりか、玲人、橘、沙耶だった。美久達は、弘美と本庄と真綾で一組だった。

せりか達の班は、元一組の子達から、委員長チームとひやかされた。玲人と沙耶は元、一組委員長を一年やってきた。せりか達、二人は、新一組の委員長二人だからだった。

「班長は玲人がやって欲しいんだけど」

「忍じゃないのか？適任だろう？」

「橘くんは委員の仕事も被るから…玲人の方がいいと思うんだけど」

「分かった。沙耶も忍も俺が班長でいいのか？」

「もちろん。悪いな！」

「玲人君、よろしくね」

「じゃあ、俺のいう事をよく聞くよーに！！」

「「「はーい！」」」

委員長チームというと堅苦しい印象だが、内情はこんな感じだった。

小学生の遠足か？！と突っ込みたくなるが、明るい玲人が班長なのはこういう楽しい効果も産んだ。

美久達のところは当然のように紳士な本庄が、班長を引き受けた。

用紙を集め終えて、人数が合っているか確認して、説明を終えた。

帰ってから、玲人と恒例の勉強会を終えてから、旅行の話になった。

「修学旅行って二年生で行くのは知ってたけど早いよね！」

「まあ、こんなもんじゃないの？夏休み位から夏期講習とか受験モードになるから」

「遊べるのも今のうちって感じだねぇ」

「寂しいけど、そうだよな」

「北海道ってやっぱり寒いのかなぁ？」

「こっちよりは、寒いだろうけど、旅行の頃は過ごし易いくらいで丁度良いんじゃないの？こっちは雨ばっかりだし」

「楽しみだねー！」

「そうだな。中学の時と違って、私服だから、荷物増えそうだけどな」

「そうだよねぇ！カバンあったかな？！これを機会に買ってもらおうかな」

「俺も買おうと思ってたから、明日出掛けるか？」

「ジーンズとかも見たいんだけど、付き合ってくれる？」

「ああ、じゃあ、この間行った、ワールドポーターズがいいんじゃないか？あそこは、インポートものとかアウトレット価格だし」

「ついでに、上のインド料理屋で、久しぶりにカレー食べたいな。ナンも食べたいし！」

「そうだなぁ。それ、いいよなぁ！じゃあ、明日は十時に迎えに来るから」

「わかった。まってるね♪」

翌日、せりかは、お気に入りのローラアシュレイの水色のワンピースに紺の薄いカーディガンを羽織った。かばんは同じブランドのトートバッグを持った。

仕上げにＵＶの効いたファンデーションを軽く塗って、眉、アイシャドウ、グロスと、ワンピースに合わせて淡い色のお化粧を施した。

そして、美久から貰ったネックレスと橘からもらったイヤリングを付けた。弘美から貰ったブレスレットは、三つするとくどくなるので、しない事にした。ブレスレットは少し夏っぽいので、もう少ししたら、出番が増えるだろうと思う。

せりかは鏡の前でクルンと一周りして、出来に満足して、玲人が来るのを玄関で待った。

玲人がチャイムを鳴らしたので、五センチヒールの茶色の革のサンダルを、履いて、外に出た。

玲人はラフなシャツにストレートのジーンズをあわせたシンプルな装いだが、前に雑誌に載った、『ナチュラル系イケメン彼氏』とい

う見出しを思い出し、元が良ければ、シンプルでいいんだろうと結論を出す。却って、飾りたてるとナルシストっぽくなってしまって元の良さが損なわれてしまいそうだ。

「おはよう。天気が良くて、良かったなー」

「そうね。お出掛け日和ね」

と短く答えるせりかの顔を玲人は、なかなか直視出来なかった。いつも可愛いが、今日のせりは反則だと思う。ラビスラズリのイヤリングがゆらゆらと揺れて、それに気を取られて、真正面からいきなり顔を見てしまった。

玲人は、今自分の顔が、紅くなっていないか心配だった。必死に他の事を考えて意識を他に向けるが、せりかがじーと玲人をみつめて思考の波に?まれたので、少し安堵する。せりかの態度から察するに、玲人の不自然さには、気が付いていない。

「玲人は元がいいから、何を着ても似合うわよねー」

珍しく、玲人の外見を褒めてくれる事に不気味さを感じながらも、少し照れる。

せりかが、普段外見を褒めるのは、可愛い女の子か、橘忍くらいだ。忍は中身はとても腹黒いが、外見は、誰の目から見ても、一目で美しいと思わせる整った顔立ちに、華やかさが加わった迫力ある容姿の持ち主だ。それでも、あまり表立って騒がせない空気を醸し出していて、適度な距離を保って女子と接する為、皆から、観賞用等と失礼な事を言われているが、本人もそう望んでいるし、相手に無理な期待を抱かせないだけ、親切なのだろう。

俺は、今迄、あまり深く考えずに、みんなも自分も楽しくなれれば良いと思って行動して来た。その為に、マーヤに迷惑を掛けてしまった。

今は、それでもマーヤとの誤解を解く様に、頑張ってくれた女の子達には感謝していたし、応援されると気分も乗るので、声援にも快く応えている。愛想のいい俺を「みんなのもの」と言われているらしい事に気が付いた時には、少し呆れながらも女子の可愛い戯言だと思ったが、忍やせりかに言わせると、身の毛もよだつ恐い話なのだそうだ。俺の感覚が少しおかしいのかと、心配になるが、せりかや忍からは、羨ましいポジティブシンキングなのだから、玲人は玲人のままで良いと言われると、これでいいのかと疑問を抱えつつも現状維持だった。何をどう、変えたらいいのか分からないというのが正直なところだ。

一時はせりかの罪悪感から来ると思われる優しさに心が折れそうになったが、マーヤ達と出掛けた辺りから、そういう事が、無くなり、元のせりかに戻って一安心したら、忍のアドバイスは有り難いが、やはり今はまだ受け入れられない。落ち込む事も無くなった俺に、忍はそれ以上何も言わなかったし、自分の考えを押し付けてくる様な奴では無かったので、この事も現状維持状態だ。

そう考えると、何も自分が先に進めていないのでは無いかと焦った時期も少しあったが、考えすぎるのは性に合わないので、成り行きにまかせて流れてみるのもいいかと思っている。これが、せりか達のいう、楽天的なのか？と思うが自分の事は、なかなかよく分からない。今は玲人は玲人のままで良いと言ってくれた二人の親友の言葉を信じているだけだ。

それにしても今日のせりは可愛い！何時の間にこんなに大人っぽくなってしまったのかと思う。毎日会っているというのに、照れてしまって、顔をよくみれない。せりかに不審がられないうちに何とか態度を改めたいと思う。惚れた欲目を差し引いても、せりかは、可愛いと思うのだが、いくら言ってもせりか自身の自己評価が低いのが解せない。

あまり認めたくないが、あの忍と並んでも、お似合いと周りに思われる容姿で、なぜそれを自覚出来ないのだろう…と思うと数々のせりかへのアプローチしようとする男への妨害が、自覚を薄くしてしまったのではないかと薄らと思う。しかし、あの時は仕方がなかったのだから、今、褒めちぎって自覚してもらえばいい事だという考えに到った。そうだ！今からでも遅くは無い！

「せりかは、何を着ても、すごく可愛いよ！今日の格好もとてもよく似合ってる」

唐突に褒め出した俺を胡散臭げにみる様子に失敗しているのがわかる。

「どうしたの？変なものでも食べた？それともなにか後ろめたい事でもある訳？」

なんだか世の浮気夫の様な言われ様にがくんとする。しかし、思っている事を口にしているのだから、ここで、諦めてはいけない。

「いつも思ってた事を言っただけなのに、信じてくれない訳？」

「なんだか、気持ち悪いけど、買い物に急ごうよ…」

ナチュラルに滅多切りにされてずたぼろだったが、とにかくおしゃれをしたせりかと一緒に街を歩ける嬉しさで、足が軽やかになった。

せりかは、玲人のおかしな様子を取り敢えず見守る事にした。長い付き合いの中では色々あったので、この位の事は、許容の範囲内だった。

33（後書き）

玲人君奮闘記は次回へ続きます。

34

玲人と街を歩くといつもの事だが、女の子達が振りかえる。しばらく玲人に見惚れた後に、せりかの事を値踏みする様にみてくるのだ。

はっきりいってこの余り気分の良いものでは無い事態が発生しだしたのは、中学生の終わりころに、背がぐんぐん伸びて、逞しい肢体を玲人が手に入れた頃から起きだした。

その頃は、今以上に自意識過剰で傷付きやすいお年頃だったので、聞えよがしに「何～！隣の女、釣り合ってないよね～！どうみても」等と聞こえてくると流石に落ち込んで、食事も喉を通らなかった。

学校は、若干のやっかみはあっても、そこは慣れという物があって、事情も様子も相手も分かっているので、その様なひどい事を言われる事は無い。

街に出た時の容赦の無い言葉の方が、本当の事なのだろうとせりかはずっと思って来た。

今は、少し広い世界に出たせいか、世の中には綺麗な人達は沢山いるのだと橘や若宮などを思い浮かべ、自分がそうで無いとしても、いったいそれが何なのだろうか？と思う様になった。世の中普通の方が多く大半なのに、見ず知らずの人間にそれを咎められる筋合いなど何処にも無い。たとえ、知り合いだとしても皆無だが…。

そう考えれば、心無い言葉に傷付く方が馬鹿である。逆にあんただって全然普通じゃん！と言い返してやりたいくらいだ。

其処まで開き直った今は、玲人の横を堂々と歩き、値踏みの目は、侮蔑の視線で返す。こんなんだから、女王様などと思われてしまうのかもしれないが、こっちが視線を送れば、無遠慮に知らない人を値踏みした方の人間が、目を逸らすのだ。

たまにそういう良心も常識も遠慮の欠片も持ち合わせていない人種と出遭ってしまった時はとても嫌な女になってやる事にする。

「玲人〜、あっちの人がずっと見てるけど玲人の知り合いか何かかなー？」

と指指（ゆびさ）してやると真っ赤な顔で脱兎の如く逃げ出してしまう。我ながら、性格が悪いと思うが、色々と開き直った結果なので、此方が嫌な思いをした分、相手にもして貰わなければ、割に合わない。

これを美久や弘美も一緒の時にやると、「せりかもいい性格になったよね…」と言われるが、弘美はどうか分からないが、中学の時に悩んでいた事を知っている美久は、内心では常識知らずな女の撃退を快く感じている事を知っている。もうちょっと甘い処置の時は、不満そうにしている。せりかだって鬼では無い。相手の様子で、悪意度を見極める。

一番マックスは、じっと見て来る事を止めない子達に「何か？！お知り合いでしたか？」と玲人に言わせ、（ここは、玲人は純粋に疑問系で聞きに行く。なんかじっと見てて恐いけど、もしかして知り合いかもしれないし！などと唆（そそのか）す）玲人が声を掛けてくれた事に喜んで黄色い声をあげた所で、美久に「やだー！ストーカーもどきだったの？！やっぱり知らない人達だったんだー！恐―い！やっぱりそういう人って本当にいるんだねぇー！」とキャラに無い高く透る声で叫ぶと、どんなに無遠慮にこちらにあれこれ言ってきていたと

しても玲人の前から綺麗に消え去る。

玲人も初めの頃こそ、せりかが神経質で恐がっていると思った様だが、最近は、はっきり制裁だと分かっているので行くのを断ってくるが、「元々の元凶に断る権利なんてあると思ってるの？私が言ってもいいけど修羅場っても知らないからね！」というと渋々三文芝居に付き合ってくれる。美久と弘美にプチ悪魔の所業と言われるのは、この辺りが所以（ゆえん）だろう。

もちろん此処までやる事は殆ど無い。私が、というよりも美久や弘美が隣にいて、被害に遭うと一気に沸点が低くなって数回やっただけだ。実際騒いだ此方も恥しいが怒りのが上回る場合のみの最終手段だ。

こんな気の強い、しかも腹黒くなってしまった女を今でも玲人は好きなのだろうか？と思ってしまう。普通は、幻滅してもいい筈だが、多分長い付き合いで良い所ばかりを見て来た訳ではないので、幻滅する事は難しいのだろう。元々が幻想ありきで、幻滅が対で存在しているのだから…。

しかし、今日の玲人は、やたらと可愛いと褒めてくるので、催眠術でもかけられたのか？！と思ってしまうが、そんな奇特な催眠術を掛けるような人は存在しない。と思った傍から、本庄か？と疑いが向いてしまう。彼ならその位の事が出来そうだ。しかし、橘と違って面白そうだからという理由だけで、悪乗りする性格でも無い事を思えば、今思った事は、完全に濡れ衣だろう。

じゃあ、そうなると正気かー！今日の仕上がり具合が、とてもいいのか？もしくはラピスラズリのおかげかなぁと美久達を拝む気持ち

になる。橘だって、これを買うのにかわいい店に美久と弘美に引き摺りまわされたらしいから、かなり感謝しなければならない有り難い石だと思う。引き摺りまわした件は美久が教えてくれたが、王子は嫌な顔ひとつ見せなかったらしい。さすが、私と被っている被り物の厚さがちがうなぁと思ってしまったのだが、イヤリングを見ながら、そう思った事を懺悔したのだった。元々は、私の為であったと…。

その有り難い石の効果か今日の私はまあまあ、可愛いらしい！最初は気味悪かった玲人の賛辞も、そう思うと段々、受け入れられるようになって来た。私がニコニコしだすと玲人も嬉しそうに微笑む。なんだか、まるで恋人同士の様で、少し落ち着かないむず痒い気分になった。

「俺、スニーカー見たいんだけど、せりは、どうする？」

「じゃあ、こっちの靴の方で待ってる」

どこが、そんなに違うのか理解ができないのだが、男の子のスニーカー選びは時間が長いのだ。一緒に見ていても違いが良くわからないので、靴をみる事にする。

「ねえねえ！あの人格好良くない？」

「ホントだー！！めっちゃイケメンじゃん！芸能人ばりにカッコイイよ」

「一人で、来てるのかなぁ？声掛けてみる？」

玲人の事を言っているのだろうと思われる声が私の横の方で聞こえる。こういう時に思うのは、自分に被害が無いので、唯、感心してしまう。知らない人がイケメンだからといって声を掛ける勇気は私には無い。しかも顔がいい人イコール良い人とは限らない。変な所に連れていかれたら如何するつもりなのだろうか？と思うと違う意味でも勇気があるなぁと思う。

「お姉さん、一人でお買い物？良かったら、一緒に飯でも食わない？」

なんだか、同じ年くらいの男が声を掛けて来た。お姉さんと私を呼ぶが、年下という訳では無いだろうと腹が立つ。人間、年下には甘くなりがちでガードも緩むとでも思っているのだろうか？

「いいえ、連れが、居ますのですみません」

きっぱり断るが、仲間がガラスの向こうにいるのが見える。

「えー！お友達と一緒でもいいからさぁー！あっちで先輩が可愛い子がいるから連れて来いっていうんだよ！俺の顔を立てると思ってお願い！」

知り合いでもない人の顔を立てなきゃならない意味が、まったく不明である。「悪いけど」と言って立ち去ろうとしたら腕をつかまれた。

「マジでお願い！奢るし、先輩から怒られちゃうんだよ。俺が！」

本当に怒られて困るのかもしれないが、私の知った事では無いし、掴まれた腕が気持ち悪い。

「せり！！」

玲人が気が付いて、戻って来てくれたので、助かった！

「お前、離せよ！気安くせりに触ってんじゃねーよ！！」

「なんだとー！！」

と威勢よく振り返った男の顔が強張った。玲人を見て、勝ち目が無いと分かったらしい。そうだよねぇー。仲間がいて、例え腕っ節で敵うとしたとしても、こんなにイケメン君と人目のある所で女性の取り合いをすれば、まわりから嗤われるのは目にみえてるもんねぇ。ご愁傷様！

「オトコ連れなら早くそう言えよ！！」

と捨て台詞を吐いて仲間の方に走って行ってしまった。見ていた先輩達も許してくれるんじゃないの？良かったわねと思い、見送った。

「大丈夫か？！せりも早く大きな声だして俺の事呼べよ！！」

「うん。まさに呼ぼうかと思った所で玲人が気が付いてくれたから良かった！助かったよ～！なんか先輩に連れて来いって言われてるからお願いってシツコイんだもん！」

「それは、同情を買う常套句なんだよ。本当にそうなんだろうけど、ナンパに失敗したからって、一緒に遊ぶほど親しい先輩が怒ったり

しないよ」

「成程ねぇ！そんな同情心、湧かない女に声掛けちゃって運が悪いわね！私も早くに連れが男の人だって言えば良かったんだよね。でも例え女の子と一緒の時でも行かないから、そういう断り方は違う気がしたのよね～。そうしてたら、相手が仲間がいる所為か気が大きくなってた感じで強引だったのよ」

「恐かっただろう？！ごめんな。せりが、早口で喋る時は、動揺してる時だもんなぁ。本当にごめん！」

「もう、やだなー！そういうの判っても見逃してくれてもいいじゃん…玲人のバカ！」

こういう時に判ってしまう幼馴染って本当に嫌だ…。本庄君の墓穴を指摘した時は、わざわざ言うなっていったじゃないの！玲人だって今はスル―してくれるトコじゃないんですか？！って言いたいけど、やっぱり安堵感の方が大きくて、憎まれ口を叩けない。腕を掴まれた時は、本当に恐かった。今迄で、こんなに執拗なナンパは初めてだった。女の子だけでいても、みんなでごめんなさいと誘いに乗る気が無い事を知らせれば、割とさっさと次に行ってくれた。

「俺が、馬鹿だったよ。せりを置いていくんじゃなかった。可愛いせりが、一人でいて声掛けられない訳ないよなぁ」

また今日の得意の可愛いが出た！と思ったが玲人の反省した様子にそこを突っ込む事は出来なかった。

「玲人が来てくれて、大丈夫だったんだから、買い物続けようよ。スニーカー決まったの？」

「あー！会計しようとしてた所だから、戻らなきゃっ！」

少し慌てた様子で売り場に戻ると店員さんが、商品を持って待っていてくれた。

「すみません！急に居なくなってしまって」

「いえいえ、彼女が可愛いと少しでも放って置けなくて大変ですよねー！」

彼女じゃないけど、店員さんに否定するのも無意味だし、おかしい。

「なんか、性質の悪いのに絡まれちゃったらしくて、騒いでしまってすみません。お会計途中だったのお願いできますか？」

「かしこまりました。お包み致しますので、少々お待ち下さい。あと、こちらサービスでお付けしていますので選んで下さいね」

それはシュシュが籠に沢山入っていた。せりかに合いそうなオフホワイトのものを選んで、せりかに投げた。

「珍しいおまけですね！」

「最近ジョガーが増えて来て女性のお客様も多いんですよ。走る時に、髪を縛るものがあると喜ばれるんですよ！」

「もしかして、女性限定のサービスですか？」

「いいえ、好評なので、彼女連れの方にもしていますから」

「そうなんですか。ありがとうございます」

せりかも買ってないのに貰ってしまったので、ペコリと頭を下げた。

それから目的の鞄屋さんに行き、一番荷物が入りそうなスポーツバッグを手に取った。

「ガラガラって訳にも行かないわよね」

「そうだな。今、持ってるの、黒だと使いやすいけど、黒の奴が多いから違うやつにするか、バンダナでも目印に巻いておいた方がいいぞ」

「うん。でも黒が、やっぱり気に入ったから、これにして何か付けとく事にしようかな」

「俺も、これがいいなぁ！結構入りそうだもんな」

「お揃いって笑われるわよ！いい年して…」

「こんなのみんな似てるんだから、気にしないよ。俺も黒にしよう！サッカー部の合宿とかにも使えそうだしな！」

二人で会計にいった。被害妄想かもしれないが、『ラブラブですね～』と店員さんの目が言っている気がした。お揃いを止めれば良かったのだが、私が違うのを買うのはなんだかくやしい。店員さんも

悪気は無いのだろうと思うが、少し恥かしかった。

34（後書き）

いろいろトラブルでお買物が終わりません。せりかちゃん救出で、玲人の株は上がったのでしょうか？

35

せりかは、お目当てのジーンズを一本とトップスを旅行用に購入した。

それから、玲人とインド料理屋に入って、二種類ずつ選べるので、違うカレーを頼んで、分け合いながら食べる事にする。飲み物は勿論チャイだ。

「チキンカレーとキーマカレー、それにマッシュルームとほうれん草のカレーにマトンカレーでしょう？四種類食べれて得した気分だよね！」

せりかが言うと、ナンをほうばりながら玲人も頷いた。なんだか玲人といるとホッとする自分がいる。彼への気持ちは間違いなく親愛だ。父と母と同じくらい玲人が大事だと思う。

ほんわかとした気持ちの裏側で、時を経ても玲人とは、きっと恋愛には、なり得ないだろうと思う自分がいた。一緒にいる事は容易いし、楽しい。もしも将来、今の気持ちのまま結婚をしたとしても深い家族愛が最初からそこに、存在するのだから、せりかの両親や、玲人の両親のような、良好な関係を築くことは可能だと思う。だからこそ、玲人も告白して来た時点で結婚という、いろいろな事をすっ飛ばした、突拍子も無い事を言えたのだと思うし、その時の将来設計に自分とせりかが人生を共にする選択を、違和感無く、思い浮かべる事が出来たのだろう。

あの観覧車に乗った日に、本庄に「彼の気持ちは彼のものだ」と諭

されてから、見えて来たものがある。多分、せりかの方が、手を取るか離さない限り、ずっと今のままだと言う事だ。それに罪悪感はもう持っていないが、このままで良いとも思わない。

こうして、二人で家族の様に食事をしていると、実際に家族に成ったかの様な錯覚に陥りそうになってしまう。

しかし、玲人の手を取れるか…というとそれは、多分無理だ……。せりか自身が本庄を好きだという事も前提としてはある。しかし、それ自体も相手の優しさに浸っている状態で、決して真綾の事を裏切らない本庄を思い続ける事は、段々と苦しくなって来てしまうだろう。

自分の本庄への気持ちも、この優しい状態を良い事に続けていく事は、やめるべきだと思う。

玲人が、気持ちを受け入れないのなら、離れると言ったのを酷く責めて引き止めてしまったが、玲人がせりかに対して、親愛とは別の感情がある事を思えば、怒って拗ねてしまった自分は、とても無神経な子供であったと今は、判る。報われない恋を近くでみていなくてはならない事を強いる事は、とても残酷な事だった。

玲人は、今、如何したいと思っているのだろうか?目の前にいても、気持ちが明確に見える訳では無い。今迄、関係を壊したくなくて、避けてきてしまった事柄だが、ちゃんと聞いてみて、話合う必要があると思った。

唐突だとは、思ったが、玲人に聞いてみよう…と覚悟を決める。

「突然で、カレーを食べながら、聞く話では、無いと思うんだけど、

これから玲人は、どうしたいと思っているの？」

「……如何いう意味で？」

少し玲人の視線がきつくなった。たぶんこちらのいわんとする事が、解っていても、明確にはっきりとした言葉で話さなくてはいけないのだろう。

「…私達の関係が、このままの状態なのを、どう思っているの？」

「それは、せりも言っていたけど、もう少し、大人になって、それから考えてもいいと思ってるよ。せりの事を待ってるつもりはないけど、その時にお互い付き合ってる相手がいなかったら、その時は俺達の事を、考えてもいいんじゃないかと思ってる」

それは、せりかの望んでいる……模範的な解答に思えた。実際に半年以上前に、せりかが、口にした酷な言葉だった。

待ってるつもりは、無いと言ってくれるのは、プレッシャーをかけたくないからそう言ってくれるが、あの時の言葉のまま、返してくれる玲人の気持ちは、まだ止まったままなのだろう。

「私は一度いろいろな事をリセットしたいと思ってる。本庄くんを想うことを、もうやめたいと思うの。玲人の事は、玲人が決める事だけど、……私は、新たな恋をしたいと思っているの」

「それは、やっぱり、どんなに俺が、変わったとしても受け入れてくれないっていう事なのか？」

「今日、いろいろあったでしょう？玲人といるとホッとして安心す

るし、楽しいけど、それは、こっちの勝手な言い分が生み出した結果じゃない？玲人が告白してくれた重さを、多分、私はあの時、判ってなかったと思う。…離れると言ったのを怒ってしまった自分の勝手さに今は、後悔しているの……その後悔こそが、勝手なのも分かってるけど、でもその方が、正しい道だったのが、今になって分かって来たの…玲人が言った事の意味が今は、理解出来るのよ…」

「本庄を諦めるなら、俺のところに来てくれ…。絶対に後悔させないから……」

「…それは、出来ない。多分この先も無理だと思う。玲人には、違う種類の気持ちが強すぎて、恋情にならないって、玲人とこうやって、家族みたいな事をする度に思い知らされるの。何度も玲人との将来を考えたけど、それは、共に歩いていけても玲人の望む気持ちを返せない。最初はそれでもいいかもしれないけど、段々と辛くなるのは目に見えてるよ」

「……せりを、変なやつに任せるくらいなら、辛くなってもかまわない！！」

「それは、私が、構うの！私に言われたくないかもしれないけど、玲人には、幸せになってもらいたいし、玲人は多分、私の事がなければ、当然のように幸せを手に出来る人だと思うの！勝手に聞こえると思うけど、同情とか後ろめたい気持ちから言っている訳では、無いの！それに、玲人には玲人の気持ちがある様に、私にも私の思いがあるのよ……あの時我儘な勝手を言った私に、今の気持ちを玲人に理解してって思うのは……おかしいって思うし、玲人も私を詰りたい気持ちになると思うけど、それは、覚悟して言ってるの。ごめんなさい…」

「……せりは、俺に悪いと思っているんだよな？」

「貰った気持ちに対しては思っていないけど、子供っぽい感情で、玲人にも家族愛を強要した事は、とても悪かったと思ってるわ……」

「じゃあ、ひとつだけ、俺のいう事を聞いて欲しい」

「……何？！」

「俺以外のやつと付き合う選択をするんなら、忍と付き合ってくれ…」

「！！それは、出来ないよ。玲人だって無茶な事を言ってるのわかるでしょう？」

「せり、…俺にだってせりに、家族の様に思う気持ちもあるんだよ。自分よりも、せりを幸せに出来る奴にしか、せりの事、渡せないよ…」

せりかは、困って黙り込んだ。玲人の言いたい事も解るが、それは、押し付けだ。しかし、せりかが、玲人の気持ちを何も汲む事が出来ないというのは、今の段階ではいう事は出来ない。

黙ってしまったせりかに、「それ以外の道は認めないから」と、もう一度言った。勝手だし、相手の気持ちも無視だし、……でも無理難題を押し付けて困らせようとしている訳ではない事は、さすがに判る。玲人の譲れるギリギリのところが其処だと言う事だ…。

返事ができないまま、ふたり無言で、家に帰った。気まずくは無い

といったら嘘になるが、不思議と険悪な雰囲気には成らなかった。

36

結局、玲人の無茶振りを無視した訳では、ないが、ＹＥＳと言える訳も無い。せりかが、唐突にあんな話をしだしてしまったので、（しかもインドカレーを食べながら出来る話じゃ無かった！）玲人もいきなり自分達の関係を考えるような話になってしまうとは思って居なかっただろうから、動揺してあんな事を言い出したのだと思い、少し落ち着いてから、玲人のほうから話を撤回してくれるのを待っていた。なのに何故?!教室でいきなり、

「せりー、忍が付き合ってくれるってー！」

声も高らかに、クラスの皆さんに橘くんとのお付き合いが決まった事を知らされなければならないのだろう?

「橘君、玲人が変な事言ってるみたいだけど?…どうして?」

「うん。玲人から、大体のところの話は聞いたから、いいよって言ったんだけど?」

「いいよっ?!てそんなに簡単にオッケーしちゃだめでしょう?!もうちょっとちゃんと!!ものごと考えようよ!」

「だってー、玲人公認で、小舅様から、直々に椎名さんをお願いって言われたのに、せっかくのチャンス断る訳が無いでしょう?」

このぉー!腹黒王子なにを企んでやがる?!目ジカラで訴えるが、王子はどこ吹く風だ……。

「橘くんが何を聞いたか分からないけど、そんな無理な話、断ってくれて大丈夫だから！」

少し、私達の遣り取りを見守っていた美久が声を掛けてきた。

「どうしたの？橘くんとせりかが付き合う事になったの？！」

「なってないから！！美久！玲人と橘くんが冗談言ってるだけだよー！」

「し・い・な・さん？照れて否定しなくてもいいから……」

今の言い方は、余計な事を言うなと言っている。しかし、ここで肯定しては、私の新たな『普通の彼氏を探そう計画』が、益々遠のいていってしまう。

「でも……」

「はいはい、せりは黙って言う事聞いて？せっかく忍が良いって言ってるんだから付き合っちゃえよ。な？」

玲人、あんた、何時からそんな性格に…。一昨日の事が、大きく影響してるのは分かるけど、娘に見合い持ってくるお父さんじゃ無いんだから！お前の相手は俺が、決める！みたいなのっておかしいでしょう？どう考えても……。

確かに私は、玲人に家族愛のような関係を以前に強要してしまったし、今も出来たら、そうして欲しいっていう気持ちもある。でもそれはプチお父さんになって自分が認めた彼氏を連れてきて欲しかった訳じゃない。私達の関係を見直そうっていう話だった筈だ。

橘君は、いったいどういうつもりなのか?狸の考えている事が読めない……。

「じゃあ、玲人君がキューピットで、橘くんとせりかちゃんが、付き合うの?」

「そう!せりは男を見る目が無いから、俺が、ちょっと強引にくっつけてやったんだ!」

それは、玲人も橘くんも断ってしまった私に、男性を見る目がないのは、確かだろう。しかし…。

「玲人、そのジャイアンみたいな発言はどうかと思うんだけど……」

今、玲人に対して強く出られない私は遠慮しながら、発言にクレームをつけさせて貰う。

隣に来た、沙耶に少し困った顔を向けると、理由はよくわからないが、玲人の強引な行動に、橘君は、おいといて、私が困ってしまっているのは、分かってくれた様だ。

「玲人君の強引な勧誘に、せりかちゃん困ってるよ~!いくら幼馴染でも、彼氏に、自分の友達を推薦するのは、おかしく無―い?もちろん橘君だったら文句の付けようは無いと思うけど…」

後半部分は、橘に気を使って言った言葉だろう…。沙耶ちゃんありがとう!わたしが言いたかった事をそのまま言ってくれた!と心の中で拍手を贈る。

「沙耶だって忍なら、文句無しなわけだろう?それで、うまく纏まったらいいんじゃないのか?俺だって、せりが片付かないと心配で、彼女もおちおち作れないよ」

「…それは、勝手に作ってくれて良いから……その、心配性なプチお父さんみたいなのやめてよー!自分の事は自分でするから…橘君だって巻きこまれて迷惑してるでしょう!」

「別に、俺の事は気にしなくていいから。せっかくの玲人の推薦だし、修旅前で、俺もそろそろ彼女が欲しいなぁと思ってたから、気にしないで!」

あんたが気にしろ!!と睨むが、さわやかに微笑む、腹黒の年季の入り方も違う橘に、口で敵う訳も無い。玲人より、やっかいなのが来てしまった。玲人には、色々な罪悪感から強く言えないだけで、後から話せば何とかなるだろうと思ったのだが。(玲人を馬鹿にしている訳ではない。むしろ裏に含む所がないからなんとかなると言うのは、良い意味であったりする…)

「そんな…気にするよ!そんな安易に決めなくても…ねぇ?」

「安易って訳じゃないから!俺だって誰でも良い訳じゃ無いし、椎名さんとは気ごころしれてるから、ベストかな~ってちゃんと考えてるから大丈夫だよ?」

気ごころ知り過ぎだから、『此処で逆らわない方がいいよ』って言う裏のお言葉が聞こえて、眩暈(めまい)がした。彼にまかせておけば大抵の事はうまく行くって分かっているけど、大丈夫なんだろうか?って大丈夫な筈、今回に限っては無いでしょ!!

37

今日は、珍しく若宮から、生徒会のお手伝いの声が掛かったので、昼食はそちらで取る事になった。

昨日は玲人の強引な行動に吃驚したが、橘の了解を何て言って取ったのかを、いくら聞いても教えてくれなかった。

幸い、せりかの困惑の様子を見て取った、沙耶が、「とにかく強引にせりかちゃんの彼氏は、橘君って決めるのは、いくら何でも選択肢が無さ過ぎだから、保留にしてあげなさい！！」と玲人を叱ってくれたので、あの後は、なんとか収拾がついた。

玲人と長い間、組んでいただけあって、沙耶は自由人な玲人の扱いに慣れているし、玲人も色々と世話になっているので、頭が上がらないお姉さんの様な存在なのだ。しかし、普段の穏やかな性格から、あんなにはっきりと玲人を叱った事等、今迄無かった。やんわりと苦言を呈していただけの様に思う。

友の厚意が、せりかの窮地を救ってくれた…。沙耶にはあの後、沢山、お礼を言ったが、突然の玲人の暴走の原因を聞かないでくれた。何か有ったのは、想像に難くない筈だったが、こちらからの、相談が無い以上、踏み込んでこない沙耶の優しさがせりかの心に沁みた。玲人が、せりかの事を真の意味で許してくれて、この騒動が治まったら、沙耶には本当の事を話そうと思う。

橘には、近寄らない様にしてあの後、一日を過ごした。周りに付き

合っていると周知されてしまったらもう、逃げ場が無い。いつも殆んど一緒なのに却って不自然では有ったが、周りにも、玲人と橘が、せりかをからかって居るだけ…というのには苦しい状況だが、それでもせりかが困るのを分かっていて、玲人の言う事を受け入れた橘の傍に居たく無かった。

いつもは一緒に生徒会室まで橘と行くが、今日は、直ぐに教室を出て、一人で生徒会室に向かった。

丁度入口のところで、若宮と伊藤と会った。

「ごめんなさいね。急に呼んでしまって…」

「いいえ。用事など特に無いですし、大丈夫ですよ！」

中に入って昼食を食べ始めた。

「今日は、せりかちゃんにしか声を掛けてないから橘君はこないから」

安心してっていう笑顔でせりかを見るっていう事は、三年生にまで、昨日の事が伝わっているのだろうか?！と思い、驚愕の表情を向けると若宮は軽く首を振った。

「大丈夫よ！噂で聞いた訳ではないから」

ホッとして力が抜けるが、昨日の一件を若宮は知っているようだ。

「伊藤くんから、聞いたのよ。サッカー部では、少し話題になった

らしいの…」

驚いて、伊藤の方を見ると、伊藤は、いつものからかいの色のある笑みを見せた。

「俺が聞いたのは、せりかっちが彼氏募集中で、玲人が幼馴染で過保護にも、橘と無理やりくっつけようとしてるから、自分達も立候補したいって言ってる部員がいて、揉めるまでは行かないけど、玲人に詰め寄ってたんだよ。俺からすると、玲人にせりかっちの彼氏を決める権利があるのかって言ったら、まさか無いだろうから、せりかっちの事、気に入ってるなら自分で直接行けって、言ってやったんだ！だから、急にそういうのが、うようよ告白に来られたら吃驚すると思って、今日は、此処に来てもらったんだ。昼休みとか教室にいるとやばいからさぁ！」

「……有難うございます」

「何で、玲人がせりかっちの彼氏選定委員みたいになってるのかは、分からないけど、どうせ、玲人が誤解して、仲を取り持ってやろうとかって盛り上がっちゃったってトコだろう？玲人ってそういうお祭りっぽいの好きだからさぁ！でも俺とかは、二人の関係見てるから、ちょっと解せないっていうか、妙な物を感じたから、この間のお友達みたいな騒ぎになる前に話を聞いておこうと思って来てもらったんだけど、もしかして話したく無い事だったら、無理には、いいから聞かないけど、でも、力になれる事もあるかもしれないから、他の奴に絶対に洩らさないって誓うから、話せる部分だけでも話してみてくれないかな？」

せりかは、真綾の事件を収めてくれた、伊藤が、此処まで真剣に言

ってくれているのに、誤魔化したりなど出来る筈も無かった。

「実は、玲人と橘君には、半年くらい前に告白されて、それを断っているんです。好きな、人が居るので…」

さすがにせりかの告白の内容は二人の予想を超える物だったようで驚きに伊藤と若宮は、顔を見合わせた。

「でも、好きな人には、好きになった時点で、もう彼女がいたので…気持ちだけは伝えたんですけど、結局振られてしまったんです」

まあ、判っていた事だし、当たり前なんですけど…と付け加える。

「それは、せりかちゃんも辛かったわね。友達二人に告白されて、断るのも、辛いし、恋人のいる人を好きになっちゃうのも…ねぇ」

「それで、あの二人共、振っちゃうほど、いい奴なんだ?その好きな奴って?」

「はい…。それで、私はまだ、彼の事が好きなんです」

「はぁ〜?!半年も前に振られた彼女持ちの事を???」

「しつこいですよね〜!自分でもそう思ってますし、気持ちも最初の頃より、ドロドロして来ちゃって、流石にもう諦めなくちゃいけないと思い始めて…それで、新たな恋を探そうかなと思う。と言う様な事を、玲人に話したんです」

「その、好きな奴って、近くにいる人なの?」

「はい。同じクラスで、彼女の方も同じクラスで友達なんですけど、彼女は私の気持ちは知りません。彼女はこの間、玲人と噂になって助けてもらった子なんです」

「「！！」」

「その位近い距離にいるので、たまに無性に彼女が羨ましくなってしまったりする自分が嫌なんです。無理やり恋愛するっていうのは、おかしい事なのは判るんです。でも……」

「それで、玲人が、橘を無理やり勧めて来た訳ね。…アイツよく自分が立候補しなかったなぁ？」

「それは、されたんですけど、」

「「やっぱりされたんだ！」」

「でも玲人は私にとっては家族と同列の存在なので、恋愛対象にどうしても見れないって断ったんです」

「「……」」

二人は玲人が可哀想過ぎて黙ってしまった。ずっと長い事、思っていた幼馴染に二度振られるだけでもかなりの事なのに、その上、彼女には、恋愛対象から外されるって、望みが無さ過ぎて不憫過ぎる。

「そうしたら、玲人が橘君にしか私を任せたくないから、橘君と付き合えって無茶な事を言い出して…余りにも無茶だったんで、相手もある事だし、撤回してくれるの待ったんです」

「うーん、たしかに玲人はちょっとネジ跳んじゃってるねー。そりゃあ、ちょっと無茶苦茶だよな！橘だって半年前に断っちゃってるんだろう？」

「はい。でも、昨日いきなり玲人がみんなの前で「忍が付き合ってくれるって！」って勝手に承諾を取り付けて来ちゃって…もう、あの猪突猛進な玲人が、何と言って、橘くんを口説いたんだか分かりませんが、結果玲人の思惑どおりという事になりそうだったんです。無理やり、外堀埋められて……！」

「結果、助かったって感じだけど…サッカー部の後輩達の間じゃ、『椎名さん争奪戦』が繰り広げられてるよ。他に飛び火しない様に、ライバル増やすなよ？！って他に言わないように一応言い含めておいたから、今のところはサッカー部内の一部だけの話なんだけど…」

「一応、友達が、ネジ跳んだ玲人の強引な行動を、おかしく感じたみたいで止めてくれて、保留って事になったんです。でも玲人を止められる子ってその子か橘くん位なので、片方はもう、向こうとグルなので、その子が止めてくれなかったら、募集中どころの話じゃ無くて、私は、橘君の彼女って噂が、ぱぁーっと流れてますよ！！」

せりかがそういうと不謹慎だが、伊藤が吹き出した。

「グルって、あれだけ仲良いじゃん。せりかっちと橘って…」

「兎に角、あんな裏切り者知りません！私は、普通の人がいいんです！橘くんの彼女なんて称号貰っちゃった後じゃあ、普通の恋愛なんて夢のまた夢です！彼だって分かってる筈なのに、いけしゃあしゃあと、『気にしないで、大丈夫、自分も丁度修学旅行前で彼女が欲しかったし…』とかって最もらしい嘘八百言っちゃって、真っ黒

な笑顔で、私が否定しようとするのを止めるんです！」

すこし、興奮して、橘への怒りを露わにするせりかに、二人も同情の目を向けた。

橘忍、……あの天使のような風貌で、やる事が黒過ぎる…。元々、そういう種類の人間であろう事は、若宮と伊藤は判っていたからこそ、会長候補にしたのだが、実際に身内のように思っている、せりかに、実害が及ぶと、話は変わってくる。会長として必要な資質とは、全くの別の話だ。

「あのっ！！サッカー部のその、私の彼氏に立候補してくれそうな奇特な方々の中で、橘くんと張り合えそうな人っています？！勿論、顔じゃなくて、腹黒さ加減でっ！」

二人は可哀想な子を見る様な目で、せりかの事をみつめた。

この可愛い子の彼氏が、橘に勝てる腹黒いのが決定打になるって、それは、玲人じゃなくても止めたくなるだろう！二人もせりかの事が心配になって来て、玲人の気持ちが少しというか、大分解る気がした。橘も、そうだから引き受けたんじゃないのか？と先程まで、棚ぼたをうまく利用する腹黒王子の図…から、考えを改めた。

「とにかく、橘に敵う腹黒くんと付き合おうなんてチャレンジャーな事は、止めて、もう少し落ち着こうよ…。ね？！」

「そうよ。せりかちゃん！自棄になっちゃ駄目よ！」

自棄になった覚えは何処にもないのだが、先輩達が必死で止めるので、取り敢えずコクンと頷いた。伊藤が玲人と橘に一応、釘を刺し

てくれるという話になったが、既に、せりかの彼氏選定基準が心配になってしまっている伊藤が、二人を食い止める道を選べるのかが一番難しいと若宮は思った。

それにしても、せりかの波乱万丈さに、せりかに対する印象が、また大きく変わった。こんなに話してくれた以上、力になりたいが、せりかがエナミ―認識している二人と一緒に、違う道を模索するのが、一番良い道なのでは無いかと思った。

38（前書き）

すみませんが話の都合上、主人公は出てきません。

38

「なあ、若宮、せりかっちのあの価値基準、放っておいても大丈夫だと思う?やっぱり、やばいんじゃなのかな?」

いつもの自信満々な態度からは、程遠い程、伊藤は迷っているようだった。

「だってさー、まず、女いる奴を好きになっちゃう時点で危ういだろう?!相手がいい奴だったから良かった様なものの、悪い場合は、彼女との別れをチラつかされて遊ばれちゃうか、もしくは彼女を捨てて、せりかっちに乗り換えられたら、それこそ修羅場で大変だったわけじゃん?」

「そうね、誰もがそうとは限らないけど、せりかちゃんから告白されたら、彼女と両天秤にかけてもおかしくは無かったわけよね」

「そうなんだよ!俺も、もうこの年齢の女の子に玲人が無理やり、彼氏を決めるって!そりゃあ、完璧に玲人がイカレてるって最初聞いた時は思ったから、部で、他の奴らに加勢したんだ。自由意思で行動する、最たるものだろう?恋愛って…」

「まあね。部内で留められただけでも、私は伊藤君を評価するけど、玲人君達の気持ちも解る位、せりかちゃんって恋愛方面、突っ込み処有り過ぎなのよね~!今日はこっちが無理に聞き出したような物だったから、何も言えなかったけど、同級生の友達だったら肩ゆすって早く目を覚ませ!って言ってあげてるわねー。なんだか将来、ダメンズを渡り歩きそうよね~。他が、しっかりしてる分、余計にそのへん顕著よねぇ。今迄、玲人くんとか橘くんが守って来たのが

分かる無防備さなのよね！やっぱり、他の男なんて近づけられないわ！」

「でもなぁ、守り強化ってなると、せりかっち裏切る結果でしか成立出来ないよ？今日だって、あいつらの事、めちゃめちゃ怒ってたじゃん？少なくとも、あいつらと手を組まないと変な男撃退って無理だし、でもそれが知れたら、せりかっちも、もう怒って生徒会も関わってくれなく成るかもしれないじゃん？」

「それは、心配しなくて良いと思うわ。責任感強い子だし、いい加減な事が出来る子じゃ無いわ。今日だって、彼女は橘君も来ると思ってたのに、こちらの呼び出しに応じてくれたのよ？あんなに怒ってる相手と角付き合わせて仕事しなくちゃいけない状況でも、快く来てくれたんだから、それは、杞憂だと思うわ…。大体、一生懸命やってくれてる彼女に失礼よ！」

「じゃあ、話せば解ってもらえるのかなぁ？俺達が、せりかっちの為を考えて裏切るような行動に出たとしても……でも嫌われたくないんだよなぁ！最近やっとあの事件のお蔭か俺にも懐いてきてくれたじゃん？」

「そこなのよね～！わたしもせりかちゃんに嫌われたら、悲しくなっちゃうわよ！伊藤君もすごくせりかちゃんのことお気に入りで、弄りすぎて嫌われてたのやっと最近払拭できて喜んでたのに、ここでまた、元に戻っちゃったら、ショックよねぇ」

「はっきり、言い過ぎだろう？嫌われてたとか！」

「事実でしょう？！やっと懐かなかった猫ちゃんに懐かれた時の伊藤君の頬の緩み具合、可笑しくて百合と大爆笑だったのよ？」

「……別に緩んでなんかねぇよ！お前ら、裏でそんな事言ってたのか！ひでぇよなぁ。高みの見物しやがって！もうちょっと若宮が俺のボジティブな情報入れてフォローしてくれたら、最初から苦労しなかったのにさっ！！」

「あら、珍しい！私にフォローを期待するなんて、伊藤君のイメージが崩れちゃうわよ？」

「余計な事はいうのになぁ……」

と伊藤がぼやくと流石に若宮も、「今度は、きちんとフォローするから、せりかちゃんの事をお願い！」と真剣な顔になった。

「如何したもんかなぁ～！俺の納得する奴を連れて来たいけど、それじゃ、玲人とまるっきり同じになっちゃうもんなぁ。ネジ跳んだとか言って玲人に悪い事したな……」

「せりかちゃんの好きな人ってどの人か判れば好みも判るけど、調べる？」

「調べなくても、橘に聞けば、すぐに判るんじゃないのか？もう、あいつらの方に付くっていう結論になったんだから、橘とは、少なくとも修学旅行前に密談する必要があるだろう？たしか、来週だろう？」

「そうね、早速、手を打たないとね！でもあっちも、せりかちゃんに避けられながらの護衛は難しいんじゃないかしら？」

「橘のことだから、その辺は如何にか出来るんじゃないか？今日、部活の後、話せたら少し話して見るよ。若宮は、せりかっちと明日も生徒会室で一緒にお昼にしといてくれよ？」

「えー！橘君と話すチャンスが無いじゃないの！色々言ってやりたい事もあるのに！」

「……部活前に時間取るよ。部長にも生徒会で少し貸してくれって頼んでおくから……」

「じゃあ、了解！ミッションスタートね！『うちの子猫ちゃんを守れ！』作戦かしら？！」

「まあ…おおまかには、そんな感じだな…」

なんだかんだと、せりかを過保護にしてしまう自分達に伊藤も若宮も苦笑いだった。せりかには、そういう保護欲を掻き立てる何か不思議な力があるのではないかと二人は思った。

38（後書き）

段々と守りが固くなっていってしまって、せりかはこのままで大丈夫なのか作者も不安です。

39（前書き）

若宮ＶＳ橘　ミッション２　未来の新旧会長対決です…。

39

「それで、せりかちゃんに避けられているみたいだけど、それで、彼女を守れるのかしら?」

一応、こちらの意向は伊藤が伝えてくれたらしい。最初は、伊藤の事をミイラ取りがミイラにならなければいいなと心配していたのに、若宮もしっかりミイラ側の心配性団体の一員だった。

「仲間に協力を仰ぎます。結構俺達並みに過保護なのがいますから、面倒見てもらいます」

「せりかちゃんの周りってやっぱりそういう人が多いのねぇ」

と若宮は溜息を洩らした。

「それで、せりかちゃんの好きな人って如何いう人なの?付き合っている相手がいるのに半年以上も忘れられないって、よっぽどでしょう?!」

「本庄綾人(ほんじょうあやと)といって、一年の頃から俺達と同じクラスです。大企業の御曹司で、従兄妹で婚約者が同じクラスにいる更科真綾です。この間お世話になった子です…」

「彼女って、婚約者だったの?それで、従兄妹って、本当にせりかちゃんには、望みが無いってわけね…。なんでそんな報われないの分かってる所に落ちて行っちゃうのかしら?!せりかちゃんてば…」

「それでも仕方無いくらい本庄が出来過ぎた奴なんです」

「橘くんよりも？……」

「比べ物になりません。残念ながら…」

「謙遜じゃないみたいね」

「ええ、もちろん。一つだけ、若宮先輩にもいい情報ですけど、本庄を書記に引っ張ってきます。更科さんを会計にすると思いますけど…」

「それじゃ、せりかちゃんが、可哀想じゃないの？」

「それ迄には忘れて貰います。本人もそう、望んでますし！」

「橘君が忘れさせてあげられるのかしら？一回、振られているんでしょう？」

「っ！若宮先輩は痛い所突きますね…。一回引いたのは、彼女は玲人の事を行く行くは選ぶと思ったんです。本庄に惹かれては、いても玲人への愛情があるのは、見ていて明らかでしたから…」

「そこにあの、玲人くんが不憫すぎる、恋愛対象に見られない！っていう所に来る訳ね」

「何処まで、聞いているんですか？……」

「殆んど全部かしら？本庄君の事は、相手の個人情報だから、彼女持ちだけど、今でも好きな人っていう表現どまりだったけど？」

「……若宮先輩も結構ドSですねぇ…俺が分かっている事でも彼女がそうはっきり言ったのを聞かされたら、痛手を受けるのは解ってらっしゃるでしょうに…」

「だってぇ、せりかちゃんったら彼氏立候補者の中に『橘くんと張り合える人は、いますか?勿論、顔じゃなくて腹黒さでっ』…って言うのよ?!聞いた時は泣きそうになったわ。私が!」

「彼女は意外と本庄を除けば、趣味が悪いんですよ!玲人と俺が心配になる位には…」

「そうなのよ!って流石に失礼かとは思うけど、心配になっちゃって貴方達と手を取る事にしたのよ…不本意ながら…」

「さすがに先輩方は、聡明な方々だなと、俺が言うと失礼ですが、伊藤先輩から昨日話を持ちかけられた時に、改めて思いましたよ」

「せりかちゃんを裏切っているみたいで心苦しいのよ?でも、せりかちゃんが、変な男に騙されるのを放って置けないわ」

「彼女が選んだ人でも、勿論、幸せになれるかもしれないし、そういう確率の方が高めだったら、傍観者でいるつもりだったんですけど…」

「嘘ばっかり!橘君は、いくら綺麗ごといっても最後は欲しい物は手に入れるタイプでしょう?」

「何を根拠にそんな事を仰るのか解りませんが?」

「だって、橘君って伊藤君に似てるわ。彼も今迄見て来て、そうい

う人なのよ…一緒の匂いがするわ」

「……彼女にも同じ事を言われました。…憧れの先輩と似ているなんて光栄ですが……」

「ふふっ！気を悪くしないで。良い意味でも似てるわよ。優秀で、サッカー上手くて、容姿も良い……ってこれは、伊藤君と比べたら、橘君に悪いわね…後は、駆け引き上手だし、他人に考えを読ませないし、…」

「褒め殺すつもりならその辺で、勘弁して下さい……。でも最後のは褒め言葉じゃ無い気がしますが？」

「いいえ、他の部の部長連中と渡り合わなくちゃ成らないから、会長としては、必要な資質なのよ。何も貴方が学年で首席だから、会長候補に選んだ訳じゃないのよ」

「それ、この間、椎名さんに抜かれたので、もう違いますから！」

「そうなのー！せりかちゃんやるわね～！流石、私の弟子だわ」

「貴方の弟子は俺になる筈ですけど……」

橘が呆れたように言うと流石の若宮も、「そうだったわね」と誤魔化し笑いをしたが、橘は冷たい視線を寄越した。

「とにかく、彼女が俺と玲人を避けても、本庄にフォローを頼みますから、大丈夫です！」

「頼むのって本庄君に頼むつもりなのー？！……！！」

「本庄が一番適任だし、彼女も一番信頼してるんですよ…それに他の男に任すのは、俺も玲人も嫌なので、あとは彼女の親友達に協力を仰ぎます」

「なんだか、本庄君に会ってみたいわねぇ！早めに生徒会に連れて来なさいよ！」

「椎名さんが、本庄よりも俺に気持ちが傾いたら連れて来ますよ！」

「うわー格好いいわねぇ。言われてみたーい♪頑張ってね。ほんの少し応援する気になったわ！」

「どうも！ほんの少しですか……？弟子なので、もう少しだけ加点して頂けませんか？」

「ふふっ！おみやげ、バタークッキーサンドで手を打つわ！」

「意外と良心的ですね……こちらも助かります。先輩達に邪魔をされてしまうと計画が致命的に駄目になりそうだったので、運の良さに感謝しています」

そう言って、嬉しそうに微笑んだ橘は、壮絶に美しくて、流石の若宮も息を？んだ。

40

「だから～、椎名さんが決めることじゃん?!」

「そうだよ!玲人。昼休みに会える様にしてくれよ…頼む!」

サッカー部の一角で、声を潜めて話す団体がいた。人数は六人。一際ガタイのいい少年を取り囲んで、何かを懇願しているが、少し離れた位置からは、話の内容は分からない。

伊藤に諭されて、騒ぎを大きくしたら、ライバルが増えてうまく行く確率がぐんと落ちるぞ!と有り難いアドバイスを貰った少年達は、出来るだけこの情報は自分達、もしくは自分の為だけに役に立てたいと考えていた。元々、サッカーを続けながら、この進学校に来られている時点で彼らはそこそこの頭の持ち主の集団だった。自然と先輩の伊藤の言った事の理解も素早い。

彼らの憧れの彼女、椎名せりかは、黒目がちの大きな目に、黒く光沢のある綺麗なストレートな髪に、肌理が細かい白い肌、透った鼻筋に、形の良い薄らと紅い唇という整った可愛らしい容姿で、それでいて学年首席の成績を取りながらも、慎ましい控えめな性格をしていた。去年の文化祭ではシンデレラ役をしていたが、彼らの中では、断然、「白雪姫だよなぁ…」という意見で一致していた。

しかし、せりりん（せりかのファンの中の通り名）は、玲人と忍という、芸能人やアイドルもかくや…と思われる王子もどきが二人も傍にいる為、せりりんの彼氏はこの二人のうち、どちらかだろうと

目(もく)されて来た。実際皆でどちらが、せりりんの彼氏か?論争は良く持ちあがっていた。大体のところで、多分玲人だろうという所に落ち着いた。

玲人に決まった理由は色々あるが、やはり一番の決め手は、一緒に歩いている時の距離にあった。忍と比べると明らかに距離が狭い!くぅー!やっぱりあれって恋人の距離だよなぁ?と後ろから指をくわえて見ていると、そんな親密そうな二人の中に、なんの躊躇いも無く入って行く忍を見ると、忍が空気を読まないだけなのか?もしくは、皆の希望どおり、せりりんはフリーなのか?と盛り上がる。

多少、切ない思いをしながらも身近なアイドルの話題で一喜一憂して楽しんでいた部分も大きく、しかも、決定打が打ち込まれない為、少しの希望を持って彼女を想っていられる事で、なかなか諦めない者が多かった事は必然だった。

そこへ、この間の玲人の雑誌事件である。玲人は否定したが、せりりんファンの中では、誹謗中傷から、雑誌の彼女を守る為で(そうあって欲しい!)本当は玲人の彼女なのだろう、という結論を勝手に付けていた。

一番、彼氏の有力候補の玲人が消えた事で、せりりんを想う者の中には、本気で付き合いたいと思うものが出てきたのも必然だ。今迄半分以上諦めていた所に、せりりんフリー情報が濃厚になってくれば、此処にいる者は皆、自分に自信の無い者達では無い!この中から、誰が彼氏になってもいい筈だと思うのは当然の事だった。

ただ、女子の集団の様に、抜け駆け無し!とか、『みんなのもの』など、玲人に寄せられるような思いは、彼らの中には無い。むしろ、皆がライバルであり、同士でもあるので他より抜きん出る事を考え

つつも、うまくいった奴の事は、涙を飲みながらも祝福してやろうという、さっぱりとした気の良い仲間でもあった。

修学旅行というビッグイベント前に、緊急速報が流れて来た時には、皆で歓喜の雄叫びを上げた。『『『よっしゃー！』』』。

なんと、我らがせりりんが彼氏募集中らしい。玲人に彼女が出来た所為で、傷心なのではないかと、的外れな心配をする者もいたが、多くの者達にとっては、ビッグチャンス到来である。

たまたま、玲人に教科書を借りようと行った一組で、この中の一人の二組の安藤将太（あんどうしょうた）というサッカー部の少年が、せりかに無理に橘を押し付けようとする玲人の姿を見た。明らかにせりりんは困惑の色を浮かべながらも、玲人に逆らえない様子に、玲人のせりかへの影響力の大きさを感じた安藤は、玲人にせりかを紹介して欲しいと頼んだ。それを聞いていた仲間達も

『『『俺達も！！』』』となってしまい、玲人に詰め寄った。

「せりは、男に免疫が無いから、あまり恐がらせないでくれよ…一昨日だってナンパされて腕掴まれて震えてたんだ……だから、お前らも急に告白とかは頼むからやめてくれ！」

温室で囲って免疫を薄くしたのは間違いなく玲人だった。しかしそれを知る者は少ないので、彼らを余計に焚きつけてしまう情報だった。

「忍は、ずっと五組の頃から一緒に委員やっていて慣れてるし、見た目も、なよっちいから、せりもあまり警戒しないと思うんだ…」

随分な言い様ではあるが、忍を一押（いちお）しにしている理由を玲人が言う

と、納得出来る内容に皆が黙った。しかし、安藤だけは、現場を目撃していてせりかが、橘に色良い返事を返していなかった事から、そんな理由では諦められないし、直接は行かないから玲人からうまく友達からでいいので紹介して欲しいと理路整然と述べると、皆も後に続くことになった。

収まりかかった所に喰らいつく安藤を、忌々しく思いながらも、芯があっていいと思う相反する気持ちが玲人の中に起きた。思えば、安藤は、厳しいサッカー部に入りながらも二組に入り、（一組に入れた玲人はせりかのお蔭で、忍は別格だ）見た目も、キラキラしい忍に比べると、普通を良しとする、せりかの好みかもしれない…。それに、この本気度具合から安藤は、もう少し様子を見て候補に入れてやろうかと思い始めた。

玲人のそういう思考は分かり易い。安藤にも隙を与えてしまい、結局、サッカー部で紅白戦に勝ったら繋ぎをつけてくれよ…等と頼み、（サッカー馬鹿達の彼らは結局そういう頼み方しか出来なかった）それを玲人が悉く返り討ちにしていた。

次こそは～！とチャレンジする者が増えてきてしまい、見ていた関係無かった者まで玲人に挑みだして、此処はいつから道場破りの道場になったのか?！という不思議な状態にサッカー部はなっていた。

伊藤から、「椎名さん争奪戦」騒動の話を聞いていた部長と副部長は、実力アップの起爆剤になりそうな、この事象を大変歓迎していた。普段、玲人に比べると、テクニックが先に立ってしまい、ハングリーさが少し足りないのでは無いかと思っていた忍も、玲人の防衛の力になる為に必死になってアシストしていた。

伊藤はそんな橘の様子を見て、せりかの事を本当に本気で想っているのだと改めて思った。若宮も如何(どう)、この腹黒王子に丸め込まれたのか応援する様な事を言ってきたので、おかしいと思ってはいたが、女性の方がそういう所のカンが鋭いということだろう。

伊藤はサッカー部を影ながら、（知ったら激怒(げきいか)りだろうが…）応援はしてくれていないが…力になってくれているせりかに心の中で感謝したが、また、せっかく懐いてくれた子猫ちゃんに嫌われてしまうのかと思うと柄にもなく少し胸が痛んだ。

41

「お嬢さんさぁ、そろそろ橘達のこと許してあげないと、せっかくの修学旅行、楽しく行けないと思うよ？」

「別に怒ってなんかないわよ？むしろ玲人には、こっちの我儘で迷惑掛けちゃった訳だし、出来ればこっちが許して貰いたいわ」

「…じゃあ、怒っているのは、橘に対してだけか…。気持ちは分かるけど、あいつも考え無しな奴じゃないし…」

「それは、いつもだったら、彼の事信頼しているし、例え目的が真っ黒な事だったにしても付いて行けるけど、今回はとてもじゃ無いけど大丈夫なんて思えないわ！橘くんの彼女って思われたら、私に普通の幸せなんてやって来ないと思わない？」

「それは、言い辛いけど、お嬢は気が付いてないけど、そういう風に既に少しは思われてるよ？この間の時も、まだ付き合って無かったのか？って少し噂になった時の感想がそれだったらしいから。だから、あまりにも今更な感じな話で、広がらなかった訳だけどね。まあ、お嬢さん達は一緒にいるとバランスがいいし、雰囲気がしっくり来るからね」

「それは、クラスのみんなは違うって分かってくれてると思ってたわ！」

「うん。クラスのやつは、普段のじゃれ合いというか、ど突き合い？…を見せられてるから、仲が良すぎて逆に違うだろうって思ってるんじゃ無いの？」

「じゃあ、他のクラスとかっていう事？」

「全部じゃないけど、曖昧に、つきあってるのかなぁ？位の認識だよね。もちろんみんなの関心が薄い訳では無いけど、橘が一緒に歩く女の子はお嬢さんに限定されてるからねぇ。段々には、じわじわとそう思われて行っても仕方が無いけどね……。そんな曖昧な感じなんで、お嬢さんのファンとかは違う！って思ってるらしいよ。人ってはっきりしない事については、自分が信じたい方に解釈しがちだからね」

「ああ、伊藤先輩が言っていたサッカー部の奇特な人達の事ね…」

「そこが今は中心みたいだね～。お嬢さんも橘程じゃ無いけど、猫被りだから、聞いたら、ちょっと引くかもって思う、ずれた認識されてるみたいだよ？」

「本庄君に言われると、そこは傷つくものがあるわね！橘くんとか美久とかには何とも思わないけど、やっぱりせんせいも私の事をそういう風に思っていたわけね？」

少し咎めるような視線を向けると、本庄は苦笑しながらも、「でもね、」と話を続ける。

「情報が、全て間違って流れてたりしてる訳じゃないから、気を悪くしないで欲しいんだけど、ちょっと誇大広告に近い感じなんだよ。俺からしたら、そんな理想をしょって歩いてるみたいな子って既に二次元の世界にしか居ないと思うけど…。せりりんって言われてるのは知ってるよね？情報で聞いた事をそのまま言うけど、……せりりんは美人で可愛いくて、学年首席を取る程頭が良くても、それを

ひけらかしたりしない慎ましくて控えめな性格で、それに、シンデレラより白雪姫のが似合うんだって！まあ、おおまかには、間違ってはいないから否定のしどころも無いけど、後半は少し思い込みが入ってるよね？控えめな上品な人だと俺もお嬢さんの事を、そう思ってるけど、それと相反する人間的な部分も見てる訳だよね？対して、片側からしか見て居なさそうな、そういう盲信的な思い込みってちょっと引くでしょう？！」

「…かなりドン引きだわ！何でまた、そんな極端な話が流れてるの？誇大広告なんてものじゃなくて、詐欺に近いんじゃないの？！その美化っぷり、どうかしてるんじゃ無いの？寒気がするわ…」

「だから、気を悪くしないでって言ったじゃん？」

「それは、せんせいの私への見解の思考が駄々漏れになるけど、許してって意味かと思って聞いてたもの！」

「それは、それも含めて許してくれると助かるけど、元々、解っても困る様な見解はして無いよ、多分」

「相変わらず、その辺り完璧なのよねぇ～。将来が心配になるわ。勿論真綾さんのだけど！」

もしかして良い様に掌で転がされているんじゃないかと思うが、決してこちらを不快にさせない本庄をいつもの事ながら見事だと思う。

「それで、ここから本題ね！」

「まだ、本題に入って無かったの？もうお腹いっぱいだわ！」

「サッカー部を中心にってさっき言ったけど、今はそこが戦場化してて高坂と橘で応戦してるんだって！ちょっと訳が解らない話で、最初聞いた時は俺も中々理解出来なかったんだけど」

「戦場化って、戦いってことよねー？この平和な日本の高校にまた似合わない大袈裟な言葉が使われてるのねぇ。感心しちゃうわね」

「それが、一概にそうとも言えない所があるんだ。二組の安藤って知ってる？」

「ううん。悪いけど…」

「その、安藤ってサッカー部の一人なんだけど、お嬢の事を紹介しろって高坂に詰め寄ったらしいんだ。サッカー部だけで彼氏募集中の噂が流れてるじゃん？あれって不思議に思わない？」

「あれは、伊藤先輩が、競争率下げるために他には言うなって言ってくれたから、そこで止まってるらしいわ。真綾さんの時といい有り難いわね」

「それが成立したのって、うちのクラスの奴と、その安藤しか目撃していないからなんだよ。高坂に用事があってうちのクラスに来たところで、あの遣り取り見られたらしいから」

「それで、その安藤君が、部活内で広めたのね？」

「広めたというよりも、高坂に詰め寄ってるところを、せりりん同好会の仲間に見られたってところかな」

「また、気味の悪い名称つけないでよ。趣味が悪いわよ！」

「ごめん！まあ、そんなで五人くらいの知れるところになった訳。先輩とか部長達とかも知ってるみたいだから、もう少し人数が多いかな？」

「それで、別に紹介くらいしてくれたって構わないわよ？実際、彼氏募集中も嘘じゃないんだし」

「～っ！それを言われると高坂と橘が報われなく成るから絶対言わないでやって！！」

「何でか解らないけど、分かったわ」

「それで、高坂に、サッカーで勝ったら紹介しろ！っていう奇妙な展開になったんだよ……」

「本当に奇妙だけど、それって運動部のノリなの？私をだしにして新しい遊びでも見つけたんじゃないの？」

「まあ、そういう考え方もあるけど、本人達は到って真面目に戦ってるらしいんだよなぁ」

「それって部活で普通にサッカーやってるだけじゃないの？」

「そう言われるとお嬢の言う通りって気が俺もして来たけど、高坂は絶対に紹介したくないらしいんだよ」

「橘くんじゃなくちゃ許さないって言われてるもの。玲人にしては意固地で、しつこい拘り持っちゃってるから、罪悪感がある、こっちからすると、はっきり逆らえないのよね。前に話した件じゃない

んだけど、無理やり家族愛を強要したのに、私からそれは止めにしようって言って関係がおかしくなった結果が今なのよ。もしかして、せんせいは聞いてる？」

「いや、それは知らなかったけど、それは結構思いきったね！お嬢だって寂しいだろうし、高坂と気まずくなるのも、目に見えてただろうに…」

「そういう自分のエゴで玲人の事を縛っちゃいけないと思ったの。受け入れる事も考えたから、二者択一だったわね、こっちも。そうしたら玲人からは、自分を選ばないなら忍を選べっていわれたのよ。自分の納得出来る人じゃないと嫌だって言われて、あんたは私のお父さんか？！って突っ込み入れたかったけど、結構雰囲気が深刻になっちゃって、何も言い出せなかったの。久々にそんなんで弱気になってたら、急に橘くんからオッケーの返事が来ちゃうし！あの悪魔、何を考えてるんだか？！聞こうにも今は近付けないし、電話もあるけど、口利きたく無いのよ！子供っぽいけど……」

「じゃあ、高坂の事を怒って無いんなら、橘と真綾をトレードしようか？そうしたら楽しく行けるでしょう？」

「無理よ！理由は他にもあるけど私達、W委員長チームって言われて、目立ってるのよ。もちろん彼がいればそれだけで、そっちも漏れなく目立つでしょうけど！」

「そこ、忘れがちになるんだよなぁ。そっちは確かに何とかなってもこっちの勝手な班変えは目立つよな。しかも委員長自らじゃシャレにならないか～！」

「せんせいにしては、穴の多い企画ね……他にも色々と成立しない

トコロだらけよ？」

「真綾がせりかちゃんと同じ班がいいから、橘に変われって、せっ突いてるんだよ！最もらしく『避けられちゃってるんだから～気まずいでしょう？お互いに！』とかいうから、それも有りかなって思っちゃたんだ。真綾、高坂とも気が合うだろう？石原さんも大人な人だから、いい機会かなって思ったんだよ。俺がいると如何しても自立しない所があるからさ。でも野放しに出来る程、安心も出来ないし…」

「本庄君も真綾さんが絡むと目が曇るのね～。何だか惚気られたのかしら？」

「まさか！完全に考え無しだっただけだから…これからは思い付きだけで物を言わない様にするよ」

「いいのよ。年相応の本庄君でいても、許される場所では、その方がいいと思うわ」

「……」

本庄は一瞬だけ虚を突かれたような表情をしたが、微笑んで「そうかもね」と言った。

「結局、橘君との誤解は、彼の中でも判っていたから、付き合っても大差無いって結論になったのかもしれないけど、彼の中では、小さな違いでも私の中では大きいから、その辺りの溝を埋めるべく、頑張ってみる事にするわね。私達の所為で、周りまで気まずくなったら悪いから、溝が埋まらなくても、一時休戦を申し込んでおくわ。

大体が、沙耶ちゃんにも悪いしね」

「お嬢さんなら、そう言うと思ってたよ」

本庄は、本当は、二人からせりかの面倒をみてくれと頭を下げられていたので、班分けはどうあれ、せりかに付くつもりだった。そして、高坂に真綾の面倒を見てもらうつもりだった。

しかし、せりかが、こういう風に言うだろう事は、想像に難くなかったので、結果的にはこう成るだろうとも思っていた。

せりかに、「許される場所では年相応の本庄くんでいたら?」と言われた時、不覚にも泣きそうになった。自分に何かを期待する訳でもなく、無条件に受け入れてくれる存在が他に存在しなかった本庄にとって、せりかは聖女のような特別な存在だった。相手から離れられないのは、せりかでは無く、むしろ本庄の方だった。

本庄にとっての許される場所は正にせりかのところだった。だからこそ、自分から離れて飛び立とうとするせりかを、知らない誰かに取られたくないのは、高坂よりも自分の方だと本庄は許されない思いを自覚してしまい苦々しい気持ちになった。

42（前書き）

修学旅行編1です。

42

橘に休戦協定を本庄に頼んで申し入れると、「別に戦ってるつもりは、全然無かったけど、椎名さんがそう言うのなら…」とあっさりと認められたので、更にメールで『二人の見解の相違で生じた溝を埋める為に、話し合いたい』と送った内容は却下されてしまった。返事には、『余計にこじれる可能性もゼロでは無いので、旅行が終わってからにして下さい』とあっさりとした文面が返ってきた。

少し、解決の兆しが見えて来たと思ったところの拒絶は、せりかをがっかりさせたが彼のいう通り自分達の為と周りの事を思えば、付き詰め無い方の道の方が堅実で良い様に思えた。

皆の複雑な思いを乗せて、飛行機は羽田を飛び立った。

飛行機の中では、隣に沙耶が座り、色々と他校にいる彼氏との話を前の人に聞こえない位の声で教えてくれた。

「どっちから告白したの?!」

「向こうからだけど、いきなりって感じじゃなくて、もうお互いに好意があるのかな?っていう段階だったから、一応ダメ押しって感じで、「付き合って下さい」とかって言われるのが、憧れだったのに、「俺達そろそろちゃんと付き合おうか?」ってなんだか上から目線で、なし崩しっぽい言い方だったけど、それでも嬉しかったのよねぇ。今にして思えば、最初に主導権、握られちゃって、もう少

し、遣り様が有ったかなって思うのよ！」

「成程ね～。告白が、うまくいってもめでたし…で終わるシンデレラとかとは違って、続きがあるものね～！」

せりかがいたく感じ入った様子で言うと、沙耶は吹き出した。

「せりかちゃんって年齢よりもしっかりしてて大人っぽいのかと思ってたけど、意外と可愛らしいというか…変な意味じゃ無いんだけど、擦れてなくて、純粋で放って置けない感じなのよね♪」

「そうなのかなぁ？何だか、最近色々な、誤解の賜物みたいな私に対する見解を聞かされてるから、沙耶ちゃんも良く取り過ぎだと思うよ。単に、世間知らずで思い込み激しくて、周りに迷惑掛けてるとしか思えないもん。最近は本当にごめんね！橘くんとは、一時休戦したから、楽しく旅行出来ると思う。沙耶ちゃんには一番迷惑掛けちゃって、本当に悪かったと思ってるの！」

「ううん。玲人くんと橘くんも、もしかして、せりかちゃんと同じ様に思ってるのか分からないけど、班行動の予定表作りとか、殆んど二人がしてくれちゃって行く事になったところも私が一応いってみた希望のところが全部入ってて、もしかして気を使われてるのかなって却って心苦しいくらいなの。だって流石にテディベアの博物館まで予定に組み込まれた時には、一応言ってみただけだから！って止めたのに、いいからって橘くんに微笑まれちゃって何も言えなかったわ」

「橘君達なりに気を使うのは当然だけど、わたしも世界のテディベア見たかったから嬉しいし、あの二人もクマと一緒に写真とってあげようかしら？」

「玲人くんは、良いって言ってくれるかもしれないけど、橘くんは無理でしょうねぇ」

「ふふっ！そうね」

おしゃべりしているとあっという間に新千歳空港に着いた。北海道って近いなぁと思う。確か、前に行った事のある沖縄は倍近く乗った覚えがあった。

空港に降り立って、荷物をとりに行くと、オレンジのバンダナを付けた黒いバッグがくるくると回っていた。同じバッグにサッカーボールのキーホルダーが付いているのが玲人のだった。

玲人が、両方のバッグを抱えて、せりかに「行くぞ」と言って荷物の半券を取った。

せりかは、小走りで後を追ったが、荷物は、玲人がバス迄運んでくれた。人目は気になったが、玲人の気持ちが、少しずつ穏やかなものになって来ている様に思えて嬉しかった。

バスは、玲人が沙耶と隣に座ってしまったので、橘と隣に座った。長い函館までの道中で、少しは関係の改善の糸口くらいは、掴めるかもしれない。バスはクラスの人しか乗っていないので、一緒にいても問題は無い筈だと思う。

久しぶりに向き合う事に僅かな緊張を覚えるが、相変わらず、端正な顔立ちには感嘆する。この人はどんな時でも、美しさを損なうという事は、無いんじゃないかと思う。例え、彼自身がそう望んでいなかったとしても……と考えていると橘から声を掛けて来た。直接

話すのは何日ぶりだろう?相変わらず、低音でも高音でもない、耳触りの良い声だった。

「話すの久しぶりだと緊張するね…」

やけにしんみりと、橘が言うので、せりかも少し懐かしさを感じた。思えば、一年以上の間、玲人よりも長く一緒にいた相棒だ。色々と相談し、ど突き合い、からかれたり、遊ばれていた感はあるが、一番話しやすい友人だった。実際に打てば響くといった感じなので、話していても楽しい。彼の黒い計画に巻き込まれながらも、緻密な計画な、それは、倫理的に人間性を疑うものはあったが、他人に損害を与えるものではない事を、一緒にいて誇らしく感じていた。

今回、怒ってしまったのは、明らかに彼が、せりかに害になる計画に乗ってしまった事が大きい。いつもの彼のそういう所を好ましく思っていたのに、ポリシーに反した事を選択した彼に、裏切られてしまった様に思えた。勝手な幻想を抱いた幻滅かもしれないが、せりかに直接関係する事を思えば、せりかの怒りも正当な物だと思う。

「……そうね。久しぶりに橘くんの声を聞いたら、…懐かしいって思っちゃうくらい話してなかったのね。私達」

「うん。懐かしいって俺も、今思ったんだ。だけど、それは言ってはいけないのかと思った」

「私が怒っていると思っているから?」

「いや、気分を重くさせるかもしれないと思って」

「それは、今回は先送りにする事に決めたでしょう?旅行中は普通

にしましょう」

「なんだか、こんなに長く、関わらない事が高校に入ってから無かったから、普通がよく分からなくなってるのかもしれない。椎名さんに何処まで踏み込んで話せていたのか、何処まで許されていたのかが思い出せないんだ」

「じゃあ、今日から、新しい関係を始めましょう？それじゃだめかしら？」

「いや、じゃあ、改めて、よろしく。……せりりん♪」

「あのねー！こんなにしんみりしてたのに、よく其処でその冗談が出て来れるわよね！」

「これから、そう呼ぼうかな～♪」

「イメージが狂うわよ？周りを失望させたくないなら止めたほうがいいわ」

「別に誰も失望なんてしないんじゃないの？旅行中だけは、マジでせりりんでいこうかな～？」

「くまと写真撮るわよ？！」

「相変わらず、脅し文句が、面白いね。椎名さんは…」

「やっぱりテディベアとの写真はキツイみたいね？」

「それは、キツイでしょう？部活で、ずっと、せりりんが…って聞

いてたら、なんだか俺も、もうせりりんで良い様な気がして来たけど、椎名さんが嫌みたいだから止めるよ」

「実は、今、一番呼ばれたくない呼ばれ方なの。身の毛もよだつせりりん話を聞いたばかりなの。別に、せりかって呼び捨ててくれても構わないけど、せりりんだけは勘弁して！」

「わかった。でもやっぱり、新しい関係を築いたばかりだから、今はやっぱり椎名さんが、しっくりくるかな」

「そう。くまの話は無かった事に今は…するわね？」

「結構、根に持つね？」黒く微笑む彼からは、いつもの色香が溢れ出すが、そんな事に今更怯むせりかでは無い。

「それは、これから始まった、私達の関係性で決まるって事じゃ無いかしら？旅行中には、気も変わるかもしれないじゃない？」

「そうだね。椎名さんの気も変わるかもしれないってことだよね？」と笑った彼は、先程の笑顔よりも、意識的に相手を絡め取る微笑みを浮かべた。

流石に、それに気付いたせりかは、そういう意味じゃ無いから！と必死に言い募るが、そういう意味ってどういう意味？と言われてしまい、あえなく返り討ちにあった。せりかの中で、橘忍をしつこくからかわない方が身の為だという教訓が刻まれた瞬間だった。

42（後書き）

まだまだ続きます。

43

バスの前方の席を見ると、せりかと橘が、いつもの様にど突き合っている姿が見えた。じゃれる二人は子犬の喧嘩を思わせる、のどかさに包まれていたが、喧嘩の形勢はやはり、せりかの方が不利に見えた。それを見て本庄は安堵しつつも少し笑ってしまった。

せりかから頼まれてた本庄が、橘に話をすると、予想通りの答えが返って来た。橘も有る程度は、せりかがこのままの状態で旅行に行って周りの空気を悪くする事は出来ないだろうとは、考えていただろう。

橘から和解を申し込む事は、せりかと付き合う事を撤回する事になる。そんな愚かな選択を、あの橘がする筈も無い。だから次善策で本庄にせりかの事を頼んで来たのだろう。本庄以外の奴には頼みたくないと普段の彼に似合わぬ独占欲と嫉妬の混じった言葉を聞いた時には、純粋に橘にここまでさせるせりかに感心したが、本庄にとっても特別な存在だと知っても、尚、彼は、せりかを委ねる気持ちになったのだろうか？と自嘲してしまう。

今迄、恋愛して来た事が無い訳では無かったが、本当に相手の事を想っていたかを思うと、結果的には自分のなかに今の様な強い気持ちが存在していなかった事を思えば、自分は相手からすると冷たい男であったと思う。決して相手の女の子達を軽んじたつもりは無いが、自分に対して与えてくれる安らぎは一瞬で、後は、男女の駆け引きが透けて見えていただけの様に思う。実際に自分もその駆け引きを楽しんでいた所があった。付き合う女性が年上が圧倒的に多かった事を思えば、彼女らに自分の背景に対する打算は皆無では無いのだという事は、その時から解っていた。その中には、家庭教師や、

父の秘書といった、親と雇用関係が有る事を考えれば、向こうも純粋に本庄本人を見ていた訳ではないだろう。そして自分もそれも仕方が無い事だと自分の一部として切り離せない以上、受け入れて割り切れていた。特にそれに対する嫌悪や苦悩など無かった。むしろ、当然の事と考えていた為、相手を責める気持ちには成らなかった。

別れは、相手の自尊心を傷つけないようにしながらも、いつも本庄の方から切り出した。それ程思う気持ちも強く無かったのか、婚約者の存在を先に話している為か、縋るような女は誰ひとりとして居なかった。今にして思えば、別れる時の事を、つき合う前からシュミレートしてしまう自分は無意識に縋る事等しないプライドが高い女性を選択していたのかもしれない。

真綾は、自分がずっと守って来た掌中の玉だ。本庄に纏わりつくようにして懐く可愛い従兄妹は、いずれ自分の隣に立つのだろうと幼い頃から思ってきた。

しかし、いずれ、一緒に会社を担う事を考えれば、今の様に箱入りのままの状態でいてもらっては困る。たとえ、辛い思いをしても早めに世間を知ってもらう必要がある。他にも求めたい所はあるが、それはその後の話だ。親にも話して、二人で公立高校に入った。真綾の親は、綾人との将来の事を考えなくても、その方が娘の為になるだろうと考える聡明な人達だった。綾人と同じ学校という事も安心材料の一つだったのだと思う。どう手を回したのか、一年生の時は同じクラスだったのだから、そうは言いながらも心配で有った事は分かる。

中学から、既に公立校に移っていた本庄にとって、県下一の公立校

は、そんなに危ない場所では無い事は分かっていた。

なるべく過保護にしない様に学校生活を送りながら、真綾も段々と世間の普通を認識出来る様になって来た。自分の事を普通じゃないと認識出来る程度には……。

この自覚はかなり大事なものだと本庄は思っていた。自覚がなければ、反省も出来ない。尚且つ、慎重さも身につけた真綾は思っていたよりも、骨のある女性であり、少し見縊(みくび)っていたかもしれないと反省した。見方を変えれば、自分の為に変わって貰おう等と、奢った事を考えていた訳だが、真綾の成長と共に傲慢な考えであった事を反省するようになった。まだ、十代の半ばで、将来を決めてしまう事は、彼女の為にはならないだろう。今迄、そう思わなかったのは、自分が居なければ、彼女は一人で歩いていけないだろうと奢った考えが根底にあったからだ。

真綾には、自分が必要なのだと納得して、安心してしまう自分がいた事は確かだ。其処に存在意義を見い出して縋っていたのだと思う。

面倒を見てきたつもりが、こちらが、見させて貰ってきた事に気が付いたのは、せりかと出会ってからだった。彼女にも似たような存在の男が近くにいて、まるで鏡を見る様に関係性が似通っていた。

せりかを甘やかす幼馴染は、校内一モテるが、それを頓着しないおおらかな性格に、無邪気な朗らかさを持ち合わせた、中々、好印象な男だった。

しかし、人間として自立した彼女は、必ずしも彼を必要としていない事が判った。彼が守って来ただろう筈の彼女が、他の男でも充分に幸せになれるだろうという事は、手に取る様に解った。現に橘と

その時に付き合うかどうか悩んで、本庄に相談して来たのだ。

せりかが、躊躇なく高坂の手を取っていたら、自分の中の迷いは、見ない振りを出来たのかもしれないが、現実を直視しなければならなくなってしまった時点で、自分の存在意義を守る様に、真綾に付き合いを申し込んだのは、自分を守る為であって、決して真綾の為では無い事をその時から気付いていたが、結局真綾の為にならない選択をしてしまった自分を内心では恥じていた。

それなのに、そんな駄目な自分の事を好きだから、高坂と橘を断ったと言う、せりかには、本当の事を言ってしまって幻滅してしまって欲しかった。しかし、彼女は、真綾の存在を知っていて告白して来てくれたのだから、自分に有る程度の美化をしたのだとは解るが、打算は全くないだろう。そんな彼女に自分の苦悩を吐露してしまうには、何も見返りを求められていない現状では、ただ彼女に理解と許しを求める懺悔に等しい行為で、それをされてしまっても彼女が困ってしまうだけだろうと思った。

結局、婚約者のいる男の事など、想っていたところで何の益もないだろう。それに、そんな理由を橘と高坂も受け入れる筈はないだろうとも思っていたが、橘は、こちらが呆気にとられる程、あっさりと退いた。友として見て来た彼のおそらくは、精神的には初恋であろう事を考えれば、それは納得がこちらが行かないくらいに綺麗に手を引いた。

高坂のやはり諦めきれない様子にこちらの反応の方が普通だろうと思った。

そして、自分の事をずっと好きでいてくれる彼女に、特別な思いを持ってしまう事は、真綾と彼女を同時に裏切ってしまう事になる。しかし、彼女が多分思っているよりも本庄は強い人間では無かった。彼女からの無償の愛情を無視出来ないし、それは、子供の頃から望んでも手に入らなかった特別なもので、結局はその甘い誘惑に負けてしまった事を完全に自覚した本庄は、これからの事を考えてしまい、じっとせりかを見てしまう自分を、隣で寝てしまっていたと思っていた真綾が気付いてしまっている事に、この時は気付けなかった。

44

くすりと笑う気配に、少しウトウトと夢と現実の狭間を漂っていた真綾は、現実に引き戻された。

綾人が見ている視線の先を見て、せりかさんと橘君の遣り取りに笑いが漏れたのだと分かった。

真綾も二人が仲直りしてくれて良かったと思う。ここ最近のせりかと橘の様子は、険悪では無いものの、いいとは言い難い雰囲気にクラス全体に気まずい空気が流れていた。

普段、率先だってクラスのトラブルを解消しようと動いてくれる二人の衝突に、みんな途方に暮れていた。唯一助けになりそうな高坂は、そのトラブルの原因を作ってしまったので、そこは頼れない事も分かっていたので、自然と皆と親しい本庄に『なんとかして～』という声が来ていた。本庄は『修学旅行までにはおさまるから、悪いけど我慢して！』と皆を宥めていた。

大体、無理やり、橘君を彼氏にするって、そんな横暴な事を高坂君に言われてもせりかさんも困るだろうと思う。

高坂君が余計な事をするから、あんなに気の合っていた二人が、気まずくなるのだわ！と内心、真綾は玲人を罵倒していた。

しかし、綾人がせりかさんに聞いた話では、せりかさんは、高坂君の事を怒っている訳では無く、橘君本人を怒っている為こんなに長く二人の不仲が続いてしまったのだと聞かされた。

せりかは八つ当たりでいつまでも怒っている様な性格では無いので、怒る理由が個人的に有るのだとは思うが、特に恋愛関係でもない男女が此処まで揉めてしまう理由が真綾には思い付かなかった。

じっとせりか達の様子を楽しそうに見ていた本庄の瞳が、少し揺れている事に真綾は気付いた。

二人を切なげにみつめる本庄を見ていられずに、真綾はもう一度目を閉じた…。

高坂君も言っていたじゃない！知らない方が良い事だって有るのよ…きっと…起きたらきっと今のは、気の所為だって思えるわ…。と自分を言い聞かす様にまた夢の世界に足を踏み入れた。

バスは、途中に長万部（おしゃまんべ）という面白い地名のところで昼食の休憩となった。班ごとに座るせりか達とは席が遠くて話す事が出来なかった。何か特別な用事が有る訳ではないが、真綾は早くせりかと言葉を交わして自分を安心させたかった。隣で、手を怪我するとピアノの発表会が近いからと、ハサミで毛蟹の身をとってくれる綾人を、美久ちゃんと弘美ちゃんにそっと冷やかされるが、いつもなら照れてしまうところだが、今の真綾にはその彼の優しさが妙に癇に障った。

「せりかちゃんって蟹食べるの上手よね～！」

「…実は、海鮮物大好きだから、隠れた特技なの…コツがあって挟みを使わなくても身が取り出せるの…」

少し恥かしそうに、話す様子が普段見慣れない私服な事もあっていつもより数倍可愛い。周りの注目も集めてしまって、橘が少し苦い顔をした。

沙耶はそんな橘が珍しくて驚くが、せりかと付き合うのを自分が保留にしてしまったが、やはりせりかの事を想って無ければオッケーの返事はしないだろうと、少し橘に申し訳無い気持ちになった。

「椎名さん俺のも剥いてほしいな～」と露骨なアピールをするのを、横から玲人が「せり、俺のも頼む」と空気を読まずに頼んで来たので、沙耶は秘かに笑いを堪えた。

玲人くんが勧めてるのに、自ら天然に邪魔するのって可笑し過ぎ！と玲人の天真爛漫さに、こみ上げてくる笑いを押さえきれずに少しだけ、笑ってしまった。

「ほらー！二人とも、子供みたいな事するから、沙耶ちゃんに笑われちゃってるよ？」

そういいながらも蟹の身はほぐしてあげているせりかは、根っから面倒見がいいのだろう。なんだか楽しい気配がしそうな予感に沙耶は、心の中で、『何でこの状況、観客が私だけなのよ～勿体ない！』と思ってしまった。

それから、食後にお土産を見がてら休憩をして（多分、食後すぐにバスに乗せない為だろう）そのあと、また函館に向けてバスは南下した。

「少し眠くなっちゃったから、寝ちゃってもいい？」とせりかが言ったのを「うん、どうぞ」と橘は答えたが、内心心臓が跳ね上がった。せりかのこういう無防備さには驚かされるが他意は無い事は良く分かっている。他から窓側に座るせりかの寝顔が見えないように、自分の座る角度を塞ぐようにずらした。

せりかの無防備さに橘が困っているのを見て、本庄は気の毒になるが、やはりせりからしくて可笑しかった。自分が気を揉まなくても済む事を安堵する気持ちと寂しい気持ちが両方だったが、脇でじっとせりかの寝顔をみつめる橘を羨ましく思ってしまうのをとめる事が出来ない自分に末期なのかなと諦めに近い気持ちになった。

隣で眠る真綾は、ストールを被って横向きで顔を見せない。普通は、こうなんだけどなぁと思うと、あたふたとする橘を見て少しだけ気の毒になってしまった。まだ、この先が長いから後で話せる機会があれば注意をいれて置こうかと思うが、自分がいっても大丈夫なものなのか…？…悩むところである。橘にも恨まれそうだし…いや、むしろ感謝されるのか？と考えると橘に言おうと決めた。

好きな子の寝顔をみせられる嬉しさと辛さでは、橘には辛さのが勝つだろう。高坂ならなんとも思わないのだろうなと思うと、そこは自分と真綾の関係がダブってみえた。実際ずっと見て来た真綾の寝顔にいまさら慌てたりはしない。こういう穏やかな関係を断ち切ったせりかの強さの半分でも自分にあったら、真綾の幸せを自分の事よりも先に考えられたのだろうと思う。

せりかは高坂の幸せを考えたから、受け入れるか手を離すかを考え

て、手を離したと話してくれた。それは彼の事を家族に近いとは言っていたが、自分の事よりも優先出来る程の深い愛情があるのは間違いないだろう。

それから、一行は、五稜郭タワーに上って、星型の五稜郭に感嘆の声を上げ、その後、トラピスチヌ修道院にいった。五十人以上の修道女が今も暮らしているらしいと聞いて驚くが、他人の気配がまるで無い。ここの修道女はクッキーを作って生計を立てているらしいが、朝一で無いと売り切れてしまう人気のものらしく、その有り難いクッキーは買う事は敵わなかった。

修道女の暮らすという浮世離れた空間は、まるでキリスト教の学校の様にもみえたが、どうして俗世を捨てる気持ちになったのだろうか…と、きっと聞いてはいけない事なのだろうが聞いてみたいと思うが、この好奇心こそが既に世俗にまみれたものに見えるのだろうとせりかは思った。

夕方になって急に冷えてきたので上着をはおった。昼間は少しだけ涼しくて気持ちが良いなぁなどと思っていたら、夜は真冬並みに冷える。こちらの真冬は氷点下だろうから、せりかの思う真冬並みだが驚くほど、昼間との気温差があった。この後は函館山のロープウェイに乗って、頂上から、函館の夜景を見る事になっている。横浜の夜景も綺麗だが、また別格と聞いているので、とても楽しみにしていた。

ロープウェイで本庄達の班と合流して一緒にいく約束をしていた。美久が走ってやってきて心配そうに大丈夫?といったので、笑って

答えたが、心配を掛けてしまっているのだなと胸が痛くなった。

その後、真綾達がやってきて、せりかに抱き付いたので、アメリカンな挨拶に照れながらも、抱きしめ返して「寒いね～」と照れ隠しに付け加えた。

本庄は、橘の所に行って二人で、ぼそぼそと話していたが、橘が「成程ね！」と声を上げたのだけは聞こえた。二人とも仲がいいなぁと思う。黒いところが呼び合うのかしら？とせりかは思うが、言ったが最後、碌な事に成らないのは、目にみえているので余計な事は言わない！と思ったが、カンのいい彼らは思っただけで文句を言ってくる厄介な人達でもあった事を思い出して、目を逸らした。

「何～お嬢さん、今良からぬ事を思ったでしょう？」

やっぱりおいでなすった。見逃すという単語が欠落してるんじゃないの？！と思うが、曖昧に笑うに留めた。

「椎名さんが分かり易いんだよ。前にも注意したじゃん。ね～？」と美久達に同意を求める。美久はケタケタと笑って頷いた。

「弘美―！小舅さん達が私に沢山付いて来てるの。助けてー？」と言って二人の傍から逃げて弘美の横に行った。二人でブルブルと寒いね～と手を取り合ってそのまま繋いだまま歩いた。くっ付くと少し暖かい。やっぱりひと肌だよね～雪山は！というと「「雪降ってないから」」と三人の小舅様から突っ込まれた。「みんなノリがいいね！」と美久がいうと本庄だけが大笑いして、橘は苦笑した。玲人は美久に「違うから！」とこれに関しては三者三様な対応だった。美久との親しさの差かもしれないなと思ったが、そう思うと、せりかに対して三人が同じ対応なのは三人ともせりかとの距離が同

じなのだろうか?と、ふと思った。皆さま、もう少しだけ離れてくださって構いません。とまた怒られそうな事を思ってしまったので、弘美の影に隠れた。

ロープウェイに乗って上にいくとガラス張りの温かい室内から、綺麗な夜景が見えた。すごい!地図みたいっ。北海道の先のところが地図の形そのままなのに感動してしまう。この形を元に出来ているのだから当たり前なのだが(笑)そうと判っていてもやっぱり、ここにいる!と日本地図に人生ゲームで使う人形を刺せそうなくらいに自分達のいる場所がはっきりと分かった。

結構温かい室内に、北海道の人は寒がりだという話を思い出す。寒いところに住んでいる人の方が寒さに強いのかと思うが、暖房を強くかけるので、室内温度は、せりか達の住む所よりも高く設定するので、北海道出身の人が、こっちは寒いよね~!と言って皆を驚かせた事を思い出した。今も少し着こんでるので、汗ばみそうだった。後からひえるので上着を脱いだ。

皆も口々に地図って正確なんだねっとしきりに言っていたので、さっきせりかが思ったような事を思ったのだろう。せりかは、横浜よりも神戸よりも、この地図っぽい函館の夜景が好きになった。

横浜は見慣れているし、神戸はあまりにも横浜と似ていて有難味に欠ける。神戸の人からみたら、横浜も遠いところに来た気がしなくてきっと旅行という点では有難味がないんだろうと思う。その点では、こちらは港の光も素朴で有り難さからいったらダントツに風情があった。

新婚旅行は、海外だから(予定)、その後くらいの家族旅行でまた来たいなと思う。それくらいせりかはこの函館がとても気に入って

しまった。明日の教会やテディベア博物館もこうなると期待が膨らんだ。食べ物も空気も美味しいし、道はまっすぐで車酔いもしないし、北海道ってほんとうにいいところだとせりかは思った。

４４（後書き）

横浜と神戸にお住まいの方、気を悪くされたらすみません。あくまで、話の上での主人公の個人的な感想です＞（＿＿）＜

45（前書き）

少し長くなりそうなので切りました。ちょっと中途半端なところかも（^―^；）

修学旅行の浮かれた雰囲気が伝わるといいなといった回です。

45

一日目の宿泊先は、湯の川温泉にある大きなホテルだった。

「やった！温泉だー！」

「せりかちゃんて温泉好きなの？」

「嫌いな人なんて、いないんじゃないの？」

「ふふっ。そうね。美人になれそうなお湯があるといいわね」

「でも、此処のお湯ってさらってしてて気持ちいいらしいよ？」

「詳しいのね～。せりかちゃんは、効能よりも、お湯の加減が気になる方なのね？」

「だって～、腰痛とか、膝痛とか、皮膚炎とかっていわれても、効能ってお年寄り向けな感じだし、子宝の湯とかって書いてあったら入りづらいじゃ無い？」

「確かに～！そりゃあ、入れないわ」

「そうすると自分で入った加減が気持ち良いのが一番なんだ～！」

「露天風呂もあるみたいよ。寒いかもしれないけど」

「入れたら、入ってみちゃう？」

「そうね。スキー場で雪の中、入った時も何とかなったから、大丈夫かもね…でもお風呂までが茨の道で、肌を刺すようだったから、急いで転ばない様にしないとね」

「そうなんだー！なんだか楽しくなって来ちゃった！」

きぁあきゃあ言いながら、自分達に割り当てられた時間まで、少し荷物を整理した。此処は一泊しかしない為、あまり荷物を広げないべきだろう。夕食はお風呂の後なので、部屋着には着替えられないなとインナーとお風呂セットと皺にならなくて嵩張らないからと3枚いれた被るだけで着れるゆったりしたワンピースを持っていく事にした。

真綾と美久と弘美も合流して大浴場に行った。

身体を洗ってから、内湯に浸かる……うーん…気持ちがいい。透明でさらさらの湯は清潔感があっていい感じだ。そんなに温泉めぐりをしてはいないが、温泉という言葉だけで気分が浮き立つし、実際大体のところで角質が落ちる成分があるのかツルピカになれる。

うにゃーと満喫していると沙耶が、「行っちゃう?」と言ったので、露天風呂を突撃する事にした。

「ドアはすぐに締めないと中の人に迷惑かけちゃうから、さっといきましょうね」

にゃるほど！露天風呂寒い版には、特別に入る作法があるらしい。

二人で露天風呂に行くドアをぱっと開いてさっと閉じた。

寒い…喋れない…歩くのが…つま先だちになってしまって…すぐ傍にみえるお風呂が…遠い…。

やっとの思いで辿りつきお湯に浸かると、じわーと体中が生き返る様に気持ちが良かった。

「やっぱり、寒いときこそ露天よね？」

「ホントー！沙耶ちゃんが言った通り、途中大変だったけど、極楽～！ってなるね♪」

「見てー！すっごく一杯星が見えるね！」

「本当！空気が綺麗だからかなぁ？」

「そうね。みんなは、流石に勇気が出ないからいいっていってたわ。こんなに良いのに勿体ないわね」

「寒いからねぇ。でも寒いからこそなのにね！」

二人で、しばしこの景色と露天風呂を独占したが、時間もあるので、あがる事にした。帰りは、行きに比べると全然楽だった。ちょっと謎である。元々が寒い所からの移動だからなのだろうか？……。

髪を洗って、シャワーで身体を流して手早く出た。時間が次のクラスまでもう少しだった。

皆は化粧水を塗ったりドライヤーで髪を乾かしていた。お風呂に入ったばかりなのに薄化粧をしだす子までいて流石に驚く。まあ、これから食事だもんね。どうして逆じゃ無いのかと思うが、クラス毎

の時間の関係で、夕食前になってしまったのだった。せりかはさっぱりしてからご飯の方が、良かったが、髪を乾かして、一応異性の前に出れる様にしなければ成らない事を思えば、不満を言う子の言い分は最もだった。

「夕食、バイキングなんだって！」

「うわー！好きな物だけ食べちゃいそうだし、食べ過ぎそうね？！」

「せりか、普段結構ダイエットしてるもんね～」

「まあね。過度なものじゃないけど、一回食べ過ぎると胃が大きくなっちゃうからその後辛いんだけど、今回は竜宮城に来たって思ってるから、帰ってから、頑張るわ！」

「せりかちゃん、そんなに細いのにダイエットしてるの～？！」

「せりかは、ちょっとそういう所、病気なのよ！」

「まあね。玲人病とも言うけどね…今話すと夕食が美味しく食べられないから、寝る前に話すね…」

バイキングは、語源は帝国ホテルのお店が付けたらしいから、普通はビュッフェと言ってるところが多いけど、ここではバイキングと書かれていた。なんだかその方が食べるぞーという気合いは入ると思った。元々は海賊の食べる風景ががっつり食べてるイメージがあったから、そう付いたって言う話だった。

蟹は勿論イカや、なんと今の旬のボタンエビ発見！なんだか本当に北海道＝竜宮城に思えて来た。一応、お肉類や揚げ物や、おでん、ラーメン、てんぷらと色々なコーナーがあるが、せりかの目は完全に生ものに向いていた。

ボタンエビをほうばると、甘―いトローとした美味しいエビだった。鮮度が違うのか、気分が違うのか、生もの類は全て地元で食べるものと全然違った。だって、イカが透き通ってるってどんだけ新鮮なんだろうって思う。

「せりって、海鮮物見ると、他になんにも食べなくなるよな～。せめて、なにか炭水化物と野菜類取っとけよ。具合悪くなるぞ！」

「サプリメント持ってきたもん！」

「もん？じゃねーよ！小母さんに言われてるの！なんだか浮かれるせりを見て危機感持ったみたいだったぞ？」

「いや！夜の炭水化物は、普段だって余り食べないからいいのよ！温野菜は一応採っとくから！」

「じゃあ、俺が持ってきてやるからそれは全部食えよ？」

「うん。わかった。有難う…」

二人を見ていた外野は唖然として、二人に遣り取りを見ていた。なんだかおうちの居間に居る様子がそのまま再現されている様だった。

「玲人君って意外とマメなのねぇ」

「っていうかお嬢の我儘言うのって、高坂限定なの？普段にありえない我儘っぷりで、まるで真綾みたいだな……」

「綾人、余計な事言わないで頂戴！」

「普段から、あんな感じよ？みんな高校からだから高坂君と一緒のせりかの事、あまり見た事が無いのよ。一年の時はクラス違ったし、二年の初めは近寄らせなかったから」

橘と本庄は、二人の様子を見て、せりかが玲人を恋愛対象から外してしまうのが何と無く分かる気がした。本庄と真綾よりも家も近いし、存在も近かったんだろうと思う。逆に妹に接するような玲人が、せりかを恋愛対象に見れた事の方に疑問を持つくらいだが、そこは人それぞれ、考え方も違うし、こちらがどうこう思える事でも無いだろうと思う。

恋愛対象から外されてしまうのは、困るが、せりかに甘えられてみたいと言う願望が橘の中に生まれたが、多分それは惚れた弱みと彼自体が末っ子の所為（ため）だろう。

皆も修学旅行初日の夕食を楽しんだ。玲人とせりかの遣り取りは、その後も面白くて、十分にジュースの肴（さかな）になった。

45（後書き）

投票下さった方、有難うございます♪
こんなに拙い文章に評価を少しでも頂けた事に大変感謝しております。
自分の納得の出来る所の出来までは持っていけるように頑張りますので、お楽しみ頂けると嬉しいです。

46（前書き）

告白…。

少し短めです。

46

「椎名さん、ちょっといい？」

食事から部屋へ戻ろうとする所で隣のクラスの男の子に呼び止められた。

二組の委員長の田村だった。委員会の集まりで、一年生の頃からせりかとは多少面識はあった。

橘が隣にいる割には、その頃からよく話し掛けてくれていた人で、その時も彼は、六組の委員長で、隣のクラスだった。

今のクラスか元五組以外での異性と話すのは、とても珍しく、感じ良く話し掛けてくれる彼は、とても人懐こい、人に壁を作らない人だと思っている。

確か、サッカー部じゃないよね？と怖ろしいせりりん話を思い出すが、彼は、セーフだ！

「いいけど、如何したの？」

せりかが聞き返すと彼は、少したじろいで此方を見た。

一緒にいる玲人が、後ろで刺すような視線で威嚇し、横で橘はすぅーと目を細め、見た目にも分かる黒いオーラを放っている。本庄は流石にこの状況に、彼への同情と苦笑を禁じ得ないが、どうやらこの、イベントに乗ってせりかに告白しようとしている輩だと思うので、せりかのお目付け役の二人に処遇はまかす事にした。

本庄からすると、せりかは、かなり予想外な人なので、このあまりよく知らない相手と急に付き合う事に成ったから…等と言いかねないと思っている。

彼女からすれば、好きな相手ではなくても。高坂と橘の干渉をうけず、こうして彼らがいても声をかけてこれる田村という人物はかなり好評価な相手だろう。本庄もその点に関しては、相手の人物に感心するものがあった。せりかは、モテなくは無いが、如何しても脇にめったに居ない様な端正な美貌の彼が、常に横にいる。その上、とても人気のある幼馴染の存在がチラチラと見えるので、大抵の男は諦めてしまいがちだった。

サッカー部の連中は、真綾の件で本命視していた高坂が彼氏では無く、せりかがフリーな事を知っているからこそ、彼氏に立候補出来るのであって、何も知らないこの男が告白してくるのは、かなり勇気がいる事だと思う。

しかし、世の中、記念告白と言って、駄目なのは判っていて告白する場合は、記念に等と無理やり抱き付いてきたり、キスをしたりという思いきった事をする奴も稀にはいるので、やはりせりかと二人きりにする事は出来ない。橘達もその辺は判ってると思うので、如何にかすると思うが、せりかがそれを断る可能性もあるので、本庄も成り行きを見守った。橘達を断っても自分のいう事なら聞いてくれるだろうと思う事は自惚れているが、実際に彼女はそうするだろうという確信が本庄にはあった。

やはり、思った通り、相手に請われるまま、二人きりになろうとする田村を受け入れてしまい、高坂や橘をせりか本人が遠ざけた。過保護な彼らに「付いて来ないで！」と念を押していた。橘達は心配

な部分はあるが、多少の顔見知りらしい彼が、そこまでする事は無いと踏んだのか、せりかを追わなかった。

二人が、人気（ひとけ）のない非常階段の方に行くのを見て、本庄が後を追った。

男の方は、追ってきた本庄に気が付いて、抗議の声を上げだが、予想通りせりかが宥めて本庄の同行を許して欲しいと田村に言った。

流石に、せりかの脇にいるのは、デリカシーに欠けるので、少しだけ距離を取った。

男が本庄の方をチラチラと気にしながら、一年の頃から好きだったとせりかに告白すると、そういう事に不慣れな彼女は、ぱっとうす暗い所でも判るほど顔を赤らめて、驚きを隠す様に手で口を押さえた。

せりかの様子に脈があると思ったのだろう、男は勢い込んで距離を縮めた。

普通はそうだよなぁと本庄も思うが、初（うぶ）な反応なだけだと相手を睨み、こちらも距離を縮めると相手が明らかに不満を顕わに本庄に「少し離れててくれ！」と強い口調で非難した事で、せりかの頭は一気に冷えた。

今迄あまりせりかに縁の無かった事だし、相手に悪い感情は持って居なかったので、この告白に対して、どう返事をするかは、「少し考えさせて欲しい」というつもりだった。

しかし、自分を心配して付いて来てくれた本庄に対する態度は、あまり好ましいものとは思えなかった。確かに、告白の場所に他者がいる事は不本意かもしれないが、こんな暗いところで距離を詰めてこられたら、流石のせりかも防衛本能がやはりあまり良い状況では無いと告げていて、本庄が無理やりにでも付き添ってくれた意味が分かった。

「悪いけど、好きな人がいるからごめんなさい」

と言って頭を深く下げた。田村は一度期待してしまった為か、雰囲気に流されたのか、せりかの肩を掴んで

「っ！如何して俺の気持ちを分かってくれないんだ！君の事を一番想っているのは俺なのに！」

と揺すったので慌てて本庄が引き剥がした。

やはり無理にでも付いてきて正解であった。

橘と高坂はこいつの事を割合穏やかな良識的な人間だと認識しているからからのミスだろうが、本庄はそういう先入観もないし、人間は自分の欲の為には豹変する生き物だという事を知っている。

どんな事にでも保険は必要だと言う事も分かっているので、せりかの自分への気持ちを利用する形になろうとも、最善の策を講じた。そこには本庄の前で他者の告白を容易く受け入れないだろうという打算もあったが、それは少し相手に卑怯で卑劣な事をした自覚はあった。

「女の子に手荒な真似をするのは、駄目だよ?自分は好きだからって言う、理由があるかもしれないけど、椎名さんからすれば何とも思わない君に肩を掴まれたら怖いし、不快なだけだよ」

耳元で囁くと高坂がせりかの前で恥をかかせない様に小声で言ってくれた事を認識出来る程度には良識がある奴なのだろう。「悪かった」と小声で高坂に言った。せりかにも

「椎名さんごめん!!本当に悪かったよ!なんだか椎名さんが俺の事を、少しは好きなのかもって誤解しちゃったみたいで、怖がらせちゃって本当にごめんね……考えたらそんな事を一言も言われてないのに俺の思い込みだった」

「ううん。気持ちは有り難う。今迄通りというのは、田村君も難しいと思うけど……私の方は気にして無いから…」

天然に酷い事をいうせりかに、相手の男に同情してしまった。気にしないってそれは、気にしてやれよ!と本庄でさえ思うのだから、振られた相手の受けた打撃は相当なものだろう。

「とにかく、ごめんね!」と居たたまれず相手が去っていってしまったのは仕方が無いと思う。

本庄達も少し冷える非常階段から帰ろうとしたが、せりかに引き止められた。

「新たな恋を探すとかって言ったのに、いざとなると人間って自分に正直になるんだって分かったし、玲人達を過保護だって責めるのもお門違いだって分かった。だって本庄くんが居なかったらって思

うとやっぱり危機意識が足りないって思うもの。有難う。一緒に来てくれて……」

「いや、橘が引いた位だから、普段は安全な奴なんだというのは判るけど、人って状況で変わるからね！ちょっとおせっかいかと思ったんだけど良かったよ」

そう言うと、何故かせりかは少し黙りこんでしまったが、しばらくして思いきった様に話し出した。

「……本庄君の親切に縋ってしまって結局こうやって面倒まで見てもらってしまうから甘えてしまってる事はよく判っているんだけど、今から、私も告白するから、きちんと振って貰えないかしら？図々しいのも答えも解っているけど、ちゃんと本庄君から、拒絶の言葉を貰って無いからいつまでもしつこく想っていてしまうんだと思うの。自己満足なのは解ってるんだけど、はっきり私の事なんて何とも思ってないし、彼女がいるから困るって言って貰えないかな？お願い！」

「……」

困って黙りこんでしまった本庄に、それでも自分の気持ちをちゃんと伝えられる最後の機会だと思い、せりかは心の中にしまって来た言葉を紡いだ。

「本庄君の事が好きなの……半年前よりも…どうしようも無いくらい…ただ、好きなの…」

本庄は、ここで聖女に懺悔をしても許されるのだろうか…？と突然のせりかの告白の切なさに気持ちが大きく揺れるのを感じた。

47

せりかの「どうしようもない位、ただ、好きなの…」という言葉は、本庄の心に深く沁み込んだ。

今迄、せりかから本庄の事が好きだと、本人から聞かされていた事は告白にほぼ近かったのかもしれなかったが、真綾の事を思ってわざと軽くぼかした言い方であった様に思う。

こんなに、はっきりとした告白を受けたのは本庄自身も初めてだった。

しかし、せりかが望んでいるのは、はっきりとした拒絶の言葉だ。

そんな事を今の本庄に言える筈も無い……。

かといって心では、言いたい言葉は沢山あったが、受け入れられる言葉は、今の本庄には持ち合わせてはいない。

結局何も言えない本庄は、寒さに震えるせりかの細い肩を抱き寄せてしまった……。

「っ！これ以上、優しくしないで…」

そうせりかは弱々しく言ったが、緩く抱きしめる手を振り払おうとはしなかった。

彼女の体温を感じながら、泣いてしまった彼女を隠す様に胸に抱き込むと、せりかも縋る様に本庄のシャツを掴んだ。

突然の抱擁に夢の中にいる様な気持ちになったが、せりかはたった一度だけ…と決めて、本庄の背中に手を伸ばして、自分から強く抱きしめた。本庄の背中がびくんと揺れたが、優しくした罰だとせりかは心の中で思った。

慰めの軽い抱擁から少しきつく抱き付くせりかは、自分に罰を与えているつもりなのだと本庄には判ったが、それは余りにも甘すぎる罰し方だと思う。

せりかから、身体を離した時には、もう泣き顔では無くて、悪戯が成功した時の様な得意な顔で「甘く見ているとせんせいの方が痛い目を見るわよ?」と冗談めかして言った肩はもう震えてはいなかった。

結局自分の弱さをさらけ出してしまったのに、せりかの気丈さに救われてしまう結果になってしまった。

せりかの為に、せりかの望む様な拒絶の言葉を口にするのは無理にしても、言葉が出なかったからといって抱きしめてしまった事は明らかに真綾に対する裏切りだった。

しかし、せりかの与えた甘い罰は、確実に本庄を苦しめるものだったのだから、彼女の軽い復讐は成功していたのかもしれなかった。

別れ際、せりかが笑顔でお礼を言うのをせめて本庄も精一杯微笑ん

で応えたかった。うまくいったのかは判らなかったが、それでもせりかが微笑んだので、少しだけ安堵したが、それでも刺さってしまった棘が胸に到達するのは時間の問題だと本庄は思った。

せりかが部屋に戻るとお菓子とペットボトルのお茶を片手に皆で宴会をしていた。二人部屋では？という疑問を此処で言ってしまうほどせりかも鈍くは無い。みんな、田村の告白の顛末を聞きたくてうずうずしているのだ。

「ねえねえ、やっぱり告白だったんでしょう？」

やはり一番付き合いも長く、遠慮の無い美久が切り出して来た。

「田村くんって二組の委員長よねぇ？」

一年の頃は一組の委員をしていた沙耶も多少の面識はあるのだろう。

「それで、何て言われたの？！」

少し興奮気味に聞いて来られるが、本庄との事があって、すっかり田村との遣り取りが抜け落ちてしまった自分は、なんて誠意がないんだろうと思う。

必死に思い出しながら、せりかの記憶は、食堂で呼び止められた所まで巻き戻さなければ再生が効かない程で、しばし考え込んでしまった。

皆が効きたいのはなんて言われたのかだと思ったので、「一年生の頃から好きだった」と言われたと言うと、皆がきゃー！と悲鳴を上げた。……この手の話は女の子の好物だから仕方が無いかと腹を括り「好きな人がいるのでごめんなさい」と断った事を話すと真綾以外の三人は急に表情を硬くした。

ちょっと失敗したかも？…でも嘘なんてつけないし…なんか空気をわるくしちゃったかな？！とせりかが焦ってしまうと、沙耶が「田村くん良い人だったのに勿体ない！」とフォローなのか多少は本心も混じっているのか、少しだけ話題を別の視点から繋いでくれたので、また騒がしく「二組って他にいい人いたっけ？」とか「うちのクラスの人で良いと思う人っている？」など一般的な恋愛話になったので、ほっとした。

真綾だけは、「せりかさんって好きな人が居たのね…」と暫くして呟くまで、口を開かなかった。

結局、せりかがどう思おうが本庄は真綾の彼氏で婚約者なのだし、疎外感を与えるのも悪いかと思って言ってしまった方がいいのかと皆も少し思った様だが、やはり本庄から言ってもらうか、言ってもいいものか聞いてみないと二人の関係が悪くなってしまっても困ると思ったので、せりかが軽く首を振った。皆もいわないで欲しいと言う事だけは、解ってくれた様だった。

三人が部屋に引き揚げると沙耶が声を掛けてきた。

「せりかちゃんもちょっと辛いよね…。まだ好きだったんだったら…」

「真綾さんと付き合い始めてから好きになったから、完全に無理なのは最初から分かってるんだけど、後ろめたいのは確かなのよ。でも知った所で気分を悪くするか、気を使われちゃうかじゃ無い？」

「そうよね～。知らない方がいい事もあるかもね。私も知らせない方が良いと思うわ」

「うん。でも、知らせるかどうかは、本庄君に任せようかと思っているの。今日みたいに何かの拍子に分かってしまうよりも私の口から聞いた方が、真綾さんも傷付かないかと思うし…」

「せりかちゃんが辛いのに……人の事まで考えなくても良いのよ？分かったとしても彼がなんとかしてくれるから、せりかちゃんはもう何も考えないで眠りましょう？明日も早いし」

そう言って沙耶が部屋の明かりを落とした。

47（後書き）

歯は磨かなくていいの？という突っ込みは無しでお願いします（笑）

48

思わずせりかを抱き締めてしまった時はとても緩い抱擁で、軽く肩を抱く程度のものだったが、せりかが本庄の行為を罰するかのようにぎゅっと抱きついて来た時には、急に触れた軟らかい感触に慌てて離れようと身体が一瞬、仰け反ってしまった。

しかし、自分から求めた抱擁が深いものになったからといって離れるのは失礼な話だ。…と言い訳したところで結局はなされるがまま、せりかに包まれて幸福感を感じた事は事実だった。抱き締められたところの背中に伝わる強い感触が、洗いたての少し強く香る髪の香りが、思い出す度に本庄を切ない気持ちにさせた。

きっとせりか本人は自覚が無く、こちらがこんなに苦しくなる事等思いもしないのだろうと思う。

それは田村にも見せた残酷な無邪気さと同じだが、そんな彼女の純粋さと相手の事を思い遣る慈愛が共存した所が、不思議と融合して彼女の魅力になっているのだと思う。

橘や田村も、せりかの見た目ではなく、そういうところにきっと惹かれたのだと思う。

それに比べると自分は相手が与えてくれる愛情の深さに絆された部分も大きく、既に自分に好意を寄せてくれているせりかに気持ちが傾いてしまうのは、他のせりかを思う者に対してとても卑怯だと思う。

それに、大前提として、婚約者のいる自分が彼女からの愛情を受け

取る資格も無い。

真綾はずっと自分が生きる意味を見い出させてくれた存在でもあった。

彼女の面倒をみる度に、我儘を聞く度に、自分が存在する意味を確認していた本庄には、本庄本人を心から望んでくれる存在を渇望していたのだとずっと分かっていた。

両親の愛情が無かった訳では無いが、比較的幼い内から、自我が芽生えた自分は周りの思惑が愛情だけでは無い事を感じていたし、いくら取り繕おうとも幼い自分の不信感を持った目で見られた両親が、自分を純粋に可愛い等と思えなかっただろうという事は今になってみれば簡単に解る事だ。

少し遅く生まれた従兄妹に愛情を注ぐ事で、自分の欲求を昇華しようとしていたのだから、それこそ無償の愛情を聡明な両親から存分に受けて育った真綾には、不要なものの押し付けだった筈だ。

しかし親鳥からの刷り込みの様に、愛情を注いだ相手に付いて回るのは、当然の事だったし、子供ながらにそれに満足感を覚えていた。ずっと自分の大事な宝物の様にして育てた彼女に対して、独占欲というよりも自分のものでいて当然といった感情があったのは確かだったし、多分彼女の人格を尊重した覚えも無かった。

しかし、高校生になった真綾は本庄も思いもよらぬ程、人間として成長して逞しくもなったし、魅力ある女性として見れる様になった。

せりかの魅力を見つけたのも、本庄よりも真綾の方が先だった。真綾は「せりかちゃんって可愛いのよ?」とあまり話した事もないう

ちから、よくせりかの長所を語っていたが、本庄から見た彼女はイイ子過ぎて痛々しくなるくらいの優等生で、面倒見もよくていかにもなんでもそつなくこなす典型的な委員長タイプだった。

印象が変わったのは、真綾の言葉では無く、文化祭のワルツの練習からだった。

踊る為に手を取った時の最初の表情は忘れられない。

びっくりして黒目がちな大きな目を更に見開いて頬を染めたが、それを本庄に悟られないように必死に笑顔で取り繕う姿は、初々しい中にも凛々しい使命感が彼女の中で勝っているのだと判る強がりに、とても可愛らしい人だと思った。

その後の踊りの特訓の頑張りも、最初の印象をより濃くさせるもので、彼女の事を橘が好きだと分かった時も然程驚かなかったが、うまくいくとも思わなかった。

彼女には幼馴染の高坂がいる。彼女とおそらくは長い歴史を刻んできただろう高坂に、橘がかなう筈は無いから止めたほうがいいと止めたのは懐かしい記憶だった。

しかし、予想外な彼女は、何の過ごした時間の長さも歴史もない、出会ったばかりの自分を選んだ。

最初の方こそ、気の迷いで、最後は高坂に落ちていくのだろうと思っていた。橘も判っていた様だが、彼女にはあの時点で、将来おじいちゃんとおばあちゃんになっても高坂との縁は切らないと相手を振りながらも、関係を其処まで切りたく無いと思うくらい愛情を感じていたのだから、それが成長と共に、恋情に穏やかに変わって行

くものだとばかり思っていたのだ。

しかし、なんの見返りも求めずに自分を愛しそうに見つめて来る彼女に、何の感情も抱かないでいられない筈も無い。それは半年以上続いて、結局気持ちの上でいつから彼女に惹かれてしまったのかは、定かではないが、「許される場所では、年齢相応の本庄君でいてもいいのよ？」という無条件の愛情からくる許しの言葉を聞いた時に、彼女への気持ちが、友人としての気持ちだと自分の中で誤魔化しが効かない種類のものだと観念せざるを得ない程衝撃を受けた。彼女の前では何もかも許された状態で受け入れられる事への幸福感は、真綾には悪いが、真綾にそれを感じた事は無かった。真綾にあったのは逆に必要とされている満足感だった。

こんな裏切りを可愛い真綾に悟られる訳にはいかないが、このまま真綾と婚約したままなのは、もっと駄目だ。やはり婚約は解消すべきだと思う。それから真綾が必要としてくれる所で手を差し伸べるのが正しい関係で、今迄がいかに歪（いびつ）であったかを思い知らされる。真綾も段々には気が付いて、この歪（ゆが）んだ関係の解消を遠からず向こうからいって来ただろうと思う。

しかし、自分の心変わりと思われても仕方が無いし、実際せりかもそう思うだろう。人間の本質の闇の感情など理解されないと思う。しかし、理解出来ずとも無条件の愛で受け入れてくれるせりかは自分の闇などきっと簡単に振り払ってしまうだろう。

結局眠れないまま朝を迎えてしまった。真綾には今迄の気持ちを旅行が終わったら話そうと思う。せりかは本庄の闇を払って許しをくれても、真綾を裏切るせりか自身の事は許さないのだという事は解

る。

きっと自分を責めてしまうせりかに、真綾と別れる事を告げる事は出来るのだろうか？

本庄にはそれをした時にとるせりかの行動は未知数で予想する事は不可能だった。唯、とても彼女が苦しんでしまう事だけは確かだろうと思った。

朝、一睡もしないまま連れてこられた場所は、大きな湖の様な沼のある美しい公園で、朝もやの中で目に映る光景は本庄には現実とは思えない程幻想的だった。

横にいる真綾に「私達、従兄妹に戻りましょう？」と唐突に切り出された事も現実だと認識するのに暫くの時間が掛かってから、ゆっくりと真綾を見た。

48（後書き）

投票下さった方々、本当になんといっていいのか分からないくらいにビックリと感謝の気持ちで一杯です。本当にありがとうございます。

あと、いつもご覧頂けてる?と勝手に思っておりますが、方々にも深く感謝を込めてこれから書き進めて行きたいと思います。

49

真綾に投げかけられた言葉に息を?む。

寝不足の為に、少し痛む頭で考えるが、真綾は本庄の真意に気付いてしまったのだと分かる。

ずっとずっと一緒だった従兄妹の彼女の瞳は、湖面の様に静かに透明に本庄の姿を映していた。

「別れましょうとは、言えないわ。だって私達付き合っていたのかさえ、あやふやな位、綾人に付き合おうって言われてから何も変わって無いんだもの」

真綾の言う言葉は、本庄の胸を抉(えぐ)った。変化が無い事を特段気にして居ないと思っていた真綾は、ずっとあれから本庄の仕打ちに耐えていたという事なのか?!

「ごめん…。俺は、……真綾の事を傷つけただけだった…」

「そうね。でも、裏切られた訳じゃない事は解ってるわ。私が、綾人の家族で、綾人の求める物をあげられるって思ってたけど、結局無理だったってだけなのよ」

真綾には、真綾に依存する本庄の本心が判っていても、尚、救いの手を差し伸べていてくれていたという事なのか?と驚く本庄に真綾は微かに微笑(わら)う。

「何処かで最後は、綾人は私を選ばないって思ってたの。ずっと前から…実際彼女がいた時も、最後は私のところに帰って来るなんて思っていた訳では無かったの」

「じゃあ、何故俺が付き合おうと言った時に頷いてくれたんだ?」

「あの時、綾人は、とんびに油揚げを攫われたら困るから、付き合おうって言ったわ。…ずっと綾人のお嫁さんに成るのが夢だった私はその言葉に跳び付いてしまって、ようやく他の女性じゃ無くて私を見てくれるのだと有頂天になったけど、……攫われたら困るのは、本当かもしれないけど、結局あの言葉は、元々は私は綾人の所有物だったって貴方が思っていた事を物語っていたわ!綾人がようやく手に入るって思った私が、直ぐに気が付いて目を覚ますには十分な言葉だった…。でも、夢から覚めても夢が続いていたら、綾人だったら、自ら覚醒する勇気がある?私にはそれが無かったから、ひたすら夢の世界を歩いているような気持ちで夢が終わる瞬間がくるのをずっと待っていたのかもしれないわ。だって夢の中で人は生きていけないでしょう?」

本庄は唖然とした。あの時の焦りで自己保身の為だけに真綾を縛りつけた言葉は、真綾にこれだけの負の気持ちを与えてしまっていたのだから…。

「真綾……ごめん…真綾は俺の大事な…宝物だったのに…」

本庄の胸は張り裂けそうだった。自分の愛する幼い少女はお人形だった訳では無い。ちゃんと自分の意思が存在していた筈なのに、どうして自分はそれを見ずに来れたのだろう?

「綾人はおそろしく勘が鋭いけど、私に対しては、ずっと一緒だっ

たから判っているつもりなのか、ひどく鈍いし、ガードも甘く成る事、気がついてる?私だって綾人といない時間も結構あったし、小さい頃の様に何でも話したりする訳じゃ無くなっていたのよ。綾人にとって私は小さな可愛い従兄妹でいて欲しいと思っている事も分かっていたから、ずっとそう振舞ってきてしまったけど…演じ続けた自分が駄目だったっていうのは分かってるの。結局は本当の素の自分で体当たりして行かなかった私も悪いのよ!」

「それでも、真綾は、そうしてでも俺を選んでくれたのに…俺は真綾を裏切った!」

「最初から夢だと分かっていたのだから、現実に帰るだけよ!出来れば大人になる迄夢の中に居たかったけど、それでは大人に成れないわ…不健全でどうしようもない御飯事をしていても仕方が無いのよ!!私達は、……最初から最後まで、ずっと従兄妹だったというだけ!私も気付いていたのに、わざと綾人の気を引く為に箱庭から出て行かない私を綾人がお人形の様に感じたとしても、そう思う様に仕向けて来たんだから仕方がないわ。そんな女性を綾人が選ばないのは当然だったのよ」

「俺は、多分、今迄真綾が居なかったら、生きて来れなかったと思う…」

「それこそ思い込みよ!多分、私以外の他の何かをみつけていたと思うし、普通は子供が生きる意味なんて考えないものなのよ?綾人が人より早くにそういう問題に直面しちゃって、子供なりの納得の仕方をしただけなのよ」

「普通は考えないものなのか?!」

「ふふっ！当たり前じゃない！遊ぶ事と楽しい事しか考えないわ。生きてるのは当たり前なのよ。生まれて来た意味を考えたりする哲学的な子供だった綾人が変わってるのよ！」

「それは、子供らしい子供では無いのは分かっていたけど、皆もそういう事は他人には言わないだけで、心の中では考えているんだと思っていたんだ」

「みんな誰かの為に生きている訳じゃ無くて、自分の為に生きているし、生まれて来た意味なんて死ぬ時にだって分からないわ。きっと！」

「俺が少し考え過ぎだったって言う事なんだろうな……」

「分かっていたのに教えなかった私も、相当性格が悪い子供だったわ。だって教えたら綾人が私を構ってくれなくなるかもって思って、教えたくなかったの！綾人は私をずっとお姫様扱いしてくれていたんだもの」

「そうだったかもな。真綾は俺の宝物だから、俺が守らないとってずっと思っていたからな。あの頃は」

「だから、みんな自分本位に生きているのに、綾人だけが、罪悪感を抱えなくてもいいのよ？私だって、自分の為に綾人が悩んでいるのを見捨てたわ」

「それは、子供だったんだから、自分の利益優先なのは仕方がないだろう？例えばお菓子だって大きい方を選ぶだろう？」

「綾人は無意識だったかもしれないけど、いつも大きいほうや、イ

チゴが多く乗った方のケーキを私にくれたのよ?私はそれを良い事に綾人に甘えまくちゃったけど、綾人を甘やかしてくれられる人と出逢えたら、それを私は喜んであげたいの…。もちろんそれに私が成りたかったけど、でも今は、そういう人と巡り逢えて生きる意味を考えなくても、見つけようとしなくても良い位、綾人が幸せに包まれたら、私も恩返しと罪滅ぼしができるのかな~と思うくらいには、大人になったのよ。優しくなったでしょう?」

「真綾は、昔から優しいよ!ただ素直じゃなかっただけだ」

「そうね。素直に綾人の間違いを正してあげて、もっと早くに私が居ないと駄目だと思う誤解を解いてあげられれば良かったけど、子供だったし、仕方が無いわよね?!」

「俺が、捻くれて馬鹿な子供だっただけで、真綾は悪い事なんて一つも無い!!真綾に辛い思いだけさせたと思っていたけど、それも俺の自惚れと奢りだったって思うよ。真綾は、自分の為に生きて自分の道を進んでいるのに、勝手に俺が閉じ込めたかの様に思ったのは、俺がそう思い込んでいただけなんだな」

「そうよ。綾人はちょっと頭でっかちで考え過ぎだから、良い事を考えないのよ!人間あまり考えすぎないで、欲望に忠実な方が幸せになれるのよ?もちろん法の範囲でだけどね♪」

「真綾のいう通りなんだと思う。生まれてから初めて思ったけどな!」

「綾人って結局そういう上から目線のところが有るから、せりかさんに好きなままでいて貰えるのか、不安だわ。唯でさえ彼女には良い部分しか見せて無いのに、こんな人だと判かっても綾人を好きで

いてくれるのか心配になっちゃうわ～！それに、あの橘くんが超やる気出してせまってるのよ？旅行中に靡いちゃわないか心配ね。班行動も別だし？」

「お前、何処（どこ）まで解ってたんだ？今迄？！」

「さあね。どこまでかしらねぇ？綾人には幸せになって欲しいけど、悪いけどまだ応援する気までは成らないから、邪魔しても恨まないで頂戴ね？！」

「……」

女はとても逞しいのだ！本庄が思うよりもずっと…！！

50（前書き）

５０話迄来たのが驚きです。

今回は楽しい修学旅行編です。最近どろどろして来ていましたので明るめに！

50

「かわいい～すっごく豪華な振り袖着てる～」

せりか達は例のテディベア館を見に来ていた。みんなそれぞれ一体一体違う顔をしているのが魅力なんだよねぇと好みのクマを見つけては立ち止まり、沙耶とせりかが盛り上がる。

「みんな同じにしか見えねぇけどな？」

「まあまあ、楽しく女の子達が見てるんだから水注（みずさ）すのはやめろよ？…そうは言っても俺もちょっと分からない世界かな～」

しかし、せりかのくるくる動く表情を見ているのは楽しかった。普段落ち着いている彼女がはしゃぐ姿は珍しく、昨日の夕食時といい、旅行は彼女の別の顔がみられるチャンスでもある。

「あの赤い振り袖みたいなの着たいなー！成人式の時に…」

「もう用意してるって言う子の話も聞くけど私は寸前でいいかなって思ってるの」

「最近は結構着物にも流行りがあるもんね！沙耶ちゃんは何色の着物がいい？」

「私も赤かピンクがいいわ！だって成人式の時にしか着られないじゃない？年齢が相応になってから着れる色もあると思うから、若い時だけっていう思い切ったのがいいかな」

脇で聞いていた橘は、赤やピンクの着物を着た二人を思い浮かべるが、二人ともクールな青か紫の方が断然似合うと思ったが、それこそ水を注す行為なので口には出さなかった。

「橘君、一緒に写真撮らない？」

沙耶からの申し出に後ろに糸を引く存在を感じるが、断りづらい。玲人がこんな時だけ気を利かせて、せりかにも一緒に入る様にいって、両手に花、バックにクマの状態でパチリと撮られた。

沙耶とせりかは『やったね！』と顔を見合せた。せりかは橘の醸し出す邪悪な空気を少しでも変えようと、沙耶と玲人を違うクマの前に立たせてポーズを取らせた。後ろに渦巻く黒いオーラをちょびっと感じて痛い……いや、…ちょっとじゃ無くて、だいぶ痛いかもしれない……。

沙耶から言われたら断れないかも？と思ったら案の上うまくいった。サッカー部関係で委員の仕事を肩代わりしてくれる沙耶には、玲人同様、橘も、とても弱い。相手が高飛車にやって上げてるのだから感謝しなさいよ！というような感情が一切沙耶に無い事が、余計に二人を弱くさせてしまう原因だろう。

これから、困った時は沙耶頼みだなっとほくそ笑む。そうすると橘がやって来て「なかなか、やるね？！椎名さんは、流石に違うなぁ」とにっこりと笑ったが、笑顔が怖すぎてせりかにはとても直視出来なかったが、駄々漏れたフェロモンが周りにいた女性客の頬を紅く染めさせた。

せりか以外の女性には、稀有な美丈夫の艶やかな笑顔は、充分に効果を無駄に振りまいて発揮されていた。

それを見ていた玲人と沙耶は、「世の中って上手くいかないね…」といる場所には似つかわしく無い言葉を口にして二人して溜息を吐いた。

それから、教会を見て回るが、童話にでも出てきそうな尖った青い屋根の建物はメルヘンチックだが、説明書きを読むと由緒あるロシア正教の教会らしい。日本人のせりか達は、信仰に関しての感情がいまいち分かりづらい所もあるのだが、ここで昔から祈りを捧げてきた人達の息吹は少しだけ肌で感じる事が出来たような気分になった。

港町は、外国人の往来も多かったから、教会も多いのだと思う。外人墓地や異国情緒溢れる古い建物も沢山あり、旧領事館など見てまわるが、徒歩圏内に観光名所の多くが固まってあるのが嬉しい！

朝早くに行った大沼公園のソフトクリームが有名だと聞いていたので、お店が開いていなくて残念に思っていたら、そこの物と同じものを売っているお土産屋さんが存在していたので、皆でアイスを食べながら少し休憩する事になった。

その公園の後に連れていかれた朝市で玲人と一緒に吟味に吟味を重ねたお土産を二軒分一緒に購入して、せりかの家に送る事にしたので、母に玲人の家に半分持って行って貰う様にメールを打った。

母から直ぐに『ありがとう～？玲人君によろしくね♪楽しんで来てね？』というラブリーなメールが届いたので、そのまま玲人に見せるとぷっと吹き出した。

「ソフトクリーム食べてる時に笑わせるなよ！」

「宅配代が得になるから一緒に送ったお土産の事、メールしたら速攻でこのメールが返って来たのよ！」

「小母さん相変わらず面白いなぁ～！この間の誕生日宴会も大騒ぎだったもんな」

「あれは、来年は受験生だから勘弁して欲しいよね。私達の誕生日をだしに宴会してるだけじゃんね！もう蟹も食べちゃってもいいから両家でかにすきでパーティとかならないと良いけどね…」

「旅行から帰って疲れてる所に企画されると流石に厳しいよなぁ。かといって土産送らないと怒られるしな！」

「今回は二人で、なんとか回避しようね。怪しい動きがあったらメールするから、そっちも目を光らせてね？」

「分かった。逐一報告メール入れるから！！」

二人でやや愚痴大会になった後、決起集会を終えて頑張ろうね！と頷いた。

その様子を微妙な顔で橘と沙耶は見ていたが、堪え切れず二人が笑い出した。

「っ！気管にアイスが入りそう！めちゃめちゃ面白いね。せりかちゃんと玲人君ちって！」

「ははっ！聞きしにまさるってこの事だな。たいした事なさそうな事に、二人が超必死なのが余計に可笑しいって！！」

二人が笑うのを遠い目をした玲人とせりかが見たが、余計にツボに入った二人が更に笑ったのは言うまでも無い。

酷い～！と玲人に言うと、そうだな！二人とも俺達の身になったら笑えないよな～！と二人で慰めあったが、それが更に可笑しかったが、流石の二人も今度はぐっと笑うのを堪えた。

しかし、せりかと玲人は仲が良いよなぁと沙耶と橘は思うが、苦労も多そうで更に少し面白い関係に羨ましいような、そうでも無いような…と、とにかく微妙な感じがした。

せりかが割と大変だと話していたご近所関係が垣間見えた瞬間だった。そういえば、ダイエットの事を玲人病だと言っていたのも田村君の告白で昨日聞きそびれたが、この関係に繋がっている話なのかもしれないと、昨日のせりかの憂鬱な言い方を思い出して沙耶は思った。

せりかは、コクがあるのにさっぱりしてるね♪とソフトクリームの味を褒めた後にお昼ご飯の話をし始めた。

沙耶はダイエットの話を思い出した後なので、大丈夫なの？と思うが時間を見ると、とうに昼食を取るのには遅い時間になっている事に気が付いた。

男性陣二人に気を使って、（テディベアで恩義を感じているし）デ

ミグラスオムライスが美味しいと言われている大正時代の建物で有名なお店に観光も兼ねて行く事になった。

やはり、さっぱりした海鮮ものばかりでは辛いだろうという配慮からだったが、お店も趣があって、滅多に地元ではお目にかかれない様な建物の中で食べるオムライスは味の方も最高だった。

その後、元町公園に散歩に行くと港が一望出来て、爽快な気分になった。昼間の景色も海がキラキラと光って綺麗だった。

集合時間が近くなったので、早めにバスが待機している駐車場に向かう。

もう集まっていた皆はお土産を買ったようで、手に袋を沢山持っていたが、お土産屋さんに行ったのに、ソフトクリームだけを食べて何も買わなかった手ぶらな自分達を見て、四人は可笑しくなって顔を見合わせて笑ってしまった。次の街では食べ物以外のおみやげもゲットしなくては！と笑いながらもお土産をあげる予定の親戚や友達や先輩達の顔を思い浮かべた。

50（後書き）

黒い手を使って写真撮影成功の巻です。今回は珍しくせりかの勝ちです。橘を見習う内に知略に長けるようになってしまったせりかに涙です。

51

バスは来た道を北上してかなり長い時間を掛けて札幌に着いた時にはもう辺りは暗闇だった。

途中に何回か休憩を挟んだものの、まだテディベア事件を引き摺っているのか？…考えたくないが違う方の理由なのか、橘に隣の席でからかわれっぱなしで異様に疲れてしまった。

彼と隣にいる事は慣れて来て平気だと思っていたのは、橘がせりかに対して、異性を意識させない様にして来た努力の賜物だったという事がこの数時間でよく分かった。

彼の視線が自分のどの部分に運ばれようとも、それは常に意識がそこに向かされてしまう。こちらが耐えきれずに視線を彷徨わせると悩ましげな溜息が聞こえる。傾国の美女さながらのその容姿は、彼が自分でそれを武器にしたならば、こんな慣れたと思っていた自分にも充分に効果を感じてしまうくらい、橘と隣り合う身体が訳の分からない熱を持たされた。

お願いだから、その魔性の効果は私以外で発揮して欲しい！とせりかは切実に願うのだが、彼は玲人が言った事を本気でこの旅行中にするつもりなのかもしれないと、初めてせりかは思った。

今迄が今迄の関係で、この短期とは言えないまでも玲人とは比べ物にはならない時間で、玲人と同じ位の距離にまで近くに感じる彼が、色恋を匂わせる態度を取ったのはおそらく初めてだ。

以前に告白された時には、せりかのお子様ぶりに合わせてくれた彼

なりの幼いアプローチはあったが、断った途端に「好きだと本当に言われただろうか？」と思うくらいに彼は、簡単に友達から親友、そして悪友へと変わって行った。告白された事などまるで無かったかの様だったし、いつまでも本庄を思い切れない自分や、まだ自分に好意があるのだろうという態度を見せる玲人とは全く違い、超人的な普段の彼を裏切らない、さばけた態度だったので油断していたのかもしれない。というか、それが彼の優しさだったのだと今になってみれば解る事だった。

本庄を忘れようと他の人と付き合ってみようと考えていた自分は、そうしなければ思い切れないから無理にでも恋愛をしたいと考えていたが、田村の告白で結局自分の甘さを思い知らされた。誰でもいいという訳では無い。自分の心に響く人が現れなければ、多分無理だろうとあの時にはっきりと分かった。

それは、きっと橘にも言えた事で、あまりにも彼があっさりと引いたからと言って、彼女を作る気配は無い。むしろ去年は、告白されたりする隙がまだあったけれど、今年になってからは、意識的にせりかの横に立ち、女性を寄せ付けたく無い様だった。

それを思えば、橘がせりかの事等、とうに思い切れてると思ったのは、彼の態度がそう思わせていただけなのかもしれないと思う。

稀に見る美貌を持った彼は、一緒に街に出た時は、あえてせりかの隣を歩かない。隣を歩くのは学校の時だけなので、少し利用されているのだと思っていたが、出掛けている時の方が気を使っていたのだとも思えてくる。

美久などは、ふざけて二人だけでその辺を歩いて貰うと、羨望の眼差しに気分が良くなったと言って、よく遊びに付き合わせていたが、

仲間内のそういう遊びには軽く応じてくれるので、気さくな印象があったが、それ以外の女性は、特定の知り合いしか近付けさせない彼が、感じの良い玲人との対比で観賞用等と失礼な言われ様をしていたが、せりかが怒ると、「自分がそれでいいと思っているんだから、いいんだ」と静かに言ったので納得したが、今は、それでいい筈は無い様な気がした。

特に恋人が居なければならないという訳でもないだろうが、こんなに綺麗な彼が一人でいるのは、やはり勿体ないというか損失だと思われた。横に綺麗なお姉さんの三人や四人や五人くらい侍らせても良い位…と此処まで考えていたら、すこしせりかの中のおっちゃん思考が顔を出し始めたので、少し、頭を冷やす。

大体、触れるギリギリのところまで手を伸ばされてカーテンを閉めたり、（言ってくれれば閉めるのに完全にせりかが焦るのを楽しんでいた）妙にキラキラしい笑顔で話掛けてくるし（いつも話してる内容と同じなのに表情や仕草が微妙に無駄に艶があった）そういう些細なことをちくちくとして来た時は、クマの呪いか?と思っていたせりかも時間が経つうちに、自分を切なさそうに見つめてくる橘の真意に気付きたくないけど、無理やり気付かされてしまい、呪いと思っていた内は、どう反撃してやろうかといつものど突き合いの様に思っていたのだが、段々、辛くなって来た上に魔女のような魔性で近寄られれば、もう彼が、美しい悪魔の様に見えてきて逆らう事を諦めつつあった。

元々、橘がせりかに合わせて遊んでいただけで、魔王様に逆らおう等と恐れ多かったのだわ!と現実逃避したくなるくらい、甘く囁く様に、橘は本当に鬼だと思う。それでいて口説いてくる訳でも無く、話す中身は到って世間話なのだから、抗議を出来る訳でも無いが、せりかにとって苦行に近かった長時間移動はやっと終わり、札幌に

着いた時には、ほっとして魔王の魔手から助かったのだと思ったのだが、当の魔王様が、こちらの様子にくすっと黒い笑みを洩らしたのを見てしまって、玲人に助けを頼みたくなった。元々、魔王様を倒せる人間が居たかどうか不明だが、今回の事は玲人が差し向けて来た事だし、テディで沙耶も使ってしまったので、もうカードが無かった。

本庄の顔が頭を過ぎるが、田村の件で付いて来てくれたりと自分に何処までも優しくしてくれる彼を思うと真綾に悪くて、とてもじゃ無いが頼れない。まして玲人と同じ様に橘を推している可能性も捨てきれない。それを思うと彼に相談出来る勇気はせりかには無かった。取り敢えず、部屋に着いたら、沙耶に少し愚痴ろう。同じ年ながら今迄に包容力のある友人があまり居なかったせりかに、初めて出来たお姉さんの様な存在の友人に話す事が出来るだけでも、少し気分的に楽になるだろうと思った。

「結構疲れたね～。沙耶ちゃんは大丈夫だった？」

「結構移動が長かったものね。北海道ってやっぱり広いのね。他だったら県をとっくに超えてるところなのに、まだ道南の方なんだもの」

「そうだね～。一周旅行とかに行ったら、きっとバスに乗りっぱなしで、観光は二十分くらいで戻ってきてー！とかになりそう。だから、みんな北海道に行く時は、道東とか道央とかって分けて行くんだね。今迄北海道ってひと括りで思っていたけど、同じ県の中って思っちゃいけないね。大人になってからの旅行に来る時の勉強にな

ったよ！」

「今日はお風呂、部屋のだから、夕食までゆっくりできるわね」

「そうだね。残念な気もするけど今日はゆっくりしたいかも～」

「そうだよね！橘君に大分、押されて、タジタジだったものね。お疲れ様…」

「分かってたの～。あの鬼、悪魔！見た目が綺麗だからって騙されないわ！！」

「せりかちゃん…橘君は悪気は無いわよ…多分……それに鬼、悪魔って…」

「沙耶ちゃんにだって彼の悪魔の尻尾が見えたから、多分…とかって言うんでしょう？」

「あれだけ想ってくれてるんだから、少し考えてあげればいいのに……せりかちゃんだって玲人君推薦が無くても仲が良いじゃ無い？」

「……それは、彼に悪いから絶対にしたく無いの！私がこの先に橘君を好きにならないとは断言出来ないけど、好きにならない内から付き合ってやっぱり無理でした。っていうのは、失礼すぎるわ」

「橘君がそれで、終わらせないんじゃ無いの？」

「それも、それで、魔王様に流されてもいいのかな？って不安になって来るじゃないの～！」

「彼の事が、魔王様に見えるのはせりかちゃんくらいのものよ。アイドル顔負けの格好良さになのに、ナルシストじゃ無い人なんて稀(まれ)だと思うわ。今日だってどの位の女の子が振り向いたか途中で数えるの止めたくらいよ？」

「あの美貌を、活かせる商売が無いかと常々思ってるんだけど、彼自身が写真とか売ったら切れるだろうし、友達が嫌がる事もしたくないのよね…」

「せりかちゃんって好きな人以外には乙女思考に成らないって、よーく分かったわ！商売とかって、橘君に好かれて、考えられる事にある意味尊敬しちゃうわ」

「だって、沙耶ちゃんは奴の今迄の悪魔振りをしらないから、そんなに美化できるんだよ！私だって、彼の事、親友だし、どんなに悪い事をしても自分に害が来なければ協力もしちゃうけど、あの精魂吸い取られそうな悪魔にじわじわ言い寄られたら、危機感覚えるのも仕方が無いんだって！」

せりかの危機迫る言い様に少し気の毒にはなるが、本庄を諦める以上は、橘よりも適任な人物が他にいるとも思えないんだけどなぁーと沙耶は思うのだが、今言ったら確実にせりかが泣くのでそれは言うのを止めた。

しかし、せりかは鬼だの悪魔だのと橘の事を言うが、あまり人の事を悪く思っても口に出さないせりかに此処まで言わせるのだから、沙耶には分からない結構な悪行が有ったであろう事は分かるが、自分に向かない限りは仲間化しているせりかにはぴったりじゃないかと思うし、玲人も、それも判って勧めているのだから、見た目を裏切る位の可愛いものなのだろうと沙耶は思った。

勿論その様子を本庄達も見ていたのだが、真綾は横で楽しそうに「橘君が本気を出して落ちない女の子がどの位いるのかしらねぇ」ときゃらきゃらと笑った。

本庄も実際そう思ったが、真綾を傷つけて自分だけさっさと幸せになるのも如何かと思ったが、真綾はそんな風に思って、橘君に取られても私の所為にされても困るから、せいぜい頑張ってねと生温かい言葉をくれた。真綾の優しさに甘えさせてもらうべきかもしれないと思う。

しかし、どうやってせりかを籠洛出来るのか？予想外過ぎて分からないが、とにかく早めに好意を伝えるべきなのだろうか？それとも橘との関係を見守ってからにした方が良いのだろうか？と本庄も悩むところではあったが、橘の容赦のない攻撃に少し抵抗を諦めかけた表情を見せたせりかを思うと、あまり攸長に構えて居られないのかもしれないという危機感は募った。

52

夕食に行くと今日はジンギスカンだった。野菜がたっぷりで、高タンパク低脂肪のラムはダイエットにも良さそうでちょっと機嫌が良くなった。

夕食はせりかが、ジンギスカン鍋の面倒を見て、皆に取り分けると、玲人からは「せり、サンキュー」といつもの如く言われたが、沙耶には恐縮されてしまった。せりかはこういう事をしてあげるのは嫌いでは無い。王子にも渡すと、「有難う」とにっこり微笑まれるが、距離がバスの時ほど近く無い為、彼のスペシューム光線もどきも華麗にスル―出来た。少し自分で自分を褒めてあげたくなった。美味しいものを食べている時は、おおらかな気持ちにもなれるので、男性陣の御代わりのお肉も焼いてあげて立ち登るジューシーな香りにお肉を炒める手付きも軽やかになる。

沙耶にも勧めるが、お昼ご飯が少し遅かった為かあまり食べられないようだった。オムライスは美味しかったが、夜がジンギスカンだと分かっていればさっぱりしたものに変えていたのにっ！と思う。

旅のしおりには夕食と書かれているだけで、中身にまでは言及してはいなかった。少し、不親切かな？と思うが、先に書いて置くと好き嫌いなど言って来る者もいてきっと不都合もあるのだろう。来てしまえば意外と気分で食べられるか、諦めて食べれる野菜だけ食べて、持参した栄養補助食品でも食べるのだろうから、言わないでおこうというのは仕方が無いのかもしれない。

せりか達はおいしく頂けたので良かったし、悪魔も二人っきりで無ければ意外と平気だったので、明日の市内観光も少し気持ちが軽く

なった。

ラーメン横丁とかも行ってみたかったんだよね～！とせりかは早い立ち直りを見せて、沙耶にもにっこりと笑うと、少し心配顔だった沙耶も安心してくれた様だった。

し、か、し玲人には少し釘を刺して置きたい。せりかの苦労を察して欲しい。

夕食後、メールで玲人を部屋に呼ぶと直ぐに来てくれた。（普通は男性を入れてはいけないと分かっているが相手はいつも家でも二人っきりの玲人だし、沙耶もいる）

沙耶もいるし…と思ったのだが、沙耶も真剣な話をするのだろうと気を使って出ていってしまった。

「美久ちゃん達の部屋に遊びに行ってるから、せりかちゃんも用事が終わったらおいでね！」

と言ったので頷く。玲人は部屋を見渡すと、どこも部屋は同じだなと言った。札幌の方が都市圏になる為か、少し昨日のホテルよりも手狭な印象だった。

「せりちゃんは、それで、俺に何の文句があるのかな～？」

「せりちゃん？！気持ちの悪い呼び方しないでよ！生まれてこの方、そんな呼び方した事無いのに、玲人も流石に、少しは私に良心の呵責でも覚えたのかしら？」

「せりの方こそ、長年の俺の片思いを軽―くふっといて良心の呵責

に苛まれないのかよ？」

「悪いけど、ぜーんぜん、そういう風に思える余裕が今の私には無いの！長年っていうけど、早く言えば長年に成らないようにしてあげたわよ？！」

「ひでぇー！！人道的にどうなの？って思わない訳？何時からせりは、そんな奴になったんだよ？」

「玲人が、あの腹黒王子と付き合うか？自分と付き合うかっていう究極の二択を迫って来た時からじゃないのかしら～」

しらっと言うと、少しは玲人も落ち着いてきて無茶を言った自覚は出てきたらしい。せりかがあれだけ苦労を強いられているのだからそうだろうと思うのだが、玲人に繊細な女心は通じないらしい。

「忍は、腹黒い以外は完璧だし、せりと気も合ってて、俺も胸が痛いけど、うまく行って来てるかなって思ってたけど違うのか？」

「全然違います！！悪魔に魅入られた人間の末路が幸せだって思ってるの？！」と詰め寄ると玲人も意味はよく分からないがせりかが必死なのは伝わったらしい。すこしせりかもほっとして話を穏やかに進める。

「だから、橘君以外は認めないっていうのは、玲人の勝手ないいぶんだよね～！」

「うん。まあ、そうだけど……」

「それで相手が良いって言ってくれたのは、前に告白して来てくれ

たのを断った相手だって玲人も知ってるよね～」

「それは、そうだけど、せりもあれから浮いた話が全然出ないから心配なんだよ。せりが本庄の事、引き摺ってるんじゃ無いかって気になってさっ！！」

「そ・れ・は、はっきりと引き摺ってるわよ！だからと言って、友達の婚約者盗っちゃう訳にもいかないし、この年で二番目でもいい！なんて奇特な事も思って無いから自然に忘れる事にしたの！まだ先は長いけど、進路とかで離れるだろうし、会わなくなれば自然と新しい出逢いとかもあるのかなぁって漠然と思っているの！」

「でも、そうやって知り合った奴がロクでも無い奴に違い無いと思うし……」

「何で、そんな事決めつけるわけー？私が選んだ人ならそれを認めてあげようとかっていう気にならないの？」

「悪いが成らない！せりは、男の趣味が悪すぎる。誰っていうと支障があるけど、それはみんな心配してる。ダメンズ一直線だってお前が思うよりも危惧されてるし、俺だってそう思ってる」

「……何と無く誰が仰ったお言葉なのかは分かったわ…先輩達、玲人達の方に付いたのね？！」

「それは、お前が危なっかしいからだよ！恨むなよ！若宮先輩はかなり忍にキビシかったらしいけど、何とかお許しが出たらしいから」

「それは、あの王子なら、無敵でしょうよ？！責任を玲人に此処まで転嫁するつもり無かったけど、私が王子と付き合ったとして、本

当に幸せになれる保証なんて何処にもないのよ?!分かってる?」

「……そんなの分かってるよ!だけど、せりは、一回まともな奴とちゃんと付き合ったほうがいいと思う。今のまま、大学生になって合コンとかで適当な彼氏が出来たとしても、もう少しせりが大人になって居てくれないと、痛い目みる事になるのが目に見えてるのに、俺もみんなも放って置けないから、無茶だって分かっても、押し付けでも取り敢えず受けてくれないか!って思ってる」

意外というとかなり失礼だが、玲人の話は説得力があった。そんなに心配されてしまう自分にも失望感を覚えるが、田村との事を思えば心配されるのも当然だし、心配してくれるというのは愛情の裏返しでもあるのだから、身内以外の人達が多く気に掛けてくれている現状を有り難く思うべきなのだと思った。

「玲人……有難う……私の至らなさが、玲人にそういう行動に出させるんだって分かったから、もう少し様子見るとかじゃ駄目かな?」

「駄目に決まってるだろう!少なくともこういう浮ついた事が出来るのだって今の内だってせりだって分かってるだろう?忍が不満な訳じゃなくてせりは、本庄じゃなくちゃ駄目なだけだろう?そんな事、とうに分かってるから、忍には悪いとは俺だって思ってるよ。せりの気持ちが他にあるのに付き合えっていうのは気が引けたけど、それでもアイツはせりを引き受けてくれたんだから、その気持ちを汲んで貰えないかな?!」

なんだか玲人じゃないみたいにさっきから一々説得力がある(失礼すぎる感想だけど)裏に先輩達とかの影も感じるけど、玲人も思って無い事を言える性格じゃない。本当に心から本心なのだろうと思う。…例え某先輩の差し金らしきものを多少感じようとも…。

「王子と直接話して決めたいわ！だって…玲人も言っていたけど、随分と不実な事をしようとしているのに、それに対して彼がどう考えているのか聞いてないわ！」

「じゃあ、忍、メールで呼ぶから話してみろよ？」

「ここで？！今？」

「結構ここのホテルって無駄なスペースが無いし、人に聞かれても困るから、そうじゃ無ければ俺達の部屋もあるけど、あっちには肝心の本庄もいる。…どうせなら本庄も交えて話しとくか？」

「こっちでいいわ。そんな事になったら、リアルに泣いちゃうと思うから、修羅場決定だもの」

「じゃあ、メール打つ。俺は、部屋に戻るから、二人で真剣に話してくれ！」

「はぁ～？玲人正気なの？！男の人と密室に二人きりにするつもり？！」

「今とたいして状況変わらないだろう？大体、あれだけ女に不自由しなさそうな奴が同意も無く手なんか出さないよ。ましてせりみたいなお子様に…」

最後は自意識過剰の如きに言われたけど、心配してくれる所が違うでしょう？橘君になら何されてもいいって訳じゃないんだからね！！

「お子様でも、向こうも大体私に告白した時点でそういうタイプが

すきっていう変態さんて可能性も捨てきれない訳だし……」

「あのなぁー、せりは、仮にも付き合うかもしれない相手が変態でもいいわけ？しかも親友にその言い様はないんじゃないのか？」

「親友が変態でも温かく見守れる広い心は持ってるけど、恋人が変態は嫌かもしれないわ」

チャイムが鳴ったので、玲人が開けると橘が部屋に入って来た。入れ替わりに玲人が出て行こうとするので、腕にへばりついて力ずくで止めると橘が笑い崩れたので、気を取られて手を離してしまうと玲人が、「ほら、自意識過剰だろう？」と言ってでて行ってしまった。

「椎名さんが俺に聞きたい事があるっていうから来たんだけど、何？」

何？ってそりゃあ、いっぱいあるけど、一番聞かなくちゃいけない事を先に聞く。後では聞きづらくなる可能性がある以上、優先順位が高い物から聞いていくべきだと思う。

「橘君は、私が、本庄君を好きなままで付き合っていけると思ってるの？それで橘君はいいの？私が反対だったらそれは無理だと思うんだけど…」

「人の気持ちは変わって行くものだし、変わらなくても椎名さんとならやっていけると思ってるんだ。少し自分でもおかしいのは分かってるんだけど、俺にもリハビリっていうか練習？って言うと椎名さんに失礼だけど、そこはお互い様で、罪悪感無しって事でお付き合い願いたいんだけど？」

少し自分は自意識過剰だったのかもしれないとせりかは思った。橘がまだ、自分の事を忘れられなくてこの事を受けたのかも?なんて思ってしまっていたが、彼は彼で、自分とせりかが色々と克服と勉強になるという一挙両得な彼の得意な収め方で、せりかとの付き合いを了承したのだ。

なんだか、橘はやはりこちらに害を与えず、皆に得になる様に動きながらも自分の目的も遂げるという、せりかの相棒の一番いい部分が失われた訳では無かった事にホッとした。

「わかった。利害一致で貴方の手を取る事にします!橘くんからすると子供の面倒を見る様で、申し訳ないけど、嫌になるか、好きな人がお互いに出来る迄よろしくお願いします!」

「喜んで!有難う……」

彼が、右手を出したので、固くその手を握った。玲人にメールをすると飛んで来そうな勢いで喜んでくれる返信が来たが、玲人の気持ちを思えば、それはとても感謝しなければいけない事なのだとせりかは思った。橘も微妙な顔をしたが、せりかに微笑んで「おやすみ」と言って部屋から出て行った。

今日から橘くんの彼女(仮)になってしまいました。

52（後書き）

本庄がモタモタしてる間にせりりんが～！！

でも真綾ちゃんの手前、ああ言われてもさっさとは行けないか～！

と作者も悶えております。でも仕方無い。橘君が二枚も三枚もせりかより上でした。

53

沙耶にメールで話し合いが終わった事を知らせると直ぐに戻ってきた。

やはり話し合いの結果を心配してくれていたのだと思う。

「ごめんね。お部屋を借りる事になってしまったけど、お蔭で無事に決着が付いたの！」

晴々とした顔で言うせりかに一応、話し合いに成果があったのだと沙耶もほっとするが、結局何処に落ち着いたのかが気になる。

「それで、どうなったのか聞いても良いのかしら？」

「勿論！沙耶ちゃんにはこの旅行中、色々と聞いて貰って感謝してるもの。結果から先に言うと私は今日から橘くんの彼女になりました！」

「…えー！本当に？だってせりかちゃん橘くんの事をさっきまで、鬼とか悪魔とか、果ては魔王様と迄言ってたのに良いの？大丈夫？！」

少し気は確かか？と確かめられると玲人と橘の説得に負けた様に思うところもあるが、皆の愛情の裏返しと言う名の心配のされ様を思うと、この結論は決して間違った物では無いと思う。

「玲人と話し合った後に、橘くんとも話したの。彼には率直に違う男の事を想っている私と付き合ってうまく行くと思っているのか？

って聞いたの。それで、それでもいいから好きだと言われたら断るつもりだったんだけど…それじゃあ、橘くんに悪いし失礼過ぎるじゃ無い？でも、彼は、気持ちは変わって行くものだし変わらなくても私とならうまくやって行けそうだから、リハビリか練習のつもりで付き合って、お互いに利用し合う関係で良いと言ってくれたの。彼も少し事情があって、リハビリしたいっていう状況なのね？まあ、あの見た目だし、色々あるのは仕方が無いかと思うんだけど…」

「うん。そうだよね。それは、橘くんと同じクラスになってから少し感じてたわ。彼って少し女性不信な所が有るわよね？せりかちゃんとか男女の垣根を越えられる人としか親しくしないものね」

「彼のプライバシーの問題も有るから、あまりちゃんとした事は話せないんだけど、そういう雰囲気は元々一年生の頃から有って、クラスの子達はそう言うのが分かる良い人達が多かったから、言い寄る様な素振りを見せる子も居なくて結構平和だったんだけど、二年生になったら近寄らせないオーラが酷くなって来たでしょう？彼もきっと色々克服しないと駄目だって思っているから、私と付き合う事でリハビリしようと言う気になったんだと思うの。でも自分の事をとても好きな相手じゃリハビリに付き合わせるのは悪いと思うじゃ無い？だからこのままじゃダメンズ一直線だってみんなに心配されちゃう私の練習台になってくれる事にしたんだと思っているの。お互い様だから罪悪感は持たなくて済むから良いって言ってくれたし…だからお互いに嫌になるか好きな人が出来るまでの恋人になる事になったんだ！」

せりかは此処まで沙耶に話すのは、橘に少し悪いとは思ったが、色々と迷惑を掛けてしまった事を考えると、全てでは無いにしても彼女が納得出来る範囲までは話すつもりでいた。

「そうね。彼だったら、せりかちゃんの事もよく分かってくれてるし、お互いに友情とはいっても、好意は存在しているんだし、それが二人の為になるといいなぁとは私も思うけど…恋愛ごとは結構難しいし、割り切れないところも出てくるから、無理だと思った時点では断った方が良いと思うわ」

沙耶の言葉はとても重く、付き合っているという他校の彼との関係も、きっとせりかには話さない大変な面も有るのだという事を窺わせた。

「それは、お互いに無理はしないという確認は、もう一度よくしておく事にするね！お互いの為にも」

せりかがそう言うと、途端に沙耶は真剣な雰囲気を一変させて楽しげに話し始めた。

「付き合い始めって一番楽しいものなのよ？なんだかワクワクして来ちゃうわね♪橘くんとせりかちゃんって考えるとお似合いなのよね～！」

「そ、そうかな？最近は開き直って来たから、見た目の差はもう、いいんだけど、なにしろこっちは超初心者の上に、相手に気持ちも今のところは無いっていうのもあるから、子供の相手をさせるだけかと思うと申し訳無い気持ちのが大きいのよ。それに、今迄ずっと一緒だったのに付き合ったからって何が変わるのかも良く分からなくて不安だし、とても楽しむところまで行けるのは何時の事やらって感じなんですけど…」

「せっかく仮にもあんな美少年が彼氏なのよ？せりかちゃんも、もう少し楽しもうよ！取り敢えず携帯の待ち受けとか彼の写真とかに

変えてみたら？」

「人に見せないって約束で撮らせてもらった写真だから待ち受けにはちょっと無理かも……」

「そんな変な写真じゃ無いのよね？今見せてとは言わないから、明日の市内観光の時に聞いてみたら？きっとＯＫしてくれると思うわよ？……そうだ！明日は二人で回ったら？私と玲人君は美久ちゃん達のところと一緒に行くから！」

「そんなに気を遣われる様な仲でも無いんだって！」

「折角の機会なんだからそうした方が良いと思うよ！元々言ったら悪いけど、恋愛要素が低めなんだから、今回で少し恋人っぽい事して来てみたら？形から入らないと何時まで経ってもど突き合う仲から進展しないし、それじゃお互いに付き合う意味が無いんでしょう？」

沙耶の言う事はいちいち最もだと思う。少しだけ事情を話しただけで、これだけ理解されてしまっている事に驚くけれど、ずっと脇で見てきた沙耶には言わなくても伝わるものがあるんだろうと思った。

「相手もある話しだから、一応朝イチは皆で羊ヶ丘展望台に行くでしょう？その時に話してみるから、相手もいきなり二人きりなのもどう思うのか分からないし、聞いてみてからね？」

「彼は、断らないと思うけどね～♪」

「女性に恥をかかせそうに無いものね。なんだか彼の方に私と付き合う意味があるのか不安になってきたわ」

「最初は誰でも不安なものよ！そのうち慣れて図々しくなれるから心配要らないと思うわ。初々しいくらいの方が相手も喜ぶって！」

「今更～？！…彼との間に初々しさを出せる自信は何処にも無いけどね！」

流石のせりかも乾いた笑いを洩らす。橘と自分の間にそんな可愛いものが発生したらそっちの方が吃驚だった。

「とにかく、明日はごっこでもまやかしでもいいから彼との旅行って思い込むのよ！」

それじゃあ、まるで洗脳じゃんっ！とせりかは思ったが、あまりにも頼り無いせりかの肩を押してくれる沙耶にそれを言う気には成らなかった。

洗脳まで行かないまでも恋愛なんて、所詮夢か幻みたいな要素もあるものだ。思い込みも一応必要かもしれない。沙耶も悪乗りで言っている訳では無いんだろうし、アドバイスとしては今は一番に聞く価値のある相手だろう。

翌日に色々な課題を残しつつ、明日の用意を整え寝支度をした。このホテルには連泊の予定なので、荷物などは貴重品も含めて金庫もあるので置いていける。明日は軽装で出掛けられそうだった。気持ちも同じ位、気を張らずになるべく軽めで行こう！とせりかは思った。

結局、明日聞こうと思った二人きりの観光は、玲人と沙耶が橘に確認を取って、デートさながらの様相を呈してきた。っていうか忘れ

そうになるが、ばっちりデートだ！少しグロスくらい塗ってそれらしくして行くべきなのだろうか？

彼氏になった橘と二人で、それらしい事を見つけていく旅も、二人の始め方なのかもしれない。考えるよりまずは状況に慣れるべきだと思う。

しかし、周りはどうしてこんなに面倒見が良い人達ばかりなのだろう？！と多くの感謝と少しの困惑がせりかの胸をよぎった。

翌日爽やかに「おはよう」という彼に、何の変わりも無い事に安心をして、朝食を終えてから展望台に行く為のバスに乗る。昨日はあんなに苦行に思われた距離が、話合って溝が無くなったお陰で全く苦痛を感じない。

もっと早くに話し合いたかったが、橘に拒否をされていたのだったと思うと昨日話し合いに応じてくれた彼は、こちらが思うよりも身構えて部屋に来てくれたのかもしれないとせりかは思った。

見る方向を変えてみるとそんな事まで昨日と違って見えてくる。やはり自分は視野を広げて、玲人のいうところのもっと大人にならないと、ちゃんとした異性のお付き合いは難しいのかもしれない。

橘はお互い様だと言ってくれてはいるが、付き合いを始めれば、せりかの方の得の方が大きい様に思う。しかし、いまは橘君の彼女（仮）なので、甘えさせて貰う事にしよう！と思う。そうして成長出来た暁には彼の傷も癒してあげられたらいいなとせりかは思った。

54

羊ヶ丘展望台にはクラーク博士の立像があった。

あの有名な「ＢＯＹＳ　ＢＥ　ＡＭＢＩＴＩＯＵＳ！」少年よ大志を抱けの人であるが、ここに何の縁（ゆかり）があるのだろうか？もしかしてこの辺りにお住まいだったのか？等と思って説明書きをみると、どうやら北海道大学にある別の胸像を見にくる団体さんに困ったらしく、こちらに大きな像を作って見に来て貰おうとしてここにいらっしゃる運びとなったらしい。勿論、説明はもうちょっとちゃんとした開拓精神を後世にも伝えたい云々とかあったが、せりかの理解する限り、広くて迷惑掛けない場所でクラーク博士と写真を撮ってね！と読めた。

それなので同じポーズで指を指して写真を撮る皆と一緒に写真に収まった。こういう事ってみんなでやると意外と恥しくもなくて、とても浮かれた楽しい気分になった。

見渡す限りの草原で、いかにも北海道に来ました！という場所で、羊などもいてなんだか札幌市内なのに急に何時間も走った違う場所に来たみたいだったが、割と近くにビル群も見える。

札幌は北海道の三分の一の人が住んでいるらしく、街中は都内のように大きなビルが犇（ひし）めきあっていて、せりかの思う北海道から大分かけ離れたものだったので、この展望台は、それを満足させる為に誰かが考えたのでは？と思ってしまう程、北海道に想いを馳せた時に浮かぶ風景そのままの景勝地だった。

お土産屋さんで羊のヌイグルミがおススメ！と書いてあったが、皆

には北見薄荷の薄荷スプレーを頼まれていた事を思い出して、ヌイグルミを手から離した。

それから札幌の大通公園まで、バスに揺られて、そこから班行動となった。しかしあちこちで、男女二人で抜けていく様子が見える。班でという建前はあっても、ここは沙耶が勧めてくれた通り絶好のデートの機会なのだろう。

皆に手を振って橘と二人で抜けて行くと少しだけからかいの視線にあったが、二人でいる姿は特別珍しいものでは無い。本庄の顔を見てしまうと流石にテンションが落ちてしまい、本日の半日デートが残念な事になってしまいそうだったので、本庄と真綾の姿は出来るだけ視界に入れない様に、逃げるように来てしまった。橘にも何と無く分かってしまっただろうが、彼は納得してここに居てくれるのだ、と気を強く持つ事にする。

「行きたい所とかある？」

「うん。時計台は、外せないよね？何だっけ…日本三大がっかりの一つだよね。そう言われると却って見たくなるものじゃ無い？」

「そうだね。元々が有名だしね。じゃあ旧北海道庁舎とか有名どころを回ってから、あとはゆっくり大通公園沿いの記念碑とか見てまわろうか？俺はブラックスライドマントラっていう滑り台があって、それを見て見たいんだよね。なんだか面白そうで…」

「いいね。気持ち良さそう。公園も大きいよね～。電波塔も上がっ

て見ちゃう?」

「そうだね。そうしようか?なんだかミニ東京タワーって感じだね」

「はぐれた時はあそこで待ち合わせね!とか決めたら痛い思いしそうね。真っ直ぐで見晴らしが言いぶん、距離が遠くても判らない感じだもの」

「携帯持ってきたでしょう?もしも、はぐれたら携帯だよね。やっぱり」

「充電もホテルでして来たからバッチリ大丈夫!」

「じゃあ、行こうか?」

と橘は言って紺のキャップを被った。メガネでもしたら変装の様だった。これで、知り合いに会ってもあまり目立たないだろうと思う。

「入学式の時って、フレームの無い眼鏡してたよね?」

今にして思えば眼鏡をした彼を見たのはあれが最後だった。

「…少しでも賢そうに見えるかと思って兄貴のを借りたんだけど、書いてある字が見えなくて参ったよ」

「掛けなくても充分賢そうだから、大丈夫だよ?でも結構眼鏡男子好きには、あっちの方がウケがいいかもね!」

「眼鏡男子?ってうちの学校の奴って殆んど眼鏡掛けてるよね?そこで掛けると馴染むかと思ったけど、スポーツするのには向かない

かなと思って直ぐに断念したんだけど」

「眼鏡男子っていうのは、少し古いんだけど、でも今でも結構そういうマニアックな需要があるから、大丈夫かな?…うーんとねぇ、眼鏡を掛ける事で格好良くなる人っているでしょう?そう言うのが典型的な眼鏡男子なのよ!それで、橘くんみたいにどっちでも良い様な人が掛けても一応似合えばＯＫかなぁ?」

「椎名さんは、そういうマニアックな趣味があるの?」

「そうねぇ～。お母さんがヨン様騒いでいた時期は、眼鏡の似合う人はいるんだなぁとは思ったけど、清潔感があれば外見にあまり拘らないかなぁ?橘くんと付き合ってて言っても誰にも納得されないだろうけどね～!」

「それは、普通の人が良いの!って何度も言われてるから分かってるよ…」

橘が苦笑する。そんなに言っただろうか?最近は言って無いから昔の事かなぁ?楽しい思い出もあるけど気まずくなりそうな過去もあるので、何と無く話題を移したくなる。

「昨日ホテルで二人っきりにされそうになった時に玲人に抵抗したら自意識過剰だし、橘くんがわたしみたいなお子様相手にしないって失礼な事を言われたんだけど、でもそういう趣味の人だっているんじゃないの?!って話になったんだけど、橘君は其処まで極端じゃなくてもロリ…」

「ちょっと待って!!ロリコンじゃ無いし!椎名さんはどっちかというと背も高めだし大人っぽい方でしょう?」

「そう言ってくれると嬉しいけど、最近みんなに子供扱いされてたから、なんだか自分でも子供っぽいのかな？って思ったのよ。それにロリコンて言おうとしたんじゃ無くてロリコン気味な気があるの？って柔らかく聞こうとしたのに！」

「……そう。あまり変わって無いけど、とにかく違うから！」

「そうだよねぇ。私も親友が変態さんでも平気だけど、恋人がそうなのはちょっと無理かなぁと思って最初に聞かなくちゃって思ったの。後は、無理って思ったら、お互いに遠慮しないで別れる事にしようねっていう確認もしたかったの！」

「それは、そうだね。いつでも言ってくれていいよ？」

「それは橘君も、言える事なんだから、もう子供のお守なんかヤダって思ったら、遠慮しないで言ってくれていいからね！」

「分かったけど、初っ端から変態確認されるとは思わなかったよ！でも友人なら許してくれるんだ？優しいね！」

「それは、他の部分で良い人ならそういうマニアックな趣味があろうとも、受け入れるわよ？法の道から外れそうになったら皆で止めると思うけど！」

「玲人が変な事いうから、そんな誤解受けるんだと思うけど、椎名さんは極端にそういう心の広すぎる所が心配になるから、皆に心配されちゃうだけで、特に子供っぽい訳では無いよ。後は、玲人の所為で男が寄って来辛いから、少し無頓着な所が気になるし、他の女性に比べると無防備に見えるね。少し警戒心が足りないかと思って

たから、昨日の抵抗は椎名さんの方が正しいと思うよ。これも玲人の所為だけどね？」

「私が駄目な所は玲人の所為だったの？」

「はっきり言うと基本的には、そうだね」

「それなのに玲人の奴、あんな、人をお子様呼ばわりして、ダメンズ一直線とか言って…許せない！」

「玲人も自覚があるから、無理やり俺と付き合わせたんだし、椎名さんにとって玲人は必要な人なんでしょう？だったら負の部分も受け入れるべきかなぁと思うけど？」

「……橘君はなんか大人だよね？！落ち着いて橘君に言われるとこっちがやっぱり子供だと思っちゃうわね」

「そんな事無いって！その内、直ぐに思ってたのと違う！詐欺だって言われちゃうよ！」

「これ以上？！もう既にお互いに詐欺に遭った様に思うんだけど、気の所為かしら？」

「ははっ！確かに！一回は詐欺だってもう既に思われてるね。あまりそういう意味では心配いらないのかな？椎名さんとは結構地で付き合ってきたから、本性知ってるもんね」

「そうそう！確かに私以外の子だと一回は確実にその言葉は浴びせられると思うけどね？」

「椎名さんは、詐欺だと迄は思わせない内に、手を切りそうなタイプだよね？」

「何だか感じ悪ーい！猫被り続けるんだろうってはっきり言って貰った方がいいわ！それにその高飛車に簡単に男の人を捨てるってイメージなの？橘君の中の私って？！」

「うーん。若干、そうかなぁ？」

「そういう人と付き合ってるんだぁー？！橘君は！」

「それでも付き合ってるって言って貰いたいなぁ！実際にそういう付き合いしたら、そのうち恨みを買っちゃうでしょう？後は、こういう言い方は本当に言うのは躊躇うけど、俺達勉強していこうって付き合いだからはっきり言うけど……」

はっきり言うと言いながらも言い澱むのは余程言い辛い事なんだろうとせりかは思った。

「言い辛いなら、言わなくてもいいわよ？なんだかキッツーイ事言われそうな予感がプンプンだから！」

「カンが良いね！やっぱり止めとこうかな？まだ早いし！でもなぁ～！もしも直ぐに別れちゃったら、別れてからだと、言うと完璧にセクハラ発言だから絶対言えないしな～」

「言ってもいいわよ！耐えるから！……じゃなくて、勉強させてください！ある程度の暴言であろう事は承知で私の為に言ってくれてるのを理解して聞かせて貰います！」

「じゃあ、言うけど椎名さんは、男と付き合っても何もさせ無さそうなんだよね。普通は付き合いをオッケーした時点でそれ込みで受けないと駄目なんだよ？だから適当な奴と付き合ってみたりとかってすると、かなり相手から別れる時に恨まれるってさっきも言ったけど、理由としてはそういう事も含まれてると分かって欲しいんだよね？高飛車な女って思われて逆上されて下手したら殴られるよ？！」

「……耳が痛い！実際、そういう気持ちで彼氏を作ろうかと思っていたけど、そういう事は無理！って思ってたんだもの。田村君に告白された時も肩掴まれちゃって、ぞわーとしたから言ってる意味は分かるし、その通りだと思うわ！」

「田村に！！何かされたの？！」

「田村君に怒らないでね？せんせいが止めてくれて、直ぐに向こうも謝ってくれたから、もう許してるし、元々は私が少し向こうに気が有る様な誤解をさせちゃう態度を取ったのが悪かったのよ。皆に言われた事が良く分かったし、それに今橘君が言ってくれてる意味もよく分かる様になったから悪い事ばかりじゃ無いのよ？」

「ごめん。嫌な思いしたの椎名さんだし、それに俺もそのまま行かせちゃったのに…」

「あれは私が強硬に橘君達を断ったのが間違ってたのよ！」

「本庄が付いていってくれた事に感謝だな……」

「そうね。せんせいは自分は田村君に関して先入観が無かったからって言ってたわ。橘君が行かせた位だから普段は安全な奴なんだろ

うけどって言われて、実際に私もそう思ってたから振った時の豹変ぶりに驚いちゃって！だから橘君が言いたいのはもっと本当は言い足りなくて、多分私に合わせた言い方をしてくれているんだろうって事位は分かって来たの」

「そうか…。分かってたなら、言い過ぎたかもしれないな。椎名さんに嫌な思いをさせない様には言ったつもりなんだけど…」

「ううん。有難う！結局そういう心配をされちゃうのは、私の認識が間違ってるからだし、それに、今だってこうやって付き合ってくれてる橘君が、そういう事を注意してくれる事自体が、すごく親切だって分かってるわ。しかも別れたら言えないからって言われたら、少し感動して泣きそうになっちゃったわ！別れた後の私まで、そんなに心配してくれるんだもん」

「元々、椎名さんは、親友でしょう？だから例え直ぐに別れが来ても、それは変わらないつもりで付き合ってるから安心して？」

せりかは橘の言葉に本当に感動で涙が出て来てしまった。彼の様な人が親友だと言ってくれる事を誇りに思おう。そして彼氏になってくれた事に感謝しよう。

「あのさー！椎名さんは、そういう風に無防備に男の前で泣かないで？泣いてる女の子をそのままにしておく奇特な奴はあまり居ないと思うから」

「彼氏の前だもん！それは許されるのよね？！」

「…何をされても良い場合のみだけどね！」

「そっかー！それは、ちょっと駄目だったかも…。気を付けるね？」

にっこりとせりかに感心されてしまい、橘は少し脱力した。この付き合い、俺の方が、もつんだろうか？と不安になって来た…。

55

せりかと橘が二人で抜け出すのを、心の中では驚きで一杯だったが、顔はいつもの表情を保った。

二人が付き合う事になったらしいと真綾から聞かされた時には一気に血の気が引いた。

「昨日の夜、話し合って付き合う事にしたって言ってたわ！」

「そうか……」

「綾人がさっさと、さくっと昨日好き！って言っちゃえば、せりかさんだって橘君の手を取らなかったのに！！」

「彼女は、ちゃんと納得しなければ、俺の事を受け入れないよ…」

「そこを納得させちゃうのが、綾人の阿漕（あこぎ）な特技でしょう？！せっかく使い処だったのに、こういう所で活かせないんじゃ綾人のトコの会社の将来も知れてるわね！」

真綾から辛辣な言葉が飛ぶが、真綾と別れて迄、手に入れたかった女性があっさりと他の男に持って行かれてしまったのだから、彼女が怒るのも無理からぬ事だろう。

「沙耶ちゃんからの話しだと、橘くんと高坂くんの説得にとうとう折れたみたいよ？まあ、あの橘くんの事だから、素直なせりかさんを言い包めるくらい造作もない事でしょうけど！」

「真綾！橘は確かに周りが思ってるよりも腹黒いし、策士だけど、人を騙す様な奴じゃ無いんだ。だから、椎名さんの事もうまく彼女を誘導したかもしれないけど気持ちが無ければ絶対に出来ないから、二人がうまく収まるようなら、俺は何も言わないでいる事も考えてる」

「っ！せりかさんは綾人の事を今でも好きなのに、よくそんな勿体ない事が出来るわね！せめてせりかさんと親戚にでも成れないと私も浮かばれないわよ！」

親戚！ってそれは、随分話が飛んでいるだろう?！と思うが、真綾は発想が高坂と近く、二人とも周りを気にしない振り切れた性格なので、気が合うのだと思った。

「兎に角、椎名さんが橘を選ぶ選択をした以上、俺が今告白したとしても、彼女は橘も真綾も裏切らないだろうから無理だと思う」

「随分弱気なのね?！綾人らしくないわ?綾人なら、橘くんだってうまくなんとか自分から別れる様に持っていけるでしょう?彼だってせりかさんの気持ちは分かっている筈だし！」

「それは、俺が彼女を好きだと言えば、橘はあっさりと退くと思うよ?そんな策略を練る程もないくらいにね?」

「だったら、せりかさんじゃ無くて、橘くんの方に私と婚約解消した事を話しちゃえばいいのにー！」

「橘に身を退かせたら、椎名さんは流石に俺を許さないよ。彼女はそういう卑怯な事をして許してくれるほど、好きな奴に盲目的になれる人じゃ無いんだ…」

「じゃあ、どうするつもり？指をくわえて見ているつもりは無いんでしょう？」

本庄がふっと微笑む。

「やっぱりねぇ～！何が二人がうまくいくなら何も言わないよ？結局うまく行かせなくしてから告白する気だったんでしょう？」

「今は、勝算が無いから、少し待つけど、真綾に辛い思いをさせて、そのまま何も収穫無しじゃ余計に申し訳ないから、出来るだけの手はじわじわ打つ！まずは、高坂を攻略しないと始まらない」

「高坂君を？！将を射んとすればって奴？でも遠すぎない？」

「いや、彼が、納得すれば、後は転がる様に上手くいく筈だけど、それだけに、ここが一番難関でもあるんだよ。早くしないと橘に彼女を完全に取られそうだし…でも高坂は、橘と友達だから、橘よりも俺の方に付かせるのは、彼女の心が揺れていないと難しいから、そこも何とかしないと行けないんだよな～！」

「高坂君の言う事ならせりかさんが聞くって訳でも無いと思うけど？大丈夫なの？！」

「なんでもは勿論聞かないけど、高坂の椎名さんに与える影響力は、見た所、一番だよ。それは、高坂が椎名さんの事をよく考えているのを彼女が知っているからだ。だから、彼が此方を選択すれば、自然と高坂が橘を退かせる結果になる。彼女が、橘を裏切れない性格なのは判ってるんだから、搦め手でいかないと、椎名さん本人に行くのは得策じゃないんだ」

「そんなまどろっこしい事してる間に橘君に心奪われちゃうんじゃないの？結構良い感じで二人で出掛けていったじゃ無い？」

「そこが一番の悩み処なんだよなぁ！俺が女だったら、橘の方が俺よりも良いと思うし、更に言うなら高坂が本当は一番お薦めなんだよな～！椎名さんも勿体無い事するよな～。わざわざ、腹黒い方に付いていかなくてもな～！」

「こらこら、其処で他人事に感想言ってる場合じゃ無いでしょう？自分の方に向かせる努力をしないと！」

「なんだか真綾にお尻を叩かれるのって微妙で、そこも引っ掛かって頑張れる気がしない！やる気だして本当にいいのかな？って思う」

「何を今更？！私の所為で振られたって言われても困るって言ってあったわよね～？それを負けの理由には絶対に使わないで頂戴！例え橘君にせりかさんを取られても自業自得だし、私は慰めないからね！」

「分かったよ！お前を言い訳には勿論しない！自分でなんとか活路を見い出すから、真綾は高みの見物でいいよ。俺が足掻くのをせいぜい良い気味だ！くらいの気持ちで見ててくれよ？」

「嫌よ！こんな面白い事に関わらない筈ないでしょう？仲間外れにしないでくれる？！」

ちっと舌打ちする綾人の顔を見て真綾は、「殊勝な事言ったって、そんな手に乗る訳ないでしょう？」と艶然と微笑んだ。そんな言い方で余計な手出しをさせないなんて、やっぱり真綾を見縊(みくび)っている

のだと思う。

しかし、少しだけ綾人の真意が見えない。もしかすると邪魔をする真綾を牽制しておいて、二人がうまくいっても良いと思っているのでは無いかと思う節もある。やろうとしている事もまどろっこしい！

此処は、とにかくは綾人の言った通りに真綾が高坂に色々とバラしてあげよう。

綾人の味方ではないかもしれないが、高坂はせりかの味方なのは確かだ。その辺から攻めてもいいし、寧ろ、橘に自分から綾人と別れた事を告げても良い。勿論、せりかにもだ！真綾は本庄の本当にやろうとしている事の妨げになるのかもしれないが、真綾は真綾の考えで動く。例え、それが誰を幸せに、誰を不幸にしたとしてもだ！

結局、ぐちゃぐちゃになった後に、収まった所が収まるべき場所なのだと真綾は思っている。自分だって、綾人のところには収まらなかった。それが結果としてでた以上はそれが最善だと思っている。だから、これから穏便に済まなくても皆が自分の気持ちに正直になって、その上でぶつかり合って落ち着いた所が今の時点の最善なのだと思う。

皆、難しく考え過ぎるから糸が絡まる様にこんがらがって雁字搦めになってしまうのだ。もっと単純にどうして考えられないんだろう？

早速、高坂の傍に言って相談があるの！と動き出す。結果がどう成るのかは皆の気持ち次第だ。話したら高坂はまず、どう出るのだろう？

きっとそこから何かが動き出す……。真綾はそれを見ているだけ

だ…。

「実は綾人と別れたの。お互いに従兄妹以上の関係に成れなかったの」

「マーヤ、それは、せりも知ってるのか?!」

「ううん。言えて無い。だって言おうとしたら、せりかさん、橘君と二人で行っちゃったんだもの」

「本庄がマーヤを振ったのか?」

玲人の口調がきつくなる。真綾に同情してしまっているようだった。

「違うわ。ずっと思ってたけど、良い機会だから、私から切り出したの!だって綾人、せりかさんの事ばっかり目で追ってるんだもの!従兄妹としてはちょっと情けないっていうか、ちゃんと男らしく行けばいいのに!って、もどかしかったのよ」

「でもマーヤの彼氏だったんだろう?」

「実質は何にも無いわ!名ばかりで保護者に近い感じよ?他に好きな人が出来たんならさっさと行って良かったのに、綾人も律儀よね〜!その間にせりかさん、橘君とうまく行っちゃうんだからこっちは目も当てられないわ!」

「マーヤは本庄とせりがくっ付いても良いのか?」

「いいも何も無いわ!せりかさんの事は大好きだし、うまく行って

くれたら親戚になれるかもしれないのに…綾人がもたもたしてるから！」

「……本庄は本当に本気でせりを想ってるのか？忍と出掛けても顔色一つ変えなかっただろう？」

「強がってるのよ！私から見たら血の気が引く音が聞こえたわ！せりかさんに告白しようとしていた矢先だったんだもの。それに橘君とじゃ邪魔できないじゃ無い？友達だし！」

「せりも友達の彼氏盗っちゃう訳にいかないって言ってたもんなぁ～」

「それって……もしかしてせりかさんも綾人が好きだったって事？！」

白々しく真綾が驚いて見せると玲人は苦々しく頷いた。

「もうちょっと早く言ってくれよ？！俺が無理やりくっつけたのに今更別れろなんて言えねーよ」

「でもせめてお互いの気持ちも判らないでこのままなんてお互い不幸だし、橘君だってそれでいいとは思えないわ！」

「そうだな…。今日は取り敢えずお試しの付き合いだから、傷が浅い方がいいだろうから、俺から忍にお前達の事と本庄の気持ちを話すけどいいのか？」

「勝手にって言う事？！別に構わないわ。遅かれ早かれ知れる事なら、早い方がいいに決まってるわ！」

さばさばと言う真綾に本当に二人の間には何も無かったのだと分かると玲人は悔しくなった。やはり忍にこの事は言わないで済ます訳にはいかないと思う。それからは忍にせりかとの関係を続けられるか止めるかを委ねるべきだろう。しかし、無理やり頼んでこんな残酷な事を親友に言わなければ成らない事は辛い。かと言って黙っているのが親切では無いだろうというのは分かる。

やはり、結果的に人の色恋事に首を突っ込んでしまった報いなのだろうか?と玲人は思う。結局、心配だったといっても無理やり部外者がどうにかしようと強制するには無理があったのかもしれないと深い後悔が玲人を襲った。

56

橘との札幌観光デートは、前に八景島にいった時とは全然違い、緊張感の欠片も無い悪友との遊びのノリのそのままの物で、せりかはかなり拍子抜けしてしまった。

沙耶には彼氏と旅行と思い込め！と洗脳もどきの助言を頂いたが、普通のカップルってこんなに自然なのかなぁと思って周りを見渡すと、結構甘々な雰囲気だったのでやっぱり少し違うのかと思う。

それでもやっぱり時計台に二人でがっかりして笑ってしまい、ラーメン横丁の入り口と規模の小ささに驚き、そして電波塔から見える碁盤の目のような街並みと遠くに見える山の美しさに感嘆の息を洩らした。

お土産屋さんを冷やかしながらも、頼まれていた薄荷スプレーを買った。荷物が軽くて助かるお土産だとせりかは思うが、どうやら眠気覚ましに使いたいらしいと聞いたのでお世話になった先輩方にも受験勉強用に購入した。

橘に一緒にと誘うとそれに一緒に便乗するといったが、若宮には頼まれている物があるので、それも買うと言ったので、それでは私もそれを一緒に乗ろうとしたら、こっちは賄賂だから一人じゃないと駄目なんだ！と真剣にいうのがおかしく笑ってしまった。賄賂って公明正大に言ってしまう橘が可笑しいが、そういうところがとても潔くて彼らしいと思った。

ついでに賄賂の中身を聞くとお菓子の銘柄だったので、家用にせりかも一箱購入すると結構重たいからと自分のものと一緒に橘が持っ

てくれた。

なんだか本日で初めて彼氏っぽい感じだったので、携帯の待ち受けの話しをするとあっさりと「いいよ」という返事が返ってきた。

反対に自分もそうするからと言ってバシャリと写メを急に撮られて、せりかよりも先に待ち受け設定にされてしまった。

「なんだか恥しいねー！！みんなよくやるよね～？本人目の前にいるんだから、遠距離恋愛とかでも無い限り、必要が無い気がしてきた…」

「そう？ちょっとバカップルっぽくて俺は一回やってみたかったから結構気分は良いよ？椎名さんもやってみれば？嫌ならすぐに設定変えられるし！」

「いや、どっちかって言うと自分が写ってるのを待ち受けにされるのが、ちょっとって感じ。こっちはあの桜の芸術的な写真だもん。でも他の人に見せてもいいの？」

「見せるっていっても石原さんとか森崎さんくらいでしょう？他に見せても別に良いけど……」

「お花見の時は抵抗してたじゃ無い？何で今は大丈夫なの？」

「それは、……見せると椎名さんが困るかなぁと思ったんだよ。単純に少し照れくさいのもあったけど、周りに少し誤解されてた段階であの写真をみせたら結構冷やかされて大変だったと思うよ？今は、待ち受けにしようっていうのは好きな人か彼氏くらいのものだから、椎名さんがいいなら全然構わないよ」

「そうだったんだー！単純に嫌だからとかじゃ無かったのね！あんまり綺麗にとれたからお母さんとかにもみせてあげたかったけど、確かにあれを見せてたら誤解はめちゃめちゃされてたわね！」

「そうだよ！椎名さんがそう言う事に無頓着過ぎなの！例えば今は俺は一応椎名さんの彼氏だから、待ち受けにしても良いけど、唯、気に入った写真だからっていって椎名さんを待ち受けにしている人がいたら引くでしょう？」

「そりゃあ、ドン引きでその人とは半径何十メートルかは距離置くわね！もしかして私が橘くんを引かせてた？ごめんね！」

「いや、引かないけど、やっぱりそう言う用途で使われるのはマズイとは思うけど、椎名さんの場合は気に入った風景とか動物とかと同列で俺の写真も使いそうだったから注意いれたんだけどね」

「すごいねー！実は絵画の様だと思ってたのよ？もうあれは芸術の域かなぁって自分のカメラの腕に少し酔ってたりしたんだけど、見せられないから自慢できないし！」

「やっぱりね～！釘刺して大正解だったわけだ？」

すこし苦笑いで橘に言われてしまうと、やっぱり自分は考え無しなのだとせりかは反省してしまう。それでもあの桜舞う橘の写真を待ち受けにすると見入ってしまう位の出来で大満足だった。

橘にも見せると、「ほんとだ！反対はやっぱり恥しいね？止めようか？」と言って来たので、「お好きにどうぞ！」と暗にこっちはやめないけどそっちは何時でも消して良いと言ったら彼は薄く笑って

「じゃあ、本当に好きにさせてもらうかな？皆にも見せちゃおうかなぁ～！」と子供っぽく言ってきたので「こっちも皆に見せちゃうよ？」と子供の喧嘩の様に応酬すると余裕の笑みで「ご自由に！」と返された。

結局これを見せても私が冷やかされるだけで、自分は困りませんと言ってきてるのだが、反対だってそうじゃ無いのか？と思うと橘は別に平気そうだし、多分橘を冷やかせる者はそういないだろうと思う。なんだかんだと男子の中では、黒いオーラが薄ら見えるのだろうとせりかは思う。

特に女子に愛想が良い訳ではないが、理知的で穏やかな橘は優しげにみえるし、基本的には女性に優しい。あの美人で豪快なお母さんの教育の賜物なのか、例え一線引いていたとしても、女性からは腹黒くは多分見えない。せりかは一緒にプチ悪事に加担させられるので、真っ黒なのが分かるくらいだ。

結局付き合う様になっても橘には大負けなのだと思うと大分悔しい。しかし、一矢報いようとすると、返り討ちに遭うので、自分が少し大人になるんだもん！とせりかは強がりながら、「携帯の件はお互いにこのままで、必要以上には見せない方向でお願いします」というと「それが良いね！」と橘も微笑んだ。ちょっとだけど…く・や・し・いー！

「このまま負けちゃう付き合いなのかなぁ…」

と呟くとぷっと橘は吹き出して笑った。

「嫌なら止めても構わないよ？」

「いいえ。いつかはぎゃふんと言わせて見せるから！それよりも期末テストは誰にも負けないでね！」

「分かってるよ？椎名さんの期待は裏切らないよ」

既に中間テストでせりかは橘に勝っているのだが、それはせりか基準では勝利の数に入らないらしい。ますますおかしくて橘が笑うと、少し馬鹿にされたと思ったらしいせりかが頬を膨らませた。

既に橘はせりかに惚れた段階で大負けなのだが、それは伝えられないし、これからも伝える気は無い。だから、せりかの機嫌を直す術が無いので困ってしまうが、不機嫌なせりかを見るのも面白いかと少し放って置くと、土産物屋の北キツネのグッズに目を奪われて途端に夢中になってしまう。基本、せりかの不機嫌は長続きしないのだった。

彼女の機嫌を取るというのをやってみたいかな？なんて思っていた橘は少しだけがっかりするが、不機嫌が長続き出来ない彼女の事も好ましく思ってしまう。このまま溺れないうちに少し、気持ちを引き締めないといけないと橘は思う。こうしている間にも別れの足音がしてくるのが聞こえて来る気がして来てしまう。その時はあっさりと彼女を離して笑って送り出さなければいけないのだから……。

57

「高坂、ちょっと話したいんだけど良い？」

と本庄に寄ってこられたので、女子四人と違う店で昼食を取る事にした。まあ女の子だけでも昼間だし問題ないだろう。

がっつりした物を食べたいからと美久と沙耶に言ってなにかあればすぐにケータイに連絡するように言った。

過保護の様に思われれそうだが、みんな割とレベルの高い容姿の四人だ。いくら人数が多くてもしつこいナンパ等に遭わないとも限らないので、入ると言った店まで送り、出る時には連絡するように伝えた。

取り敢えず沙耶達にも言った通りにとんかつ屋に入り、注文した物がきてから話を聞く事にした。

思えば一緒によく遊んだりする割には、こうして面と向かって二人きりで話す様な事は初めてだった。

やはり、せりを袖にしているヤツと言う印象が強かった所為かもしれないと玲人は思う。

「真剣な話を食べながらで悪いんだけど、真綾達の事もあるから、

ごめんね」

と言いながら食べる本庄は、食べる箸使いが綺麗で、よく見ると食べ方や姿勢も自然と身に付いているその美しさに、こいつって、そう言えばお坊ちゃんだったよなぁと思いだす。

じっとみつめる玲人に「何か？」と不審げに聞くので思った感想をそのまま言うと本庄はすこし苦笑した。

「それで話したいのは俺と椎名さんの事なんだけど…」

「マーヤからある程度聞いてるけど、せりの事が好きならどうしてもっと早く言ってくれないんだよ！」

玲人は素直な気持ちを本庄にぶつけた。本来向こうから話があると言われたのに、話の腰を折るのは悪いと思うが一事、言っておきたかった。

「そうだな。俺がもっと早くに気が付くべきだったのに、真綾にも悪い事をしてしまった」

「マーヤはお前と従兄妹以上の付き合いは無かったって言ってたけど？」

「実質はね。でも真綾には俺を慕う気持ちはあったし、俺は、真綾にそういう気持ちが無いのに縛り付けていたから。結婚さえすれば許されるかと思ってたけど、真綾がそれで幸せな筈は無い事は分かってたのに、結局真綾に言われるまで彼女の手を離さなかったんだ」

「なんで、好きでもない女に其処まで執着したんだよ？！」

「話すと長く成るけど端的に言えば、彼女が俺を必要としてくれているから、俺に生きる価値があるんだと勝手に思っていたんだ」

「そうじゃ無ければ価値が無いっていうのか？そりゃあ、また極端な思想だな？」

「それは、真綾には錯覚だし、幼い頃からの思い込みだって言われたんだけど、でもそう思わないとやって来られなかったのは事実なんだ。真綾には、俺の誤解が分かっていたのに解いてあげられなくてごめんって謝られたけど、でも俺が椎名さんに気持ちが行ってしまった事は完璧な裏切り行為なのに、真綾は結局責めないどころか、俺に椎名さんとうまく行って欲しいと思ってくれているんだ」

「マーヤって見かけによらず良い女だったんだなぁ！唯の我儘娘じゃ無かったんだな」

「俺がそうであって欲しいと思っていたのが解っていたから、そう振舞う様になったって言っていたから、そう見えるのも俺の所為なんだと思う」

「それで、せりの気持ちに応えてくれる気持ちがあるから、マーヤと別れたのか？」

「そうなんだけど、結局こちらが言う前に真綾から別れを切り出された。感謝すべきなんだろうけど、やっぱり直ぐに椎名さんに告白するっていうのは許されないと思ったし、彼女自身も真綾が俺の事を好きなのは知っているから、裏切った事を許してくれないと思った。でもそれを椎名さんが納得してくれて、それでも俺の事を許してくれるならって虫の良い事を考えていたら、橘と彼女が付き合い

始めた」

「あ〝―！それは俺が出しゃばったから、皆に悪い事したと思ってるんだよ。変に首突っ込んで忍にも無理いったし！」

「マーヤが高坂に何を言ったのか大体想像が付くけど、橘に俺が椎名さんを好きな事は知られたく無いんだ。せめて、しばらく二人の関係が安定して来る迄は！」

「忍とせりを別れさせたく無いのか？」

「出来ればね……」

「何故？！」

「橘はお嬢さんの相手としては、高坂が選んだだけあって申し分ないよ。少し腹黒いけど、それは生きて行く上では悪い方に出る事ばかりでは無いからね」

「せりは今でもお前の事を想っているのに忍に譲る気なのか？」

「椎名さんは、きっと橘を裏切れないと思うよ。そうじゃなきゃ、付き合いにＯＫしたりしないよ。逆に橘が俺の気持ちを知ったら、きっとあっさりと退いてしまうと思うんだ…」

「多分そうだろうな。でもマーヤが言ってしまいそうだけどなぁ？俺のトコに言って来たのだってそういう事だろう？」

「そう！其処は一番頭が痛い！真綾は俺の為もあるけど、基本的には自分の思うままに動くから、俺がいいって止めても言う事なんて

聞かないし、昨日は俺が動くから真綾は黙って見ててくれって言っても騙されてくれなかったよ。おれも真綾を甘く見てたなぁって痛感させられたよ」

「せりが、忍のものに成ってもいいって位の想いしか無いって事なのか？！」

「それは、そんな筈ないだろう？！真綾と別れて迄、手に入れたいと思ったんだから…でも、お嬢さんが苦しむのが目に見えてるんだよ。高坂は、この後、橘に話して彼が身を退いた後に、椎名さんが俺の手を取ってくれると思ってるの？」

「でも、それじゃ、忍が余計にピエロだろう？両想いのお前等を邪魔していた事を知ったら、どう思うと思ってるんだ？」

「椎名さんは、本当に橘に少しも気持ちが傾いて無いと思う？俺はそうは思って無い。彼女はとても情の深い人だから、最初から好きになれる可能性の無い奴と付き合いを始める事は無いと思うよ」

「せりが、既に忍に気持ちが移りつつあるって言っているのか？でも、せりはずっとお前の事を真綾がいても想い続けたのに、そんなに簡単に忍に気持ちが移るとは思えないんだよなぁ！」

「でも、俺は二人が俺の事で壊れたとしても、椎名さんは俺のものには成らないっていう確信だけはあるよ。だから、二人の為を思ってばかりって訳でもないんだ。勿論、椎名さんの事を一番に考えてるから、彼女が幸せの為に見守ったほうが良ければそうするつもりだけど、橘に落ち度があったり、二人がやっぱり今の状態を続けていくのが無理ってなったら、今度は迷いなく行くけどね」

「……俺にマーヤを黙らせて欲しいって事か？話っていうのは……」

「そう！俺が高坂に話したかったのは、結局その一言に尽きるんだけど、それを分かって貰うために色々回りくどく話したけど、お願いできる？」

「お前から今言った事を話せばいいだろう？真綾だって馬鹿じゃ無い。話す事がお前の得にばかり成らないって分かるだろう？」

「それは、高坂がお嬢さんの性格を熟知しているから理解出来るだけで、真綾には解らないよ！」

「…そうなのかもな。せりは極端に潔癖だから、今本庄が告白したとしても本庄に行かないと思うのは少数かもしれないな…特にあれだけ長く想ってたのを見ていた美久達だって思わないよなぁ」

「橘は、もしかして思うかもしれないけど、客観的立場なら冷静でいられるかもしれないけど、やっぱり俺が彼の立場でもあっさり手を離す事しか出来ないと思うんだ。だからこそ、これで橘とうまく行く様なら、俺も遠慮している訳じゃなくて、入る余地が無いだけって事なんだ」

「お前が考え過ぎな気もするけどな？言ってる事は分かるし、実際にせりの性格を知っていればお前を許さないかもしれないけど、…というよりも真綾との別れの原因を作った自分を許せないかもしれないけど、それでも気持ちの方が勝つかもしれないだろう？罪悪感よりも！」

「……それは、正直判らない。でも、彼女を苦しめたく無いし、

橘とうまくいく様なら、それを壊したくないんだ。今は…」

「将来的に忍と別れる迄待つつもりなのか？！」

「まだ高校生だし、進路も考えればずっとって言うのは言い切れない。俺の目の届く内に別れてくれたら、彼女をこちらに向かせるのに全力を掛けるよ！」

「さっぱりしている雰囲気で結構ねちっこい事を考えてるんだな！なんだかお前が、せりを狙う捕食動物に見えて来た…。なんか忍とうまくいって欲しくなって来たよ。お前に捕まったら嫌だと言っても別れてくれなさそうだ！」

「まあね！別れてあげないだろうね。だから付き合う時は覚悟して欲しいって言うつもりだけどね！最初に言わないのは流石に卑怯だろう？」

「ヤバイ人間に目を付けられたのだけはわかるんじゃねーの？流石に。でも、お前自身、そういう重いのって自覚有りみたいだけど、物事もう少し軽く考えないとお前自身の幸せが遠くなるから考えを改めた方がいいって！」

「ははっ！真綾と殆んど同じ事をいうんだな！気が合うと思うんだけどなぁ？二人が！」

「おいおい！俺にマーヤの面倒見させるつもりかよ？勘弁しろよ？！」

「真綾は俺の自慢の従兄妹なんだ。そんな事を言っていても絶対に後から欲しくなると思うけど、その時は邪魔する事にしようかなぁ

？」

「おまえなぁ！大概、忍よりも性質悪（たちわる）な性格してるのな？お上品な外見と大違いだな！」

「大事な幼馴染の彼女を任せるにはふさわしく無いだろう？」

「いや、それは、せりの事をよく理解して考えてくれるし、お前自身は結構ねちっこい以外は文句付ける所は忍と同じくらい無いよ。強いていえばそのねちっこいのと同じ位減点なのが本人には間違ってもいえないけどあの容姿だよなぁ！お前も忍と親しいから絶対に言わないから話せるけど、あの良すぎる容姿はどう見てもプラス方面だけには働かないよな。本人も芸能人とか成る様な性格してないじゃん？前に建築の勉強したいからサッカーは高校迄だっていってたし？」

「高坂はサッカー、大学でも続けるつもりなんだ？」

「ああ、それで、推薦もらえたらって思ってるけど、それは、まだ判らないかな？でも、自力で行ってもサッカーは続けるよ。お前は跡継ぎだから、経済の方に行くんだろう？」

「椎名さんはどうするのかな？」

「まさか、せりの大学に合わせるつもりは無いよな？」

「さあね？偶然同じって事もあるかもしれないけど？」

「お前さぁー！もう今から告白して来て振られてしまえ！！」

「ははっ！ごめん。それは、流石に冗談だよ。将来は俺が頑張らないと会社の人と家族の人生も掛かってくるから、自分の事だけは考えられないよ」

「マジで良かったー！脅かすなよ？！」

「そういう未来も少し夢見たくなっただけだけど、まあ現実はそううまくはいかないね！」

「マーヤを黙らせるの一応引き受けとくよ！取り敢えず忍とせりがどうなるか見届けないと俺も今は動いても誰にとってもいい事には成らないと思うから」

「悪いけど頼む！少し引き延ばして貰えればいいから」

「分かった。お嬢様の相手を、少ししておいてやるよ！」

「頼んどいて何だけどお取り扱いは慎重にお願いします」

「危険物みたいだな？でも、言えてるなぁ！だってマーヤって爆弾みたいな女だよな？」

「そう、我が身内ながら、自分の欲求に忠実な分、とんでも無く危険極まりない一面があるから、そこのところだけ気を付けて！高坂に怪我されたんじゃ流石にこっちも申し訳無い」

「いや、こっちもせりの為だから、頑張るよ。お前も忍と友達だし辛いと思うけど頑張れよ？」

「有難う……」

こうして密談は終わり、メールは来ないが迎えに行くと、食べ終わってはいるようだが、女子会トークが盛り上がっているのが外から見えた。本庄はその盛り上がりに自分とせりかの事が含まれていないか僅かの不安を覚えた。

58

徒歩で二人でホテルに戻ると沙耶は部屋に戻っていた。

「おかえりー！どうだった？今日のデートは？」

勢い込んで聞いて来られる程、何か有った訳でも無いのに少し期待を込められた目に困ってしまう。

「楽しかったよ。なんだか、玲人と歩くのとは少し違ったけど、緊張感無さ過ぎでこれで大丈夫なの？って感じだったけど観光は楽しかった！元々彼とは波長が合うから一緒にいても自然で楽なのよね」

「なんだか初デートから、初々しさがないのねぇー？」

「だから、彼との間にそういうのが出てきたらその方が吃驚だって昨日も言ったじゃない？」

「待ち受けは？ＯＫくれた？」

「うん！これってバカップルっぽくて一回やって見たかったんだって！彼っぽくなくてそれは可笑しかったけど見る？」

「うん。いーの？……うわー！このアイドルの写真集の一枚みたいなのが、うちのクラスの委員長とは思えないわね！！」

「うん。元が、元だけど、この写真は雰囲気出てるでしょう？カメラマンの腕も褒めて？」

「すごいすごい！せりかちゃんが商売したくなる気持ちが分かったわ～！道端でも売れそうね？」

「それやったら、どんな目に遭わされるか判らないけどね！」

「みんなにも自慢に行こうよ！」

「彼は誰に見せてもいいとは言ったけど、まあ、美久達くらいならいーか…」

メールをしてから遊びに行くと、待ちかまえていた様にせりかの話を聞きたがった。沙耶は聞き方に容赦が有るからいいけど、こちらの女子部屋は少し辛いところもある。

「手くらい繋いだの？！」

「いーえ。繋いでません…」

昨日まで唯のクラスメイトだったのに、そんなに急にラブラブな訳ないでしょ？！と突っ込むと沙耶も同意の意を示す。

「そうよね～！そんなに急に変われないかもね～！まして勘違いしそうな男共とは違って、あの出来過ぎな王子様じゃねぇ～」

そう言われると少し反発したくなってくる。

「以前に彼のお兄さんに貰ったチケットで八景島にいった時は腕くらい組んだもん！」

「えっ！何？聞いてないんですけど？！」

「橘君のお兄さんに会ったの？やっぱり格好いいの？」

「一遍に聞かれると困るけど、お兄さんも格好良いよ。あとお母さんもすっごい美人だよ！」

「せりかって橘くんの家に言った事があったのね？何で言わなかったの？」

「それには、ちょっと事情があったんだけど、大分前の話なの！それより真綾さんは帰ってきてないの？本庄くんと一緒なのかしら？」

「ううん。玲人くんが面白いからゲーセン連れてくって言って真綾ちゃんを引っ張ってたのよ！」

「ああ、玲人って真綾さんの事、構い倒すの好きなのよ！彼氏がいる前でもお構い無しにやっちゃうから、参るわよね」

「高坂君らしいけど、結構いい雰囲気なのよ？大丈夫なのかしらー？高坂くんもせりかに振られてから目が行く子がせりかの好きな人の彼女っていうのもねー？！」

ここには事情を知る者しかいない為か、口が軽くなって美久はそんな事まで言ってくる。「こっちは初デートの帰りなんですけど？！」と睨むと「ごめーん水注した？」と聞くので「思いっきりね！」と答えると流石に悪乗りしたのを反省したらしい。

「それで上手く行きそうなの？橘くんとは？！」

じゃーん！とケータイの待ち受けを見せるとすっごーい！と歓声が

上がる。まあ私の腕の力も大きいけどね?

「彼とは、結構思ったよりもうまくやっていけそうよ」

せりかが言うと美久と弘美が「「いいなぁ!」」と言った。沙耶も笑って「良かったね!正直心配はして無かったけど…」と言った。心配要素はゼロなのはせりかにも分かる。

皆はうまく行ったのか一応聞くが、本当にあんまりな感じの可能性が有る場合は、相手が話出すのを待って聞くか、如何だった?とか止まりだろう。

「皆も観光楽しかった?」

「うん。本庄君が皆の意見聞いてくれて、予定立ててくれるから、すごいスムーズだし、玲人君がいるとそれだけで、場が華やぐっていうか楽しくなるよねー!」

沙耶が言うと二人も頷く。聞くとエスコートぶりも其処までやるの?!とせりかが思ってしまう位のすごさに少しだけ気楽な二人旅で良かったかも?と思ってしまった。

本庄は真綾の事を世間知らずの様に言うけれど、本庄自身も若干普通の高校生には無い振舞いをする事を自覚した方がいいよ!と思った。今度注意しておこうかと思うが、女性陣はご満悦の様なので余計なお世話かもしれないが…。

「じゃあ、本庄君と橘君だけ帰ってるのね?」

「奇襲掛けちゃう?彼氏の方は喜ぶんじゃないの?」

「からかわないで！そんな訳無いでしょう？彼氏って橘君なのよ？私と付き合い始めたからって急に人格変わる訳じゃないから！」

「そうねぇ。やんわり、しっかり怒られそうね？」

「そうそう！そう言う意味では本庄君も結構厳しいから、私と沙耶ちゃんが帰った後でもしない方がいいと思うよ？あの優しげな見た目に騙されると痛い目見るよ！」

「せりかって彼氏に辛口だよね～！あと怒られるかもしれないけど、本庄君にも結構、辛辣だよね？一緒に班行動してても完璧に優しくてスマートだし、真綾ちゃんの彼氏じゃなかったら！って思う所が一杯だったのよ？！」

「まあ、そうだろうね。納得はするけど、皆も一回やんわりキツク注意を受けて見るといいのよ！直ぐに私の言った意味が分かるんだから！」

「怖いもの見たさもあるけど、落ち込みそうだから、止めておくわ」

「そうだよね。本庄君にこんこんとお説教は想像してみると厳しそうかも？」

「そうなのよ。私が毒舌で言っている訳じゃないの分かってくれた？後、今はもう橘君と付き合っているんだし、真綾さんに聞かれても困るから、本庄君の事は言わないで欲しいんだけど？」

「そうよね～。ごめんね。でも今回の班行動で、何でせりかが、本庄君の事を好きに成っちゃったのかだけは分かったわ！高坂君とか

もいるのに～って思ったけど、転ぶわね?!あの雰囲気に」

「そうよねー!私も一回、クラっと来たから分かる～。一種独特な雰囲気と包容力があるわよね～」

真綾が居ないのを良い事に皆で本庄の話題で盛り上がる。今迄、せりかを通しての付き合いだったのだから、今回そう思うのは一歩譲って仕方が無いとしても、せりかの言った事は何処に消えてしまったのだろうか?

黙ってせりかが聞いていると、車道側を歩いてくれたり、彼女だけに特別扱いをしなかったりと彼の紳士ぶりの話題が続く。あとやっぱり普段から思うが所作が綺麗だと口々に言う。特に物を食べる時などが顕著で、一緒に食べていると緊張してしまうと言った。

なんだか皆も、せりかが半年間の片思いの相手をようやく振り切れたので、タガが外れてしまった様である。

今迄は気を遣ってくれていたのだと感傷的になりそうになるが、もう少し頑張ってくれてもいいんじゃないのか?とせりかは一人でむくれた。

そりゃあ、本庄の良い所なんて、分かってるし、今更言われても聞くまでもない。しかしここで一緒にそうだよね!って盛り上がるのは流石に無理だろう。携帯に目を遣ると桜の中に佇む彼の姿を見て和む事にする。皆もこういう使い方をしているのかなぁと思うと待ち受けにする意味もあるのかも知れない。

橘からメールが来てお菓子をそのまま持って来ちゃったけど、明日渡す?という内容だったので、直ぐに貰いに行く事にした。

部屋には本庄と橘がいたが、一人は彼氏だし、もう一人はせんせいだ。なんの躊躇も無く部屋に入ると橘は少し笑って、「もう少し警戒されたいね」と囁くように言うので「信用してるから無理！」と返すと、椎名さんに一本だな！と本庄も笑った。

「玲人が真綾さん引っ張りまわしてるらしいわね？ごめんなさい」

「何でお嬢さんが謝るの？別に真綾が付いて行ったんだし、高坂が居れば安心でしょう？」

「玲人らしいね？気にし無さ過ぎだよね！」

橘も楽しげに言うので、「まあ、そうなんだけど、本庄君が気にしないのなら別にいいけど、言い辛かったら私から言っておくから言ってね？」と言うと、頭を軽くゆすって「大丈夫だし、真綾と高坂の問題だから」と言うので、何だか腑に落ちない物は感じたが、頷いてお菓子を貰って出て行こうとすると、橘が部屋まで送ってくれると言ってきたので、本庄の手前、気恥かしかったが、うまく行っていた方が、彼もホッとするだろうと思い、送って貰う事にした。ホテル内で送るって彼氏っぽいなぁと本日二度目の感想を思った。

「写メ見せたら、アイドルの写真集みたいって言われたから売ったらどんな目に遭うか分からないって言っておいたわ」

「どんな目に遭うと思ってるの？」

聞いて来る目が既に怖い。冗談だってば！魔王様写真集を学校で売った時の粗利益なんてちょっとしか計算してないよ？と心の中で言

い訳するが心をお読みになる千里眼体質なのを忘れていました。

「ふーん思ったよりも本気なんだね？」

お付き合いする様になっても甘さは出ないのにこのヒンヤリ感は一緒だなぁと思う。なんだか理不尽な気がする。

「いいえ、そんな事したら、退学になっちゃし！」

「そうだよねぇ！聡明な椎名さんがそんな馬鹿な事で退学になって欲しくないよねぇ～」

本当に今は聡明だなんて魔王様は思ってらっしゃらないだろうがコクコクと脅えて頷くとにっこりと微笑んだ。相変わらず艶やかな微笑みでいらっしゃる。

今迄は思っても言えなかったが、ここで、色気駄々漏れなスマイルな事を、少し言っておこうという気になった。

「あのね。昼間橘君が、彼氏になったからって注意してくれたじゃない？反対の事をしたいんだけどいいかな？」

くすくす笑って「良いよ。楽しみだなぁ！何？」と言われたので言いやすくなった。

「初めて見た時も思ったんだけど、橘君って笑うとぱぁーと華やかになるよね？」

「そう？あまり言われないけど、そうなのかな？それで？」

「笑わないでって言うのは勿論無理なのは判っているんだけど、とっても艶がでて急に雰囲気が変わってフェロモン駄々漏れ状態になるのね？」

「……それで？」

「私とか近い人達は慣れもあって耐性があるけど、人によっては、腰に来るって言ってるの聞いちゃったのね？」

「…腰にって椎名さんは意味分からないで言ってるかもしれないけど、結構会話としては際どいから！気を付けて！」

「じゃあ、それは無かった事にして、不特定多数の人達に直撃しちゃって、せんせいとかは、橘君男子校に行かなくて本当に良かったなって言った位なのね？」

「本庄のやつ！椎名さんになんて事言ってるんだ？！」

「今のも無しにして……」

「…無しにしなくていいから！結局時と場合を考えて気を付けて笑えって事を言ってくれたいんだよね？」

「うん！良かった。分かってもらうの大変かと思った！」

「助言は有り難く聞かせてもらうよ。何か、他にも気を付けた方が良いかなって事があったら言ってくれる？」

「うん！私の方もよろしくお願いします」

「なんだか、今迄はずっと其処まで踏み込んで言ってあげたくても言えなかったのが言えるように成るっていいね！」

「そうだよね！やっぱり唯の友達が言うのは、分が超えてるから、言えなかったのよね！少し付き合ってる実感が出てきたね？」

「ははっ。そうだね～。でも本来の付き合いだと、もう少し違う面で思うものだから、警戒心を持って欲しいかな？」

「そう言われると、猫みたいに成っちゃうよ？逆毛立てて…」

「中間はないんですか？お嬢さん？」

お嬢さん呼びは本庄を思いおこさせるので止めてほしい。しかしこの男の場合わざとの可能性が高いのでスルーしよう。

「心がけるわ？」

なるべく爽やさを心がけて微笑むと橘も「そうしてね」と注意した艶やかな微笑みをせりかにだけ向けた。……怖過ぎてやっぱり私には腰に来るとかは分からないわね！とせりかは思った。

59（前書き）

※ＰＧ１２ですご注意下さい。（１２歳以下の方はこの回は回避して下さい）読まなくてもつながるようにします！

59

せりかが意外と乗り気らしいと伝え聞くと、本庄と玲人は二人で微妙な顔になった。

「やっぱり橘が、簡単にお嬢さんを離すような真似をするはずは無いよな？」

「後悔してるなら今のうちに忍にぶちまけちまえよ」

「それは、二人にいくら何でも悪いよ。椎名さんが俺と付き合ったとしてもうまく行くかなんて分からないし、将来の事を考えるとやりたい事も出来ない可能性も出て来るのに、ハイリスクローリターンな賭けに幸せに成りそうなお嬢さんを巻きこめないよ」

「せりか側から見ると確かにそうだな。マーヤはむくれてたけど、言ったら絶対せりは自分自身の事を許さないから本庄ともうまく行かないって言って聞かせたけど、マーヤが本当に黙っているかは、分からないからな……」

「もう少し、高坂の言葉なら真綾にも届くかと思ったけど、今日の様子だと持たないかも知れないな…」

「忍とせりが思いの他うまくいってるのが気に入らなくて、一回は納得したけどやっぱりこのままじゃ駄目だと思い直した感じだよな？」

「どうしたらいいのかな…」

「忍に謝る心構えだけしとけ！俺も一緒に謝るから」

「橘は何も無かった様に許してくれるのが分かるだけに辛いな…」

「忍はせりにも何時でも別れたくなったら言ってくれって言ってるらしいし、別れたら言えなく成るから…って言いながら色々と助言してくれるってせりから報告が来たから、何も恨み事は言わないだろうな。なんだか聞いてると別れを見越してせりの教育だけは早めにやろうとしてくれてるみたいなんだ」

「今日、部屋に椎名さんが来た時もそんな感じだったよ。俺と真綾の事はもちろん知らないから、俺に気を使ってはいないけど、椎名さんが普通の付き合いが出来る様にさせるのが当面の目標って感じがありありで、うまく行ってはいるけど、橘は少し悲壮感が漂ってたから俺が言うと説得力が全然無いけど、橘にとって、この付き合いが今は幸せじゃ無さそうで、無関係なら止めてるところだね」

「お前達の事を聞かなくても、そんなに悲観的なら、言ってやった方が親切じゃないのかな？」

「俺も実はそう思ってる。ただ、お嬢さんが、真綾を裏切った俺を許してくれないのは仕方が無いにしても原因になった自分を責めちゃって苦しみそうなのがなぁ……」

「それは、悪いが回避は無理だと思う。せりとお前の事は切り離して、忍の事を考えてやったほうがいい様に思う。せりがどう思っても、忍には話した方が良くないか？マーヤと話したら、一応は納得させたけど、マーヤの『みんなが自分の気持ちに正直になってぶつかって出た結果の方が正しい』っていうシンプルな考えもそれは、それでこっちが説得されそうになったよ」

「真綾がそんな事を言ったのか？」

「お前が思う程、マーヤも自己中じゃ無いよ。考え過ぎるお前よりはシンプルな答えだってだけだ」

結局、マーヤには絶対に橘には言わない様に今の段階では説得して、玲人と本庄はあともう少しの修学旅行中は、事を荒立てない事に決めた。

しかし、意外なところから橘に真綾と本庄が別れた事が知れる事になった。

橘が沙耶に、何かせりかの周りで自分と別れたいと思う様な要素が少しでも出て来たら知らせて欲しいと頼んでいたのだった。沙耶は最初はそれを断ったが、橘が「椎名さんから別れを言い出せないから、その時は自分の方から言わなくては成らないからお願い！」と頭を下げられ、「言える範囲で…」という条件付きで引き受けたのだった。

真綾が、班行動中に橘とせりかの仲を気にする様子を怪訝に思って、理由を聞くと、本庄と別れた経緯を聞いてしまった。橘に言わない選択も沙耶は考えたが、結局橘への同情心の方が、沙耶の中では勝ってしまい、メールで二人が別れた事と、本庄はせりかを思っているみたいだが、橘とうまく行く様ならこのまま、見守ろうとしていそうだと真綾から聞いて自分が思った事も付け加えた。

橘からは返事で『本当にありがとう。石原さんの選択を無駄にしない結果に出来るよう頑張るから』と、如何いう行動に出るのか分からないものでは有ったが、沙耶自身はせりかよりも、本庄よりも橘に一番気持ちが寄っていた。だからこそ、彼の意向に沿う事を選んだ。彼は決してせりかの為にならない事はしないという約束も沙耶に情報提供を頼む上ではしていたし、沙耶のなかで橘は信頼に足る人物だった。

夕食は外で海鮮丼を団体で食べられる大きな店に徒歩で案内されて、食事が終わった後、時間も早めな事もあるのか、二時間の自由行動が急に許されたので、皆浮足立った。

多分、思っていたよりも明るい事と、ホテルにカン詰めの様にした方が、脱走者が出たりと悪い影響が出ると思ったらしい先生方の配慮だった。必ず時間内に戻る事と、すすきの等の繁華街は女子だけでは絶対に行かない事、男子の居ない班は、二班で行動する事を条件に、夕方から夜の間の時間の外出が許された。昼間に大体の把握が出来ているので道に迷ったり、変な所にも行かないだろうし、確かにこれから狭いホテルで過ごすには時間が長過ぎた。

夜のライトアップされた札幌も見て見たかったので、皆先生の言う事にコクコクと頷いた。一人でも今言った事を破れば、明日の小樽観光は自由時間無しという罰則も加えられた。

皆、二時間と短い時間なので、何処に行こうかというよりも、とにかく狸小路の明るい方へと歩き出した。お土産屋さんが沢山あるので、とても明るくて昼間と変わりないのだが、やはり夜の外出というのは、少しだけ大人になった様な気がして、嬉しくなった。

橘がせりかを誘い、皆に、断りをいれて二人で、抜け出したのを、皆はそれぞれの思いで見送った。

公園のベンチまで来たところで、橘が暖かいお茶を買ってせりかに渡した。

「折角の観光の時間だけど、話しがあるんだけど、どこか行きたい所があるなら、行きながら話す事になるけどいい？」

「観光はもう充分昼間にしたし、この夜の札幌の雰囲気が味合えれば、特に行きたい所はないからいいわ！話って何？明日の小樽の事？」

「いや、急で悪いんだけど俺と別れて欲しい」

「……」

事務的な事でも頼む様に、別れを言い出す橘がせりかには理解出来なかったが、お互いにどちらかが嫌になれば別れる約束だった。しかし、今日部屋にお菓子を貰いに行った時はそんな素振りは全く無かったし、夕食までの間に何があったのか気になった。

「分かったけど、どうしてかだけ聞いてもいい？今後の参考にならないでしょう？」

出来るだけ冷静に言おうとするが、声が涙声になってしまい、橘もそれに気が付いた様だったので、せりかは慌てて言い繕う。

「ごめんなさい！別れを切り出されたら、さっぱりと別れなきゃいけないのは判っているの…橘くんが私の事を嫌になったのならさっさと別れるべきだし、それを受け入れるつもりだったのに、やっぱり吃驚しちゃって！ごめんなさい」

急に別れを切り出したのは橘の方なのに、せりかに何度も謝られる事に流石に耐えられなくなった橘は、せりかの涙を手で拭った。

「男の前で泣いちゃ駄目って言ったのもう忘れちゃったの？短くても俺達の付き合いも意味があったと思わせて欲しいから、泣かないで？」

「だったらどうして？！……何でもいう事を聞いてくれるお願いを此処で使うのは、酷いのは分かっているけど如何してかだけ、本当の事を教えて？私を傷つけない言い方をしないで！」

「お願いだから、何も聞かないでって言うのは無理だよね？」

「無理！別れても親友だって言ったじゃ無い！せめて、わたしの至らない所をオブラードに包まないで言ってくれるのが、親友じゃ無いの？！」

「俺の勝手だから、椎名さんの落ち度じゃないよ？」

「橘君がそう言うなら、橘君が急に私と別れたくなった理由をせめて解る様に説明してほしいの！私が逆の事を言っても橘君はきっと何も言わないで別れてくれるのが分かっているのに、反対にそうし

てあげられない私は、橘君に親友と言ってもらえるに値しないかも知れないけど、理由を聞かなくてもやっぱり、横には居られないから、一緒だと思うの。軽蔑してくれても構わないから、理由を教えて……」

最後は弱々しくて聞き取れない程小さな声だった。橘は、せりかに納得のいく理由を捜してから、別れを切り出すべきだったと後悔するが、急にできたチャンスに早く自分が楽に成りたくてせりかに言ってしまった事を後悔した。

「椎名さんは本庄の事を、まだ想っているでしょう？やっぱりそれが辛くなったんだ。それでも良いからって始めたのに、こんなに早くに投げだすんだから、椎名さんが俺の事を軽蔑してくれていいよ」

「私は、せんせいを忘れるつもりで橘くんと付き合い始めたし、今は、橘君の事が好きだわ。だって別れようって言われたのがこんなにも辛いんだもの…」

「…それは、目には見えないから分からない」

せりかに本庄が真綾と別れた事を言ってしまえれば楽だが、言ってしまったら、彼女は決して橘と別れないだろうと思う。実際、その方が辛い。少し意地が悪いがせりかには自分の思い込みを理解して貰わないといけないと思う。

「もしも、どうしても俺と付き合いを当面続けたいなら、俺に気持ちが有るって示して欲しい」

「……好きだと言って駄目ならどうしたらいいのか分からないし、それを分かる為の勉強だった筈なのに…」

「此処でキスして?…出来たら考え直してもいいけど、駄目なら、やっぱり別れて欲しい」

「…っ!それは、少しハードルが高いよ?分かってて言っているんでしょう?」

「やっぱり別れよう?お互いの為だし、椎名さんを嫌いになった訳じゃないから。ね?」

せりかが橘の唇にそうっと唇を寄せて来た。予想外のせりかの動きを橘が肩を掴んで止めた。

「ちょっと待って!言ってみただけだから本気にしないで!」

焦る橘に、せりかには出来ないだろうと無理難題を吹っ掛けて来たのだと分かり、一度も二度も同じだし、こうして肩を掴まれても田村の時の様な嫌悪感は無い。

せりかは迷わずに橘にキスをした。

ファーストキスも彼とだったが、二度目も彼とする事になるとは正直思って無かった。しかし、彼がいいと言う迄離れないつもりで唇を押し付けた。彼の困惑が伝わってきたが、もう引き返せないのだから、どう思われようとも自分から離れるつもりは無かった。

長い長い、せりかからの一方的な口付けを終わらせたのはやはり、橘だった。

「どうして!!」

「これで気持ちは分かって貰えて当面は付き合ってくれるのよね？」

不安そうに自分のしてしまった事に橘が不快感を持っていないか探る様なせりかに、流石に橘も折れた。

橘は何回か角度を変えてせりかに口付けると、せりかも彼からのキスを受け入れた。自分がした色気のない一方的なものとは比べ物に成らないほど、それは、相手を近くにを感じるものだった。

彼が別れをこれで撤回してくれなかったら、マジで切れるからね？！とせりかは彼を見ると、彼が哀しそうに見えたので、もう一度、せりかの方から先程よりは慣れたキスを彼にするととても驚いた顔をした。

自分からするのは良くても女の子からっていうのは、恥じらいがないのかなぁと不安になるが、彼から、せりかに目で見える形で好意を示す様に提示したのだから、そんなに驚かれても困る。

「えっと、驚かなくてもよく無い？自分からは、散々したでしょう？」

「するのとされるのは違うよ……」

「じゃあ、次からは言ってからにするから、取り敢えず、橘君の別れたい気持ちは払拭できたのよね？私だってこれを盾にずっと付き合ってっていうつもりは無いから安心して？でも考えは変えてくれるのよね？」

「考え直すけど、椎名さんが後悔しない事しか祈れないな…」

「此処までしても信用されないんじゃ、もうこれ以上は無理だわ！」

流石に此処までしても橘が別れたいと思うなら、別れるしか無い。

言った理由も本当のものか如何かも分からないし……。

「ごめんね？分かったから……今は、椎名さんが俺を好きだと言ってくれたのを信じるから……でも椎名さんって本当に予想外な事をするよねー」

はぁーと溜息を吐く橘に、せりかは自分から無茶振りしておいて良くいうよ！と思う。

「取り敢えず、明日の小樽は、一緒に回ろうね？！」

無邪気に微笑むせりかが、本庄の事を知っても同じ笑顔でいてくれるのだろうか？と橘は思ったが、結局、自分は禁断の果実の実を口にしてしまったのだから、このまま何処までも流れに逆らう事は許されないのだと思い、せりかを強く抱き締めた。

60（前書き）

拍手タグを設定しましたのでご感想など頂けると嬉しいです。

60

『ホテル内の土産物屋で待っています。寒くならない格好で出て来て下さい』

橘から沙耶にメールが来たので、せりかにちょっと友達と会って来ると外に出た。

最初はせりかを裏切る様で嫌だった橘への情報提供も「出来る範囲で良い」という言葉と「彼女の為に成る様にだけ使う」という言葉を信じて真綾から聞いてしまった本庄と真綾の別れ話を橘にメールで伝えた。彼は、動いた結果を沙耶に話してくれるつもりなのだろう。全く律儀な人だと思うが、結局こういう真面目さに負けて橘に協力してしまっているのだから、彼の作戦勝ちな部分もあるのかもしれないと思う。

土産物屋にいくと彼は軽く手を振って、ホテルの狭い中庭に出るドアを指差したので、沙耶も上着を着て外に出た。

「ごめんね！寒いから誰も居ないのは助かるけど、石原さんにも寒い思いをさせちゃって！」

「ううん。メールで話した件でしょう？あれの所為でせりかちゃんと何かあったんでしょう？」

「うん。結局彼女の本命の本庄が更科さんと別れて、椎名さんの事が好きなんだとしたら、俺とは早めに別れた方が良いに決まってるから、今日の夕方の外出時間に別れを切り出したんだけど、彼女は泣いて嫌だっていうんだ。…それ自体こう言っては何だけど予想外

で…元々彼女が俺の事を好きで付き合い始めた訳ではない事は知ってるでしょう?お互いにリハビリと勉強になればっていう付き合いだから、別れたく無いって言われるとは正直思って居なかったんだ。でも本庄達の事を今、付き合っている段階では彼女に教えられないし、却って意固地になってしまって俺が退こうとするのを許さ無いと思うんだ。だからそれを言わないで何とか分かって貰おうとしたんだけど、失敗してしまって……」

「橘君、唇にグロスのラメがくっ付いてるから拭いた方がいいわよ?それって付いちゃうと結構しつこいのよね〜」

沙耶が言うと、橘は僅かに顔を紅くしたが、その後、はぁーと溜息を吐いた。

「橘くんからした訳じゃ無いのは分かってるわ。帰ってきた後、せりかちゃんが急に『女の子の方から迫ったら男の人って引くのかなぁ?』って聞かれた時はこっちが引きそうになったけど、喜ばない男の人の方が少ないんじゃ無いの?って答えたら明らかにホッとしてたから、何か有ったのはもう分かっていたから少し意地悪だったかもしれないけど、判かってると思うけどせりかちゃんは、そんなに軽くそういう事が出来る子じゃ無いのよ?本庄君の事を聞いたら確かに気持ちは揺れるかもしれないけど、それも含めて彼女を受け入れてあげて欲しいの。だって女の子からそういう事が出来る事自体、男の人には判らないかもしれないけど、確実に橘君の事が好きになってるのよ?」

「それは、本庄の事を知らないからだとも言えるよね?」

「違うわ!せりかちゃんは、橘君とは波長が合うって言ってたわ!付き合い始めてから、気持が変わる事だってあるし、付き合う前か

ら既に好きだと思う気持ちが無かったら付き合わないと思うの。だから結果的にせりかちゃんは、橘君を選ぶかもしれないのに橘君が手を離しちゃったら、せりかちゃんだってどうしていいのか分からなくなるわよ?」

「それは、長い間、彼を想う椎名さんを石原さんが真近で見ていないから思える事だよ。確かに人の気持ちは変わるかも知れないけど、婚約者のいる本庄を間近で見続けてずっと忘れられなかったのに、俺とまだ付き合い始めたばかりで、俺の方を選ぶとしたら、同情か二人を別れさせてしまった罪悪感からだよ」

「例え、そうだとしても、今は彼女は貴方の事を見てるのよ?この先振られそうだからって、先に振っちゃう程、狭量じゃ無いわよね?橘君は?」

「実際そうしようとしてしまったから、狭量なのは否定出来ないけど、彼女に絆(ほだ)されて結局別れられなかったから、石原さんには、嫌な役目を押し付けてしまったのに、それを活かせなかったから謝りに来たんだ。本当にごめんね。元々嫌だって言っていたのに…」

「悪いと、もし思ってくれるなら、せりかちゃんが別れたいって言うまでは真剣に向き合って欲しいの。最初から、本庄君の方に行ってしまうんだなって思って付き合ってもうまく行かないと思うし、橘君に悲壮感が漂っちゃって見ていられないわ!この話のメールを打つ前から、なんだか悲観的だったわよね?どうして?」

「虫のしらせって奴かも…。何と無く本庄の様子で、彼が彼女の事を想っているんじゃないかって、ずっと思ってたんだ。唯の友達では片づけられない感情が本庄にあるのは、実際判ってたから、彼が彼女を好きだと聞いても驚かなかったよ。驚いたのは更科さんと別

れた方だよ。彼らは従兄妹でもあるからそんなに簡単には別れないと思っていたんだ。更科さんの事も過保護な位、大事にしていたしね」

「そういう事だったのね。橘君に厳しい事を言ってしまっている自覚はあるけど、女の子の方からキス迄して縋って引き止めたんだから、気持ちは汲んであげて欲しいのよね！」

「そうだね。俺も彼女が万が一でも俺を選んでくれる様に審判の時が来るまで頑張る事にするよ」

「多分せりかちゃんは、橘君が初めてだと思うけど、ファーストキスは重いのよ？…橘君の方は大分慣れていそうだけどね？」

「いや、彼女とはシンデレラの時に事故でしちゃってるから実は初めてじゃ無いんだ」

「っ！！あれって本当にしちゃってたの？！」

「振りの予定だったけど、本番で本庄が椎名さんに目を瞑るようにアドバイスしたらしくて、そうしたら、どうしても体勢を保てなくてね」

「役得ね～？！橘君も！」

「いや、彼女に謝り倒されて逆に凹んだし、その後、告白したけど本庄が好きだからって玲人と一緒に振られて散々だったよ」

「……せりかちゃんも何気に天然系悪女なのね！結構不憫な話を聞かされると、いまさっき言った事が極悪非道に思えて来るわ」

「そんな事ないよ。石原さんは友達思いなだけだし、俺の事も考えてくれての事なのは、よく分かってるし、本当に感謝してるから！」

「そう？これからも私はせりかちゃんと橘君の為に何か出来たらって思ってるから、それだけは覚えていてね」

「分かった。最終的に俺が手を退いた時は、彼女の事を思っての事だからその時は許してね？」

「橘君はこんなに格好良いのに随分自信が無いのね？不思議だわ！」

「椎名さんって面食いじゃ無いんだよね？知ってた？」

「本庄君だって顔はかなり良い方だと思うけど……」

「顔で惚れたんじゃ無いんだ。中身なんじゃないかな？俺は本庄よりも玲人の方が良いと思うけどね？」

少し茶化す様に橘が言うと沙耶も少し笑ってしまった。

「とにかく寒い所、ごめんね！」

「ううん。また報告待ってるからね！」

「石原さんは手厳しいから怖い気もするけどね？」

「ラメは本当に早めに落として置かないと不味いからね？！」

手で橘がゴシゴシとこするが、沙耶がそれじゃ駄目だとコートのポ

ケットからウェットテッシュをくれて、それで拭く様に言った。

「せりかちゃんにも注意して置く？一応塗らないで貰った方がいいわ」

「…いや、そういう事は無いだろうからいいよ…」

「そうなの？取り敢えずは言わないでおくけど、鏡は持っていた方がいいわよ？」

「色々と気を揉ませて申し訳ない」

「いえいえ！結構楽しんでますから大丈夫よ？」

「結構趣味が悪いね？」

僅かに黒い微笑みを橘が見せると「きゃー！これが魔王様の微笑みなのね♪」と沙耶が言ったので、せりかが何を言っているのかが少しバレてしまい、「明日の小樽は楽しみだね？」と橘が言うのをせりかに申し訳ない気持ちで沙耶は聞いた。しかし、今日の話を含めると話せないので心の中だけでせりかに謝った。

部屋迄結局魔王様が送って下さったので、「お手柔らかにね？」とだけ釘を刺すととても綺麗に橘は笑ったが肝心の返事は返ってこなかった…。

61

小樽へと行くバスの車中で橘がせりかに本当に二人で回ってもいいのか?と聞いてきたので札幌とどう違うのか疑問に思い、「何故?」と聞くと彼は札幌と違って、観光範囲が狭いから人の噂になるかもしれないと言った。

「でも、どうせ皆、付き合ってるのかなぁって思っているんでしょう?」

「それは、そうだけど、椎名さんも言ってたでしょう?付き合ってるのかな?って思われるのと付き合っているでは大きな差があるでしょう?」

「うーん。でもこんな機会は滅多にないし、橘君が嫌じゃ無ければいいわ。実際付き合っているんだから誤解じゃないんだし…」

「そう。じゃあ、二人で回る事にしよう。昨日と同じグロス今日もしてるの?」

「よく気が付いたわね?そういうものに無頓着な方かと思ってたけど?」

少しせりかは恥しくなりながらもよく見てるなぁと感心していると耳元で「ラメが付いて困るから出来たらそれはもうしないで?」と悪戯っぽい笑みで囁かれた。

はっとして言葉の意味を理解すると瞬時に頭に血が上った。この悪魔め!こんなところで言わなくてももうすぐ二人になるのにこの場

でわざわざ言うなんて、何の仕返しだろう？やっぱり昨日の事とか？！でもそれは大丈夫だろうって沙耶も言ってたし…とせりかが、怒りと恥しさで顔が紅潮する様子を見て涼しい顔で橘は微笑んだ。

これは沙耶の失言と自分の暴言の所為だと知る由も無いせりかだったが、昨日はあんなに儚げに見えた橘に今日は悪魔の尻尾が見える。昨日のような哀しげな表情をして欲しくは無いが、極端なんだよなぁとせりかは思う。

しかし、悪魔様にも「中間はないの？お嬢さん？」と言われた事を思い出せば多分似たもの同士なのだろう。

そう思うと少し諦める気になった。自分だって直らないのに橘に修正を要求できないだろうと思った。

運河沿いの大きな駐車場に降ろされる。荷物はチェックインまで時間があるので、そのまま荷物が自分達よりも先に着くらしく、先に部屋割表を渡されて、部屋番号のプレートを付けさせられた。

バスから降りてぞろぞろと歩き出すと皆が同じ方向を目指して運河沿いを歩いていた。皆、ここに来たからにはまずは、ガラス工芸店をやはり見たいと思っているようだった。

「なんだか集団行動みたいで、特に二人で歩く雰囲気でもないわね？」

「結構周りに見られてるけどね？あまり気にしなくなったんだね。断られた二番目位の原因だったのに」

なかなか傷を抉りますなぁ？！魔王様は実は御機嫌斜めなのか？と

思って顔を見ると、嬉しそうに「何？」という疑問をむけて微笑む。機嫌はすこぶる良ろしいらしいので単に事実を仰られただけのようだ。

「そうね！前よりは随分気に成らなくなったわ。玲人と歩いていても最近はへっちゃらだもの」

「玲人で鍛えたの？」

「そうね。玲人とはよく出掛けるから鍛錬には持って来いだし、自分の意識が変わったのも大きいの。玲人以外に橘君とか若宮先輩みたいな強烈な美人さん達見ちゃうと、普通の人も居て当たり前でしょ！っていう気になったら、人の目を気にする方がばかばかしいわ！」

「椎名さんも可愛いよ？！」

「有難う！橘君から言われるのは嬉しいわ。とっても！」

「誰に言われても嬉しいものじゃ無いの？」

「……今迄怖くて聞けなかったけど、サッカー部でせりりんって呼ばれてて、何か変な事になっているんでしょう？悪いけどその人達の美化に美化を塗り重ねた可愛いは、正直キツかったわ」

「ああ！あれね？こうやって俺と付き合い始めちゃえば、紹介しろっていうのは成り立たなくなるから、あれが終わるのかと思うと助かるよ。玲人はもっと助かるね！」

「玲人が私の為に頑張ってくれていたみたいだけど、サッカーで勝

ったら紹介しろ？ってそれは、意味不明過ぎて、理解する気にも成らないわね」

「ははっ！結構盛り上がってたんだけど、先輩方が良い起爆剤になるからって止めないもんだから、関係無い奴までなんだかよく分からないけど「勝負だー！」とかって玲人に言ってきて笑えたけど、俺は玲人のアシストに頑張ったんだけど、玲人はマジで大変だったんだよ」

「玲人には今迄結構迷惑掛けられて来た所為か、悪いって言う気が全くしないのよね！」

「……椎名さんも結構鬼だね」

「それも橘君からだと褒め言葉に聞こえてくるから不思議ね？」

「それは俺も不思議だな？どうして？」

「ふふっ。分かっていて聞くのは野暮というものよ？」

「いうね！朝の悪戯の仕返しなのかな？」

「やっぱり、あれは、自覚があったのね？！まあ、橘君に限って計算無しって事は無いとは思っていたけど…」

「あれを二人だけの時に言わないのが、本当の意味では親切なつもりだけど、俺がそれだけじゃつまらないからね♪」

「そういう理由なのね！良かった～！怒ってるのかと思って心配してたの」

せりかはこういう予想外な事を言って来るので本当に困るんだよなぁと橘は思うが、計算など無く、全くの天然なのだろう。

「怒る理由は思い当たらないけど?」と橘が意地悪く返すと「っ!そう。それならば良いの…」とせりかは口に出すべき事では無かったのだと学んだ。

ガラス工房で、ガラスの表面に砂を吹き付けて好きな模様がつくれるサンドブラスト体験というのをやった。なんだか職人さんになったみたいで楽しかった。器用な橘は、こんな所でまで器用で、きれいな青いマーブル模様を付けていた。せりかは、オレンジのバラをイメージしたが、コスモスと見分けが付かない出来になったが、一応教えてくれた先生は綺麗に出来たと褒めてくれた。

その後、やっぱり小樽に来たからにはお寿司だよね!という話になりお寿司屋さんに向かうと驚いた。聞いてはいたが、長い道が全部殆んどお寿司屋さんが並んでいて壮観だった。ラーメン横丁とは真逆の意味で吃驚した。

「どのお店にするか迷っちゃうね?決めようにも決めてが無いよね〜」

ずっと並ぶ店を見ながら言うと、橘も「皆同じ値段だもんね」と少し呆れたように言った。談合?カルテル?と思いたくなる程値段を合わせてあるが、一件安くすれば其処だけが潤う結果になるので、暗黙の了解なのだろうと思った。

「一軒とても有名なお店があるけど、そこに行ってみる？」

橘がそう言うので、そこに行くと其処の店だけ並んでいる人達がいっぱいだったので直ぐに判った。

「並ぶ？椎名さんが良い方でいいよ」

「ううん。デパートの物産展に出店していたから、ここじゃなくてもいいわ」

「じゃあ、隣のお店に入ろうか？」と並んでいる人を横目に隣の店に入ると清潔感のある小ざっぱりとしたお店で、とても選びようが無くて適当に入ってしまったけれど、もしかして当たりかも？と思う。

折角此処まで来たからと、うにといくらの入った上寿司を頼んだ。

温かいお茶を飲みながら待っていると直ぐに二人前が握られて出て来た。早っ！！

実際札幌で海鮮丼や、函館でもボタンエビなど食べてきたので、家の方のお寿司屋さんでも見る様な普通のお寿司は美味しそうだが、特別変わったところは見えない。

しかし、ひとつ口に運ぶとびっくりするくらい美味しい。新鮮だからとかだけでは無い美味しさに、二つ目を食べるとやっぱり美味しい。シャリが違うのかな？とか色々と思ったが、ここの美味しい理由は分からないままだったが、皆が小樽でお寿司を食べるのは如何してなのかだけは分かった気がした。

「大当たりだったね！待たないで済んだし」

「本当！でも他のお店も試してみたくなっちゃうわね？隣って混んでいたからあれより美味しいのか気になっちゃうわ！」

「多分空いている所の方が、落ち着いて食べられるし、丁寧で美味しいと思うよ？試したいんなら、後でもう一軒付き合うよ？」

「ううん。さっきのが美味しかったから、小樽のお寿司屋さんは皆美味しいって記憶にしておくわ。流石に飽きてしまって絶対今より美味しいとは思わないと思うのよ」

「そうだろうね。次は何処に行く？」

「一応、見ても解らないって聞いてはいるんだけど、おじいちゃんがファンなんで記念館で何かお土産を買ってきてあげてって言われてるの」

「いいよ。行ってみようか？此処に来たら定番だよね？」

「でも何もきっと分からないよ？」

「一応、来たら話のタネって言葉もあるでしょう？分からなくてもいいんだよ」

スーツが死ぬほど置いてあっておじいちゃんとかが見たら泣いちゃうんだろうなぁという外車とかご本人愛用の品々が飾ってあった。一応、話してあげないといけないと思い、いろいろと真剣に見て回った。橘は、古いものが一杯で逆に新鮮だよね？と言って色々と興

味深げに見ていた。

お土産屋さんで、キーホルダーや写真立て等を選んで買い記念館を出た。

記念館の前で写真を橘に撮ってもらうと、通り掛かった人に橘は自分のカメラを渡してせりかと一緒に撮ってくれる様に頼んだので、二人で写真に収まった。

もしかして二人で写真を撮るのは初めてかもしれない。橘は、あまり写真が好きそうでは無かったので、仲間内で撮る時も遠慮していたからだが、デジカメを持って来ていた事に驚いた。

「カメラ持って来てたんだね?」

「自分が建物とか撮るのが好きなんだ。あとで旧日本郵船の建物も見たいんだけどいいかな?」

「もちろん!私も見たいと思ってたから」

そうやって訪れた旧日本郵船小樽支店はヨーロッパ風の石造りの重厚な建物で、中にはシャンデリアや暖炉もあり、とても豪華な内装で一見の価値はあると思ったが、重要文化財に指定されているらしい。そういうのって京都とかに多いのかなと思っていたが、意外と同じ港町でもある地元にもあるのかもしれないとせりかは思った。

橘の意外な趣味発見なので、ガイドを見ながら、日本銀行旧小樽支店(北のウォール街と呼ばれていたらしい)や旧青山別邸等にいく事にした。

「悪くない？付き合わせちゃって？」

「全然！せっかく二人なんだもの。好きな所が回れて良かったわ」

そう言うと、橘はいつもよりも幼い笑顔で「有難う」と言った。

両方共、観光地としては一般的で特にお礼を言われる程マニアックな場所ではないのだが、目を輝かせて建物を見て回る橘を見ている方が楽しかった。

その後、多分せりかの為だろうと思うが、行ってくれたオルゴール堂と北一ヴェネチィア美術館は宝石箱をひっくり返したかのような美しさだった。ヴェネチィア製のドレスで記念撮影も出来たので、橘に勧められるままにアンティークドールのようなドレスを着させて貰った。橘が自分のカメラで写真を撮ろうとしたのでせりかの方を渡したが、結局両方ので撮っていたので、御家族には見せないでね！と言ったら軽く笑っただけだったので、見せる気でいる様である。

「だって兄貴がシンデレラちゃんのファンだから喜ぶと思って」

「あのね～、どの位迄その話をされる訳？！流石にあれは断れなかったけど、やっぱり恥しいわよ！」

「まあ、お互いにそうだよねぇ。でも椎名さんもあれから、腹が立ってる時に王子呼びする様になったの直ってないよね～」

「確かに！習慣って怖いわね。じゃあ、シンデレラちゃんでいいわ。一樹（いつき）さんだけの話だし」

「そこは、王子呼び止めるわ、ってなる所じゃ無いの？」

「無意識なのを止める約束出来ないから、出来ない約束よりは許容の方をとるわね！」

「律儀で椎名さんらしいけど、あれは結構心臓に悪いんだよね？！だって、呼び方で怒り具合が本当に如実に分かるからね！」

「そんなに暴れ出す訳でも無いのに物騒な言い方は止して。大袈裟だわ」

「うん。椎名さんは静かに怒るタイプだし、長続きはしないけど、でも堪（こた）えるんだよね～」

「ふふっ！それは、楽しい事を聞いたわ！今度から怒って無くても普段からそう呼べば、解決するんじゃ無いの？」

「椎名さんは俺の寿命を縮めたいみたいだね？」

「そんな滅相もありません。いつもやられてばかりだから、反撃のチャンスだと思っただけなのよ。悪気は無いの…」

「今の言葉をどう解釈すれば悪気がない所に行きつけるのか疑問だけど、可愛い彼女のいう事だし？目を瞑るよ」

「……やっぱり、そう言うのってふざけて言っているのが分かってもかなり恥しいわね？」

「そう。それは、良い事を聞いたよ？いくらでも言い惜しみしないから覚悟しておいてね！」

「……如何か、程々で御容赦を！こっちは無意識だから無理だってば！」

「別に嫌がらせじゃ無くて今のも本気で言ってるから、こっちもやめないからね？」

既に王子じゃなくてせりかの中では魔王様に昇格しているのだが、それを言ったら、もっとキツイ事になるだろうと思う。せりかには沙耶がうっかりバラしてくれた事は知らないので、心の中での沙耶の謝罪も勿論届かなかった。

港が一望できそうな所に立つホテルに着き、部屋に入るとプレートをつけた自分の荷物が部屋の中に先に着いていた。

61（後書き）

実在されると思われる所は、正確な情報では無いので、ご注意ください。すべて登場人物が感じている感想です。

62（前書き）

色々あった修学旅行も最後の夜です。

62

「沙耶ちゃんおかえりー」

「せりかちゃんの方が先に帰ってたのね。遅くまで彼氏と一緒かと思ってたのに！」

「夕食までには帰って来なくちゃでしょう？あと三十分くらいだもん」

「そうね。今日は、広間で十勝牛御膳が出るって男子が喜んでたわよ！」

「小樽なのに？！」

「そう、小樽なのによね？でも大体みんなお昼にお寿司食べてる人達ばっかりなのを見越してるのよ。昨日も海鮮丼だったでしょう？」

「それで大きな北海道くくりで、有名な十勝牛になっちゃうのね…」

そう言いながら行った大広間での食事は、確かに石焼のサイコロステーキや、蝋で温められた少量のすき焼き等、お肉も多かったが、お造りや野菜のおひたしなどもあって、そんなにくどいものでは無かった。どちらかというと幕の内弁当の様に少量づつ色んな種類の小鉢もある御膳で、その上、すき焼きも頼めばちゃんちゃん焼に変更可能だという事だったのでせりかは迷わずそちらを選択した。

アルミに包まれてもう火が通っている物を、蝋の火で炙ると味噌の香ばしい香りがして来て食欲を刺激した。

玲人が隣だったので、つい無言で青物の小鉢をこちらに寄越すのを受け取り、ステーキの半分を玲人の方に移した。

沙耶と橘が目の前で驚いた顔をしたので、自分達のやってしまった事に気が付いた。人目がある時はやらないようにして居たのに習慣って怖ろしいと思う。

「橘くん、あれってどう思う?」

「見たのは初めてじゃ無いけど、修学旅行では控えた方がいいかもね?玲人も子供じゃ無いんだから、野菜もちゃんと食べる様にした方がいいよ?」

沙耶が「注意するところって其処なの?」と橘に言うと「玲人相手に競争出来ないよ。スタート地点が遥か遠くなんだし」と言っているのを聞いて、せりかは沙耶が彼氏の前で玲人との親密な行動を橘にどう思っているのか聞いているのだと分かった。それこそ何の心配も要らないだろうと思う。すこしみっとも無いのが恥しいだけだ。

「忍も、そんなに口うるさいと、せりに嫌がられるぞ!」

「…別にそんなんで嫌に成らないから、放っておいてくれていいから…」

「そうだよ。玲人は、椎名さんが居ない時は俺に寄越してくるんだもん。流石に後輩も出来たんだから、ああいうの止めて自分で食べろよ!」

「残すのも勿体ないし、せりはダイエットで野菜を多めに食べたいから利害が一致してるからいいんだよ」

「俺とは、一致してないだろう？」

「……その時は食べる様にするよ。流石に後輩の前では、みっとも無いかもな？子供っぽくて」

「玲人、私が居ない時は橘君に甘えてたのー？！信じられない！橘君ごめんね！今度からちゃんと食べさせるから」

橘に謝るせりかに仲間たちは流石に其処は違うだろう！と突っ込みたくなったが、せりかが真剣に自分の彼氏に「うちの子がすみません」的に謝るのを生温かく見ていた。

皆は橘の反応が気になったが、取り立てて何も思う所は無い様子で、沙耶やせりかと料理の味の批評をしていた。

クラスの皆も、せりか達が付き合い始めた事が今日で判ったので、その様子に「玲人君邪魔し過ぎだよー！」と声に成らない心の声で呟いた。

「椎名さんも、とうとう折れたのか！って思ったけど、玲人が天然に邪魔してて笑えるし！」

「高坂君も気にしないよね～！彼氏の前で流石にあれは無いでしょう？」

「椎名さんもあそこで、橘の方に謝っちゃうから、ずっこけそうに成ったよ！」

「そうよね～。あれは橘君が気の毒になっちゃったけど、彼も何も気にしてなさそうだったわよね？」

クラスの皆の噂になる事になるが、今迄と変わらない人間関係の様子に皆も何と無く不可解ではあるが、玲人が無茶振りで幼馴染の彼女の彼氏を親友に決めた事はクラス全員の知るところだったので、漫才でも見せられているかの様な印象だった。皆もその様子が微笑ましくてくすくすと笑ってしまう。

何と無くせりかと橘が付き合っているという雰囲気も感じられないので、玲人の無意識な邪魔も受けつつ、付き合いは本当に続くんだろうか？という懐疑的な意見が多かった。

「椎名さんもダイエットの必要ないでしょう？体に悪いよ？」

「そうだよ。必要無いわよ！そう言えば、せりかちゃん、ダイエットの事を前に玲人病とかおかしな命名してたわよね？」

せりかは少し声を潜めながら答えた。

「玲人は均整のとれた身体でスタイルも顔も良いのに、横に半ば強制的に居なくちゃいけなかったから、せめて太らない様にして来たのよ。それが沁みついちゃって夜はあまり食べないのよ。それに外食の時はカロリーが高めだから、3分の1位、玲人に先に分けちゃって玲人も普通のだと足りないのもあって、それで丁度良かったか

ら、つい今みたいな事をしちゃって恥しいんだけど、皆が言う程ダイエットしている訳では無くて習慣だから、気にしないで！」

「せりは、そうやって何でも俺の所為なんだもんなぁ！」

「それは、しなくてもいい苦労をさせられれば、子供の内ならそう思うわよ！今は、自分の為って思ってるから、玲人の所為にはする気はないけど、美久とかにも病気だとか言われるから、つい玲人病って言っちゃっただけで、でもそれは本当の事だし、他に言い様もないのよね」

「解るわ！玲人君みたいな人がお隣さんで幼馴染なのは羨ましがられそうだけど、結構大変だよね？色々と」

「そうなのよ。でも玲人の奴は私の苦労を何とも思ってない訳！玲人も努力が無い訳ではないんだろうけど、こっちの身にもなって欲しいわよ！」

「そうだよね！せりかちゃんが大変だったのよく分かったわ！」

「沙耶ちゃんは唯一の玲人の被害者同盟だもんね！沙耶ちゃんだけだよ～！病気とか酷い事言わないでくれるのって！！」

せりかに、うるんとして熱弁をふるって沙耶と手を取り合われると玲人も少し、居心地が悪くなって来た。

「なあ、忍も俺が悪いと思うのか？」

「うーん。微妙かなぁ？お年頃の女の子は些細な事が気になるもんなんじゃ無いの？」

「なんだか、随分他人事だな？忍がせりの彼氏なのに…」

「まだほやほやだからね？玲人との方がうんと親しいのを見せつけられると道は長いかなぁって思うよ」

「確かに！せりかちゃん達の熟年夫婦みたいなのを目の前で見せられると、あれくらいに成れるのって何時なのかな？って思っちゃうわよね？」

「はぁ～！橘君はそんな風に思っている訳ね？」

「せりかちゃん、其処は呆れる所じゃ無いと思うよ。多分殆んどの人がそういう感想になると思うから！」

「そうなの？私は橘君とはお付き合いを始める前から、もう玲人と同じ位親しいつもりだったけど？」

そう言うと橘と沙耶が頬を紅く染めたので何かいけない事を言ったのかなぁ？と玲人に目で聞くが「さあ？」と玲人にも分からない様だった。

「ちょっと聞いていた方が照れちゃった位だから、いくら橘君でも照れるわよ！」

と耳元で沙耶に囁かれるが、せりかにも玲人にも照れ処がさっぱり判らなかった。ハテナマークが頭の上に乗ったせりかに更に沙耶が言葉を続けた。

「無自覚かもしれないけど結構熱烈な告白に聞こえるわよ？！」

と言われたので、微塵もそんなつもりは無かったが、せりかも紅くなった。違うから！と大否定も仮にも恋人にしていいものか？と悩んでしまう。

「椎名さんの言いたい意味は分かっているから、大丈夫だから！でも玲人と同列にしてくれるのはかなり嬉しいかな？」

「忍も目標低いなー！」

「お前に言われるとそれは、それでムカつくんだけど！」

「まあ、俺達の間に入ってくるつもりなら頑張れよ？」

せりかの肩を抱いてふざけて忍をからかおうとするが、せりかと忍の両方から頭を叩かれた。

沙耶は手を叩いて大笑いしていて、旗色が悪くなって気まずくなってしまった玲人は頭を掻いた。

「橘君をからかおうなんて怖ろしい事はしないでよ！」

とても彼女の言葉とは思えないがせりかは真剣だった。こっちにとばっちりが来たら如何するのよ？！と思う。

「椎名さん？其処は、『彼氏の前なのにふざけないで』が正しい解答だと思うよ？」

「そんな恥しい事よく言えるわね？私には悪いけど無理だわ！」

少し険悪な雰囲気になった二人に玲人も焦る。

「俺も悪かったから、喧嘩するなよ？」

「「俺も？！」」

ギロリと二人から鋭い視線を浴びると玲人も危機感を覚えた。忍もせりも怒らせると厄介なんだよなぁ！沙耶に助けを求めて視線を送るが、魔王様の怖さを知ってしまった沙耶は玲人には悪いが視線を逸らした。

「サッカー部で椎名さんとの付き合いを聞かれたら否定して置くから」と忍が囁き、「かにすきパーティしたいなぁって言うからね！」とせりかにも言われて玲人は青くなった。

「それは、勘弁して！俺も悪ふざけし過ぎたからさぁ！ごめんって！」

「そうよ！付き合い始めの微妙な時期に、変な茶々入れられたんじゃ困るわよ！大体玲人の大推薦なんだから協力しても邪魔はしないでよね！」

せりかが勇ましくそう言うのを聞いてとても嬉しかったが、玲人と肩を並べられる日はなかなか来ないだろうと橘は思った。

ヤキモチは焼かないと思っていたが、やっぱり二人の仲の良さに少し妬けてしまった。

63

修学旅行最終日は文字通り帰るだけだった。折角来たんだから旭山動物園とかにも行きたかったのに！とせりかは思うが自分達の移動した所を地図で見ると、それはかなり難しいのだと分かる。

「今日で沙耶ちゃんとお別れかと思うと寂しいよ！」

「せりかちゃん…学校で会えると思うよ？しかも毎日…」

「そうなんだけど、結構色々と沙耶ちゃんには相談に乗って貰ってたから、姉妹が居ない私には寂しいのよ」

「ああ、一人っ子だもんね。私は妹が居るけど、恥しくて身内に相談なんて絶対出来ないわよ？ちょっとした事でも根ほり葉ほり聞かれるから面倒だし」

「そうなんだ？居ないと結構夢見ちゃうだけどね？なんでも相談してるのかなぁとか…」

「無い無い！少なくともうちは其処までは話さないわね～」

「橘君のところはお兄さんがいて、結構仲が良さそうだったわよ？」

「あれくらい可愛い弟ならねぇ～」

「まあね！なんだかとても可愛がられているのは分かったけど、長男タイプじゃない？橘君って！だからちょっと意外だったのよ」

魔王様は確かに末っ子タイプには見えないが、話を聞いているとお家では、もしかして魔王降臨は、無く御家族は知らないのでは？と沙耶は思うがせりかにそれを聞くと色々とマズイので何と答えようか迷う。

「そうねぇー。でも外と家では違うのかもしれないわね」

「そんな感じでも無かったけど、みんな多かれ少なかれはあっても外の顔はあるかもね！」

朝食後、チェックアウトをして新千歳空港に向かう。

昨日は橘達の部屋にクラスの男子が殆んど集まってしまい、とても寝れなかったらしく王子様は眠い様だったので、窓側の席を譲って少し寝る様に言うと頷いたが、神経質な性質（たち）らしく乗り物では滅多に眠れないらしい。

「昨日は質問攻めで参ったよ！とうとう椎名さんが落ちたのかって言うから、それは如何言っていいのか悩むとこだから『どうなんだろうね？』って言ったら首絞められるし、玲人にも肯定しておいてくれって頼まれちゃうしで、もう大騒ぎ！『俺達のせりりんに手を出すなよ』とかっていってくる椎名さんのファンの奴もいて、付き合ってるのに手を出すなって言われてもって感じだし、俺たちのってそれは絶対に違うだろう！だし、もう滅茶苦茶だったよ」

「……そうなんだ？大変だったね！私の所為で迷惑掛けちゃってごめんね。小樽を二人で回ったらそういう風になるのが判っていたなら、班行動で良かったのに！」

少し眠い所為か、言わなくても良い事をせりかに言ってしまったかもしれない。

「ごめん。要らない事まで言ったかもしれない」

「ううん。橘くんがそういう事言うのって珍しいから面白いよ。サッカー部が大変なのも玲人が大変って言っていたけど、橘くんだって聞いた話では大変そうだったのに、愚痴っぽい事全然言わないで飄々としているんだもん。後、テスト前でも眠そうにしないのに今日はそれも珍しいから、大変だったのに悪いけどもうおかしくて！」

「…椎名さんはそういう人だったよね。そう言えば…」

「人の不幸を笑っている訳じゃ無くて、珍しい橘君が面白いって言っただけだから誤解しないでね？」

「うん。たまに顔を出すSっ気振りを見ると、なんだか安心するよ」

眠さがピークで言葉にオブラードを掛けなくなって来ている事にせりかも気が付くと、どうせ眠れないんなら、もう少し話させたく成ってしまう。

「そう？自分では全くそんなつもりは無いけど、そう言えば家では橘くんって末っ子っぽいの？」

「うーん。割とそうかもね？下が居ないから、椎名さんが玲人に甘えるの見ると少し羨ましいかも…」

「あっちも甘えてるから、お互い様だけど、玲人は橘君に懐いてて

甘えて来るじゃ無い？」

「玲人でも可愛いと思わない事も無いけど、今迄、年下の子とかと付き合った事が無いから、願望的には女の子に甘えられてみたいかな…」

なんだかこのまま喋らせると本当にヤバイ事まで喋ってしまいそうだとせりかは思うが、玲人の事でも甘えれば可愛いと思っているとは驚きだった。ちなみにせりかは誕生日が早いので、橘よりも同級生とはいえ、年下では無い。橘は仲良くなった時には誕生日が来ていたので、何時なんだろうか？と思うが、今聞いてしまうと完全に覚醒してしまって面白く無いので、後で、玲人に聞けばいいだろう。

この後も聞くと、いつもだったらかわされそうな質問も簡単にするすると答えてくれてかなり面白かった。

新千歳で一時間弱くらい飛行機を待つ間、最後は自分の記念に残る自分用のお土産をゲットして、飛行機で羽田に向けて飛び立った。飛行機でも橘が隣だったが、バスの時の様な朦朧さは無くなっていたので、かなりがっかりしたが、先程聞いた甘えられたい願望等、面白かった事を思い出してにやりとせりかが笑うと「なんだか不気味なんだけど？」といつもの橘に戻っていて油断出来ないなと思った。

羽田に着いたのはお昼ぐらいで、皆、直接帰るか、お昼御飯を食べるか迷ったけれど、せりかと玲人は家の方面に向かうバスが直ぐにでるのがあったので、二人で抜けて、皆に手を振った。

荷物は玲人が持ってくれるので、悪いのでお土産の袋をせりかが持

ってバスに乗った。空いていたので荷物も預けずに近くの座席に置かせて貰う。目的地までノンストップだから良いよね？と言うと玲人もそうだなと言った。

「ただいま～！疲れたよ～！」

「おかえり！楽しかった？北海道は」

「楽しかったよ？これお土産のお菓子―」

「あら、これって有名なバタークッキーサンドじゃ無いの？お母さんも大好きなのよ！お茶入れてくるわ」

「お昼食べて無いから何でもいいからご飯にして」

「チャーハンでいいわよね？ちょっと待ってて！」

昼食後やはり疲れていたのか昼寝してしまって起きたらもう夕方だった。

「明日は送ってきてくれた蟹でお隣とうちで食事会するからね！」

えー！！玲人―！防ぐ前にもう決定してたよ。私が冗談で囁いた事が本当になってしまった。

翌日の夕方から始まった、かにすきパーティ（暑いのに！）は、写真をみせたり、旅の話を聞かれたりと、いつもよりは、宴会の要素は低かったが、お酒がすすんでくると今回は、両家で三世帯住宅に将来はしようか？という話になった時には、さすがに玲人と青くなった。

「せり、彼氏いるから、それは無理だよ」

玲人が言ったのも無理からぬ事ではあった。

「「「「えー！！」」」」

皆が驚いてせりかの方を見た。

「一応彼が出来たので、小母さんやお母さんの期待を裏切って悪いけど、三世帯住宅計画は無理だから」

「えー！せりかに恋人が出来たなんてお母さん聞いてないわ！」

「修学旅行中に出来たから…」

「如何言う人なの？」

「前に、シンデレラの王子様だった玲人の友達」

「「えー！あのイケメン？！」」

「まあ、綺麗な人だよね」

「今度連れて来て～！お願い」

「いや、小母さん、付き合い始めたばかりだから無理だから…」

「玲人の友達なんでしょう？玲人が連れて来なさいよ！」

「えー！連れてくるの？本当に？！」

「今度はうちでバーベキューにするから、玲人が呼んで来てね？」

「忍には一応声を掛けて見るけど、判らないから！」

「せりちゃんの彼氏なんだったら断わらないわよ。ね？」

「それは、判らないですけど、一応聞いてみます……」

こうして、玲人の家で行われるバーベキューにせりかの彼氏が招待される事になった。

64

「橘くん嫌なら本当に来ないで良いんだよ？」

「大丈夫だよ。椎名さんだって家に来てくれた事があったでしょう？娘の彼氏を親が見て置きたいっていうのは割と当たり前だよ」

「そればっかりじゃ無くて、橘くんが格好良いから見たいっていう邪な小母さま達の陰謀なのよ？」

「そうなんだ？それはそっちの方が随分気楽かもね！厳しい審査の目かと思ったよ」

「それは、橘君に限っては審査の心配なんて皆無でしょう？私なんて前にお家にお邪魔した時には何も考えて無かったからいいけど、今度お会いする機会があったら緊張すると思うわ！」

「うちは、御招待の話をしたら、『頑張るのよ』って母が言うんだけど兄貴は結構心配するんだよ。彼女の親に嫌われると辛いからって！」

「一樹さんに限って相手の親に嫌われたりしないでしょう？」

「多分有ったんじゃないの？俺もくわしく聞いちゃうと今回が怖くなりそうなんで、やめて置いたんだけどね？」

親の前で絶対に彼女といちゃつくな！と一樹は言っていたから、嫌

われた原因は言わなくても判った。一樹がそんなドジをするとは思えないから、彼女があまり空気を読まないタイプだったのだろうと思った。

「忍、悪いなぁ！なんかうちの母親、異様に忍の事近くで見たがってさぁ！」

「そういえば玲人の家からの招待だったね？椎名さんの御両親に会う方が実は気になっちゃって、玲人のお母さんなんて全然余裕だから気にしないでいいよ。パンダじゃないけど見たい位ならいつでも玲人の家に行ったのに！」

暗にせりかと付き合う前に軽く遊びに呼べよ！と言う言葉を含ませると玲人は「悪いな！」と言って忍を見た。ジーと見るので「何？」と少したじろぐと「いや、おばちゃん達の悲鳴が聞こえて来た」と訳の分からない事を言ったが、忍は「今度はうちに椎名さんと一緒に来てよ」というのでそれはせりだけの方が良いと思うけどと言うと、うちも玲人で母親が喜ぶかなぁって思うし、椎名さんも一人だと緊張するからと言うと玲人も頷いた。

「何か楽しそうな相談してるのね？」

「なんだよ！マーヤか……」

「バーベキューなんて楽しそう！私もお邪魔したいなぁ？」

「真綾！！何図々しい事言ってるんだよ？！高坂、無視しといてくれて良いから！」

「真綾さん達が、そう言うなら、本庄君と二人で来たら？橘君だけだと気まずいと思うし！」

「せりかさん、いいの？」

「真綾！！」

「そんなに怒らなくても玲人の家でやるって言っても二軒合同みたいなものだし、友達が増えるけどって小母さんに言って置くから大丈夫よ？」

「俺は行かないからな？」

「じゃあ、私だけでもお邪魔しちゃおうかなぁ？でも言い出して置いてなんだけど、本当に迷惑に成らないかしら？」

「全然！真綾さんが来てくれるなら、気の重い会が少し軽くなるわ」

「じゃあ、本当にお邪魔する事にしちゃうわね？もちろん高坂君のお母様の許可を頂ければだけど」

「玲人の小母さんは気さくな人だから大丈夫よ」

「マーヤ、一体何のつもりだ？！」

「私が行くと迷惑？」

「せりと忍に何も言わないなら良いけど、両親が揃っている所で気まずく成る様な事をしたら、流石に俺も許さないからな?!」

「こわーい!せりかさんとバーベキューしたいだけだから、お邪魔するのを許して欲しいんだけど?」

お邪魔されるのは構わないが、本当に邪魔する気は無いんだろうな?と疑わしげに見たが、真綾は失礼な事はしないわと言ったが、それは真綾基準なので何が起こるのかは分からない。なにしろ本庄に取り扱いを注意されている。

「真綾、いい加減、変な真似はやめろよ!椎名さん達は結構うまく行っているのに波風たたす気なのか?椎名さんが泣くような事になったら、俺も高坂も許さないぞ、真綾の事」

「私にとってもせりかさんは大事な友達なんだから、せりかさんの事を考えて行動するし、親御さんが居らっしゃるのに変な事なんて出来ないわよ」

「何の目的も無く、あんなに強引に割り込んだ訳じゃないだろう?」

「綾人も心配なら一緒に付いて来たら?せりかさんだって良いって言っていたじゃ無い?」

自分が行くのは、それだけで橘とせりかの負担になってしまうだろうと思う。少なくとも橘にとっては、今回は本庄に来て欲しくはな

いだろう。

「いや、俺まで行くのは流石に迷惑掛け過ぎだから、高坂には非礼を謝っておくけど、でも、もし迷惑を掛けたら二度と椎名さんに真綾のことを、俺と高坂が近付けさせないと思う…」

玲人の家に行くおみやげを真綾と合同で持っていく事にした。駅で待ち合わせた橘と真綾は、ケーキと飲み物を購入して玲人の家まで歩いた。

「大丈夫？重く無い？」

「これくらいは平気よ。ケーキも飲み物も殆んど持って貰ってこれ以上取られたら手ぶらになっちゃうわ！」

「それならいいけど、更科さんは重い物を持ち慣れなさそうだから…」

「そんな事ないわよ？」

「いや、あるでしょう？本庄が女の子に重い荷物なんて持たせないよ」

まあ、事実であったので黙る。それにしてもペットボトル一本で心配されてもこれ以上減らせないだろうと思う。

玲人の家に着いて二人で挨拶をするとせりかと玲人の両方の親から歓待された。

「来て頂いて有難う！忍くんは無理にリクエストしちゃって申し訳ないけど、ゆっくりしていってね？真綾ちゃんも、玲人がお世話になっています」

「いいえ、高坂君にはこちらこそお世話になってるんです。あとせりかさんにも！」

「せりちゃんの仲良しさんだったわね？じゃあ、今日は楽しんで行ってね！」

両親達はせりかの彼氏だという少年の美貌に圧倒されながらも、礼義正しく挨拶する橘と真綾に好感を抱いた。

韓流スターもかくやと言う容貌の忍に母親達は溜息を洩らすが、夫と子供達の手前、騒ぐのは躊躇われたので、二人で目を見合わせた。

「せりちゃんの彼氏って本当に格好いいわよね？」

「本当にせりかで良いのかしら？」

「せりちゃんは美人さんだもの。大丈夫よ」

大人達への挨拶を済ませ、四人でお父さん達が焼いてくれたお肉を食べるとジューシーな美味しいお肉にせりかと玲人は今日は親達が特別気張ったなぁと思う。

「美味しいね！」

橘がせりかに、にっこりと微笑むと両親達から安堵の溜息が洩れたのが分かったので、親達の方も緊張しているのだと分かって少しおかしい。

「そう、良かった！張り切って沢山用意し過ぎちゃったみたいだから、良かったら沢山食べて行ってね？」

「有難う。椎名さんと玲人の家って本当に仲が良いんだね？！」

「うん。もう半分親戚みたいなものよ！三世帯住宅建てようか？っていう怖ろしい話に成り掛かったんで玲人が橘君の事を話しちゃったのよ」

「成程ね！玲人と将来は結婚予定だったのに、俺の存在は御両親達には面白くないんじゃ無いの？」

「いいえ。両親達もそうなったらいいなぁとは思ったかも知れないけど、望んでないのに自分達のエゴを娘や息子に押し付けようと迄は思ってはいないのよ。だけど、私達も面倒なんで否定しないで来ちゃったから、誤解してたのよ。よく一緒に出掛けるから恋人同士だと思ったみたい。それを踏まえての妄想だから、彼氏が出来たって言ったら、あっさりとその件からは解放されたんだけど『どういう人なの？』ってなったから分かり易くシンデレラの時の王子様で玲人の友達って言ったら母親達が近くで見たいから玲人に連れて来いって酔いも手伝って盛り上がっちゃったのよ」

「ああ、あの言っていたかにすきパーティーがあったんだね？」

「そうそう、旅行の翌日にうちで開催だったんだけど、あまりに疲れてて玲人と魂が飛んじゃってたの！その悪夢のかにパーティの所為で今日、橘君に迷惑掛けちゃったけど、両親達の誤解も今回のお陰でとけたから本当に有り難いわ」

「そうなんだ？役に立ったんなら良かったよ」

「お土産までごめんね？今度特大のケーキを持って玲人とお礼に行くわね！」

「それは、大家族じゃないから困るかな？母親以外は男ばかりだしね？」

橘と二人で話し込むと親達の視線が真綾をからかって遊ぶ玲人達に向けられているのが見えた。

「真綾ちゃんは誰か良い人いるのかしら？うちの玲人とは、お友達なだけ？せりかちゃん達みたいにお付き合いはしていないの？」

せりか達よりもカップルに見える真綾達に小母さんが目を輝かせるのも仕方無いが、真綾には本庄という婚約者がいる。

「お友達なだけですけど、お付き合いをしている人はいませんから、高坂君が良ければ…」

そう言って頬を手で可愛らしく押さえる真綾に三人は目を丸くした。

玲人の母は、やはりせりかにだけ彼氏が出来てしまい息子が不憫だったのだろう。真綾に「うちの息子をよろしくね！」と手を握りしめた。

真綾は照れながも「高坂君の気持ちも有りますから」と暗に自分の方は玲人に好意を持っているというと玲人の母親は上機嫌で、「とにかくよろしくね♪私も大賛成だから」といって可愛い真綾の頭を撫でた。

こちらで見ていた三人は唖然とするが、せりかはちょっとやり過ぎな真綾のサービストークだろうと思うが、玲人は苦虫を噛み潰したような顔をして、橘は静かに様子を見守った。

「真綾さん、サービスが度を超えてて本庄君に怒られちゃうよ?元々このバーベキューもあまり乗り気じゃ無かったのに」

「別にサービスで言った訳じゃなくて本気よ?綾人は怒らないわ!」

「それは、彼は真綾さんが他の人と付き合っても怒らない位、心が広いのかもしれないけど良い気はしないと思うよ?」

「そうじゃ無くて、綾人は私の事なんて何とも思わないわ」

「そんな事ないわ!真綾さんの誤解よ!」

「せりかさんは誤解してるけど、綾人には私は妹止まりなのよ。だから高坂君と付き合うのも割と本気よ?相手次第だけど」

「それじゃあ、せんせいが可哀想だわ!真綾さんの事とても大事に思っているのは私にも判るのに……」

「せりかさんには、解らない所もあるのよ」

「……でも！」

「マーヤ、お前が俺と付き合いたいなら、直接俺に言えよ。本庄に許可貰ってやるよ？」

「玲人！ちょっと、ふざけないでよ？！」

「だから、本庄に聞いてみるって言ってるだろう？」

「……許可が出たら付き合うっていうの？」

「まあ、あいつがマーヤの保護者みたいなものだからな？せりも許可が出てから文句言えよ？今、ここでぐだぐだ言っても始まらねーよ！」

「分かったわ……」

本庄は許可してしまうだろうと思うとせりかの胸は痛んだ。最終的に真綾が自分を選んでくれればいいとは言っていたけれど、今時点で付き合っている彼女に他の男と付き合いたいと言われるのは辛いだろうと思う。

「橘君はどう思う？」

「更科さんの事は、更科さんに決める権利があるよ。付き合っているからってずっと絶対に別れる選択権が無いのはおかしいからね。もちろん椎名さんと俺にも言える事だけどね」

橘の言う事は最もだと思う。結婚したって離婚する夫婦もいるのに、付き合いや婚約を真綾が破棄する権利が無い訳ではないだろうと思う。しかし、本庄に不実すぎるのではないかと思う。あんなにせりかの羨望する位置を独占していたのに、急にその座を捨てるのはせりかからすると真綾の気儘さが身勝手に見えた。

「更科さんが本庄と別れたら、椎名さんは俺と別れる？」

「まさか？！本気で言っているの？」

「本気だし、例えそうなっても親友だから、俺に悪いとかは思わないで考えてくれていいよ。椎名さんにも玲人の大推薦の彼氏じゃなくて、自分で自分の恋人を選ぶ権利はいつでもあるんだよ？」

「橘君は今は私が無理に引き止めたから付き合ってくれているの？」

「それは、流石に心外だな？！俺はそんなに奇特じゃないよ。椎名さんと付き合いたいっていう俺の意思で付き合ってるよ。もちろん」

「じゃあ、どうして何時でも別れても良いなんて言うの？」

「椎名さんの方から言い辛いかと思っているからだよ。札幌の公園で俺の事を好きだと言ってくれて嬉しかったけど、最初はそういうので俺達の付き合いは始まって無いから難しいよね？」

「始まりはそうでも今は違うと少なくとも私は思ってるわ」

彼女が橘に抱き付いて来ようとしたので、慌てて止めると流石に親達の存在を思い出した様でせりかも「ごめんなさい」と頬を染めた。

しかし、真綾と本庄が一時的にでも別れるかもしれないという事実は、せりかに大きな混乱を与えた様ではあった。橘は人知れず溜息をついた。彼女が自分に縋ってくるのは、混乱している時だけなのでそれが恋愛感情から出た行動とも思えないが、彼女の性格からすれば全く好意の無い人間にそういう言動をとらないであろう事も判っているので心中は微妙なところだった。

65

バーベキューはお肉を気張った為か、一緒に刺してある野菜にも美味しい肉汁が沁み込んでとても美味しかった。母親達もこれからはお肉は無理しても良い物が良いわね！とこっそりと言い合っていた。

せりかの父親はかなり飲んでしまった様で顔が赤い。娘が彼氏を連れて来たんだから、酔い潰れるなんて恥しい事はしないで欲しいなぁ！とせりかが言うと、玲人の父親が「娘の父親の心境は複雑なんだよ」と庇い、玲人と二人でせりかの家の和室まで父を運んで行ってくれた。

「お父さんも感じのいい彼氏で嬉しそうにしていたけど、それでもやっぱり寂しいのよ」と母も言い橘に気を悪くしないでね？と笑いかけると橘も頷いた。

せりかと玲人は手慣れているので、手伝うと言った橘と真綾を断り、ふたりで手早く片づけた。頂いたケーキは直ぐに食べられそうに無いので、玲人の部屋かせりかの部屋にでもいって貰えば？と言う母の提案により、せりかの部屋に行く事にしたが、玲人が真綾の首根っこを掴まえて「お前はこっちに来い」と自分の部屋に連れて行ってしまった。

「とりあえずお部屋で少しゲームでもしようか？」

「椎名さんの部屋はどんな感じなのか楽しみだな」

「普通だよ？」

「うん。でも興味があるかな？玲人のところも折角だから後で行こうかな」

「そうだね。でも真綾さんと話しを付けようとしているのかも知れないから、話しの邪魔になると悪いから、メールとかで様子聞こうかな？」

「玲人は多分俺達の方に気をきかせているんだと思うけど……」

「えっ？！そうだったの？それは、それで気恥かしいね！」

急に抱き付いてこようとしたりする大胆さはあるのに、部屋にふたりきりになるのは恥しいというのは、彼女独特の矛盾だが、こちらが通常で、大胆な時は混乱していて他に気が回らないから恥しくならないのだろうと思う。

部屋に通されると麦茶を持った彼女も一緒に入ってくる。カーテンやカーペットはすべて濃淡こそあれオレンジで小物もオレンジと黄色で纏められている。

「椎名さんってオレンジが好きだったんだねー？！」

「うん。だから、部屋は殆どオレンジ系になっちゃって、そうすると後のものは黄色か、きなりみたいな色しか合わせられないから、自然と他の色は決まってしまうのよね！これ以上カラフルな部屋になったら落ち着かないって玲人にも言われちゃうのよ」

「玲人はよく来るんだよね？」

「殆んど毎日かしらね？少なくとも週５くらいかしら？」

「そうなんだ！この間の修学旅行でも思ったけど、少しは妬けるかな？」

「えー！玲人に？それは無いって橘君も前に言ったじゃない？」

「別にやめて欲しいとかじゃないからあまり気にし過ぎないで欲しいんだけど、気持ちはやっぱり変化するものだからね？」

「そっか～！気を付けた方が良いの？」

「ううん。言ってみただけ。何かして欲しい訳じゃなくて、ただ聞いて貰えれば充分かな？意味が無いみたいだけど言わないと何だかたまりそうだったから…」

「確かにそうよね！そういう事を聞いていれば、少しは気を配る事も出来るから、言っておいてくれた方がいいわ！私もクラスの皆に最終日の夕ご飯の時のこと、橘くんが可哀想だよって散々言われたのに、橘君はそんな事微塵も気にしないって切り捨てたけど、周りの方が正しかったのね！」

「今は逆に椎名さんに妬いて貰いたいけどね。一生無理そうだけどね！」

「甘えられたい願望と一緒ね？とっても似合わないけど、らしく無い所が微笑ましいわ！」

「ああ、あのバスの時にもうろうとして要らない事を沢山言った気がするなぁ？！」

「あれは結構面白かったわね！旅行の醍醐味ってこういう所なのかなって思ったもん」

「それは激しく誤解だよ。あの時は一睡も出来ないのに皆に質問攻めでかなり弱ってたから、旅行の所為じゃなくて精神状態の問題だよ…」

実はあの時は朦朧とする橘を良い事に、結構際どい質問を重ねて、女の子の好きな髪型はショートかロングかと聞いたらアップ髪がいいと言ったので今日のせりかはシュシュでポニーテールにしているが、多分沢山した質問の一つだし、覚えてないだろうなと思う。

「パソコンにデータ移したから写真見る？」

「うん。是非！」

二人でテーブルの上のノートパソコンを見ていると両手に花、バックにクマの写真が出て来た。少し気まずそうにするせりかの戦利品だが、もう怒ってはないよね？と橘を見ると「これは石原さんにあげるの？」と聞かれたので「まあね？」というと少し苦い顔をしたが、敗北宣言の様に「仕方がないよね」という橘には悪いが、全く罪悪感は湧かなかった。

橘くんもいる？と聞くと、「いらない」と拗ねた様子に、これが末っ子っぽい橘君なのかなぁと思う。せりかも下が居ないので、やはり甘えられると正直玲人でも可愛いが、橘が甘えられたいと言っても、どう甘えていいのか分からないし、嫉妬は、せりかの中では出来たらしたく無い感情だった。

「旅行楽しかったね」

「そうね。その前の険悪さが嘘の様になる位に楽しかったわね？」

「あれは、椎名さんが俺に怒っていただけで、別に険悪には成って無いよ？」

「あの時は、橘くんが私が一番好きだったポリシーを捨てたのかと思ったのよ！」

「ポリシー？！」

「どんなに黒い事をしても、人道的にどうなの？っていう事が有っても周りに害が行かないで微量でも多少益になる様にうまく持って行っていたのに、それが裏切られたと思って怒っていたのよ？」

「そんなに強く意識して害を出さないと決めている訳ではないよ？唯、損害被る人がいると厄介な事が出て来るからそうしているだけで、椎名さんが俺を美化し過ぎだよ！」

「それは、美化では無くてそういう効率的な所が好きだったのに、私にした事はひどく非効率に思えたのよ」

「それで珍しくあんなに長く怒りが持続したんだ？」

「なんだか私が怒ってられない人みたいじゃ無い？」

「実際そうだよね。あの時は今迄の付き合いでは、群を抜いて最高記録じゃ無いの？」

「そんな記録要りません！橘君も変なところにフォーカスしないで

！」

「今怒っても長続きしないだろうけど、お母さんの手前、喧嘩は些細でも止めたいね。後、兄貴から、親御さんの前では絶対彼女といちゃつくなって言われてるから、出来たらなるべく距離を近くにしないで貰いたいんだけど？」

「はぁ～！成程ね。一樹さんが彼女の親に嫌われちゃった理由はそれなのね？」

「多分ね？さっきはだから驚いて止めちゃたけど、勿体ない事したから今ならいいよ？」

「はぁー…さっきはごめんなさい！いいよって言われても、じゃあって行ける訳ないでしょう！」

「そうなんだ？遠慮しなくてもいいのに！」

「……私が困るの分かっていて言っているんでしょう？」

「困るのは分かってるけど、甘えられたい願望かな？」

「橘君が甘えたい方に見えるけど…」

「まあ、紙一重かもね？」

「じゃあ、今日来てくれたお礼に甘えられたい願望を叶えてあげるわ。少しかがんで？」

橘はドキドキしながら少しかがむとせりかが頭を撫でた。

「これは、紙一重で違うんじゃ無くて、真逆だよ」

「うそうそ！ごめんなさい…」

と言って橘の首に手を回して抱き締めると「やっぱり紙一重で叶ってないかな…」と耳元で言われたので理由を聞く為に離れようとしたが、離れる前に引きとめられて「なんだか甘やかされてる感じだけど、それも悪くないね」と言ったので、とりあえず合格点は出た様だった。

橘はせりかから離れると、「ありがとう」と綺麗な笑顔を見せた。なんだかこれで有難うって言われるのってどうなの？という気はしないでも無いが、橘が満足したなら良しとしよう！

それから二人で玲人の部屋に行き、格闘ゲームをしている玲人と真綾と合流して一緒に遊んだ。

真綾は家でもやっているらしく、玲人と互角の闘いをしていてせりかと橘を驚かせた。しかし、本庄とやっていただろう事を思えば、せりか同様強いのも当然かと思った。

結果的にトーナメントで一番強かったのは意外にも橘だった。この男はこんなところまで器用なのか？と少し呆れる気持ちになるが、橘曰く年上のお兄さんといつも闘っていれば、今迄も同級生の友達よりは強かったから、仕方ないよ。と言うのを聞いて一人っ子軍団は深く納得した。

その後、小母さんがケーキとお茶を御持たせですが…と持ってきてくれた。高野の白桃のムースのケーキに真綾が選んだのだと分かる

が、甘みを抑えたムースとケーキは見た目に反して男の人向けでもあった。

「悪いな！」と玲人が言うと橘が「いや、とても御馳走になったし、玲人の家に呼ばれたから、緊張度合も半分だし良かったよ！」と言ったので玲人とせりかの心が軽くなった。無理に来て貰った事を二人とも申し訳なく思っていた。

真綾にもお礼をいうと「こちらこそ、無理やり混じってとても御馳走になってしまったから、後日にお礼をしたいんだけど…」というのをケーキだけで充分だから！と玲人とせりかで慌てて止めた。

真綾は一見我儘に見えるが、躾の行き届いたお嬢さんだ。少し過激で気の強いところもあるが、配慮の欠ける人では無い。そう思うと本庄との事も、玲人との事も、今回のバーベキューに参加して来た事も、何か理由があるのかもしれないとせりかは思った。しかし、それがどうであれ、本庄を真綾が振ってしまう事には違いない。そう思うとやはり真綾に考え直して欲しい気持ちと、橘達が言う様に自分がどうこう言える問題では無く、本人達の問題なのだという気持ちがせめぎ合うが、今、何も言える立場にせりかがいない事だけは確かだったので、黙っているより他無かった。

二人は暗く成らない内に帰ると言ったので、玲人と一緒に駅まで送る事なった。橘と真綾は玲人の両親に今日のお礼を言い、せりかの家にも寄ってくれて、せりかの母にもお礼を言ってくれた。

十分程四人で夕暮れを歩くと、まだ旅行が続いている様な楽しい気分になった。真綾も同じだった様で少しはしゃぎながら、行きに橘にペットボトル一本で心配された話やケーキを選んだ経緯などおもしろおかしく話してくれた。真綾セレクトだと思われた白桃ケーキ

は見た目こそ可愛いものの、洋酒が効いた大人向けのものだったが、橘がこれが良いと押したらしい。真綾も見た目も綺麗だし食べやすそうだと賛成したが、『橘君って意外とスイーツ好きなの？』と思ったらしく、そう言うと「今言わないでその時に言ってよ」と橘が言った。どうやら以前、自分の所の来たお客さんに貰って食べた時に男の人向けだと思い、お父さん達の事を考えてそれに決めたらしい。特にそんなに詳しい訳じゃないから！という橘に真綾が「お父さんがターゲットって正しいと思うわ」と感心したように言った。玲人とせりかは頭にハテナが浮かんだが、帰りにお互い相手に聞けば良いと思ってその場では聞かなかった。

二人を見送った帰り道にその話になって、二人とも理解して無かったのに分かった様に頷いた事を責め合う小さな醜い戦いをしたが、結局ケーキは美味しかったからいいんじゃねーの？と玲人のお得意のお気軽な解決法が出たので、せりかもその楽な考え方に習う事にした。

66（前書き）

大分シリアスです。

66

「本庄、マーヤの事だけど…」

「先日は世話を掛けてしまって悪かったけど、高坂は真綾と付き合う気はあるんだろう？」

「あれを放っておいたら、お前だって気が気じゃないだろう？！」

「まあ、そうだね」

「何だか、俺を従兄妹二人で嵌めたんじゃ無いのか？」

「さあ？それは高坂の判断に委ねるよ」

「涼しい顔してるけど、せりが結構お前の事を心配してるぞ！」

「それは彼女とは俺が話すから、心配しなくて大丈夫だから」

「お前が大丈夫って言うなら大丈夫なんだろうけど…マーヤは結局自分が悪者になって、気儘に俺に気持ちが移ってお前と別れるようにせりに見せかけたんだ」

「椎名さんが原因で別れたのを知られたら真綾とも、もう椎名さんの方が親しくしてはくれないだろうし、真綾の我儘は多少彼女に悪印象だとしても、それで彼女が真綾を見捨てたりはしないだろうね。椎名さんは、他者にはまるで聖女の様に許しを与えられる女性だからね。それが自分には向かないのは彼女の美徳でもあり、残念なところでもあるけどね」

「聖女ってせりがか？お前って本当にせりを勘違いしてるのな？」

「でも結局は椎名さんは真綾を許してしまっただろう？」

「許したかどうかは分からないけど、せりのマーヤへの態度は変わらなかったな…」

「それが、真綾の望む事だから真綾に泥を被せて酷い奴だと思われているかもしれないけど、真綾の選択を尊重するつもりだから…」

「それで俺と付き合うのも真綾の好きにしろってか？」

「まあ、ロクでも無い奴を連れて来たら、手を回して相手を退かせるけど、俺の真綾はそんな奴を連れて来ないように充分教えて来たからね？」

「お前も極端だよな？別れた途端に『俺の真綾』ってそんな怖い事言われて付き合う方の身になれよ！」

「婚約者じゃ無くなったからって、どうでも良いわけじゃ無いからね？むしろ今迄は周りが引くから、真綾を大事に思っていても口に出さなかっただけだよ。惚気ている様に聞こえてしまうだろう？」

「今でも充分ドン引きだから止めてくれ！」

「それは、考えておくよ。それで、お嬢さんは、真綾に何て言っていたのか教えて貰える？」

「…マーヤが綾人にとって結局自分は妹止まりだって言ったら、マ

ーヤの誤解でせり自身が見てもお前がマーヤの事を大事に思っているのが分かる位なのにお前が可哀想だって」

「そう。……真綾もキツかっただろうな！真綾自身が椎名さんの大ファンだからね」

少し哀しげな顔を見せたが言葉を続ける。

「少しは真綾の事も椎名さんの中で悪く思われない様にフォロー入れとかないと真綾が可哀想だな。それじゃ」

「せりは俺にも真綾と付き合うつもりなのか？って怒って来たから、その場では気まずく成りたく無かったから、話しは本庄に聞いてみてからしろって宥めたんだけど、怒りが収まらないせりが、忍にどう思うのか振ったら、更科さんにも別れの選択権はあるから仕方が無いって言った後、それはせりと自分にも言える事だからって言ってたから、忍もお前とマーヤの別れに何も思わない訳では無かったんだろうと思う。せりにも何時でも別れを切り出し易い様にしてやってて、お前が旅行の時に当事者じゃ無かったら止めるっていうのが分かる位、悲壮感が漂ってたな……ただ、その割にはお前に言って良いのか分からないけど、付き合い自体はうまく行っているんだ。親に紹介とかも当然だけどうまくいったし、ただ、あんまりにもせりが連れてきた彼氏が格好良いんで、親達が驚いて少し引き気味で心配されてたけどな？せりかでいいのか？って」

「橘はそこが気の毒な所だよな？俺に橘の容姿があったらもっとうまく利用するのに！」

「お前が言うとシャレに成らないからやめてくれ！忍も結構黒い割には、あの容姿を使わないから、そこは本人も良心が有るのか、コ

ンプレックスなのかどっちかだよな？」

「まあ、後者じゃ無いの？他の手段では割と容赦がないよ。高坂みたいに女の子に付けいる隙も与えないから、椎名さんにも被害が行かないだろう？」

「マーヤの事は、前の事を考えたら、俺と付き合っているのは皆には分からない様にした方がいいよな？」

「そうだね。橘と違って高坂はモテるから、真綾に余計な敵が出来て問題起きると、俺も今度こそ汚ない手を使ってしまうからね？前の時には誤解だったし、真綾にもいい勉強になるかと思って黙っていたけど、今回は少しの危害でも加えられたら、その子を学校に居られなくしてあげるから高坂も充分気を付けて？俺にそんな事をさせたく無いでしょう？」

「お前が忍よりもうんとヤバくて怖いっていうのは良く分かったよ。せりもお前に騙されてたんじゃないのか？」

「彼女は、好きになった人達に対してはとても寛大な人だから、俺が同じ事を彼女に言った時も、相手が助かって良かったと思っている様だったけど、俺に対しての悪感情は湧かなかった様だよ」

「せりってすげぇなぁ！今のを聞いて引かないなんてよっぽどお前が好きだったんだな…」

「そこが赦しの聖女だと俺が彼女の事を思う所以（ゆえん）だけどね」

「お前がせりの事を思っているのは、信仰心に近いんじゃ無いのか？崇め過ぎで、幼馴染でよく知ってる俺から思えばすっげえ寒い言

葉に聞こえるけどな？」

「信仰心とは少し違う。表現がそういう響きを持つものに当てはめてしまっているけど、ちゃんと生身の女性として彼女が好きだから、信仰とはそういうものでは無いと思うよ。ただ彼女の懐の深さは感嘆に値するけどね！」

「せりは、可愛いけど少し抜けた所のある普通の女だよ！」

「近過ぎて分からないのかもね？俺も神聖視したり、美化したりして言っている訳じゃ無いよ。実際、最初はイイ子過ぎて痛々しい優等生の委員長だと思っていたくらいだし」

「それもそれで辛辣な評価だな？！実際にせりと接するうちに今の考えに変わった訳だから、俺よりもお前の方が客観的だと言いたいのか？」

「比べれば位だけどね？彼女の好意にずっと、浸って来てしまった俺が客観的である筈は無いから、主観的なのは認めるけど、そういう意味では高坂も同じに彼女の好意の中に俺達よりもずっと長くというよりも最初から当たり前の様に受けて来た恩恵には、気が付かなくて当然だよ」

「俺よりお前の方がせりの事を分かっていると思っているのか？！」

「怒らせるつもりで言った訳じゃ無いから、誤解しないで欲しいけど、例えば真綾の事で置き換えれば、俺が真綾を分かっているつもりでも高坂の方が真綾の本質を分かっている様に思ったから、近過ぎると当たり前過ぎて見えないし、後、また少し怒らせてしまうかもしれないけど、ずっと一緒にいた相手に対して男は成長を心の底

では望んでいないと思うよ。置いていかれそうで嫌だという我儘なエゴだよね？」

「俺はせりの成長を願って忍と付き合わせたんだ！お前とは違う！」

「自分の選んだ、信用のおける人間を自分が彼女と付き合わせた訳だよね？」

「それはお前だってマーヤがどこの誰とも分からない奴と付き合いだしたら嫌だろう？許せるのか？！」

「勿論、許さないよ。『俺の可愛い真綾』だからね？」

「それだったら…」

「其処だよ！そもそも俺達が彼女達の相手を決める事自体、異常な事だし、もしも付き合っていたら少し共依存的な関係になってしまっていたと思うから、椎名さんが高坂を選ばないのはいつも勿体無いと思って来たけど良かったとも思ったよ。高坂には悪いけどね？それでもそれ自体は、幸せの基準は本人達の問題だから否定はしないけど、付き合ってもいない彼女達を俺達の枠に縛りつけるのは問題が有ると思ってるよ。鏡を見ている様なんだよ、高坂とお嬢さんを見ていると」

「お前の真綾に対する感情よりは、マシだと思うけどな？」

「俺より酷かったら、即、別れた方がいいよ！こっちは言い訳する様だけど、血の繋がりがあるから、肉親の情と言い訳出来る面もあるけど、高坂とお嬢さんには、それも無いのに、相手に文句を付けるのは明らかに越権行為だと思わない？…思わないよね？実際にし

たんだから！」

「何が言いたいんだ？！」

「肉親の情として聞いて貰えたら有り難いけど、多分無理だと思うから、百歩譲って聞いて欲しいんだけど、真綾と付き合う以上、お嬢さんの方が大事だと思われたら、ちょっと切ないんだよ。真綾がそれでも良いと思う訳が無いと思うから、高坂にもそれは理解して欲しい。俺が、お嬢さんと付き合ったら、真綾よりも大事に思うと思うから、さっき言っていた事は悪いけど俺の方が問題的にはマシな方だと思ってるよ」

「『俺の真綾』って聞いてて寒いし痛いと思ったから、逆にそれで、客観的に考えろ！って意味を込めて意識的にその言葉を使う訳だろう？俺に考え直さないと真綾と付き合わせないと思っている辺りはお前の真綾への過干渉が直っているとは思えないけどな？」

「急な変化はあまりいい結果に結び付かないから、徐々にで良いよ。椎名さんへの干渉も直ぐに全部手を退いてっていう訳じゃ無いけど、高坂に必要なのは自覚だよ！俺がお嬢さんの事を分かった様な事を言っただけで、怒り出される様だと少しマズイと思って、結構キツイ事を言ったけど、何も高坂とお嬢さんの今迄の歴史やこれからの関係を否定している訳じゃ無くて、少し俺達が今迄も今も、少し考え直した方が良い状態なのを分かって貰えればいいんだ」

「お前の怖いのを聞かされれば嫌でも自覚するよ！それを狙ってやるんだから性質悪だよな！」

「少し荒療治の方が分かり易く効くでしょう？」

「お前のマーヤへの過干渉は直してくれる気は有るんだよな？」

「それは、勿論！真綾から別れを切り出されて俺も自覚したから、高坂にも何処かで気付く機会が来るのを待つべきなんだけど、まだ真綾の事も完全に干渉が切れて無いから悪いね？」

「小舅が洩れなく付いてくるのかよ？マーヤには？！」

「それは、橘だってよく小舅様が仰るからってオドけて高坂の事言うじゃないか？あれは冗談で言ってる訳では無いよ？」

「……忍とは友達だし……」

「橘は高坂を含めての椎名さんの事を受け入れているから、うまく行った稀な例だと思うよ。前にお嬢さんと真綾と話した事が有るんだけど、高坂が洩れなく付いて来たら相当自分に自信があるか、余程気にしない奴じゃ無いとお嬢さんに彼氏が出来ないね！って三人で言ったんだ。その時は真綾と付き合っているつもりだったから、自分が高坂と同じ事をしているのには気が付かなかったけどね？」

「それくらいの時から、俺の事はヤバイと思っていた訳か？」

「その時は、橘と付き合うかどうか相談を受けている時期でもあったから、自分達の関係を思えば、椎名さんも結局は高坂を選ぶと思っていたんだよ。お世辞じゃ無く、橘より高坂のが、全然お薦め物件だよ！少なくとも俺はそう今でも思っているけど、旅行で本格的に自分がマズイのに気がついたら、高坂達も同じかもしれないと思ったんだよ」

「結局、お前のお薦め物件の俺とマーヤを付き合わせても良いのか

？」

「俺は、一度も勧めて無いよ！真綾が選んだ人が俺のお薦めだっただけだよ？」

「成程ね？俺は絶対にお前をせりに勧めたく無いよ。だけど、せりの事を管理する様な真似は今後はしないつもりだから、せりが万が一お前に転んでも生温かく見守ってやるよ！」

「その時は本当にそう願いたいね？」

少しおどける様にそう言った本庄はすっきりとした顔をしていた。
多分本庄は、玲人が越えていない壁を越えているから、自分の事を少しもどかしく見えてしまっているのだろうと玲人は思った。

67

「お嬢さん。今日の帰り時間少し良い？」

本庄から声を掛けてきた。

ここ数日せりかが話したさそうにしていたのが判っていたのだろう。

「ええ。大丈夫よ」

此方から聞きたい事は沢山あったが、教室で聞ける内容じゃ無かったので、こうやって話す機会を与えられた事は正直とても助かった。

以前文化祭の後、親と入った喫茶店に入る。ここは駅から逆方向な上に値段設定が少し高めな為、学校の生徒が来る事は殆ど無い。せりかも何カ月ぶりかで足を踏み入れた。

「何が良い？ケーキセットにしようか？」

ケーキを食べながらのどかに出来る話でも無いと思うのだが、本庄がケーキセットを二つ頼んでしまい、せりかも店員さんに聞かれるままにケーキを選び、飲み物はアイスコーヒーにしてしまった。

本庄もせりかと同じものを注文した。

店員さんが来るまでの暫くの間、せりかが本庄に「大丈夫なの？」と聞くと穏やかな笑みで微笑んだ。

同じセットが二つ来るとここに来た理由を忘れて、前の様に本庄と他愛もない話しをしていたいと思ってしまうのはせりかの我儘かもしれない。橘と付き合うように成ってから、本庄は明らかに距離をあけて来た。今日の様に誘ってくれたのは、せりかが話しを聞きたいと思っている事を察してくれたからだと思う。

「高坂がマーヤと付き合うって言って来たから、俺は構わないって言ったから多分付き合い始めると思うんだけど、お嬢さんに心配掛けちゃってるみたいだからちゃんと説明しないといけないと思って今日はつきあって貰ったんだ」

「本庄君はそれで良いの？一時的とはいえ真綾さんが玲人と付き合ってもいいと思ってるの？前に真綾さんと婚約していてもお付き合いを申し込む前は、そう思っていたのは少し理解出来るけど、今の時点でそれは、少し真綾さんが本庄君に不実ではないかと思ってしまうの」

「真綾は、俺を裏切って高坂と付き合う訳じゃないよ？俺達は結局付き合ってるって言えない程、以前と変わり無くて気持ちもそれ以上には育たなかったんだから、俺に真綾を縛り付けられる理由は何処にも無いんだ」

「それは玲人との事が出て来たから言っているのではないの？」

「いや、本当の事なんだ。真綾には別れましょうって言えないって言われちゃった位、付き合っているかどうかも怪しい付き合いで、そんな中途半端な状態で今迄真綾が耐えて来てくれたのは、おそら

く肉親の情だと思ってるんだ。今は真綾が、ちゃんと自分で高坂を選んだ事は、真綾の為にも俺自身の為にも良かったと思っているんだ」

本庄は真綾との事をあっさりと受け入れた様だが、せりかにはやはり納得がいかない。

「……前に私が告白した時も真綾さんに対しては従兄妹としか思って無かったって事なの？」

「答えから言えばｙｅｓだけど、そう言うとお嬢さんに軽蔑されちゃいそうだね？」

「今言っても仕方の無い事なのかもしれないけど、私には少しも望みが無いのは真綾さんがいるからだと諦めていたけど、結局私じゃ駄目だったって事なのね？真綾さんが居なければ私を選んでくれるんじゃ無いかという嫉妬の気持ちが少なからずあったから、そうじゃ無かった事も自分勝手だとは思うけどショックなのよ…」

「それは、今は言って良い話では無いと思うけど、お嬢さんは充分魅力的な人だと思うよ？橘と付き合っていて、俺にどう思われていたかで自分の価値を下げてしまうのは感心できないな！」

「でもね、せんせいには私が心の中で、どれほど汚ない気持ちでドロドロしていたかを知らないからそうやって言ってくれるけど、そういう気持ちも悩んだのも何もかもが無意味だったんだなぁと思うと余計に虚しくなって来ちゃうし、自分でも自分が嫌になっているのよ。真綾さんにも申し訳ないし…」

「真綾の事を従兄妹だと言ったけど、それは恋人には成り得なかっ

ただけで、俺の中では真綾は俺の生きている意味を感じさせてくれる大事な存在だったんだ。だから恋人よりも重い存在だと思っていたから、真綾の好意を良い事に彼女に鎖を付けてしまったけど、自分で真綾がそれを外してしまったのは仕方の無い事なんだと思っているから、俺が身勝手だっただけだから真綾の事は不実だとかは思わないでやって欲しい」

「恋愛感情じゃなくても、とても強く真綾さんを必要としていたって事には変わりないのでしょう？」

やはり彼女は本庄に対して盲目的には無いが甘過ぎる。他者全般に甘いが、本庄に対してはそれが顕著だと思う。

「お嬢さんは例え愛されていなくても相手の勝手な執着だけで結婚出来るの？」

「それは、出来たら想い想われたいけど、執着される程の強い気持ちを持たれたら、自分の気持ちがその人に向いていれば出来ると思うわ…」

「それは、高坂の執着は受け入れなかったのに、俺がお嬢さんに変な執着心だけで付き合ったとしても受け入れてくれたって事？」

「そうね。多分どんな理由であれ望んで貰えるのなら、本庄君の手を取っていたと思うわ」

「普通は無理じゃ無いかな？真綾も耐えきれなくなったんだよ。例え付き合ったとしても煮詰まって来ちゃうと思うけど？」

「今は、もう橘君と付き合っているから、今言ってしまった事も、

橘君に対して失礼なのかもしれないけど、彼は最初はリハビリか勉強でいいから付き合って欲しいと言って来てくれたのね？今の現状からすれば彼のリハビリに成っているのかは怪しいけど、付き合い始めた時点では私は彼に必要とされているから付き合う事にしたけど、恋愛感情からでは無かったし、彼からもそうでは無かったけど、それでもいいかなって思っていたから、まだそんなに期間が経ってないけど煮詰まったりしていないわ」

「それでも、同じ事を高坂とも出来たかと言えば出来ないでしょう？それと同じ事だよ…お嬢さんは今は橘の事が好きになっているんでしょう？元々無意識ではあってもそう成れる可能性も無いのに相手から望まれるだけで良いと言うのは思い込みだと思うよ。実際に付き合っているとは名ばかりの付き合いを何カ月も続けてくれた真綾は辛抱強い方だと思うよ」

「せんせいと真綾さんと玲人が納得しているなら、私が何かいう権利は何処にも無いんだけど、せんせいと真綾さんは私の思う理想の関係に思っていたから、別れてしまったのがショックなのかもしれないけど、正直別れて欲しいと願ってしまった事もあるから、混乱していて自分がどうしたいのかよく分からないの！私がどうする事も出来ない事は分かっているから、おかしいし迷惑なだけだという自覚はあるから、もうこの件に私が関われるのは、相手から相談された時だけだと思っているの」

「俺を心配してくれたんだから、それは感謝しているし、お嬢さんはずっと、こんな俺を好きでいてくれていたんだから、あっさり別れられたら悩んだのは何だったの？っていう気持ちになるのは仕方が無い事だと思うよ。でも今は橘と付き合っているし、橘を裏切る様でそう思う事自体を否定したくなるから混乱しちゃうんだよ。俺を詰ってくれてかもいいんだよ？悩んだ時間を返せって！」

「ふふっ！それは勝手に想っていた側からしてもあまりにも身勝手過ぎて、笑っちゃうわ！でも、もしかしてそう思っているから、何処に気持ちをぶつけて良いのか分からないのかもしれないわ。真理は実は其処から来ているのかもしれないわね？」

「素直になったね？真綾にもお嬢さんにも、長い事悩ませてしまった事を謝らないとね？本当にごめんね。そう言っても時間は返せないから、二人には、特に真綾には違う所で償いたいけど、もう二人とも早々と彼氏が出来ちゃって幸せなんだもんな～！俺が償いをしたくても今は必要ないと思うから、謝罪しか出来ないけど、気持ちはお嬢さんにも真綾にもそう思っているから」

「私は怒る資格なんて本当にゼロだけど、そう言ってくれるなら一応言ってスッキリしておこうかな？じゃあ……とっても、とっても好きだったのに、別れた彼女の事まで好きじゃ無かったなんて聞いたら割り切れないわ！ほんの少しでも私にも好意があったって思わせてくれても良いじゃない！彼女がいるからごめんって嘘でも如何して振ってくれなかったの？もう少し私にきっぱりちゃんと断ってくれても良かったじゃない！…それから他に何かあったかな？…あっ！そうだ！……好きでも何でも無いのに抱き締めたりしないで！！」

「……ごめん！」

「ううん。聞いてくれてありがとう！お言葉に甘えてみました！言っている事が矛盾だらけで無茶苦茶だけど、そこは目を瞑ってね！」

「ああ。お嬢さんに言われると結構堪えるよ。でも肝にめいじておくよ。さっきの言葉は。でも一つだけ言うと俺はお嬢さんを何とも

思って無かった訳じゃ無いよ。真綾と同じくらい大事に思っていたから」

「そういう事を言われると泣いちゃうでしょう？橘君に男の人の前で泣いちゃ駄目って言われてるのに！」

「もう泣かされてるの？！早過ぎない？」

「すっごく早かったのよ！言い付ける様だけど、付き合って二日目に突然別れようって言われて、私が泣いてしまったのよ。最初の約束を思えばルール違反なんだけど、全然数時間前迄、前兆が無かったからせめて理由だけでも聞かせて欲しいって言っても中々言ってくれないのに、泣いちゃ駄目ってそんな事だけは言うのよ？酷いでしょう？」

「惚気に聞こえるけど、それ自体は酷いね？でも今現在付き合いが続いているんだから分かって貰えたんでしょう？」

「それは、多分そうなんだけど、やっぱり恋愛って難しいって思ったわ！今は私が縋ったから付き合ってくれているけど、力技も否めないから本当は彼がどう思っているのかは分からないのよ」

橘が、別れ話をそんなにも早く持ちだしていた事は、本庄にも正直ショックだったが、彼女がどういう手段で、彼を引きとめたのかも自然と分かってしまい、やはり…とてもショックだった。

本庄もせりかの様に思っている事を言って相手を詰れたらどんなにいいかと思ってしまった。『どうして俺を待っていてくれないで、彼氏なんてさっさと作ってしまったんだ！それに…こんなにも早く彼に口付けを許してしまうなんて…許せない！』と……。

68

もうすぐ期末テストだったので橘の家からの御招待は『勉強会』と名前が変わった。

橘の家には以前行った事があるので、家族構成なども考えてゼリーと水羊羹の詰め合わせをお土産にする事に決めた。

「忍の家って花がすごいなぁ？」

「お母さんの趣味みたいよ？綺麗よね？」

玄関で話しているとインターフォンを鳴らす前に橘の母が姿を見せた。以前の時には橘とどちらが出るかを争っていたので前回は引き分けだったが、今回はお母さんの勝ちの様だ。

橘も気付いて慌てて三階から降りて来た時には、せりかが挨拶をして玲人が自己紹介をしながら、土産を渡している時だった。

「椎名さん玲人、いらっしゃい。早くこっちに来て！」

「忍、そんなに慌てなくても良いじゃ無いの！お母さん、もう少しせりかちゃんと玲人君とお話したいわ？」

「とにかく、玄関先で話さなくてもいいでしょう？それに今日はテストが近いから勉強に来たんだから、あまり邪魔しないで！」

一応居間に連れられながらもお母さんが話し始める。

「玲人くんって本当に素敵ねぇ！うちの子と取り変えたいわ！」

「いいえ、橘君の方が何倍も素敵ですので、間違っても取り変える必要無いですよ？」

「せり、ひでぇ！それは忍の方が、格好良いかもしれないけど、何倍も！って、1．5倍位にしてくれよ！」

「橘君と張り合おうなんて図々しいわ！お母さんはお世辞で言って下さってるんだから本気にしないでよね！」

「お世辞じゃ無いわよ？忍から聞いてはいたけど、それでも驚いたもの！それにしても玲人君とせりかちゃんは仲が良いのね？」

「隣の家で幼馴染なんで、殆んど兄弟みたいなものなんです。忍は何て言ったんですか？」

「恥しいんだけど、『母さんが喜ぶくらい格好良い友達が来るから』って聞かされてたからもう楽しみで！」

「橘君と一樹さんがいれば充分じゃないですか？」

「あら、せりかちゃん、息子は所詮息子なのよ。毎日見てるから飽きるしね！」

あの妖艶な美しさも母親にかかれば、なんという事も無いらしい。せりかの母や玲人の母も橘のことを韓国の俳優よりも格好良いと後から散々騒いでいたのだが、ここで橘の母にそれをバラす気は流石に無かった。

「せりかちゃんがこの前来てくれてから、その後来てくれなかったから、忍とはうまく行かなかったのね！って思っていたから、また会えて小母さんうれしいわ！」

「母さん！余計な事は言わないで！直ぐ部屋にいくよ？」

「大丈夫よ！橘くん。今日はお父さんと一樹さんはお出掛けなんですか？」

「明日だったら二人ともいたから、忍の彼女が来るなら見たいってうちの人も頑張ったんだけど、あっさりと忍に却下されて泣く泣く出掛けて行ったのよ。一樹はまた会えるだろうって言っていて宜しくって言ってたわ！」

「兄貴がいるとシンデレラちゃんってしつこいし、父さんなんて、椎名さんが緊張しちゃうよ？女の子の方の親御さんは心配されるだろうから、御挨拶も当然だけど、こっちはまだ付き合い始めなのに紹介されても彼女が困るよ！」

「橘君のお父さんなら私も見て見たかったけど…」

「俺も！見たかった！」

玲人と二人で言うと、橘の母は少しだけ、忍に『大丈夫なの？』という視線を投げてきたが、玲人とせりかが仲が自分よりも良さげで、玲人に取られないのか？と心配されているのだと分かり、最もな心配だと思って、母にも判る様に真綾の話題を玲人に投げた。

「更科さんの所には玲人はまだ行って無いの？」

「ああ、マーヤの所はあの小舅が認めていれば、親も安心らしいから、機会があればってマーヤが言っていたから、直ぐには行かないと思う」

「本庄が良いって言えば、確かに安心するかもね？」

「あらっ！玲人君もやっぱり彼女がいるのね？」

「前に遊びに来た本庄の従兄妹なんだよ！」

「そうなのー！小舅って本庄君のことなの？」

「あっ、はい。本庄は、かなりその従兄妹を可愛がっているんで、完全に小舅なんです！」

「それは玲人君も大変ね？本庄君が相手じゃ厳しそうよねぇ。大分大人びた感じの子だったものね？彼女も彼と似ているのかしら？」

「いえ、顔は少し似てるかもしれないですけど、マーヤは…彼女は何と言うか…割と我儘で子供っぽい方ですね」

「あら、せりかちゃんとはまた全然違うタイプなのね？」

「いえ、同じクラスで私も友達ですけど、可愛らしい良い子です！」

「忍は？どう思っているの？」

「割と気は強めだけど、玲人とは合うんじゃ無いの？二人して子供っぽいトコがあるし？」

「橘君、そこは毒吐く所じゃ無いんじゃないの?!例えそう思っても、もう少し無難に言っておこうよ?」

「…そうだね。……玲人と並んでもぴったりな可愛い子かな?」

「嘘くさい!」

「玲人も折角橘君が改心して言い直したんだから、こっちを採用しなさいよ!」

「ごめんなさいね?私が忍に余計な事を聞いたから!本当に口が悪くて誰に似たんだかって言ってるのよ?」

「兄貴じゃないの?父さんは温和だし、母さんはお喋りなだけだし?」

「ね?口が減らないでしょう?」

「忍って家では猫被ってるのかと、ずっと思って来たけど、違うんだな?」

せりかも実はそう思っていた。可愛い息子、可愛い弟を家族の前で演じているものとばかり思っていた。

「家で猫被っていたら神経が持たないよ。そうじゃ無くても学校ではだいぶ被ってるのに!」

「そうだよね。何と無く私も橘君はおうちでは良い子なんじゃないかと思っていたけど、それは流石に持たないよね?色々な意味で…」

「二人とも、俺の事をどんな奴だと思っていた訳？家族に猫被って暮らしてたらちょっと怖い奴だろう？！」

「「……」」

そういう少し怖い人だと思ってました…なんてお母さんの前では言えない！

「ハハハッ！忍が彼女の前でも猫被ってるんだろうって思ってたから安心したわよ。良かったー！！」

「母さん……」

「だって三者面談とかに行って別人みたいな息子の話を聞かされるこっちの身にもなってよ！いつもすっごく誉められると居た堪れなかったんだから！」

「ふふっ！お母さん、それは相当キツそうですけど、学校での彼は完璧なんで誉められておいて何の問題も無いですよ？別人格って程は違いませんから！」

「そうなの？お友達とかには普通そうだったけら、まさか聞けないし、どんな感じなのか、実は心配してたのよ！」

「うーん、そうですね…見た目が目が覚める様な美人さんな上、学年首席で、強豪サッカー部で一年生からレギュラーだし、面倒見も良くて頼りになる委員長って感じですよ？」

「……聞いてたら、痒くなって来ちゃったわ！……せりかちゃん達には、どちらかと言うと、家での方に近いのよね？」

「おうちでの橘君がはっきり分かりませんから、そこは断言出来ませんけど、私と玲人とかには素だと思います。それに今言ったのも事実なだけで、決して嘘でも無いんです」

「せりかちゃんは、素の忍で良いのよね？！」

「はい！素の方がお付き合いし易いんです。それまではこう言っては何ですけど、欠点が見当たらないんで逆に怖かったんです！出来過ぎで……」

「…せりかちゃん！有難う！本当にホッとしたわ…」

そう言ってせりかの手を取って嬉しそうにする母に忍は、そんなに変な心配をされていたのか？と、とても驚いたが妙な誤解も解けた様なので良かったのかも知れないと思った。

流石に試験もあるから勉強しようと部屋に上がって行く事になった。最後尾にいるせりかにお母さんが手を振ってニッコリとしたので、せりかは軽く頭を下げた。

「忍の部屋ってなんか俺の部屋にあるものと、感じが似てるな？」

「普通ってこんなものじゃ無いの？」

「怒るなよ！せりだって俺と同じく思ってたんだから、そう思わせる所がビシバシあったんだよ！」

「なんの事？私は何も思ってないもんねー！」

「せり？とぼけて自分だけ助かろうとしてんなよ？！」

「はいはい、二人でじゃれないで！親だって、玲人と椎名さんの事、少し心配そうに見てたんだから！」

「じゃあ、二人とも無罪放免にしてくれる？」

潤んだ目でせりかが橘を見ると玲人と橘は溜息を吐くが、彼氏が相手なので、失言と共に無罪放免にする事にした。

勉強会には、二人はお互いの誕生日プレゼントの参考書と教科書とノートを持参したので結構大荷物だったが、参考書の話を橘にすると同じものを橘も持っていたので、皆でおかしくなって笑ってしまった。結構種類があるのにやっぱり被るあたりは、気が合うなぁと思う。

「今回は結構勉強してるから」という橘に結局かなり教えて貰ってしまって、玲人もせりかも範囲の広い期末テストが何とかなりそうな位、集中して頑張ってしまったら、結構な時間が経ってしまっていた。

橘の母が、夕食を用意してくれていたので、誘われるままに良く煮込んであるトロトロのロールキャベツを御馳走になった。ローリエの葉の香りがしたので、それを言って「美味しいです！」というと庭にある月桂樹の葉を洗って乾燥させたものらしい！他にも筑前煮やら野菜が多く並ぶ所を見ると、せりかの玲人病を聞いているのかな？とせりかは思った。

すっかり御馳走になった後持ってきたゼリーまで勧められたので、玲人と丁重にお断りをして、二人でお母さんと橘にお礼を言って、

お家を後にした。

「忍のお母さんって俺らの親と同じ位だよな？」

「すっごく若いけど、三つ上のお兄さんがいるんだから、同じか下手したら上なんじゃないのかな？」

「美人のお姉さん…は少し言い過ぎだけど、お母さんの年の離れた妹です。ってくらいな感じだったよなぁ？」

「そうなんだけど、中身が気の良い小母ちゃんなんでやっぱりお母さんなんだなって思っちゃった！」

「忍が学校で、すげえ誉められるのを心配してたけど、聞けなかった！って…マジで受けたよなぁ？忍の親にしか悩めない悩みだな！」

「家で普通だったんで、そっちの方が安心したわ！玲人じゃないけどやっぱりお家では私達の前みたいに黒い雰囲気は出して無いと思っていたの！でも何で私達そう思っちゃったのかなぁ？」

「おうちですごく可愛がられてるっぽいってせりが言ったからだよ！やっぱり親だからどんなんでも可愛いと思うんだな？」

「それは、大分失礼じゃ無い？橘くんは……なんていうか……親じゃなくても充分可愛いわよ？」

「それは御馳走様！せりの口からそういう惚気が聞けるなんて思わなかったよ！」

「からかわないでよ！そう言う意味じゃ無いし…」

「うまく行ってるんだな！良かったよ！」

「うん。有難う。玲人のお蔭だね」

「いや、無茶振りしたのは、今は本当に申し訳ないとせりにも忍にも思っているから、うまく行っていると罪悪感が薄れて、正直マジで助かるよ！」

「玲人に言われた事ばかりで付き合うのを決めた訳じゃないし、実際お付き合いを始めたら、やっぱり私が大分駄目だったのも分かり掛けて来たし、橘君も彼氏だからって言って、はっきり教えてくれるから、玲人にも橘くんにも感謝しているのよ？」

「それなら良いけど……それで、俺より忍の方が何倍も格好良いって思ってるのかよ？！せりは？」

「美久に言ったら、私は玲人を見慣れているから互角だろうって言ってたわ！本庄君は玲人のほうが良いっていうから客観的には分からないけど、少なくとも私はそう思ったわね！ごめんね？見飽きちゃったのかしら？」

「お母さんかよ？！せりは！」

「お母さんと同じ位は見ているのは確かよね？」

「……かなりムカつくけど、そのくらい彼氏びいきの方がいいかもな？」

「言ったのは入学当時だから、そんなに平和的解決されても詐欺み

たいだから、懺悔しておくわね？玲人も充分格好良い自慢の幼馴染よ！って今日初めてそう思った事も一緒に懺悔しておくわね？」

「……せり？俺、明日の朝ご飯、せりの作ったフレンチトーストにメープルシロップがたっぷり掛かったのが食べたいな？」

「う、うん。八時くらいに家で待ってるわ…」

「ゆっくり寝るから九時にして！」

「…了解」

甘えてくる玲人をやっぱり可愛いと思ってしまうのは、玲人にはやっぱり内緒にしておいた方が良いなとせりかは思った。

69

期末テストは無事終わり、当然の様に橘が首位に返り咲いた。

「やったー！」せりかは三位だったが中間より期末の方が少し落ちてしまうせりかには上々の出来だった。

「橘君おめでとう！」

橘と本庄が話している所にせりかが駆け込むと、二人は笑い出してしまった。

「何でふたり揃って大爆笑な訳？おかしな事なんて何も言ってないわよ？」

「それは、中間テストからの流れからすると、どうしても笑っちゃうよ。お嬢さんの『三冠馬になれ！』っていうのを思い出しちゃうもんなぁ！」

「今回は期待を裏切れないから、受験勉強と同じ位に必死だったよ！」

「まあ、あそこ迄プレッシャー掛けられればなぁ？！」

「まだ一冠だから、最低あと二回は頑張らないとね！」

「…なんだか私が無理強いしてるみたいじゃないの！」

「してるんじゃ無いの？橘の取り様にもよるけどね？」

「期待は裏切らないって前回言っちゃたから、今回は少しはきつかったかなぁ？やっぱり」

「そう。でも一位で良かったじゃない？何も頑張ったのは、私に言われたからばかりじゃ無いでしょう？」

「「……」」

「沈黙が痛いけど、橘君が私に言われた位でテスト勉強に力を入れたり、手を抜いたりはしないだろうから、当然の結果よね？良かったわね！」

そう言ったせりかは美久達のところに、喜んで橘の首位奪還の報告をしにいって、やはり苦笑を誘っていたが、こちらの様に爆笑に成らないのは、『彼氏』の首位を喜んでいると思われている為だろう。

しかし、中間テストの頃はそんな話は微塵も無い頃で、例え橘との関係が変わっていなくても、同じ反応だったであろう事が分かる橘と本庄は大爆笑だったのだった。

「相変わらずお嬢さんは最強だよな？」

「今は俺の事を自分の事の様に喜んでくれても不自然じゃ無いけど、前回は流石に参ったよ！」

「そうだよな？面喰ったもんな～！」

「そうそう！大差ならまだしも一点差なんて諦めが付かない！って言ってこられた時は本気でハナ差で負けた馬の気持ちが分かったね！」

「ははっ！御愁傷様。でも今は彼女のお願いなんだから、気を引き締めないとな？」

「それは彼女が、理不尽じゃ無く見える様になっただけで、俺の中では一緒だよ！お前だってあの時の勢い、一緒に居たんだから覚えてるだろう？」

「でも、椎名さんがそう言うんだから仕方が無いよね？」

「はぁー。確かにそうなんだよな…」

橘が溜息を吐くと本庄は僅かに笑みを見せた。お嬢さんの彼氏で居られる以上、このくらいで弱音を吐く位なら、さっさと自分に渡して欲しいものである。しかし、そんな事を言える筈も無いので少々橘にプレッシャーを掛けさせて貰う事にした。

せりかは橘の首位を喜んでいたが、試験までの数日、部活動が休みになった橘と一緒に勉強をしていた事を思い出す。

玲人を誘ったが断られたので、最初は少し部屋に入るのも緊張したが、それも無くなって来た頃に悪魔様は「問題を間違ったらペナルティでキス一回ね？」と軽く言ってきたのでパクパクしてしまったが、要は間違えなければ良いのだと特に異議は申し立てなかったが、

結局間違えないせりかに橘は翌日は「正解したら御褒美に変更ね！」と言って来たので、せりかはそれは流石に異議を申し立てると「彼女とラブラブな感じで試験勉強ってやってみたかったんだよね？」と要は悪魔様に、自分のリハビリに付き合ってくれるよね？と言われてしまった為に断れなくなってしまった。毎回は初心者には刺激が強いからと言って三問正解で一回の割合で、チュッとリップ音のする軽いキスを何度もされてしまうと、せりかはクラクラしてしまい、頭が馬鹿になってしまいそうだった。それをテスト期間中続けられたのだから、橘の首位など取って貰って当然である。あんなに余裕があったんならこれからだって当然だとせりかは思うが、あれが無ければせりかは二位を取れたんじゃ無いかと秘かに思っているが、教えて貰ったから出来たのも多いので相殺でやっぱり三位が妥当かなぁとも思う。

とてもそんな事は誰にも話せないので、一般的にラブラブな範囲なのかどうか疑わしいと思っているが、多分違うと思うのは、あれでは普通、勉強に成らないだろうと思うのだが、悪魔様は流石、常人と違ってその位の事では動じた様子もなく勉強出来ていたので、首位は当然だが、せりかは結構一杯一杯で、玲人にテスト勉強、根を詰め過ぎるなよ？と言われていたが、玲人の前でも同じ事をされかねないので、玲人に付いて来て！と喉元まで出かかったが言えなかった。彼は御機嫌で毎回せりかの家まで送り届けてくれたし、あちらのお母さんも喜んで迎えてくれたので、悪魔のキス以外は完璧な彼氏振りだったので、玲人も親達も爽やかに挨拶して毎回帰って行く橘に感心していた。

しかし、嫌なら拒否するなり、橘の家に行かないなり、出来た事はせりかも分かっているので、せりかも何と無く橘の施すキスがとても軽く、せりかに嫌悪と恐怖を与えない物だという事は分かっていた。一度だけお母さんが出掛けていた日が有ったが、軽く橘が今日

は御褒美お休みね！と言って来たので意外と気を使ってくれているのだと分かった。

そう思って、悪魔の所業は許そうと思っていたのだが、テストが終わったらデートの約束をしていた。旅行以来、初めてのお出掛けだが、一位になったらせりかに御褒美を強請るのが予想出来たので、軽く私の為に一位を取ったなんて馬鹿な事は言わないわよね？！と念を押して置いた。

デートは何処に行こうか相談中だが、なんだか急に出来た彼氏との急な展開に付いて行けない……。相手が嫌な訳では無いけれど、このまま付き合うのも不安だったが、こんな事、誰にも相談出来ない！と思っていたが、今日は委員の仕事が有って沙耶が付き合ってくれる。沙耶になら全てでは無くとも少し相談出来そうだった。

放課後、仕事をしながら、少し声を潜めて沙耶に「相談に乗って貰っていい？」と聞くと「勿論！」と言ってくれたので、聞いて貰う事にした。

「最近、彼の部屋で一緒に勉強してたんだけどね……」

流石に恥しくてモジモジと言い澱むと沙耶が「まさか押し倒されちゃったの？！」と聞いて来たので慌てて首を振った。

「良かったー！なんだか深刻だったから！」

と沙耶が言うので、もしかすると子供っぽい相談なのかな？っと少

し不安に思いながらも、思っている事を相談してみた。

「うわー！流石に彼氏の方もよく知ってる人だと話がリアルで恥しいわね！」

と沙耶はそう言って頬を紅く染めた。

「うん。言う方もかなり恥しいんだよ？！」

「そうよね～！少なくとも聞いている限りは、せりかちゃんが嫌な事ははっきりと拒否すれば、無理強いしそうな相手でも無いし、気も使ってはくれているみたいだから、少し相手がギリギリセーフな辺りを狙ってやって来ているのは気になるけど、多分彼くらいじゃ無いとせりかちゃんとだと何も進展しなさそうだし、かといって普通は部屋に入った時点で手を出されてもおかしく無い訳だしね？恋人なんだし！…そう思うと、こう言っては何だけどライトなキス位で済ませてくれる辺りは、流石橘君ね！って感じなのよね。せりかちゃんが不安に思うのも分かるけど、急に関係が深まっているって印象は受けないわよ？どちらかと言うと、せりかちゃんが困るのを喜ぶ性癖の方が問題よね？」

「やっぱり！あれは小動物をいたぶる行為だったのね？！」

「せりかちゃん！仮にも彼氏にキスされてその感想は無いって！嫌って訳じゃ無いんでしょう？！それに旅行の時もしてたでしょう？」

「何で知ってるの？もしかして見られてた？！」

「ううん。せりかちゃんが女の子から迫っても嫌がられないか聞いて来たんで、何と無くそうなんだろうなって思ってたら、橘君に会

ったら、せりかちゃんがつけてるグロスのラメが付いていたから注意したのよ」

「そっか～！それであの悪魔、次の日のバスであんな事言って来たのね？！」

「何か言われたの？橘君に」

「言われたのよ！小樽に行く前に！せめて二人の時に言ってくれれば、少し恥しい位で済むのに、皆もいるバスの中で「ラメが付くから出来たらそのグロス付けないで？」っていうから周りもいるのにすごく顔が紅くなっちゃって何の嫌がらせかと思ったわよ？！」

沙耶は遠い日を思い返して「明日の小樽楽しみだね？」といった魔王様が、やはりせりかをタダでは許さなかったのだと分かった。自分の失言の所為だが、「お手柔らかにね？」といったが微笑んで返事はしてくれなかった事を思い出す。そう思うと出来ない事は言わない主義なのかもしれないとも思う。

「すこーし彼女を困らせたくなるのは、許してあげる事にして、本気で許せないっていう事が有れば、文句を言うか、最悪は別れる事に成るわよね～！」

「別れるって…それは正直考えて無かったわ！相手が言い出す事は有っても、私からは無いと思うわ…」

「随分と魔王様に御執心なのね？」

「前から真っ黒なのは知っていたから、本当はこの位でうろたえるのも変なんだけど、彼が大した事もしないのにあっちの狙いが的確

なんで、こっちが思ったよりもダメージが大きいのが悔しいのよ！今迄も同じ様な事は沢山有って、いつも彼には負けっぱなしでも全然以前なら平気だった事が、何故か平気じゃ無いのよね！」

「付き合うってそういう物だと思うよ？私も友達だった期間が長いから分かるけど、相手も此方もその期間とは気持ちが違うのよ！なんだか負けたく無いって思っちゃうのよね？」

「うん。そうなのよね！でもやっぱり橘君には、気まで使われちゃう位、負けているんだと思うと相手の気持ちは分かるんだけど、そこまで負けてるのかと思うとこれから付いて行けるのかなぁって思ってしまうんだと思うんだ…」

「…大丈夫よ！少なくとも彼がせりかちゃんに夢中なんだし、その時点で向こうの負けよ！」

「とても、そうは思えないけど、沙耶ちゃんの慰めは聞いておくね？」

本当なんだけど、せりかは何を言っても信じないだろうから、橘の方に少し自重させた方が無難だろうと沙耶は思った。

「聞いた感想ではね、とてもうまく行っていて、相手もせりかちゃんの事を想ってくれているし、せりかちゃんが不安に成らない様にもう少し橘君がしてくれたら、言う事無し！って印象よ？」

「そうだよね～！贅沢な悩みなのかな？とは自分でも思っていたけど、なんだか誰かに聞いて見たかったのよね？普通が良く分からないから、今の状態で大丈夫なのかな？って！」

「人それぞれだから、意外と自分達の中で許されれば他と比べなくてもいいのよ？」

「だけど、相手は過去に彼女がいるから、その人達との普通も存在していた訳でしょう？そう思うとやっぱり大丈夫なのかな？って常に思ってしまうのよね！」

「それは、比べられる対象がいるのは、キツイわよね？……でも、せりかちゃんが無理してもやっぱりうまく行かないと思うから、相手がどう思うかよりも、自分がどう思っているかを優先するしか無いのよ。結局相手の思う事なんてはっきりとは分からないじゃ無い？それで空回るよりは、確実に分かる自分の感情で動いた方がうまく行く確率が高いと思わない？」

「確率ねぇ！そうだよね！あれこれ考えても自分の気持ちを最優先して駄目なら結局は駄目だったって事だもんね？」

「そう思うよ！とにかく今はどう聞いてもラブラブでうまく行っているうちから、先の事まで心配する必要なんて無いと思うわ！」

「うん。分かった。ありがとう！聞いてくれて」

「ううん。私が悩んだ時は、せりかちゃんが聞いてね？」

「それは、勿論！いくらでも聞くわ！」

沙耶は、ここには居ない橘をどうとっちめてやろうかと秘かに考え始めていた。

70

『せりかちゃんの事でお話が有ります。明日の朝、少し早めに学校の近くの公園のブランコの所で待っています』

という沙耶からのメールが来た時は悪い予感しか浮かばなかった。

やはり本庄の事と関係しているんだろうな…と覚悟を決めて早めに公園に行った。沙耶はまだ着いていない様でホッとした。

やはり朝早くの公園に、女の子を一人で置く事が心配で早く来すぎたが、犬の散歩やジョギングなど、思ったよりも人気（ひとけ）があったので、心配は杞憂だったようだ。

割と直ぐに沙耶が現れたので、驚くと沙耶も「橘君も早いわね？」と言った。約束した時間よりもお互いにかなり早めに来てしまい、橘は要らぬ心配からだったが、沙耶は律儀な性格からだろうと思う。

「それで、話って何？」アイスのカフェオレをベンチの傍の自販機で買って渡すと沙耶がお金を出そうとしたので「些細だけど昨日の仕事のお礼だから」と断った。

自分は先に持っていた缶コーヒーを握り締めながら沙耶の言葉を待った。

「せりかちゃんには、私とこうして会っている事は、内緒なのは分かってくれてるわよね？」

「それは、当然分かってるよ」

「昨日せりかちゃんのお悩み相談を受けたんだけど、橘くんは何をしてるの?!」

「ごめん。もう少しはっきり言って貰わないと分からないけど、彼女が俺との事で悩んでいるの?」

「思い当たる事は無いの?」

沙耶は胸に手を当ててみろ!という意味で橘に言ったが、橘は「やっぱり本庄の事かな?彼女が悩んでいるなら、やっぱり別れを此方から言ってあげたほうがいいね」と言い出したので、お灸を据えようと思っていた沙耶は慌ててしまった。

「違うわ!本庄君の事は何も無いわ!せりかちゃんが橘君にテスト勉強中、散々キスされたって頬染めて言うから、三問に一回はやり過ぎでしょ!って注意しようと思ったのよ。彼女も困惑していたし、少し橘君の前の彼女達と比べたりして、自分との付き合いは普通なのかな?って心配しているし、橘君から好かれてる実感が無いみたいだから、言葉も無いと駄目だから、少し大袈裟にでも言ってあげてって言おうと思ったのよ!」

「何だ…その事か…」

「私もメールで書くのは恥しかったから、話の内容に全然触れてなくて、余計な心配をさせちゃったみたいでごめんなさい。でもせりかちゃんは橘君から別れを切り出される事は有っても自分からは無いって言っていたから、橘君ももう少し好かれてる自信を持ったら?」

「彼女から別れなんて絶対に言い出さないのは、最初から判っているけど、それは椎名さんが俺を好きだからじゃ無くて、俺を裏切れないからだよ」

「……話を聞いたら結構ラブラブな上に、随分とせりかちゃんを困らせて喜んでいる様なのに、私には随分悲観的な事しか言わないのね？」

「それは、付き合っている間は、彼女が嫌がらない範囲では少しベタベタはしたけど、それは、今だけの事かもしれないと思うと、しつこく成ってしまっていたかもしれないから、彼女が石原さんに相談する程嫌だったんなら謝るけど、椎名さんは自分で拒否出来ない程、流され易い方でも無いと思ったし、かなり加減したつもりだったけど、少し読みが甘かったみたいだね？」

「そうね。すこーしやり過ぎよ？せりかちゃん頭が馬鹿になりそうだったって言ってたわ！」

「来るのを断るか、嫌なら拒むと思っていたけど、意外と言えないものなんだね？」

「そういう手段に出ないっていう事は、嫌では無いけど、良いと嫌の中間も有るでしょう？」

「成程ね！そう言われればそうだよね。少しは良くて少しは嫌という事か……」

「まして急に出来た彼氏に急な展開で、お母さんが出掛けた時に気を使われたのが結構堪えたみたいよ？こんなに負けている状態でこの先、付いて行けるのか不安だって！」

「あれは、そうするしか無いでしょう？親も居ない家で彼女に怯えられたら、勉強どころじゃ無くなるしね？」

「それは、私にも、勿論せりかちゃんにも分かってはいるわよ！彼女が言いたいのは橘君との差が大きいんじゃ無いかと思って気にしてるのよ。気持ちと経験の差が有り過ぎて不安なのよ」

「俺の方が、いつ彼女が本庄の気持ちに気が付いてしまって、俺と別れたいと思うんじゃ無いかと常に不安なのにね…」

「橘君は、せりかちゃんとちゃんと向き合ってくれるって言ってくれたけど、それでも、せりかちゃんをいつ離してもいい様にしているみたいだけど、その反面、しがみ付き過ぎで、言葉も無いのにキスだけいっぱいされたら、ちゃんと好かれているのか心配に成るわよ！男の人って言わなくても分かるって思っているものだけど、橘君は違うと思ってたのに！」

「買い被り過ぎだよ。拒まれなければ自分がホッとしてしまうから、つい、彼女の気持ちを確かめたくなる」

「せりかちゃんは、貴方が初めての恋人なのよ？もう少し手加減してあげないと、唯でさえ別れを切り出されてる状態を自分が縋ったから、付き合ってくれてるって誤解しているのよ？そういう状態で、少し背伸びして無理しちゃうのは当然でしょう？其処に付け込む様な事はしないであげて！」

「彼女側から見ると景色が大分違うものなんだな…」

「そうよ？せりかちゃんだって『橘君はせりかちゃんに夢中だから

大丈夫よ』って言ったら『沙耶ちゃんの慰めは聞いておくね？』っていうのよ？！」

そう言うと、少し橘は驚いた顔をした。

「彼女は俺を好きなのか？！」

「…其処からなのー？！当たり前じゃ無い。何処の世界に好きでも無い人に散々キスをされて逃げ出さない女子高生がいると思っているの？！」

「でも少し嫌がられてる…」

「だから、やり過ぎなの！言いたく無いけど、聞いているだけでも恥しくて死にそうだったわ！せりかちゃんがそう思うのも当然よ！」

「…そうだよな。流石に自分でもそれはそう思ってるよ。まして俺が不安なのは彼女には分からない事だし、慣れない彼女が辛く感じるのも当たり前だよな」

「橘君もせりかちゃんも、お互いに好きだから付き合い始めましょうっていう始まり方じゃ無いから、相手が自分に好意は有っても、種類が別な物なんじゃ無いかと思っているみたいだけど、外から見れば目も当てられない程、バカップルなのに、どうしてなのか不思議になっちゃうくらいだわ！」

「多分、俺が不安にさせているのは分かるんだけど、俺自身がもっと不安が大きいから、彼女に安心感を与えてあげられないんだ」

「好きって言ってあげたわよね？少なくとも…」

「多分、言って無いかもしれない。彼女からは一回言われたけど、別れ話をした時で混乱していたし、付き合って直ぐだったから、正直信じられなかったんだ。石原さんが言う様に、違う種類の好きだと、その時もそう思ったよ」

「何だか、橘君は、本庄君の事を、せりかちゃんにちゃんと言わないと、駄目な気がして来たわ！せりかちゃんだって貴方に無理に付き合って貰ってるって思っちゃうのも、何も言ってくれないんじゃ仕方が無いわよ？」

「本当は言ってしまいたいけど、本庄と更科さんは、椎名さんの事が原因で別れてるのを、彼女に知られたく無いから、本庄もきっと黙っているのに、俺からは言えないよ」

「そっかー！それを知ったらせりかちゃんが、真綾ちゃんに罪悪感持ってしまって辛くなるし、あの二人にも友人としても付き合えなく成るだろうから、隠しているのね？」

「おそらくね！ほぼ断定だけどね？そうで無ければ、本庄が俺と椎名さんの付き合いを、続けさせない様にしてくる筈だよ！」

「橘君と友達だから、遠慮しているとかは？」

「少しはあるかもしれないけど、俺に悪いとは感じてもそれだけで、椎名さんの事を諦めるのはおかしいよ！元々の付き合い自体が、玲人に勧められるがままだったんだから、直ぐに解消させても良い筈だよ！」

「私は、正直せりかちゃんが橘君と付き合い始めた時は、それまで

結構、貴方の事を鬼、悪魔呼ばわりしていて、彼女はとても怒っていたから、とても不思議だったけど、彼女は今は、確実に橘君の事が好きだから、本庄君の事は、彼達の問題だから、取敢えず置いておいたら?せりかちゃんに、また片思いをさせ続けるのは可哀想だと思うわ!」

「彼女に俺がちゃんと言ってあげれば良いと思っているのは分かるけど、彼女の枷に成らないか心配なんだよ」

「悪いけど充分、重—い枷に成っているから、そんな事を心配するなら手遅れよ!もう手遅れなんだから、がっちりもう一個枷が増えても、せりかちゃんが橘君に無理に付き合って貰ってるって思われない方を選らんだら?」

「…確かにその方が良さそうだね?先の事は、その時に対処した方が良いね?」

「そうしてくれないと、せりかちゃんがとっても悩んじゃうから、それは、私も橘君も看過出来ないでしょう?」

「そうだね。そこは同じ気持ちだね。助言を有り難く実行する事にするよ。やり過ぎな面も含めてね?ごめんね?女の子に言い辛い事を言わせちゃう様な事をしてしまって!」

「ううん。せりかちゃんには、普通なのかって不安に成って相談されただけで、出過ぎた事を言っているのに、そう言ってくれると助かるわ?」

「委員の仕事もいつも有難う!本当に一年生の頃から感謝しているんだけど、いつも何もお礼させてくれないから、玲人ともどうしよ

うかって言っていたんだ！今度玲人と四人でお好み焼きでも如何かな？」

「真綾ちゃんに悪いし、委員の仕事は、本来はクラス全員がやっても良い様な事なのよ？それにお礼なんて貰えないわ！気持ちだけで充分よ！それに、これ御馳走様」

そう言って飲み終わった缶を振った。やはり、沙耶には頭が上がらないと橘は思う。今日もせりかの為にこんなに早くに出て来てくれた彼女の心中を思うと、やはり頭が下がる思いだが、彼女がそれを望まないので、もう一度感謝を込めて「ありがとう」というと沙耶は軽く片手を振って「いいのよ」と言って笑った。

二人でまだ誰も通らない通学路を歩きながら、気温が上がり始めているのを感じて、沙耶が「暑くなってくると北海道が恋しいわね？」と言うのに橘も頷いた。長い夏休みがすぐ其処まで近づいて来ていた。

71

沙耶からありがたい忠告を受けた橘は、沙耶が言った「またせりかちゃんに片思いを続けさせるのは可哀想だ」という言葉と「本庄の事を言ってしまわないと橘自身も駄目になる」と言われた事が深く胸に刺さった。

前者は自分がせりかに伝えれば良いだけの事なので、今迄は言わない様にして来たが、お互いの親に紹介したり、キスをしたりしてしまった事を考えれば、枷が一つ増える事よりも、せりかが橘の気持ちを今は求めてくれているのなら、応える方がせりかの為に益が大きい。

それは、簡単に出来そうだが、急に言っても沙耶への相談直後では疑われそうだし、学校で唐突に言えるものでは無い。

どうしようか?と思っていたが、デートの約束を思い出し、その時がチャンスだな…と考えを巡らせる。

せりかからは、期末テストで首位を取れたら褒美を強請ろうと目論んでいたのを見透かされてしまい、予防線を張られてしまった。

この間のテスト期間中の事が余程堪えているのだろう。

三問正解毎に、目を泳がせてから頬を染めるせりかが可愛くて、少しやり過ぎた感はあったが、羽がかすめる程度の軽いものであった為、せりかの負担になる程では無いし、じきに慣れるだろうと思った読みは少し甘かった。彼女に別れ話を一度してしまっている為に、橘に対して拒否をすると言う事はしづらいのだと、もう少し早く気

付いてあげるべきだった。

自分の不安もあったが、少し浮かれていたのかもしれないと、せりかへの配慮の無さに反省するが、本庄の事もこのまま放置すれば、せりかが何時でも飛び立てる準備をしてしまう自分の態度が、せりかに対して、とても愛情が有る様に映らないであろう事も、今回沙耶のお蔭で分かったので、それも本庄達の思惑の全てを無視は出来ないが、どんな結果になっても解決しなければならないのだと思う。

部活の後、玲人と一緒に帰る時に、玲人が真綾と本庄の事を知っているのか、聞いてみる事にした。一番は本庄のせりかへの気持ちを知っているのかを聞きたいが、真綾に口止めされていれば、口を開かせるのは気の毒だ。

「本庄と更科さんって何で別れたのか、更科さんから聞いた?」

「ああ、なんだか最初から付き合って無かったっぽいな?」

「それでも別れの切っ掛けは、あったんでしょう?更科さんが玲人を好きになったから、別れた訳でも無いよね?」

「聞いてはいるんだけど、マーヤと本庄のプライバシーもあるから、ちょっと言えない……」

やっぱり玲人は、本庄がせりかの事を好きだと知っていて、黙っているのだと確信する。

これ以上玲人を困らせるのも可哀想なので、あっさりと退いて話題を変える事にする。

「…そう。そういえば、旅行後はせりりん争奪戦が終わったから、部活が楽になったよね？この暑いのに、あの暑苦しい連中に迫られたんじゃ、参るしね？」

「本当だよなぁ？あれはマジで大変だった！奴ら、目がマジだし！段々コンビネーションも良くなって来て、結構やばくなって来てたから助かったよ！忍さまさまだよ」

「それは、俺と椎名さんも思ったよりも順調だし、玲人は更科さんと何時のまにか付き合う事になってるし、お互い急に彼女が、まるで振って来てくれたみたいだよね？」

「そうだなー。マーヤは吹っ飛んできた感じだな？せりも忍と付き合うって言い出したのも突然だったから、忍からすると振って湧いた様な話だよな？そんな予定は全然無かっただろう？」

「予定は無くても、可愛い彼女が出来る事自体は、歓迎してるし、後…親があの後、すごく喜んで安心してくれたから、良かったよ。玲人のお蔭かな？」

「せりは、特別な女だと忍も思うのか？！」

「……？意味がよく分からないけど、特別な人なのは、確かだけど、玲人が言っているのは、そういう意味では無いよね？」

「なんて言うか…他と比べて違うって思うのか？」

更に意味不明に聞こえてしまうが、多分、本庄の言葉をそのまま言えないが、せりかの事で自分が思っているせりか像と全く違う事を言われたので、一般的に如何なのかを聞きたいのだろう…というの

は察せられたが、彼女の恋人である自分に聞かれても一般に思う意見等が、出てくる筈も無いと思うが真剣に聞いてくる玲人が面白いので、話しに少し乗る事にした。

「他と違うというのは、一般的な女性と違うかと言えば、彼女は、少し優し過ぎるよね？俺に対してもそうだから、正直俺が我儘になってしまいそうだけどね？」

「忍が？！我儘って言葉はあまり似合わないけど、やっぱりせりは、そういう懐の深い女なんだよな？きっと。おれは最初からその恩恵を受けてきたから分からないんだな。やっぱり…」

「それって、本庄に言われたの？」

「何で分かるんだ？！」

「そんな哲学的な言い方、玲人には似合わないよ！いかにも本庄っぽいんだもん！」

少しくすくす笑いながら言うと、玲人の警戒は解けてきた様だった。

「本庄が、せりを『赦しの聖女の様だ』って言ったんだけど俺からは聖女にはとても見えないから、奴の方が何か勘違いしているのか、俺の認識がせりと近過ぎて鈍いのか、どっちなのか忍に聞きたくなったんだよ」

「『赦しの聖女』ねぇ？いかにも本庄が言いそうな例え方だね。そういう事を平気で言えちゃう方の本庄は如何なのかな？って思う程、普通じゃないけど、椎名さんを例える言葉としては言い得て妙だね！俺もそう思うよ？彼女は、長く怒っていられないし、何か納得が

いかない事が有っても、何か言えない事情があるんだろうって許しちゃうよね？俺を押し付ける玲人も許すし、それに加担した俺の事も結局許してしまうんだから、『赦しの聖女』というのも納得するけどね？」

「そうか。俺がやっぱり、せりの優しいのを、当たり前だと思って来たって事なんだって分かったよ。でも『聖女』は流石に表現としては、怖すぎないか？」

「それは、少し怖いね？流石に俺も彼女を、そういう目では見ていなかったから、本庄の言葉は若干引くけど、納得はするね！」

「忍は中間派だな？」

「そういう問題なの？！」

「あの小舅、俺の事を何も見えて居なかったかの様に言うから、少し悔しくてさっ！」

「玲人にしか分からない、椎名さんの良さも有るだろうから、そう言う意味では、ドローじゃ無いのかな？」

「忍は俺の事をやっぱり小舅だと思っているのか？」

「うん。椎名さんの兄弟みたいなものだし、そうするとまさに小舅になるよね？でも玲人は椎名さんの事とは関係なく友達だから、玲人が思う小舅とは大分違うかもね？」

「そっかー！それならいいけど、俺もお前等の事に口出しはしない様にしようと思うんだ。俺が付き合う様にしておいて説得力が薄い

けど、それでも邪魔になる様な干渉は、なるべくしないようにするから！」

「どうしたの？明日雨になると練習辛いよなぁ？なんだか玲人らしく無いよね？」

「お前の中の俺ってどんな感じなのか？って聞きたいけど、前に言われた能天気っぽいの思い出したから、聞かないでおく…」

「いいんだよ？俺も椎名さんも玲人らしい玲人が好きだし、特に迷惑じゃ無いよ？椎名さんに俺以外の彼氏が出来た時には、玲人は少し離れててあげないと彼氏が霞んじゃうから、その時は気を付けてあげれば？」

「言うよな？流石に俺の何倍も格好良い彼氏だもんなぁ？！」

「それ、まだ引き摺ってるの？あれは椎名さんのリップサービスでしょう？うちの親も玲人が帰った後は、三日くらい本当に取り替えたいって言ってたから、たいして変わらないでしょう？変われるなら俺は玲人の方がいいけどな？」

「せりは、本気だったぞ？俺に『見慣れちゃったのかしら？ごめんなさい』って追い討ちかけてきたんだぞ？聖女様が？」

「椎名さんが本気でそう思ってくれて居るなら、かなり嬉しいけど、俺も最近聖女様の御機嫌を損ねちゃう事をしちゃったから、評価は少し下がっているかもね？」

「せりは、意外と厳しいからなぁ？真綾の方が気は強いけど、厳しさは全然、せりに及ばないな？」

「そうかもね？でも慣れるとあれが結構くるよね？」

「あのなぁ～！そういう事を言うのか？俺の前で！」

「ははっ！やっぱり小舅様が顔を出すね？」

「……忍だって止めなくてもいいって言ったじゃん？」

「そうだね？お蔭で明日の雨は免れそうだよ？」

「お前って、性格変わらないよなぁ？聖女様に少し矯正して貰えばいいのに！」

「すっごく良い奴になったら別人だよ？玲人はその方が良いの？」

「うーん。悩むところだよなぁ？」

「悩むなよ！！」

「忍が良い人になっても怖いかもな？それに明日は晴れるといいしな？」

「そうだね…自分の行いを思うと少し怪しいけどね？」

「まさか、せりに、手を出してないよな？！」

「……彼女なんだよ？指をくわえて見てるだけの筈無いでしょう？言っておくけど、椎名さんにそういう事を聞いたら、しばらく彼女に口を聞いて貰えなくなるよ？」

「くそぉー！無理強いはしてないよな？」

「それも、少し怪しいんだよね？なるべく気を付けるけどね？」

「血の雨降らすぞ？！」

「やっぱり、小舅様を折角玲人が止めるって言ったのを、勿体無いから止めない事にするよ！」

「……直ぐには無理だ！やっぱり！」

「玲人を犯罪者にするのは、俺も忍びないから、大丈夫だよ！」

忍がにっこりと天使画の様な笑顔を見せたので、「こういう笑い方をする時は嘘くさいんだよ！」と怒る玲人に、忍はいつもの少し黒い笑みで「玲人は小舅じゃなくて心配性のお父さんみたいだよね？」と笑った。玲人には、こちらの本当の笑顔の方が信頼感が有ったので、やはり性格矯正はしなくてもいいか！と思ったが、少しせりかの事を帰ってから変な目で見てしまわないか自分の事が心配になった。

72

「せり、今日はデートなのか？」

薄付きＵＶ対策バッチリのファンデーションに軽くブラウン系のアイシャドウをしてピンクのルージュを付けたせりかは、玲人には見慣れない姿だった。

「そうだけど、今から着替えようとしていたのに、急に入って来られると困るわ！」

「今更せりの着替え見たからって、何も思わないから、安心しろよ？」

「そっちが気にしなくてもこっちが気に成るの！それで、何か用事？」

「いや、暇だからせりと遊びに行こうかな？って誘いに来たんだけど？」

「あのねー！玲人にも彼女が出来たのよ？私と遊んでて良いと思ってるの？」

「別にマーヤは構わないって言うけど？忍は心が狭そうだもんなぁ？」

「…多分橘くんも怒らないけど、今日付いて来たら、流石にキレると思うわ？玲人にだけじゃなくて被害が私にも来そうだから、暇だからって付いて来ないでね？また別の日に遊んであげるから」

「今、忍にメールしたところだったんだけど、返事が超マッハで来て『絶対駄目！』だって！」

「何時の間にメールなんてしてたのよ？」

「うん。今せりが、荷物のチェックをしてる間。それで今日は何処に行くんだ？」

「今日は、横浜観光なの！シーバスに乗ったり、赤レンガ倉庫を回ったりするつもりなの！なんだか旅行中に一緒にずっと観光していたから、その時に地元観光もいいかもね？って言ってたのよ。夏休みに入ると混みそうだから、今のうちの方がいいかと思って！」

「ふーん。もしも、たまたま会ったら、仲間外れにしないでくれるよな～？！」

「私はいいけど、絶対駄目って言うのを無視するの？」

「そうだけど、別に俺が付いていってもいいじゃん！せりも、今度マーヤが連れて来てって言ってたぞ？」

「ちょっと待ってて？今、電話してみるから…」

橘に電話をすると、即、玲人に替わって？と言われたので、玲人に渡すと五分程の押し問答はあったが、玲人が負けた様だった。

「今日は、忍がマジでヤバかったから止めるけど、今度夏休みに皆で遊ぼうって？」

「そうね！その方がいいと思うわ。それで遅れちゃうから着替えたいんだけど出てってくれる？」

「なんだか、俺と出掛ける時と服も違う気がするぞ！」

「当たり前でしょう？隣の玲人と出掛けるのと一緒の筈、有る訳無いでしょう？走ると汗掻いちゃうから、早く出て行って！」

「せり冷たーい！」

いじけられている時間は無いので、服を脱ぎ出すと、玲人も平気だと口では言っていたが、流石に慌てて出て行ってくれた。

急いで紺にオレンジのドット柄にタイリボンが付いているミニワンピースに風に吹かれるので少し暑いが、レギンスを合わせた。これで茶の歩きやすい高さの無いサンダルにワンピースのドットがらのオレンジに近い煉瓦色のような革のバックを持った。

急いで駅まで歩いて、待ち合わせ場所まで行くと、橘は、旅行の時の様に帽子をかぶって居た。それに合わせてラフなシャツにベージュのボトムスで、茶の靴を合わせていたが、玲人では無いが、元々が良い人はあまり着飾らない方が良いという典型だなと思った。帽子は日よけの為では無く、目立つのを避けるためだろう。

「ごめんね～！お待たせ。玲人が中々、出てってくれないから遅くなっちゃったわ！」

「時間は、間に合ってるよ？玲人からのメールで、大体の雰囲気は分かっていたから、急がなくても大丈夫だったのに」

「前にも同じ様な事をされて、付いて来られたのよ？マーヤさんが今日空いていたら、危うく二人が付いて来そうだったわ？！」

「…前って、俺の前に付き合った人は居ないよね？」

「それは、ただの友達だったんだけど、たまたま私が行きたかったイベントにその子も行きたいって言うんで、一緒に行こうかってなったら、玲人が私の仲の良い友達と二人で、当日付いて来て、少しダブルデートみたいな感じになっちゃったのよ！邪魔されたのが、その子も腹が立ったみたいで、腹いせで玲人の前で、妙にベタベタして来るんで、こっちも断るのに大変だったのよ！」

「べたべたって？」

少し雲行きが怪しくなって来たのは、せりかにも感じるくらい、魔王様から瘴気（しょうき）が見えた。

「べ、別に、大した事じゃないわ？手を繋いで来ようとしたから断ったし、肩に手をおかれたのも、玲人が払ってその後とび蹴りしてたから、何だか申し訳無くなって、結局直ぐに付いてきてくれた友達の女の子と歩いて、玲人の横で気まずそうにその男の子が歩くのが更に申し訳無くて、もう二度と、男の子とは出掛けないって思ったもの」

「…玲人って意外と非道な事して来たんだね…」

流石の魔王様をも呆れさせる所業だったらしい。

「そうでしょう？今日なんて可愛いものよ？諦めたんだから！」

「俺が、付いてきたらとっても後悔すると思うよ？って言ったら諦めてくれたんだけどね？」

それって脅しじゃないんですか？！っていうか脅しなんだよね！魔王様恐るべしだ！！

「別に殴ったりはしないよ？仮にも友達だしね？」

「それよりも、もっと後悔させるダメージを与えるってことでしょう？大体やりそうな事が分かるから、巻き込まれるのが分かって嫌だわ！」

「ふーん。例えば？椎名さんならどうするのか、聞いてみたいなぁ？！」

「私と角度的にキスでもしている様な写真を撮って、真綾さんにメールするとかね？普通に仲が良さそう位では真綾さんには通じないしね？」

「他には？」

「玲人が居た堪れない程、いちゃいちゃするのが、真綾さんも巻き込まない最善なお仕置きかしらね？」

「正解！流石椎名さんは分かってるね？！」

「どっちにしても私が巻き込まれるんだもん。良い事無いわ！」

「そうだね。流石に椎名さんにも、玲人と同じくらい後悔させて嫌われちゃいそうだしね？」

「嫌わないけど一週間位は、口を聞かないわね？」

「それは、俺も後悔しそうだから、もしも今日、偶然玲人と会ってもやらないで置くよ？」

「ふぅー。良かった！行くところをうっかり言っちゃったから、可能性はゼロじゃ無いのよ」

「多分、来ないよ？玲人も、前の時は邪魔したかもしれないけど、今は自分にも彼女がいるんだしね？」

「それが、真綾さんが妙に私の事を気に入ってるから、其処の所が彼女に嫉妬もされないから、普通ってものが玲人にも解らないのよ！普通、彼女がいるのに、私と出掛けていいと思ってるのかしら？」

「椎名さんは俺がいても、玲人と出掛けているのはいいと思ってるよね？」

「それは、橘君に毎回良いか聞いてるじゃない！真綾さんは休日に習い事が多いから、映画とか見たいのがあると一番身近な私を誘うのは仕方がないし、今迄行っていたのに、急に恋人が出来たからって玲人を見捨てられないわ！」

「そうだね。断ったら俺も玲人が不憫だと思うけど、俺以外の人とこの先付き合うような事になった時に玲人の影をチラつかせるのは、椎名さんの為に成らないから、それは気を付けた方が良いよ？」

「…そうやって、また、いつ別れても良い様な事を言うのね？」

「そういう意味じゃ無いよ！俺以外には、玲人が張り付いてくるのを分かって貰えるとは思えないから、付き合う様になったから言える事のひとつだよ？」

「私への思いやりで、言ってくれているのは分かるけど、正直凹むわ！」

言い合っていると待っていたシーバスが来たので、それに乗ってから話をしよう？と橘がいうので乗ると、人が少なくて、すぐに出航したので、風に吹かれてしまい、降ろして来た髪が、橘に当たってしまった。

「ごめんね？結構髪って凶器になるわよね？」

慌ててシュシュで髪を束ねる。前に玲人がシューズのおまけに貰ったベージュの物だ。

「大丈夫だよ。……少し暑かったから、風が気持ち良いね？」

「シーバスなんて乗るのは子供の時以来で、何年ぶりかしら？確か、親戚を観光案内するのに連れられて乗ったのが最後だわ！」

「近いと意外と乗らないんだよね？…さっきの話だけど、俺は椎名さんと別れてもいいとは思ってないよ？そういう風に思われる事を言ってしまったのは悪かったけど、椎名さんが俺を想ってくれているよりも、ずっと俺の方が椎名さんが好きだよ…」

「……本当に？！……」

「何なら証明も出来るよ？」

そう、橘が囁くと、意味を理解したせりかは、かぁーと血液が逆流するのを感じた。

「私がした方法以外で証明して欲しいわ?」

なけなしの気力でそう言うと、橘がせりかの耳元で揺れているラピスラズリのイヤリングに口付けて「この石に誓って椎名さんが好きだよ」と言った。これは橘に誕生日に貰った物なので、かなり説得力があった。

せりかが、何か小さく言うのが風の所為で聞こえないが「何?」と聞き返したが、せりかから耳元を指差すのでかがむと、耳元に軽く口付けて「私も好きだから、信じて?」と言って来たので、心の中では『信じたいんだけどね…』という言葉は飲み込んで「勿論信じてるよ」といったが、表情がやはり伴わなかったのか、せりかが不審な顔をして周りを見回してから、橘にキスをした。

「証明はしてくれなくても信じてるから、大丈夫だよ?」

「今のは別に証明でしたわけじゃないもん。普通でしょう?付き合っているんだから?」

「じゃあ、証明以外で椎名さんからしてくれた、初めてのキスだね?ありがとう。嬉しいよ?首位の御褒美はくれないみたいだったから」

「橘君って、前に家に来た時も、私が抱き締めたら『有難う』って言ったのよね!何だか違う気がするんだけど、気の所為かしら?」

「違うって、何で違うと思うの？」

「聞きたくないけど、今迄、付き合っていた人からキスされた時も『有難う』って言っていたの？」

「……そういえば言ってないね？おかしいのかな？やっぱり」

「聞きたくなかったけど、違うって事は分かるのよね？」

「なんて言うのが適当なのかな？ちょっと待ってて。思い出すから」

「思い出さなくてもいいわ！何も言わないでいいのよ。抱き締めたら抱きしめ返してくれればいいのに、哀しそうな顔で有難うって言われると、どうしていいのか分からなくなるのよ」

表情にでてしまっていたのか！と少し舌打ちしたい気持ちになるが、大好きな彼女からキスをされて哀しそうになってしまえば、せりかで無くとも不振を抱いてしまうだろう。

「何だか、夢みたいで、覚めそうで怖くなるんだよ。だからそういう顔をしてしまっていたかもしれないけど、心配させちゃったみたいでごめんね？」

「夢みたいって、そんな風に橘君が思っているなんて、思わなかったわ！だって別れたいって言ったじゃ無い？！」

「一度、夢が叶うと、夢だと自分が思える内に終わらせたいと思ってしまったのは、俺が弱いからで、椎名さんが悪いわけじゃないし、そう思ってしまうくらい好きなんだ…リハビリか勉強で良いと言ったのは、嘘で無いけど、俺はリハビリも勉強も、好きな子としたい

からね？」

「あの時から私が好きだったって事なの？私を騙したの？！」

「騙してはいないよ？言わなかっただけだよ。好きだからっていったら付き合ってくれないでしょう？」

「～～！やっぱり、橘君は橘君よね？！」

「怒ってるの？」

「少しね！さっきのキスは返して貰いたいわね！」

「同情からのキスだったんだ…やっぱり」

「同情で出来る程、安く有りません！そういう所が、本当に……もう、いいわ！」

「嫌いになった？」

「…もう一度さっきと同じ誓いをしてくれたら許すわ！」

橘はラピスラズリの先程とは反対の石に口付けて「愛してるよ」といった後、唇にキスをした。

「～～！！返して貰いたいって言ったけど、本当に返さないでよ！」

真っ赤になるせりかに、こんな昼間のシーバスで、いくら人気（ひとけ）が周りに無いにしても何をやっているんだろう？と橘も自分でも少し反省してしまった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4353x/

幼馴染の親友

2011年12月17日07時53分発行